

八坂別所遺跡Ⅱ・Ⅲ
牛岡遺跡
栗下遺跡Ⅱ

県営農免農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2007

掛川市教育委員会

八坂別所遺跡Ⅱ・Ⅲ
牛岡遺跡
栗下遺跡Ⅱ

県営農免農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2007

掛川市教育委員会

図版 1 平成 8 年度八坂別所遺跡



調査地点遠景（北から）



D区全景

図版2 平成15年度八坂別所遺跡



調査地点遠景（南から）



道路状遺構下層検出状況

図版3 平成15年度八坂別所遺跡



道路状遺構下層検出状況
(北から)



道路状遺構下層検出状況微細
(西から)



道路状遺構土層断面
(北東から)

図版4 平成15年度八坂別所遺跡



道路状遺構下層粗朶検出状況
(西から)



道路状遺構下層検出状況
(北から)



道路状遺構最下面検出状況

図版 5 平成15年度八坂別所遺跡



和同開珎(表) 16-11



和同開珎(裏) 16-11



墨書土器「宍■(不明)」 15-23



墨書土器「上井」 15-25



墨書土器「女平」 15-24



瓦 16-9

図版6 牛岡遺跡



調査地点遠景（西から）

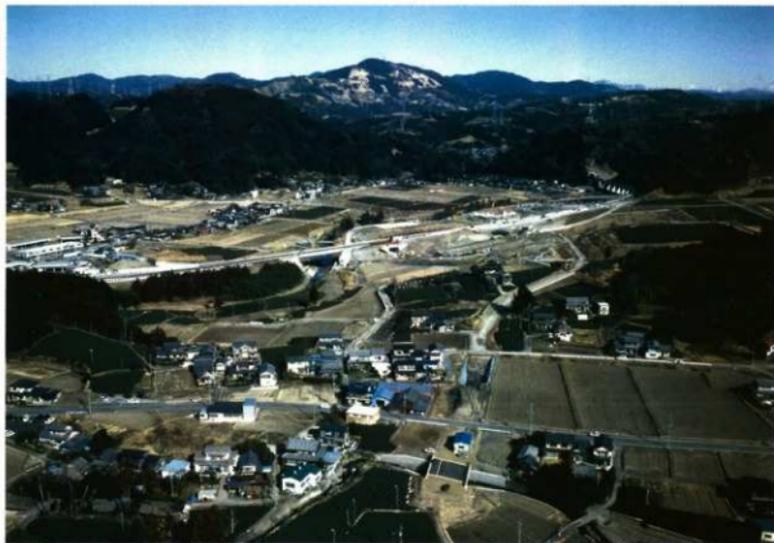


第1面完掘状況



第2面完掘状況

図版 7 栗下遺跡



調査地点遠景（南から）



第3面完掘状況

図版 8 栗下遺跡



19



19 (内側)



161 (内面)



161 (上から)



161 (外面)

例言

1. 本書は、平成8・12・15・16年度に発掘調査を実施した、静岡県掛川市東山口地区に所在する八坂別所遺跡、牛岡遺跡、栗下遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業 千羽八坂地区及び伊達方公文名地区農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、静岡県中遠農林事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、掛川市教育委員会が実施した。
3. 現地調査は、掛川市教育委員会の大熊茂広（現：掛川市立大東図書館準備室）が担当した。
4. 発掘作業ならびに整理作業では、次の方々の参加を得た。（順不同）
青島信二 山崎辰雄 田辺富士夫 木村治郎 長谷川勇次郎 大庭虎雄 横山正氏 松浦弘司
西田泰子 井筒いつよ 鳥居京 伊藤とよ 岡田あき江 久保井美代子 岡本曉美 川村ちえ
水野なつ 武田澄代 山崎美智子 鈴木とし江 榎葉せつ 中村すま子 岡田あい 岡田あき
清水香代子 田辺洋子 杉山みち子 杉山まさ子 袴田えい子 松浦まさ子 梅津まさる
中山あさ 松浦富美江 山崎とみ 松下虎夫 横井鑑治 向川弘治 向川隆 鈴木友二郎
藤田弘 寺沢巧 林修峯 西田正人 鈴木静江 伊藤和子 松浦せい子 山下三雄 西田弘明
森下孝志 塩崎駿二 大山一雄 笠谷みゆき 深津貴宣 久嶋さおり
竹村和紀 児玉昌子 清光真由美 榎葉豊子 高橋直美 山下広美 早乙女のぞみ 上山貴代子
5. 発掘調査ならびに本書作成にあたっては、次の方々、機関のご協力・ご教示を賜った。記して深く感謝申し上げたい。（五十音順・敬称略）
及川司 加藤賢二 木下良 木村弘之 木本雅康 久保智康 武部健一 永井智教
西尾太加二 早川泉 向坂鋼二 矢田勝 松井一明
埼玉県吉見町教育委員会 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 東山口地区土地改良区
兵庫県教育委員会
6. 本書作成に伴う整理調査は、平成17・18年度に実施した。17年度は、15年度に実施した八坂別所遺跡発掘調査で出土した木製品の保存処理業務を財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所に委託し、行った。18年度は、本書作成を行った。
7. 本書の作成は、掛川市教育委員会教育文化課文化振興室文化財係の松本一男、前田庄一、戸塚和美、村松弘規で行った。編集、遺物写真撮影は村松が担当した。
8. 石器実測は株式会社アルカに、自然科学分析は株式会社パレオ・ラボにそれぞれ業務委託した。栗下遺跡出土石器については、株式会社アルカの角張淳一氏に所見を頂いた。なお、自然科学分析の成果については、別冊にて報告したので、そちらを参照願いたい。
9. 調査によって得た資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

凡例

1. 挿図における方位は、座標北を示す。
2. 本書で使用した遺構名は以下のとおりである。
SA：櫓列 SB：堅穴住居跡 SD：溝状遺構 SH：掘立柱建物跡 SP：小穴及び柱穴
SX：性格不明遺構
3. 遺物の番号は、挿図と写真図版とで共通する。

目次

I 発掘調査と遺跡の概要	
1. 調査に至る経緯と調査の目的	1
2. 調査の方法	1
3. 遺跡をめぐる環境	2
II 平成8年度八坂別所遺跡の調査	
1. 遺構	7
2. 遺物	11
3. まとめにかえて	12
III 平成15年度八坂別所遺跡の調査	
1. 遺構	38
2. 遺物	40
3. まとめにかえて	45
IV 牛岡遺跡の調査	
1. 遺構	77
2. 遺物	79
3. まとめにかえて	80
V 栗下遺跡の調査	
1. 遺構	102
2. 遺物	105
栗下遺跡の石器所見	111
3. まとめにかえて	113
VI 全体のまとめと課題	199

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図

第2図 周辺遺跡発掘調査位置図

平成8年度八坂別所遺跡

第1図 遺跡周辺地形図・調査区位置図

第2図 a・b区 遺構全体図

第3図 a・b区 SD実測図(1)

第4図 a・b区 SD実測図(2)

第5図 a・b区 柱穴列実測図

第6図 c区 遺構全体図

第7図 c区 SX01実測図

第8図 c区 SX03実測図

第9図 d区 遺構全体図

第10図 d区 SD15実測図

第11図 d区 柱穴列実測図(1)

第12図 d区 柱穴列実測図(2)

第13図 d区 柱穴列実測図(3)

第14図 出土遺物実測図(1)

第15図 出土遺物実測図(2)

平成15年度八坂別所遺跡

- 第1図 調査グリッド図・遺構全体図
- 第2図 S D01～05実測図
- 第3図 柱穴列実測図
- 第4図 道路状遺構上層実測図
- 第5図 道路状遺構下層実測図(1)
- 第6図 道路状遺構下層実測図(2)
- 第7図 道路状遺構最下面実測図
- 第8図 道路状遺構土層断面実測図
- 第9図 出土遺物実測図(1)
- 第10図 出土遺物実測図(2)

- 第11図 出土遺物実測図(3)
- 第12図 出土遺物実測図(4)
- 第13図 出土遺物実測図(5)
- 第14図 出土遺物実測図(6)
- 第15図 出土遺物実測図(7)
- 第16図 出土遺物実測図(8)
- 第17図 出土遺物実測図(9)
- 第18図 出土遺物実測図(10)
- 第19図 出土遺物実測図(11)
- 第20図 八坂別所遺跡・頭地遺跡全体図

牛岡遺跡

- 第1図 遺跡周辺地形図・調査区位置図
- 第2図 遺構全体図
- 第3図 S D01・06、S X01・02実測図
- 第4図 S D03実測図
- 第5図 柱穴列実測図(1)

- 第6図 柱穴列実測図(2)
- 第7図 S D08実測図
- 第8図 出土遺物実測図(1)
- 第9図 出土遺物実測図(2)

栗下遺跡

- 第1図 遺跡周辺地形図・調査区位置図
- 第2図 調査グリッド図・遺構全体図
- 第3図 第1面 S D01～08実測図
- 第4図 第2面 S X01実測図
- 第5図 第2面 S X02・03実測図
- 第6図 包含層 石棒出土状況実測図
- 第7図 第3面 S B01遺物出土状況実測図
- 第8図 第3面 S B01完掘実測図
- 第9図 第3面 S B02実測図
- 第10図 第3面 S B03実測図
- 第11図 第3面 S H01実測図
- 第12図 出土遺物実測図(1)
- 第13図 出土遺物実測図(2)
- 第14図 出土遺物実測図(3)
- 第15図 出土遺物実測図(4)
- 第16図 出土遺物実測図(5)
- 第17図 出土遺物実測図(6)
- 第18図 出土遺物実測図(7)
- 第19図 出土遺物実測図(8)
- 第20図 出土遺物実測図(9)
- 第21図 出土遺物実測図(10)
- 第22図 出土遺物実測図(11)
- 第23図 出土遺物実測図(12)

- 第24図 出土遺物実測図(13)
- 第25図 出土遺物実測図(14)
- 第26図 出土遺物実測図(15)
- 第27図 出土遺物実測図(16)
- 第28図 出土遺物実測図(17)
- 第29図 出土遺物実測図(18)
- 第30図 出土遺物実測図(19)
- 第31図 出土遺物実測図(20)
- 第32図 出土遺物実測図(21)
- 第33図 出土遺物実測図(22)
- 第34図 出土遺物実測図(23)
- 第35図 出土遺物実測図(24)
- 第36図 出土遺物実測図(25)
- 第37図 出土遺物実測図(26)
- 第38図 出土遺物実測図(27)
- 第39図 出土遺物実測図(28)
- 第40図 出土遺物実測図(29)
- 第41図 出土遺物実測図(30)
- 第42図 出土遺物実測図(31)
- 第43図 出土遺物実測図(32)
- 第44図 出土遺物実測図(33)
- 第45図 出土遺物実測図(34)

挿 表 目 次

- 第1表 八坂地内における遺跡発掘調査
第2表 牛岡遺跡石器観察表
第3表 栗下遺跡石器観察表

写 真 図 版 目 次

巻頭カラー写真

- 図版1 平成8年度八坂別所遺跡
調査地点遠景（北から）
d区全景
- 図版2 平成15年度八坂別所遺跡
調査地点遠景（南から）
道路状遺構下層検出状況
- 図版3 平成15年度八坂別所遺跡
道路状遺構下層検出状況（北から）
道路状遺構下層検出状況微細（西から）
道路状遺構土層断面（北東から）
- 図版4 平成15年度八坂別所遺跡
道路状遺構下層粗朶検出状況（西から）
道路状遺構下層検出状況（北から）
道路状遺構最下面検出状況
- 図版5 平成15年度八坂別所遺跡
出土遺物
- 図版6 牛岡遺跡
調査地点遠景（西から）
第1面完掘状況
第2面完掘状況
- 図版7 栗下遺跡
調査地点遠景（南から）
第3面完掘状況
- 図版8 栗下遺跡
出土遺物

白黒写真

平成8年度八坂別所遺跡

- 図版1 a・b区
調査区全景（西から）
調査区全景（東から）
SD02・03完掘状況（北から）
- 図版2 SD02～10完掘状況（南から）
柱穴列完掘状況（北東から）
柱穴列完掘状況（北西から）
- 図版3 c区
1面 調査区全景（西から）
SX01（北西から）
2面 SX03検出状況（北東から）
SX03完掘状況（北東から）
- 図版4 d区
調査区全景（西から）
調査区全景（南から）
調査区全景（北東から）
- 図版5 d区
調査区全景（北東から）
調査区全景
- 図版6 SD15完掘状況（北から）
柱穴列完掘状況
柱穴列完掘状況(1)（北東から）
- 図版7 柱穴列完掘状況(2)（北西から）
柱穴列完掘状況微細（北西から）
柱穴列完掘状況(3)（東から）
- 図版8 出土遺物(1)
- 図版9 出土遺物(2)
- 図版10 出土遺物(3)

平成15年度八坂別所遺跡

- 図版 1 東調査区全景 (西から)
西調査区全景
西調査区全景 (西から)
- 図版 2 西調査区
SD01~05完掘状況 (北西から)
柱穴列検出状況 (南東から)
- 図版 3 道路状遺構路面検出状況 (南から)
道路状遺構上層検出状況 (西から)
道路状遺構下層検出状況 (西から)

牛岡遺跡

- 図版 1 第 1 面
調査区全景 (南東から)
調査区全景 (北西から)
調査区全景
調査区全景 (西から)
- 図版 2 SX01礫出土状況 (南東から)
SX01土層断面 (北西から)
SX01完掘状況 (北西から)
- 図版 3 SX02礫出土状況 (北西から)
SX02土層断面 (南西から)
SX02完掘状況 (北西から)
- 図版 4 SD03遺物出土状況 (東から)
柱穴列 1 完掘状況
柱穴列 1 完掘状況 (西から)
柱穴列 1 完掘状況 (南から)
柱穴列 3・4 完掘状況 (東から)

栗下遺跡

- 図版 1 第 1 面
調査区全景 (南から)
SD03~05完掘状況 (西から)
SD06完掘状況 (西から)
- 図版 2 第 2 面
調査区全景 (南から)
SX01遺物出土状況 (西から)
SX01完掘状況 (北から)
- 図版 3 SX02完掘状況 (西から)
SX03遺物出土状況 (南から)
SX03完掘状況 (西から)
- 図版 4 包含層石棒出土状況 (北から)
石棒出土状況微細 (北から)

- 図版 4 出土遺物(1)
図版 5 出土遺物(2)
図版 6 出土遺物(3)
図版 7 出土遺物(4)
図版 8 出土遺物(5)
図版 9 出土遺物(6)

- 図版 5 第 2 面
調査区全景
調査区全景 (南から)
調査区全景 (北東から)
- 図版 6 SD08土層断面 (西から)
SD08完掘状況 (東から)
- 図版 7 出土遺物(1)
図版 8 出土遺物(2)

- 図版 5 第 3 面
調査区全景 (北から)
調査区全景 (南から)
SB01遺物出土状況 (北東から)
- 図版 6 SB01炉検出状況 (南東から)
SB01炉検出状況微細 (北西から)
SB01炉完掘状況 (北西から)
- 図版 7 SB02・03完掘状況
SB02完掘状況 (南から)
- 図版 8 SB03完掘状況
SB03完掘状況 (南から)

図版9 SH01完掘状況
SH01完掘状況(北から)
南調査区全景(南から)

図版10 出土遺物(1)
図版11 出土遺物(2)
図版12 出土遺物(3)
図版13 出土遺物(4)
図版14 出土遺物(5)
図版15 出土遺物(6)
図版16 出土遺物(7)
図版17 出土遺物(8)
図版18 出土遺物(9)
図版19 出土遺物(10)
図版20 出土遺物(11)
図版21 出土遺物(12)

図版22 出土遺物(13)
図版23 出土遺物(14)
図版24 出土遺物(15)
図版25 出土遺物(16)
図版26 出土遺物(17)
図版27 出土遺物(18)
図版28 出土遺物(19)
図版29 出土遺物(20)
図版30 出土遺物(21)
図版31 出土遺物(22)
図版32 出土遺物(23)
図版33 出土遺物(24)
図版34 出土遺物(25)
図版35 出土遺物(26)
図版36 出土遺物(27)

I 発掘調査と遺跡の概要

1. 調査に至る経緯と調査の目的

全国的に実施された平成17年4月1日のいわゆる「平成の大合併」において、旧掛川市・旧小笠郡大東町・同大須賀町の1市2町が1つの市となり、新しい掛川市が誕生した。新市は北部に山地、南部に海岸をもつ自然豊かな環境である。

今回発掘調査が行われた旧掛川市の東部に位置する東山口地区（八坂、伊達方、千羽、小原子、本所）において、静岡県中遠農林事務所により「農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（以下、農免農道整備事業と記す）」と「県営農地総合開発整備事業（以下、農地整備事業と記す）」が計画され、両事業はほぼ同時期に施工されることとなった。

そこで、掛川市教育委員会では、計画地内には周知の遺跡が複数存在するため、各々の遺跡について時代・範囲等を把握する目的で、確認調査を実施した。その結果、遺構・遺物が確認された遺跡について、各事業において遺跡の消滅が免れない箇所の発掘調査を実施した（第1表参照）。

農免農道整備事業は、掛川市千羽から小原子、伊達方、八坂の各地区を東西に横断し、八坂から南進して菊川市西方（公文名）地区の一部を通過し、再び掛川市伊達方に至る道路を新設する工事である。工事計画地内には、大谷横穴群、八坂別所遺跡、牛岡遺跡、木ノ下遺跡、栗下遺跡が存在する。このうち、大谷横穴群の発掘調査は、平成10年度に財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所（以下、研究所と記す）が行い、弥生時代中期後葉から後期と思われる方形周溝墓1基と古墳時代後期から奈良時代の横穴墓30基を検出した。また、木ノ下遺跡は、市教委で確認調査を実施したが、遺構・遺物は確認されなかった。

上記2遺跡以外の発掘調査は、まず、八坂別所遺跡内を横断する農免農道路線の西半分を平成8年度に着手し、7年度から開始した農地整備事業に伴う発掘調査と並行して進めていった。その間、国道1号線日坂バイパス沿いに「道の駅掛川」を建設する計画が示されたため、それに隣接する農免農道路線内に存在する牛岡遺跡の発掘調査を優先する事態が発生したが、平成8年度から16年度までの9年間、実質調査期間は4ヶ年度かけて実施した。

2. 調査の方法

各遺跡の発掘調査は、まず、重機を使って表土の除去を行い、続いて人力による掘削作業を行った。調査区は、一辺5m四方の区画を任意に設定し、それに基づき遺物の取り上げと検出遺構の作図を行った。また、区画を設定した杭を国家座標に拾い出す基準点測量と水準測量を業者に委託して行った。

現地での図面は、遺構の状況により10分の1縮尺と20分の1縮尺で作成した。写真による記録は、ブローサイズ（6×7）原画白黒、35mmサイズカラーフィルム・同原画白黒・同カラーリバーサルフィルムを併用した。また、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を業者に委託して行った。

平成15年度の八坂別所遺跡発掘調査では現地説明会を、16年度の栗下遺跡発掘調査では夏休みに小・中学生を対象とした体験発掘を行った。また、それぞれの発掘調査を行った翌年度には、調査成果を公表する展示会を開催した。これらには、多くの方々に見学・参加していただいた。

また、八坂別所遺跡で検出した道路状遺構については、専門の研究者に実現していただき、調査方法や遺構の解釈について多数の御指導を賜った。

3. 遺跡をめぐる環境

1) 地理・歴史的環境

調査が行われた八坂地区は、旧掛川市域の東端、菊川市との境に位置する。標高527.3mの粟ヶ岳の谷を源流とする逆川とその支流の海老名川により解析された標高約80～200mの丘陵地となっている。今回調査対象となった遺跡は、いずれも逆川により形成された段丘上に立地する。

八坂の地名は、明治8年に影森・海老名・宮・鴨方の4か村が合併して付けられたため、古くからのものではない。記録を遡ると、『先代旧事本紀』に「佐夜(部)直」の名がみえる。直は古代の姓の一つで、大和王権に服属した地方豪族に与えられたものとされている。佐夜は左右の谷が狭く、「狭谷」から転じたとする説が一般的で、調査地周辺の地形に合致する。その後、佐夜は律令期におかれた「佐益(佐野)郡」の名に用いられており、大きな勢力を持つ一族であったと思われる。佐野郡衙は袋井市の坂尻遺跡が有力視されており、調査地周辺にあった佐夜(部)直の拠点が移動したと推測される。

調査地の北側には、今からちょうど1200年前の大同2年(807)に坂上田村麻呂が勲命を奉じて再興したと伝えられる事任八幡宮がある。事任八幡宮は、延喜式にみえる「己等乃麻知神社」に比定され、『枕草子』や『東関紀行』等に登場する。さらにここから東進すると、難所で知られた佐夜の中山峠があり、古くから多くの歌に詠まれている。時代は下るが、中世から近世には、峠の麓にそれぞれ宿が成立した。

現在の八坂地区は、平成18年度に完成した農地整備事業により、低地部には水田が、丘陵を造成した平坦面には茶畑が整然と広がっている。その中央を国道1号線日坂バイパスが縦断し、その脇には現代版の宿ともいえる「道の駅」が完成し、賑わいをみせている。昔も今も、調査地周辺は東海道における交通の要衝であったことが窺える。

2) 過去の発掘調査成果

調査区周辺の縄文時代から奈良・平安時代までの遺跡の概観については、市教委が平成17年度に刊行した『八坂別所遺跡・頭地遺跡・栗下遺跡・メノト遺跡 県営農地総合開発整備事業東山口地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(以下、農地整備報告書と記す)で触れているので参照願いたい。したがって、ここでは上記4遺跡と本書で報告する牛岡遺跡、さらに近接する地藏堂遺跡の過去の調査成果を示しておく。

八坂別所遺跡は、農地整備事業に伴い、平成7年度に市教委が調査した。調査面積は1,232㎡で、小穴64、溝状遺構13、茶毘跡1を検出した。小穴の一部は掘立柱建物跡の柱穴と考えられ、このうち、古墳時代後期の建物跡1棟が復元できた。それ以外は調査区外にのびるものが多く、全容は明らかにできなかった。溝状遺構は水田耕作に関係する区画や導水、自然流路と考えられる。茶毘跡は江戸時代のものである。出土遺物は、弥生時代前期後半から鎌倉時代にかけての土器類のほか、土馬の脚や瓦塔の破片等がある。須恵器の器種の豊富さは、集落とは異なる性格、寺院または官衙の存在を示唆している。

頭地遺跡は、日坂バイパス建設に伴い平成元～2年度に研究所が調査した例と、農地整備事業に伴い平成8～9年度に市教委が調査した例がある。

研究所の調査面積は150㎡で、土坑3、小穴6、溝状遺構3を検出した。土坑のうち、石組遺構を伴ったものは、湧水を利用した井戸と推定される。奈良時代から鎌倉時代に及ぶ陶器片が出土したが、石組遺構の年代は10世紀代の可能性が高い。小穴の一部は掘立柱建物跡の柱穴の可能性もある。溝状遺構は自然流路としたものと一体化している。溝状遺構から出土した多数の土器は、8世紀代の須恵

器が大半で、平安時代の灰釉陶器と13世紀代の陶器が若干含まれる。出土遺物の中に、短頸壺、長頸壺、四耳壺、横瓶といった器種がかなり含まれている。遺跡の立地から古代東海道との関係を予察しているが、集落ととらえている。

市教委の調査面積は900㎡で、周知の頭地遺跡の範囲を把握するような細長いトレンチ状の調査区を呈する。そのため、遺跡全域に遺構が存在する様子は窺えたが、調査区の幅の狭さから全容が把握できた遺構は少ない。調査では、小穴217、溝状遺構44、性格不明遺構7を検出した。出土遺物の中に、円面硯や須恵器坏蓋の転用硯等が含まれる。これらの遺物の時期である古代における頭地遺跡の性格は、市教委の調査では一般的な集落と異なる状況が窺えた。さらに、隣接する八坂別所遺跡も同様な性格が看取できるため、両遺跡の関連を考慮すべきである。

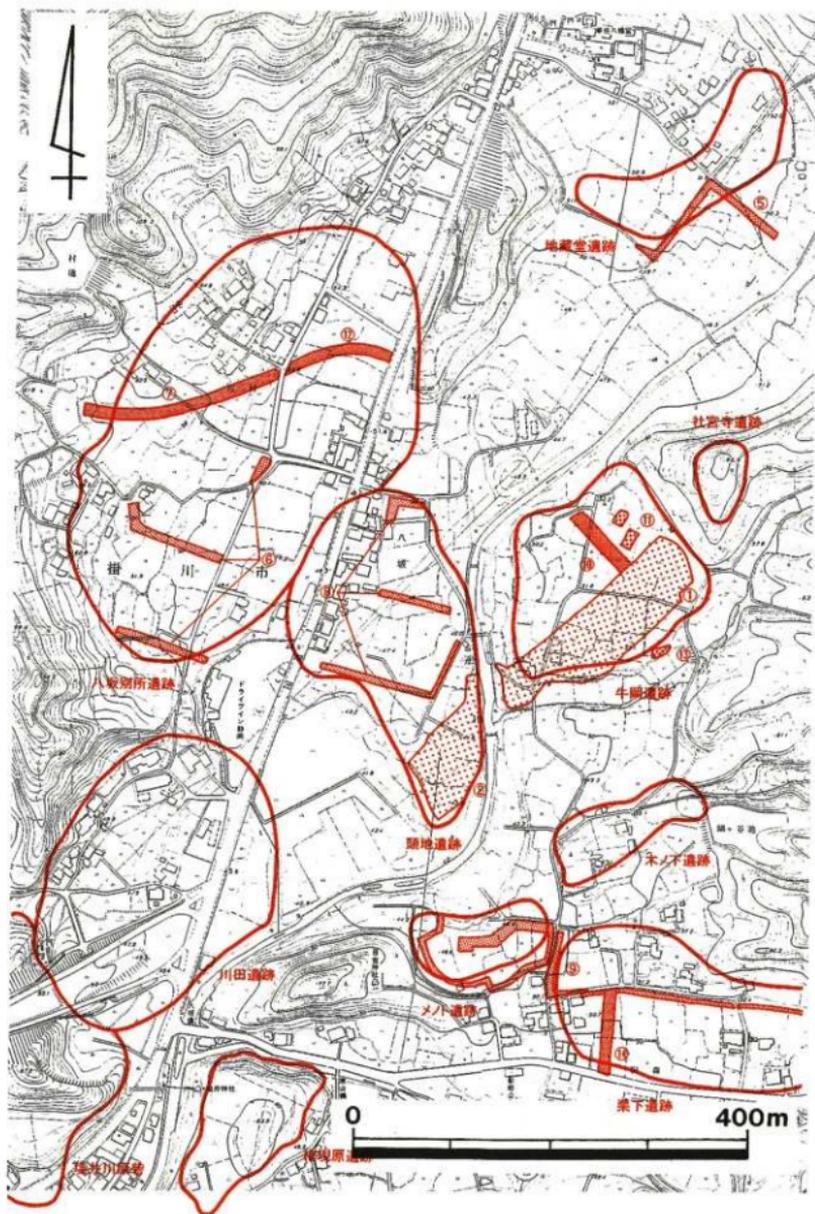
栗下遺跡とメノト遺跡は農地整備事業に伴い、平成9～11年度に市教委が調査した。調査面積は栗下遺跡が837㎡、メノト遺跡が1,350㎡である。小穴多数、掘立柱建物跡2、溝状遺構15以上、土坑、性格不明遺構を検出した。遺構は鎌倉時代と縄文時代に大別できる。縄文時代の遺構をみると、両遺跡での様相は異なる。栗下遺跡では柱穴と思われる小穴多数と、住居跡と思われる堅穴状遺構を検出しており、居住域と推測される。メノト遺跡ではドングリ等の貯蔵穴20を検出した。これらの底と側面には繩物が使われている。また、周辺からは凹石や磨石といった堅果類の粉食加工工具が出土し、埋没土中などに堅果類の殻の堆積がみられたことから、この場所が堅果類の加工場、いわゆる水場遺構であったことが十分に考えられる。これらの時期は、縄文時代後期中葉から晩期にかけてである。さらに多量の土器が出土した段丘の斜面は、土器捨て場の可能性がある。このように、集落内での空間的な使い分けが明らかとなった。

牛岡遺跡は、調査例が他の遺跡より多いため、実施順に紹介する。まず、日坂バイパス建設に伴い、平成元～3年度に研究所が調査した。調査面積は11,000㎡で、堅穴住居跡1、小穴、溝状遺構、土坑を多数検出した。小穴の並びから、掘立柱建物跡21棟を復元した。これらは、奈良時代から江戸時代初頭にかけての遺構である。さらに、多量の土器と石器が出土した縄文時代の包含層が、旧逆川の自然堤防上に堆積していた。縄文土器は、早期末から中期までのものを含むが、中期後半のものが主体を占める。これらはほとんど摩耗していないので、至近の自然堤防上に集落が営まれていたものと思われる。次に、今回の報告である調査が、平成12年度に実施された。

平成13年度には、道の駅掛川建設工事に伴い市教委が調査した。調査面積は396㎡で、上面は奈良時代から鎌倉時代にかけて、下面は縄文時代の2つの遺構面を検出した。上面では、小穴36、性格不明遺構2、土坑3を検出し、土師器・須恵器・陶器が出土した。小穴は掘立柱建物跡の柱穴と考えられるが、建物の全容は不明である。性格不明遺構のうちの1基は、石組みの井戸と考えられるが、時期は不明である。下面では小穴30を検出し、縄文土器・打製石斧が出土した。小穴は、散在している。

さらに、国道1号線日坂バイパスから道の駅掛川に入るための下り線ランプ造成工事に伴い、平成15年度に市教委が調査した。調査面積は200㎡である。縄文時代の小穴3を検出し、縄文土器が数点出土した。過去の調査で検出した奈良時代から江戸時代にかけての遺構は検出されなかった。牛岡遺跡の南端の一部と考えられる。

地藏堂遺跡は、農地整備事業に伴い、平成6年度に市教委が調査した。調査面積は1,780㎡で、溝状遺構9、土坑3、掘立柱建物跡1、柱列5、板塀跡2、小穴97を検出した。これらは調査区外に及んでいるため、遺構の全容を明らかにできなかった。出土遺物は、古墳時代から鎌倉時代にかけての土器で、量が少なく破片が多い。



第2図 周辺遺跡発掘調査位置図

第1表 八坂地内における遺跡発掘調査

番号	調査期間	遺跡名	調査機関	調査原因	時代	検出遺構
①	平成元年10月～ 平成3年12月	牛岡遺跡	研究所	日坂バイパス建設	縄文、古代、 中世、近世	竪穴住居跡、溝、 掘立柱建物跡、土 坑、小穴
②	平成元年10月～ 平成2年11月	頭地遺跡	研究所	日坂バイパス建設	奈良～中世	溝、掘立柱建物跡、 土坑、小穴
③	平成2年5月～ 平成2年10月	向畑遺跡	研究所	日坂バイパス建設	縄文、弥生	竪穴住居跡、溝、 掘立柱建物跡、土 坑、小穴
④	平成3年6月～ 平成3年9月	社宮寺遺跡	研究所	日坂バイパス建設	縄文、弥生、 近世	土坑、小穴
⑤	平成6年11月～ 平成7年2月	地蔵堂遺跡	市教委等	県営農地整備事業	古墳、古代、 中世	溝、掘立柱建物跡、 土坑、小穴
⑥	平成7年12月～ 平成8年3月	八坂別所遺跡	市教委	県営農地整備事業	弥生、古墳、 古代、中世、 近世	溝、掘立柱建物跡、 土坑、小穴、茶屋跡
⑦	平成8年6月～ 平成8年12月	八坂別所遺跡	市教委	農免農道新設工事	弥生、古墳、 古代、中世、 近世	溝、掘立柱建物跡、 土坑
⑧	平成9年1月～ 平成9年8月	頭地遺跡	市教委	県営農地整備事業	古代、中世	溝、掘立柱建物跡、 小穴
⑨	平成9年12月～ 平成11年3月・ 平成11年5月	メノト遺跡、 栗下遺跡	市教委	県営農地整備事業	縄文、中世、 近世	竪穴住居跡？、溝、 掘立柱建物跡、土 坑、小穴、貯蔵穴
⑩	平成12年10月～ 平成13年3月	牛岡遺跡	市教委	農免農道新設工事	縄文、弥生、 中世、近世	溝、掘立柱建物跡、 土坑、小穴
⑪	平成14年1月～ 平成14年3月	牛岡遺跡	市教委	「道の駅掛川」造成 工事	縄文、中世	土坑、小穴、井戸？
⑫	平成15年7月～ 平成16年3月	八坂別所遺跡	市教委	農免農道新設工事	弥生、古墳、 古代	溝、小穴、道路状遺 構
⑬	平成16年2月～ 平成16年3月	牛岡遺跡	市教委	「道の駅掛川」下り 線ランプ建設工事	縄文	小穴
⑭	平成16年7月～ 平成17年2月	栗下遺跡	市教委	農免農道新設工事	縄文、近世	竪穴住居跡、溝、 掘立柱建物跡、土 坑、小穴

確認調査を除く

○数字は第2図と対応

研究所：財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

市教委：掛川市教育委員会

II 平成8年度八坂別所遺跡の調査

八坂別所遺跡の現地調査は、平成8年度と15年度の2ヶ年にわけて実施した。そのため、隣接する調査地点ではあるが、グリッド名と検出した遺構名は年度ごとに付けて現地調査を行っており、本書でも混乱を避けるため、別に章立てして調査の成果を報告する。

1. 遺構（第2～13図：カラー図版1、図版1～7）

平成8年度の発掘調査は、平成8年6月27日から翌9年3月10日まで実施した。調査対象範囲を4つの調査区にわけ、a・b区からc区、d区の順に進めていった。

検出した遺構は、小穴175、溝状遺構9、性格不明遺構1である。以下、調査区ごとに成果を報告する。

1) a・b区（第2図：図版1・2）

a・b区とした調査区は、平成15年度の調査地点に隣接する。標高53～54m付近に位置し、グリッドの数字が大きくなるにつれて、標高も高くなる。長さ約40m、幅約9mで東西方向に細長く、調査地点内で最も面積が広い調査区である。現地調査では、A・B-6区で「a区」と「b区」に分けたが、現地調査と並行して実施した整理作業では「a・b区」としたため、本書もそれに準拠する。溝状遺構10、小穴56を検出し、遺構はa・b区のほぼ全域に広がっていた。

溝状遺構

SD02（第3図：図版1）

A・B-3・4区にかけて検出した。北東から南西方向の溝状遺構である。検出長約6.2m、幅0.7～1.55m、底幅0.6～0.8mを測る。確認面からの深さは、北東端で12.4cm、南東端で15.8cm、最深で20.6cmを測り、両端部での底面のレベルを比較すると、北東端が7cm高い。溝状遺構の立ち上がりは、北側が南側に比べやや急である。両端が立ち上がっているため、1つの遺構としたが、南西端から0.45m程離れて、SD02と向きが近似したSD03がある。したがって、2つの溝状遺構は同一であった可能性がある。遺物は、第14図-1・2の小皿が出土した。13世紀後半に位置づけられる。

SD04（第4図：図版2）

B-4区からA-6区にかけて検出した。北東から南西方向へやや弧を描く。北東端は、B-4区で立ち上がり、南西端はSD07に切られる。検出長7.6m、幅0.3～0.5m、底幅0.2～0.5mを測る。確認面からの深さは、北東端で2.5cm、南西端で2.8cmと浅いが、最深で36cmを測る。底面の北東側にい段差がいくつかみられる。遺物は、須恵器、山茶碗、近世陶器が出土した。SD07に切られることから18世紀以前に位置づけられた。

SD05（第4図：図版2）

A-6区で検出した。SD07の南東端付近で立ち上がり、そこから南へ向かい、すぐに南西へ向きを変えたのち、直線的に伸びて調査区外へ及ぶ。検出長約3m、幅0.6m、底幅0.38～0.44mを測る。深さは、北端で14.8cm、南西端で28.9cm、最深で29.4cmを測り、両端部での底面のレベルを比較すると、南西端が12.3cm高い。SD04と幅が似ているが、両者の間にあるSD07との切り合い関係から判断すると、同一ではないことがわかる。遺物は、第14図-3の山茶碗が出土した。SD06を切っていることから、近世に位置づけられる。

SD06（第4図：図版2）

A・B-6区で検出した。SD08の中央付近から南西方向へ向かい、SD07に切られた後、SD10

の東側付近で南東へ向きを変え、さらにSD05に切られて調査区外に及ぶ。検出長6.7m、幅0.2～0.5m、底幅0.07～0.22mを測る。深さは、北東端で2.7cm、南東端で5.2cm、最深で18.4cmを測り、両端部での底面のレベルを比較すると、北東端が14.7cm高い。遺物は、須恵器、土師器、山茶碗が出土した。SD07に切れ、SD08を切ることから、15世紀末から18世紀までの間に位置づけられる。

SD07 (第4図: 図版2)

A・B-6区で検出した。北西から南東方向の溝状遺構である。北西端はSD06・08と切り合い、SD04を切る南東端は細く立ち上がる。確認長3.5m、幅0.1～1.1m、底幅0.02～0.5mを測る。確認面からの深さは、北西端で10.5cm、南東端で0.7cm、最深で15.9cmを測る。両端部での底面レベルを比較すると北西端が17.7cm高い。底面の北東寄りで溝状に一段深くなる部分がある。遺物は、青磁、志戸呂産のすり鉢などが出土した。18世紀に位置づけられる。

SD08 (第4図: 図版2)

B-5区からA・B-6区にかけて検出した。北東から南西方向の溝状遺構である。南東側の上場がSD04に、途中から南西端側がSD06により切られている。南西端がはっきりしないが、確認長約7.2m、幅0.64～1.1m、底幅0.14～0.44mを測る。深さは、北東端で1.6cm、南西端で7.3cm、最深で22.5cmを測り、両端部での底面レベルを比較すると、南西端が6.5cm高い。新旧関係のわかる溝状遺構の中では最も古い。遺物は、須恵器、古瀬戸後期のすり鉢が出土した。15世紀末に位置づけられる。

SD10 (第4図: 図版2)

A-6・7区で検出した。北西から南東方向の溝状遺構である。長さ1.2m、幅0.5m、底幅0.15mを測る。確認面からの深さは北西端で2.7cm、南東端で6.6cm、最深で14cmを測る。他の溝状遺構に比べ極端に短い。遺物は、山茶碗の小片が出土した。鎌倉時代に位置づけられる。

現地調査の遺構確認段階では10条の溝状遺構を検出したが、A・B-2・3区で検出したSD01は、攪乱と判断したため、溝状遺構と認められたのは9条となる。A-8・9区で検出したSD09を除く8条の溝状遺構は、a・b区の中央付近のA-6区に複雑に集中していた。同区は調査区内で最も標高が低いところではないため、地形に影響されていないと思われる。しかし、人為的に掘られた様子が窺えるのは、SD06との交差部分での断面観察によるSD05のみである。それ以外の溝状遺構は、自然、人為の別も定かではなく、したがって性格は不明である。

柱穴列

a・b区で検出した小穴は56個を数える。このうち、規則性のみられる一群から掘立柱建物跡及び柵列を抽出した。柱穴の並びの方向は、おおむね東西または南北方向であり、調査区全体を通してほぼ一定である。これは農地整備事業に伴い、平成7年度に行った発掘調査においても見られた特徴である。

掘立柱建物跡

SH01 (第5図: 図版2)

A・B-7区で検出した。北西から南東方向が長軸の1間四方の建物跡である。SP27・28・34・37で構成される。長軸が3.3～3.45m、短軸が2.05～2.35mを測る。柱穴の掘り方は径30～57cmの円形または方形で、確認面からの深さは10～49.8cmを測る。SP34・37の規模は近似しているが、SP27・28は柵列2と重複し、柱穴間の通りも厳密には異なる。また、SP27は掘り直しが見られるため、他に比べ深くなる。遺物は、SP37から陶器の小片が出土した。中近世に位置づけられる。

柵列

SA01・02 (第5図: 図版2)

A・B-7区で検出した。北東から南西方向に直線上に並ぶ小穴群を2列検出した。2列はほぼ平行で約5m離れている。その間に小穴が確認されなかったため、これらは建物の柱穴ではなく、櫓列と判断した。北西側をSA01(櫓列1)、南東側をSA02(櫓列2)とする。

SA01では、4個の柱穴を確認した。確認長6.3mを測り、さらに調査区外へ及ぶと思われる。柱穴間は2.0~2.2mを測り、ほぼ等間隔である。掘り方はやや楕円形を呈し、長径36~50cm、短径30~42cmを測るが、長軸方向が異なる。確認面からの深さは6.6~26.3cmを測り、ややばらつきがみられる。構成する柱穴から、遺物は出土しなかった。

SA02では、4個の柱穴を確認した。確認長6.1mを測り、南西側はさらに調査区外へ及ぶと思われる。柱穴間は2.0~2.1mを測る。掘り方は、径45~62cmの円形または方形で、確認面からの深さは18.9~51.9cmを測る。SP27と31は掘り直しがあるため、他に比べやや深くなる。SP31から小皿の小片が出土した。鎌倉時代に位置づけられる。

2) c区(第6図:図版3)

c区は、調査区の東端がa・b区と接するが、調査時期が異なったため1つの調査区とした。調査の中で唯一、2つの遺構面を確認した。標高は、第1面が53.476~54.754m、第2面が53.602m~54.118mで、レベル差は最大で1.152mを測る。なお、農地整備事業の発掘調査では、3面の遺構面を確認した調査区がある。c区全体で溝状遺構2、小穴4、性格不明遺構2を検出した。他の調査区に比べ面積が狭く、なおかつ検出した遺構数は極めて少ない。これはc区周辺が谷地形に位置しているからだと思う。以下、第1面、第2面の順に報告する。

第1面の遺構(第6図:図版3)

第1面では、溝状遺構2、小穴4、性格不明遺構1を検出した。溝状遺構は、検出長3.6~3.9m、幅0.2~0.5m、深さ0.05mほどで、a・b区のものに比べ小規模である。小穴は散在的で、調査区境付近に位置するため、建物や櫓列などの遺構を復元するに至らなかった。

性格不明遺構

SX01(第7図:図版3)

A-9・10区で検出した。長径1.95m、短径1.25mの楕円形を呈する。確認面から、最深で55cmを測る。ほぼ垂直に掘り込まれ、底面の北東隅と中央から南側には、さらに一段深い掘り込みがある。覆土は炭化物を含む層などがレンズ状に堆積していた。遺物が出土しなかったため、遺構の時期は不明である。遺構の性格は、特異な堆積状況から類例をあたりたいが、今のところ不明としておく。

第2面の遺構(第6図:図版3)

第2面はc区全体からではなく、西寄りのA・B-11~15区で確認された。遺構はSX03のみ検出した。

性格不明遺構

SX03(第8図:図版3)

A-14・15区で検出した。北東から南西方向の溝状を呈し、南西端は調査区外へ及ぶ。検出長4.1mで、さらに北東側に約1mの細長い溝が伸びる。幅0.57~0.8mを測る。確認面から深さは、北東端で25.9cm、南西端で4.5cm、最深で21.8cmを測る。覆土内に長さ0.3~1mほどの木の枝が底面を覆うように検出された。これらの向きはSX03の長軸方向に沿って揃っており、北東端が立ち上がっていることから推測すると、流れ着いたのではなく、人為的に入れられたものと思われる。遺構の性格は不明だが、耕作に伴う暗渠ではないかと思われる。遺物は、土師器の小片が出土した。

3) d区 (第9図: 図版4~7)

d区は、標高56.770~58.575mと全調査区の中で最も高い所に位置する。調査時点では現道が存在していたため、A・B-20区付近で調査区が分断されている。溝状遺構4、小穴115、性格不明遺構1を検出した。標高が高いグリッドでは、遺構は検出されなかった。八坂別所遺跡内における遺構の分布範囲を把握することができたといえよう。

溝状遺構

SD15 (第10図: 図版6)

B・C-26・27区で検出した。調査区を南北に蛇行しながら横断し、両端とも調査区外に及ぶ。検出長7.9m、幅0.5~1.5m、底幅0.04~0.68mを測る。確認面からの深さは、北端側で26cm、南端側で38cm、最深で39.9cmを測り、両端部での底面のレベルを比較すると、北端側が11cm高い。底面には、複雑に段差がある。覆土には、砂利が多く含まれる。遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

d区では他に2条の溝状遺構を検出したが、いずれも南北方向の自然流路と考えられる。

柱穴列1~3 (第11図: 図版6・7)

A・B・C-21~23区で、北東から南西方向に直線上に並ぶ小穴群を、3列検出した。北西側から、柱穴列1、2、3とする。

柱穴列1では、3個の柱穴を確認した。確認長5.3m、柱穴間は2.6~2.65cmを測る。掘り方はやや楕円形を呈し、長径30~35cm、短径22~35cmを測る。確認面からの深さは4.8~12.3cmを測り、ばらつきがみられる。遺物は出土しなかった。

柱穴列2では、3個の柱穴を確認した。確認長4.8m、柱穴間は2.2~2.6mを測る。掘り方は、30~35cmの円形及び楕円形で、確認面からの深さは4.1~12.9cmを測り、ばらつきがみられる。SH01の柱穴と重複するSP113から須恵器の小片が出土した。

柱穴列3では、5個の柱穴を確認した。確認長6.3mで、調査区外へ及ぶと思われる。柱穴間は1.2~1.8mを測る。掘り方は円形が多く、直径30~42cmを測る。確認面からの深さは15.4~34cmを測り、ばらつきがある。SP96に掘り直しがみられる。SP96から山茶碗の小片が出土した。鎌倉時代に位置づけられる。

柱穴列4~5・SX02 (第12図: 図版7)

B・C-23~25区で検出した。北西から南東方向に直線上に並ぶSP146・145・144・143で構成される柱穴列4と北東から南西方向に並ぶSP140・138・142・143で構成される柱穴列5を確認した。SP143がコーナーにあたる。いずれの柱穴列も調査区外へ及ぶ。柱穴列4は確認長6.2m、柱穴間は1.7~2.0mを測る。柱穴列5は確認長6m、柱穴間は1.8~1.9mを測る。柱穴の掘り方は直径35~80cmの楕円形もしくは円形が多い。確認面からの深さは、10.3~27.8cmを測る。覆土内に石が入れられていた柱穴があり、根固め石の可能性がある。これらは、SX02を囲む柵列または塀跡の可能性がある。SP138から古瀬戸後Ⅱ期の平碗の破片が出土した。14世紀に位置づけられる。

柱穴列4と柱穴列5の内側でSX02を検出した。北西から南東方向の掘り込みである。北西側が調査区外に及ぶ。確認長は4.6m、幅1.9mを測る。確認面からの深さは10.9cmを測る。南東端付近と1.4mほど北西側に、北東から南西方向に直径30cmほどの穴が2列並んでいるのを確認した。これらの穴の深さは3.8~20.8cmとばらつきがある。遺構の性格は不明である。遺物は土師器、山茶碗の小片が出土した。

柱穴列群 (第13図: 図版7)

D・E-31・32区で検出した。柱穴と思われる小穴を12個確認した。3群にわけ、柱穴列を復元し

たが、調査区の幅が1.5mほどであるため、建物の全容が判明したものはない。柱穴の直径は25～50cm、確認面からの深さは11.2～46.5cmを測る。B-B'は柱穴間が狭く、深さも一定でないため、構成する4つの穴が同時期のものではないと思われる。遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

2. 遺物

平成8年度の調査で出土した遺物は、コンテナ9箱分である。

1) 土器 (第14・15図)

第14図-1・2は小皿で、1が渥美・湖西系、2は東遠江系である。1は、口径7.4cm、器高1.35cm、2は、口径7.8cm、器高1.4cmを測る。ともに底部外面に糸切り痕(第15図-21、22)を残す。3は、東遠江系の山茶碗の底部で、直径6.2cmの扁平な高台が付く。底部外面に糸切り痕(第15図-23)を残す。4～25は、須恵器である。4の坏蓋は、最大径9.4cm、器高3.45cmを測り、口縁部の内側に幅広い沈線がめぐり、5～10は坏身で、どれも立ち上がりが短く内傾し、受部からわずかに出る程度である。外面調整は、6～9では底部から体部までヘラ削りが施されるが、10は底部に限られ、5は未調整である。法量は、口径が10.6～9.0cm、最大径が11.0～9.7cm、器高は3.5～2.65cmである。10の底部外面に、「十」のヘラ記号(第15図-24)がある。11はかえりのある坏蓋で、最大径11.0cm、器高3.4cmを測る。12・13は、坏蓋の可能性も考えたが、12は器高が高いこと、13は口縁部が開くことから、かえりのある坏蓋に伴う坏身と判断した。12は、最大径11.5cm、器高4.75cm、口縁部の外面に沈線がめぐり、13は、最大径11.4cm、器高3.95cm、口縁部の外面に沈線がめぐり、体部下端にヘラ削りが一周するが、底部はヘラ削り未調整である。14～17は、有台坏身である。14は底部を水平に作るが、17は底部が高台端部近くまで垂下し、15・16は高台端部より垂下する可能性が高い。法量は、14が、口径15.8cm、高台径10.6cm、器高4.5cm、15が、口径14.2cm、高台径9.6cm、器高4.05cm、16が、口径13.5cm、高台径9.6cm、器高4.25cm、17は、口径12.7cm、高台径7.7cm、器高4.45cmを測る。ヘラ削りは、17が体部下端に及ぶほかは、高台の内側に限られる。18は、長頸瓶の頸部破片で、器壁が厚く重量がある。19は平瓶の破片で、体部の最大径12.8cmと推定される。20は、口径25.3cmを測る壺の口縁部である。口縁部は、受け口状を呈し、断面形は長方形である。21・22は、高坏の脚部である。端部の作りは共通するが、21の脚部中央に2条の沈線がめぐり、22より一回り大きい。23・24は陶臼である。23は、生焼けて器表の剥落が著しく、調整不明である。24の底部外面には、断面が丸味を帯びる棒状の工具による押圧痕が残り、その上を横ナデする。25は瓶子で、体部の最大径が11.2cmを測り、外面の下端にヘラ削りが確認できる。26～28は、土師器である。26は、高坏の坏部で、口径17.2cmを測り、外面に縦方向のハケ目が、内面に横方向のハケ目が施される。27・28は坏で、27が、最大径13.95cm、器高5.1cm、28は、最大径13.2cm、器高は現存で4.85cmを測る。ともに器表の剥落が著しいが、27の口縁部外面には横ナデの擦痕がかすかに残り、ともに体部外面の下半に指頭痕が確認できる。

第15図-1～12は、土師器である。1～5は坏で、1が、最大径12.6cm、器高4.7cm、2が、最大径11.3cm、器高4.95cm、3が、最大径11.2cm、器高4.6cm、4が、最大径10.7cm、器高3.4cm、5は、最大径13.0cm、器高3.75cmを測る。6は鉢で、最大径10.1cm、器高は現存で4.7cmを測り、底部に粘土の剥離痕があることから、脚付と考えられる。7の皿は、最大径15.8cm、器高1.35cmを測り、内外面に赤彩の痕跡が残る。8は、壺または壺の口縁部で、口径19.2cmを測る。9・10は、大型の台付き壺の脚で、接合部の直径は9が8.5cm、10が7.9cmを測る。9は、外面が縦方向のハケ目調整、内面は横方向のハケ目調整が施される。10の外面と底部内面に幅3～4mmの棒状工具による調整が、脚部内面には横方向のハケ目調整が施される。11・12は、甌で、11は、最大径18.8cmを測り、外面に縦方向の粗

いハケ目が残る。12は、底径11.8cmを測り、外面に縦方向のハケ目、内面に横方向のハケ目が施される。13は、同安窯系の青磁碗の口縁部で、細めの櫛掻き文が見られる。14は、東遠江系の山茶碗の底部で、高台径7.8cmを測り、底部外面に「太郎」の墨書がある。15は、瀬戸・美濃産のすり鉢で、サビ釉が施される。16～18は、ロクロ整形のかかわりけで、16が、口径11.0cm、器高2.8cm、17が、口径9.9cm、器高2.6cm、18は灯明皿に使用されたかわりけで、口径7.4cm、器高1.6cmを測る。

出土した須恵器・土師器は、25の瓶子が奈良時代後半から平安時代に位置づけられるほかは、7世紀の第1四半世紀から8世紀初頭の間に収まるものと考えられる。山茶碗は、第15図-14の東遠江系の山茶碗が13世紀前半に位置づけられる可能性があるが、13世紀後半が主体となる。第15図-16・17のかわりけは、16世紀後半に、18のかわりけは17世紀前半に、すり鉢は、17世紀から18世紀前半に位置づけられる。

2) ミニチュア土器・土馬 (第15図-19・20)

19は、全幅4.1cm、現存の高さ3.15cm、現存長3.7cm、器壁の厚さ3～6mmを測るミニチュア土器の破片である。側面が丸味を帯び、底部が平坦なことから、須恵器の横板を模したものと判断した。20は土馬の足で、現存長4.55cm、断面形は卵形を呈し、全体に指頭痕が残る。

3. まとめにかえて

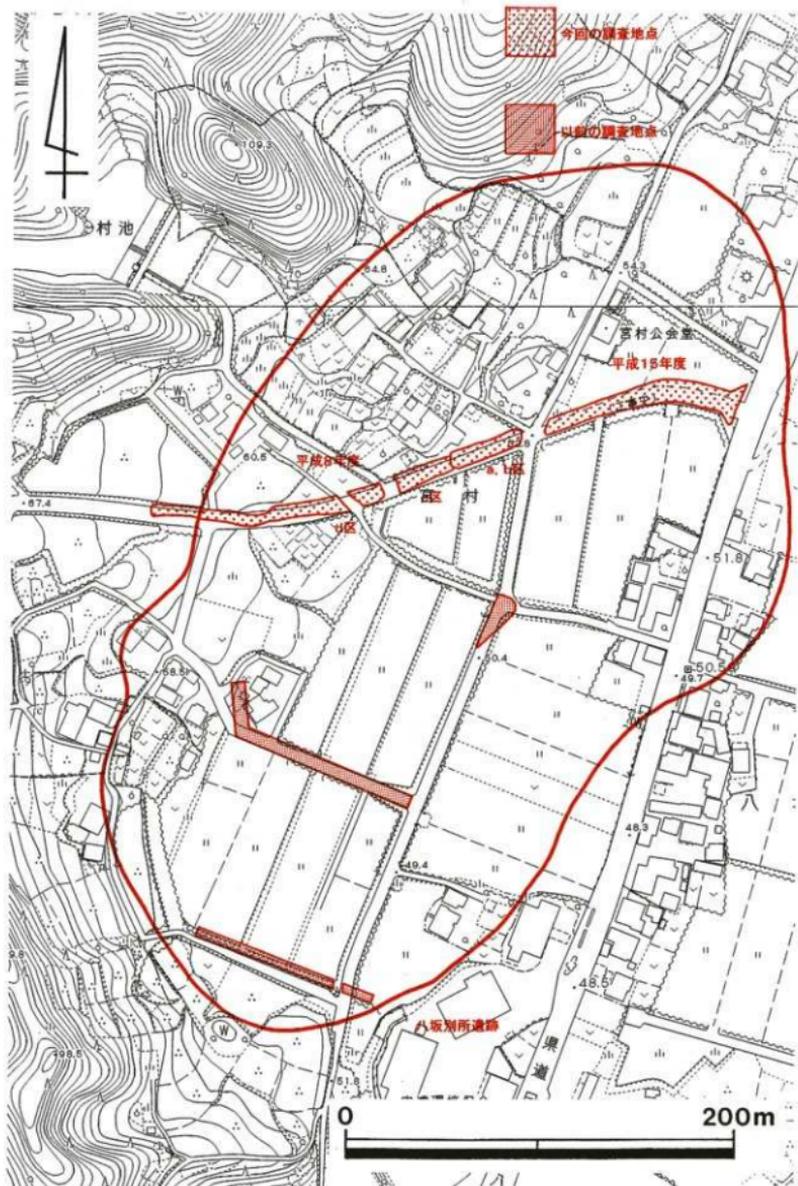
今回の調査では、中世から近世の溝状遺構、掘立柱建物跡、柱穴列等を検出した。残念ながら、当該期の遺跡の性格・構造等を考察できるほどの資料は得られなかった。遺物は、7世紀の第1四半世紀から8世紀初頭、奈良時代後半から平安時代、13世紀後半、16世紀後半から18世紀前半に位置づけられる土器がある。

八坂別所遺跡内では、平成6年度に確認調査、平成7年度に農地整備事業に伴う発掘調査が実施され、7世紀の第1四半世紀から奈良時代全般、平安時代末から鎌倉時代にかけての2時期の遺物が多く出土している。

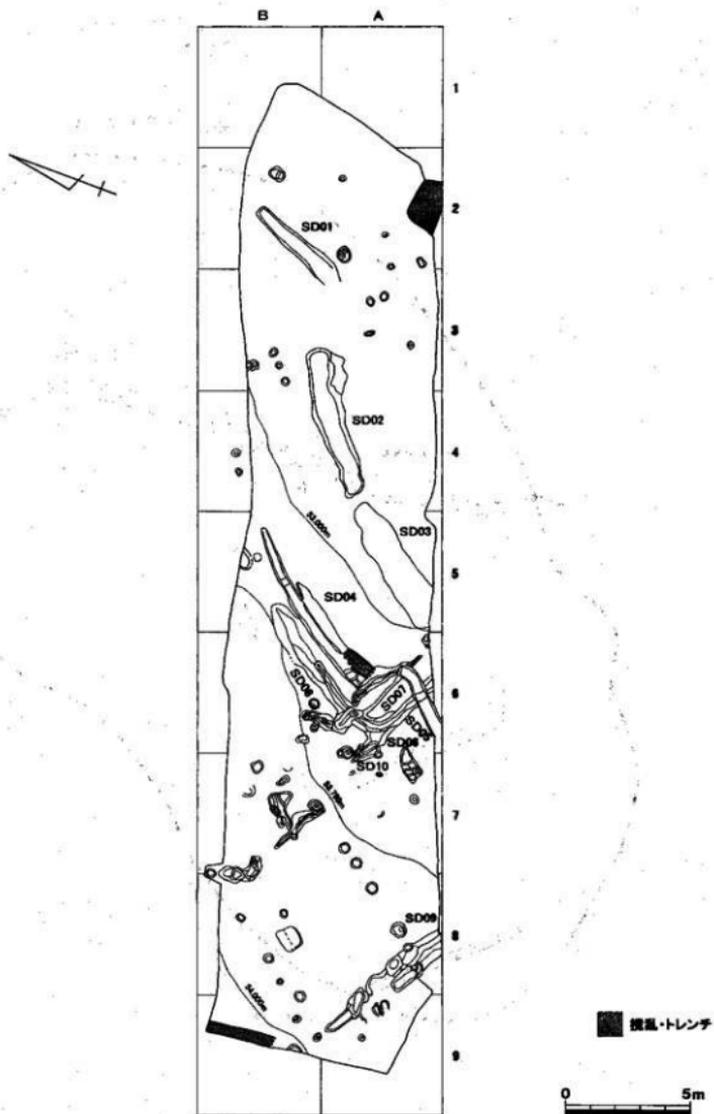
今回、7世紀の第1四半世紀から8世紀初頭の間に収まると考えられる遺物が多く出土した。これらの遺物に伴う遺構は明確にできなかったが、大きく2箇所に分かれて分布していることが明らかとなった。そのうちの1箇所目は、B-14区を中心にA・B-11区からA・B-17区にかけての30mほどの範囲である。ここからは、須恵器坏蓋(第14図-4)、坏身(5、8)、かえりのある坏蓋(11)、坏身(12)、有台坏身(14、15、16、17)、平瓶(19)、甕(20)、陶白(23、24)、土師器高坏(26)、坏(27、第15図-3、4)、鉢(6)、皿(7)、甌(11)が出土している。もう1箇所は、ここから約80m離れたD-31区を中心とした約15mの範囲である。ここからは、須恵器坏身(第14図-6、7、9)、坏身(13)、高坏(21、22)、土師器坏(28、第15図-1、2、5)、甕または壺(8)、台付き甕(9、10)、甌(12)、土馬(19)、ミニチュア土器(20)が出土している。

D-31区を中心とした地域からは、祭祀に関わる土馬・ミニチュア土器が出土していて、さらに完形の須恵器坏身(第14-6、9)・土師器坏(第15図-2)が出土していることから、この場所での祭祀が想定される。

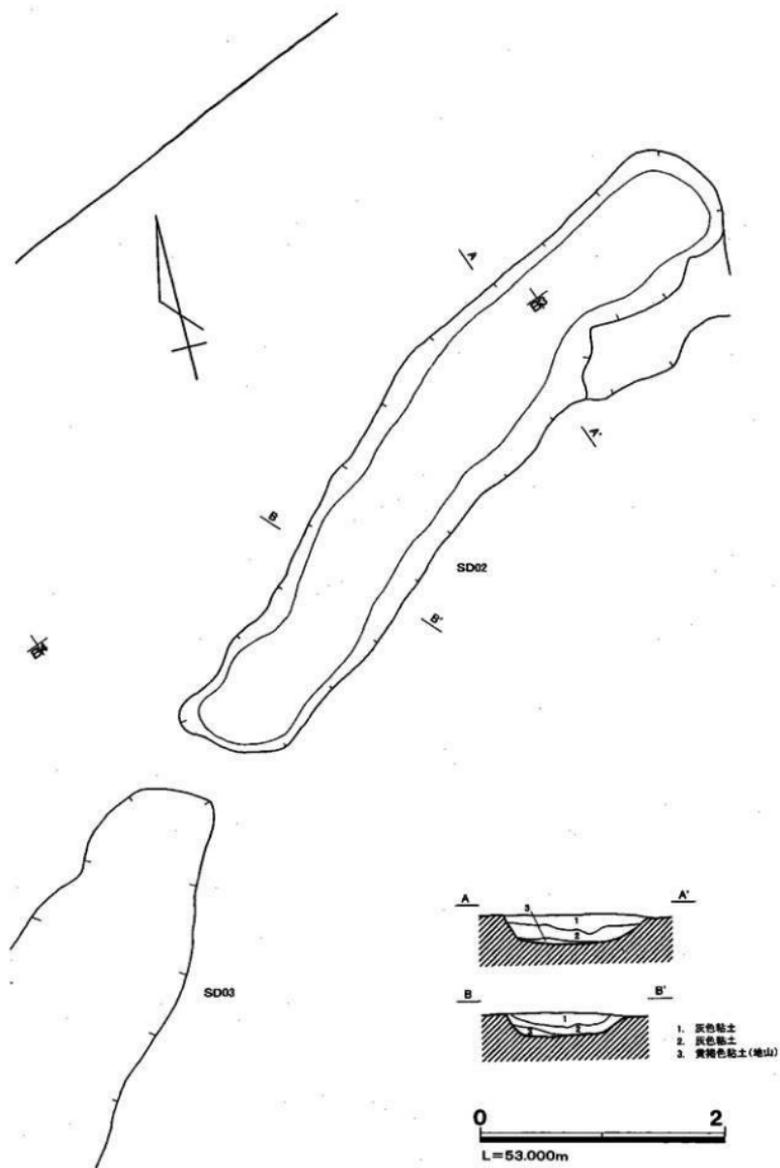
遺構は明らかではなく、遺跡の性格も判明していないが、7世紀の第1四半世紀から8世紀初頭の八坂別所遺跡の本体は、今回の調査地点あたりに存在する可能性が高いのではないかと考えられる。



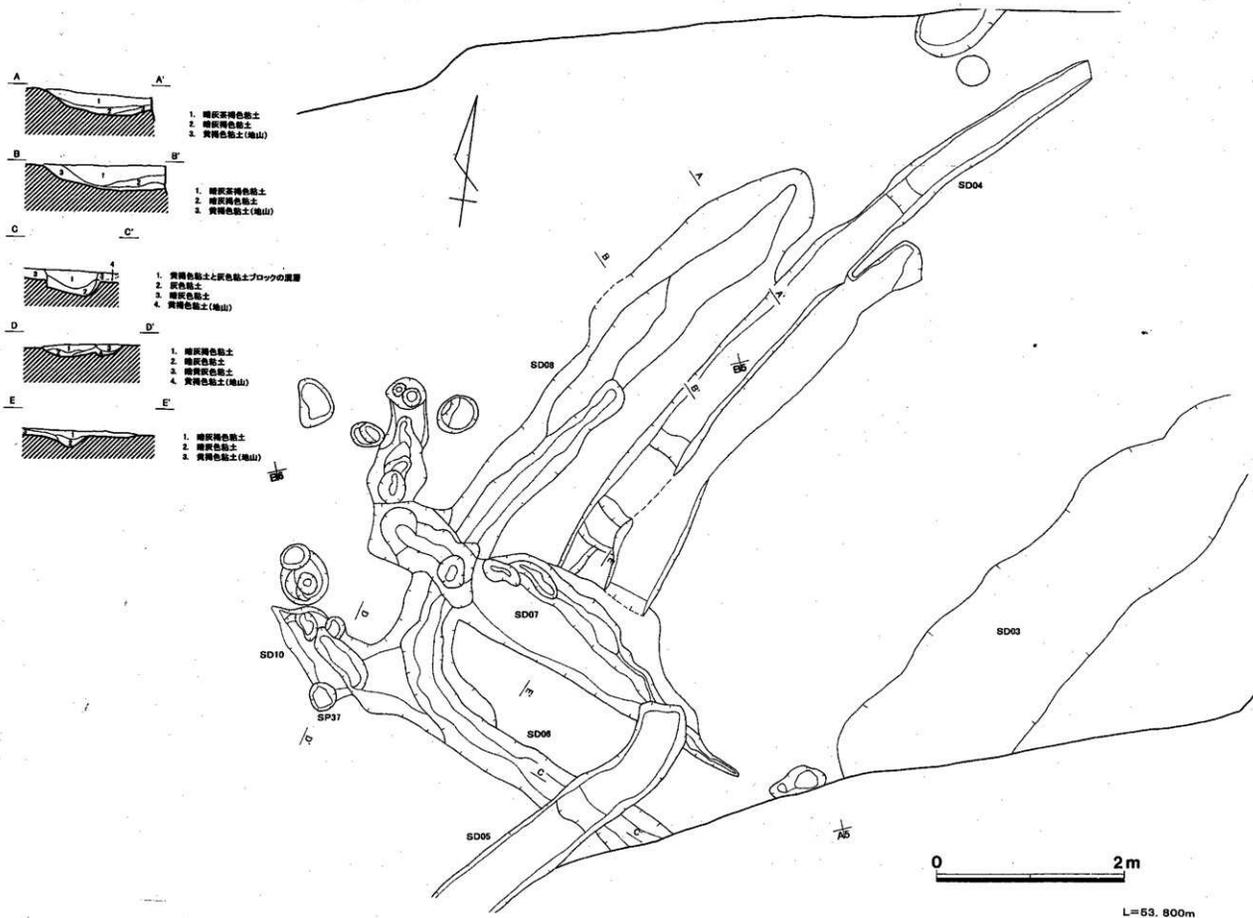
第1図 遺跡周辺地形図 調査区位置図



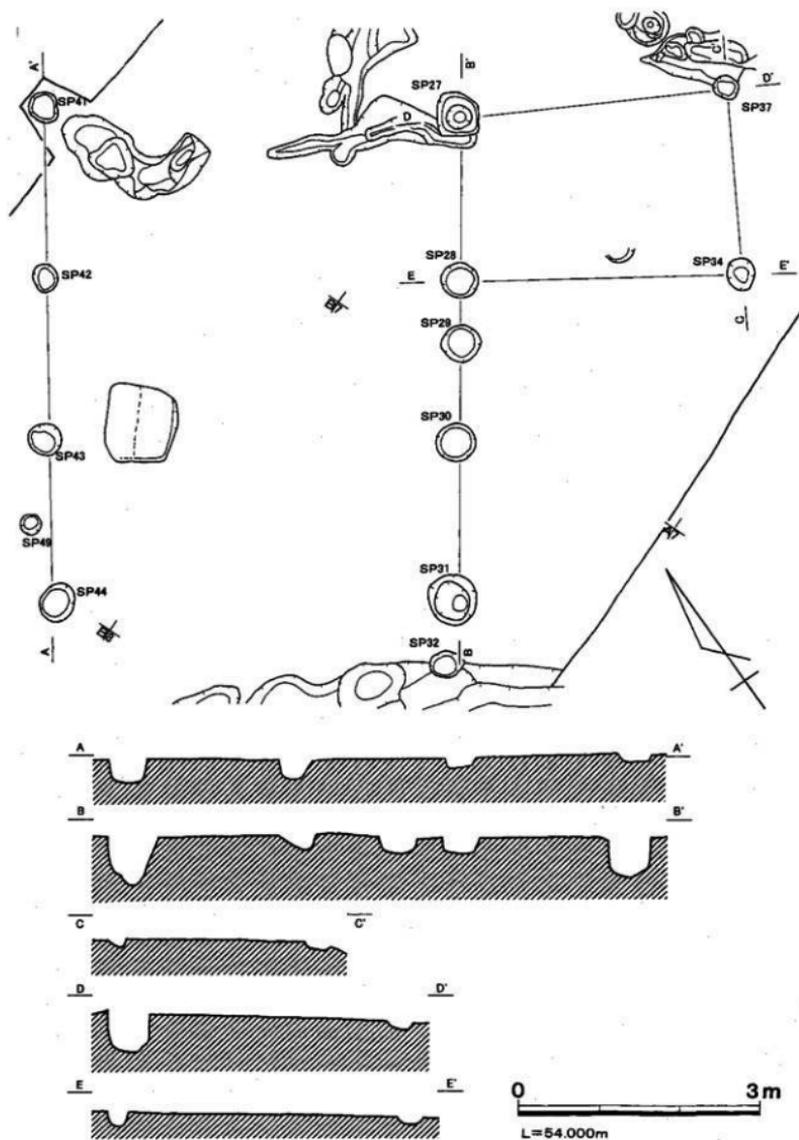
第2図 a・b区 遺構全体図



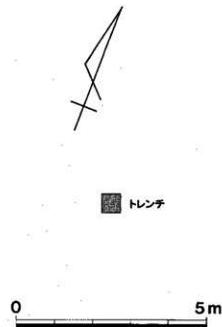
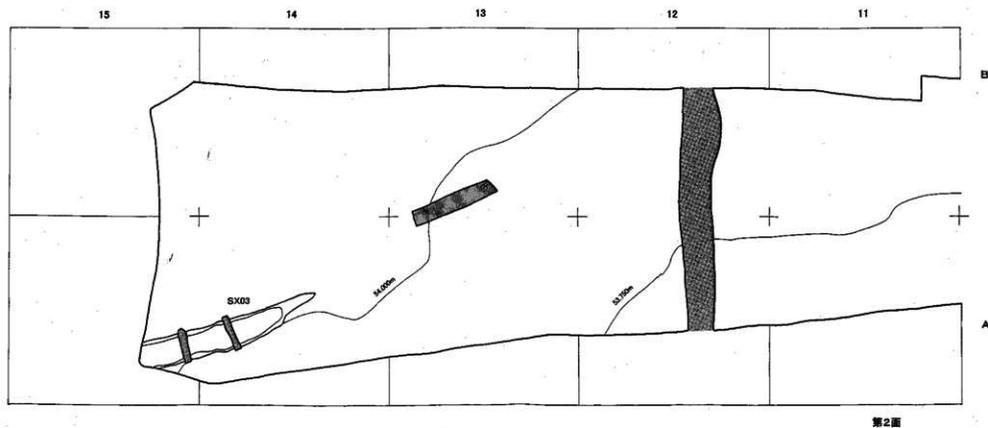
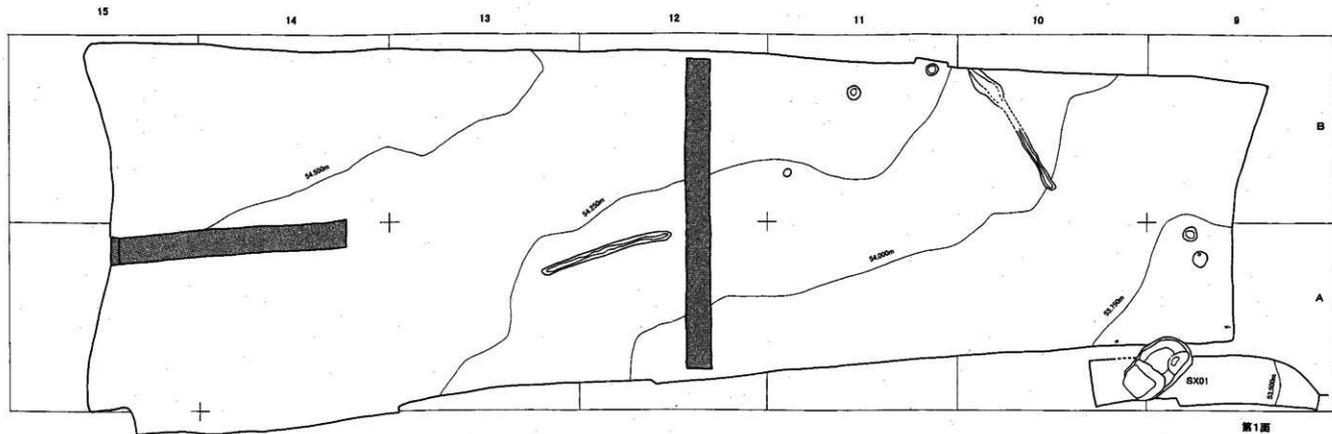
第3图 a·b区 SD实测图(1)



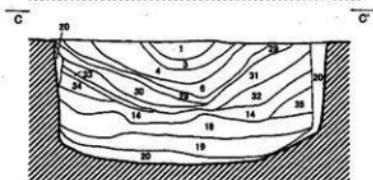
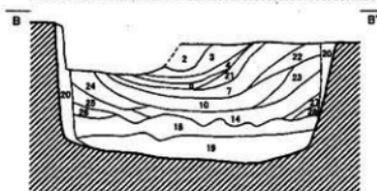
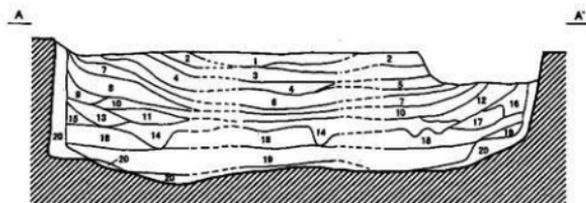
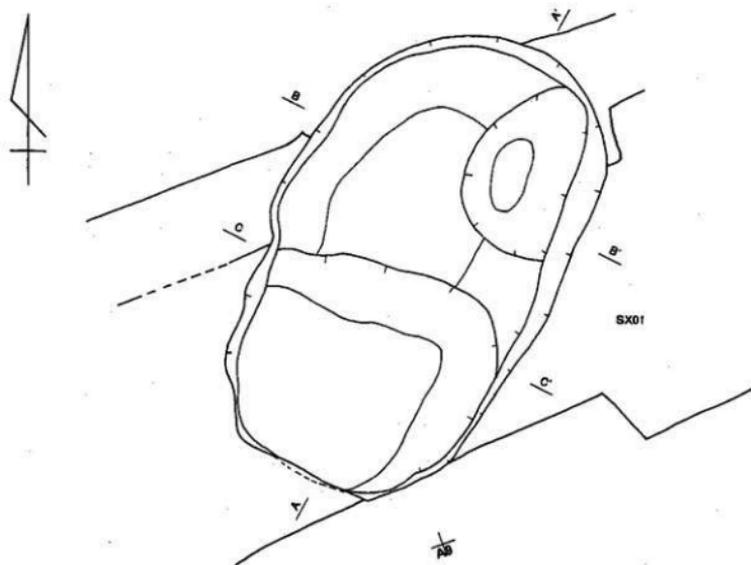
第4図 a・b区 SD実測図(2)



第5图 a·b区 柱穴列实测图



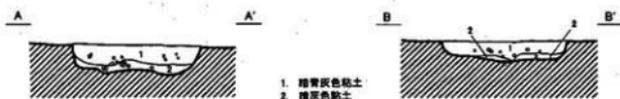
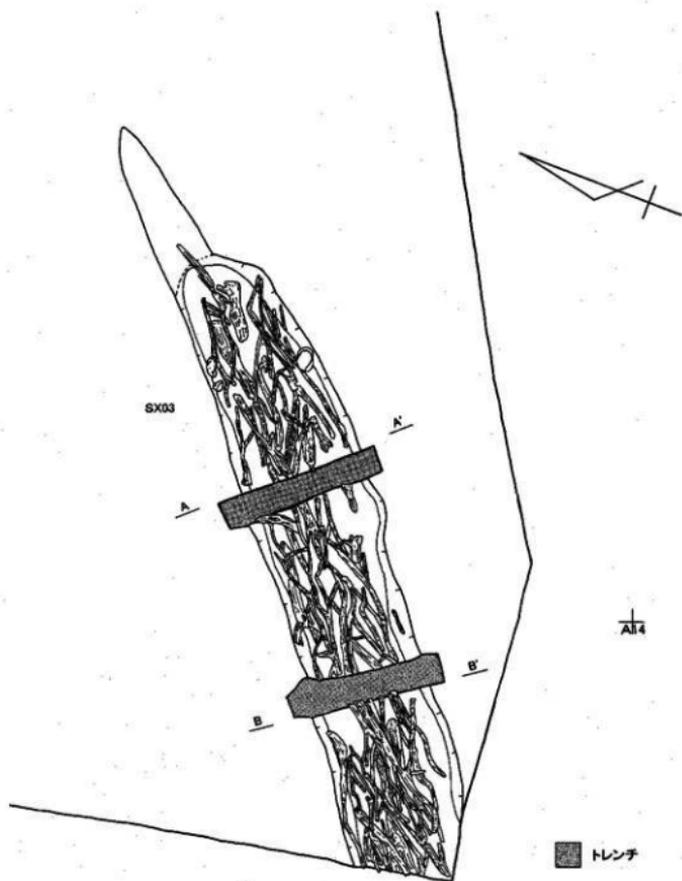
第6図 c区 遺構全体図



- | | |
|----------------|-----------|
| 1. 暗灰色黏土 | 23. 灰褐色黏土 |
| 2. 灰褐色黏土上灰化物遺層 | 24. 灰褐色黏土 |
| 3. 灰黃褐色黏土 | 25. 黃色黏土 |
| 4. 灰褐色黏土上灰化物遺層 | 26. 灰色黏土 |
| 5. 灰褐色黏土 | 27. 黃色黏土 |
| 6. 灰褐色黏土 | 28. 灰色黏土 |
| 7. 灰褐色黏土 | 29. 灰褐色黏土 |
| 8. 灰褐色黏土 | 30. 灰色黏土 |
| 9. 黃褐色黏土 | 31. 灰褐色黏土 |
| 10. 灰色黏土上灰化物遺層 | 32. 黃褐色黏土 |
| 11. 灰褐色黏土 | 33. 灰色黏土 |
| 12. 黃褐色黏土 | 34. 黃褐色黏土 |
| 13. 黃褐色黏土 | 35. 黃色黏土 |
| 14. 灰色黏土上灰化物遺層 | |
| 15. 黃褐色黏土 | |
| 16. 黃褐色黏土 | |
| 17. 深灰色黏土 | |
| 18. 灰色黏土 | |
| 19. 明灰色砂 | |
| 20. 地山 | |
| 21. 灰褐色黏土 | |
| 22. 黃褐色黏土 | |

0 1m
L=53.700m

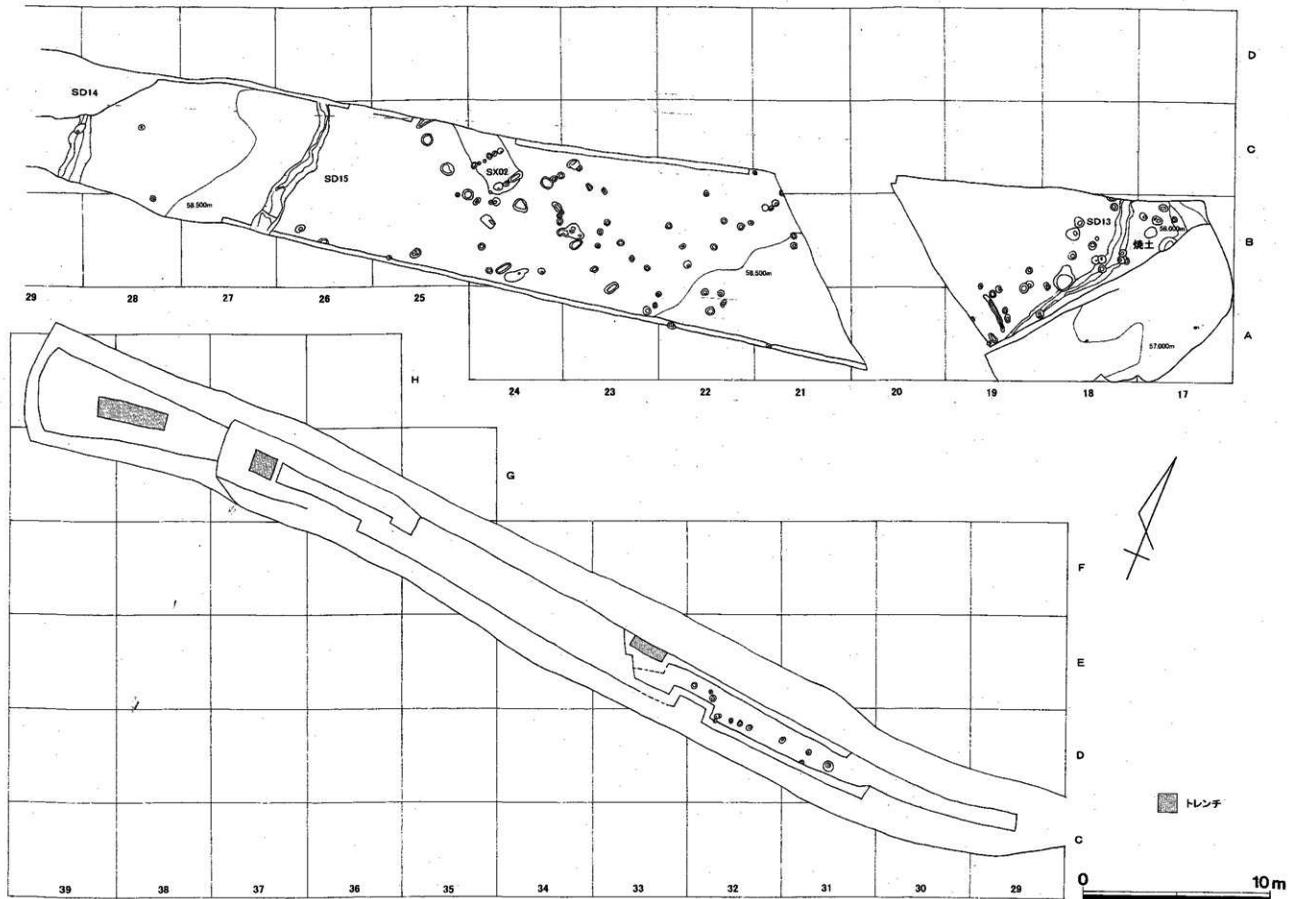
第7圖 c区 SX01実測図



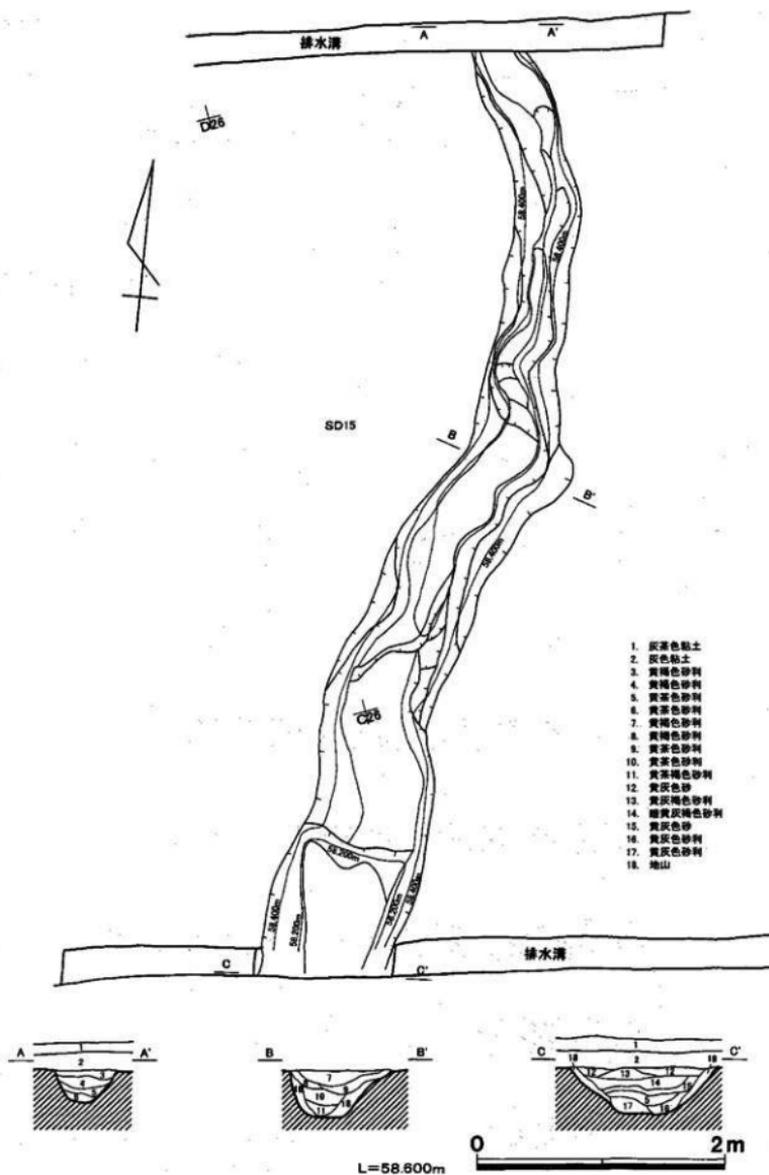
L=54.100m



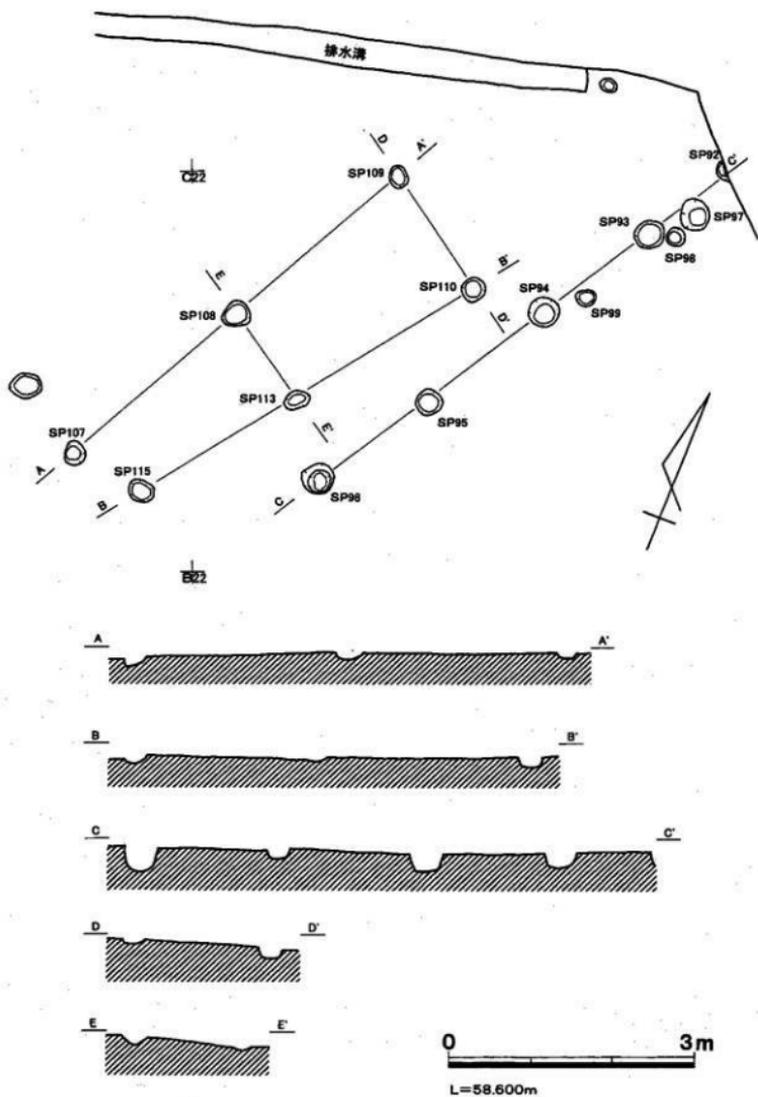
第8図 c区 SX03実測図



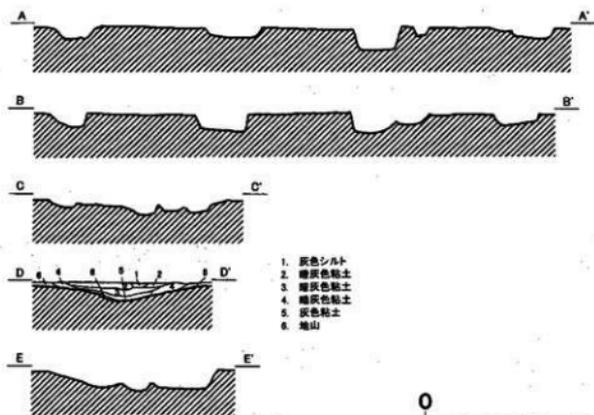
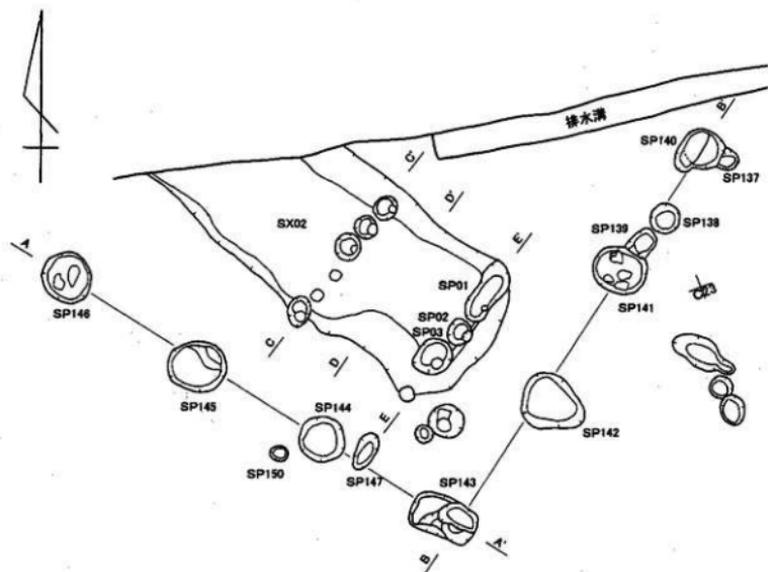
第9図 d区 遺構全体図



第10圖 d区 SD15実測図



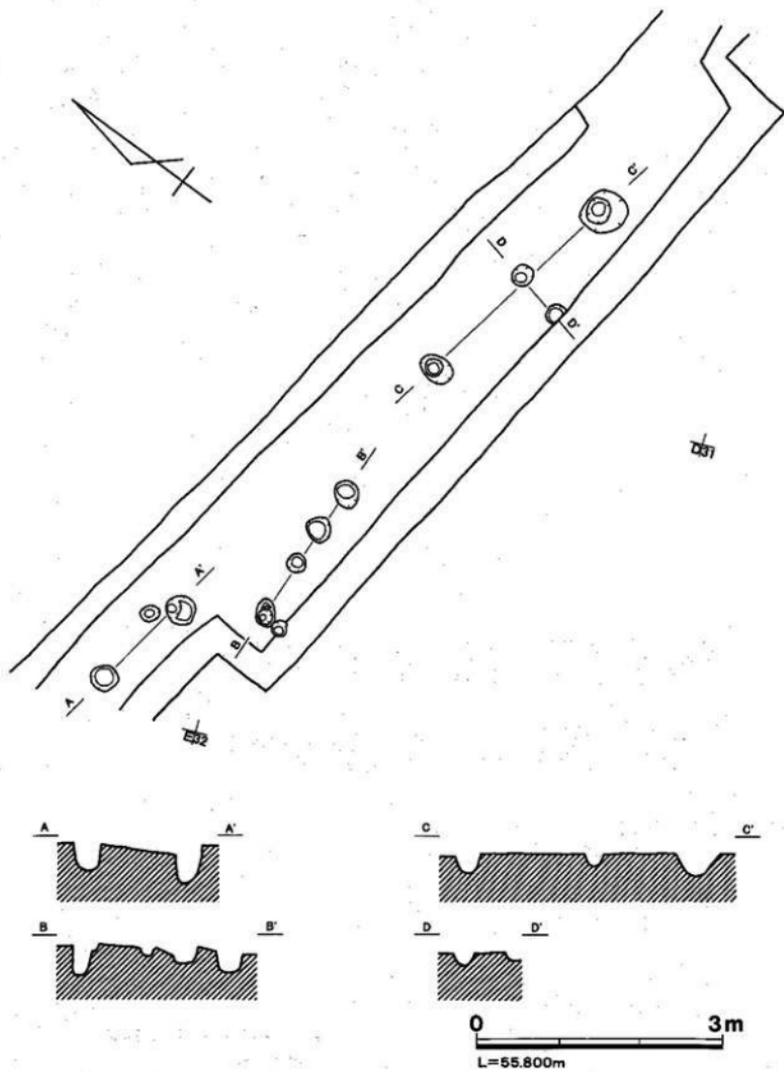
第11圖 d区 柱穴列実測圖(1)



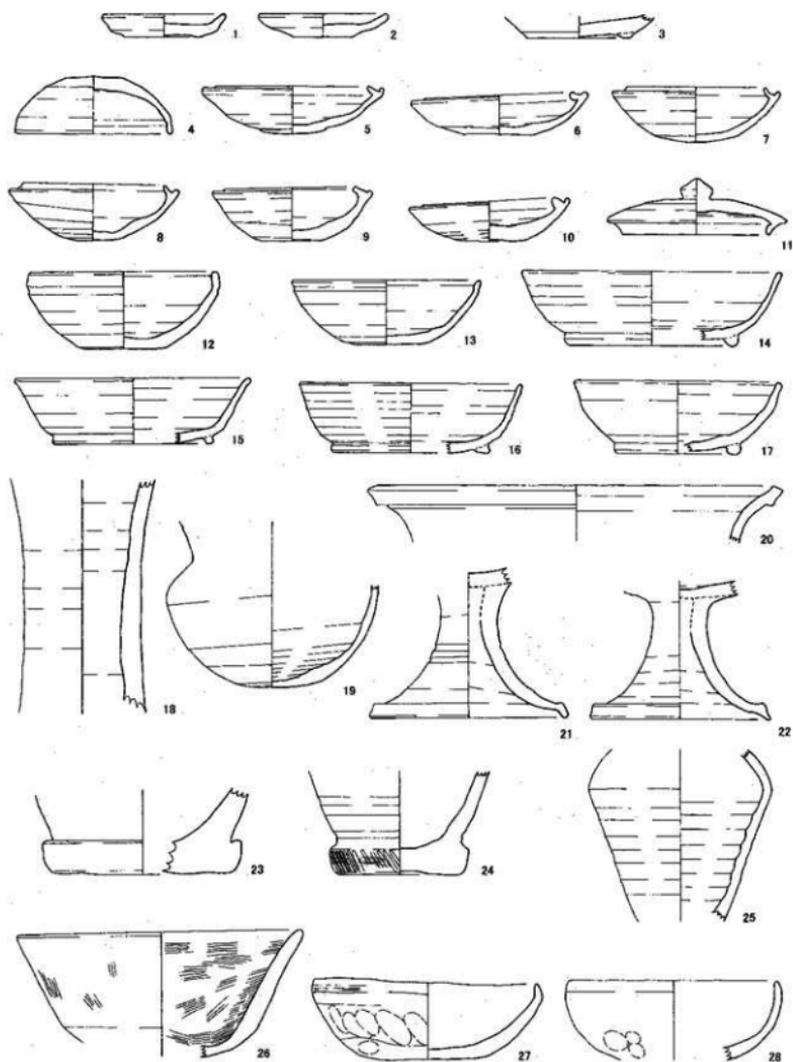
1. 灰色シルト
2. 暗灰色粘土
3. 暗灰色粘土
4. 暗灰色粘土
5. 灰色粘土
6. 地山



第12図 d区 柱穴列実測図(2)



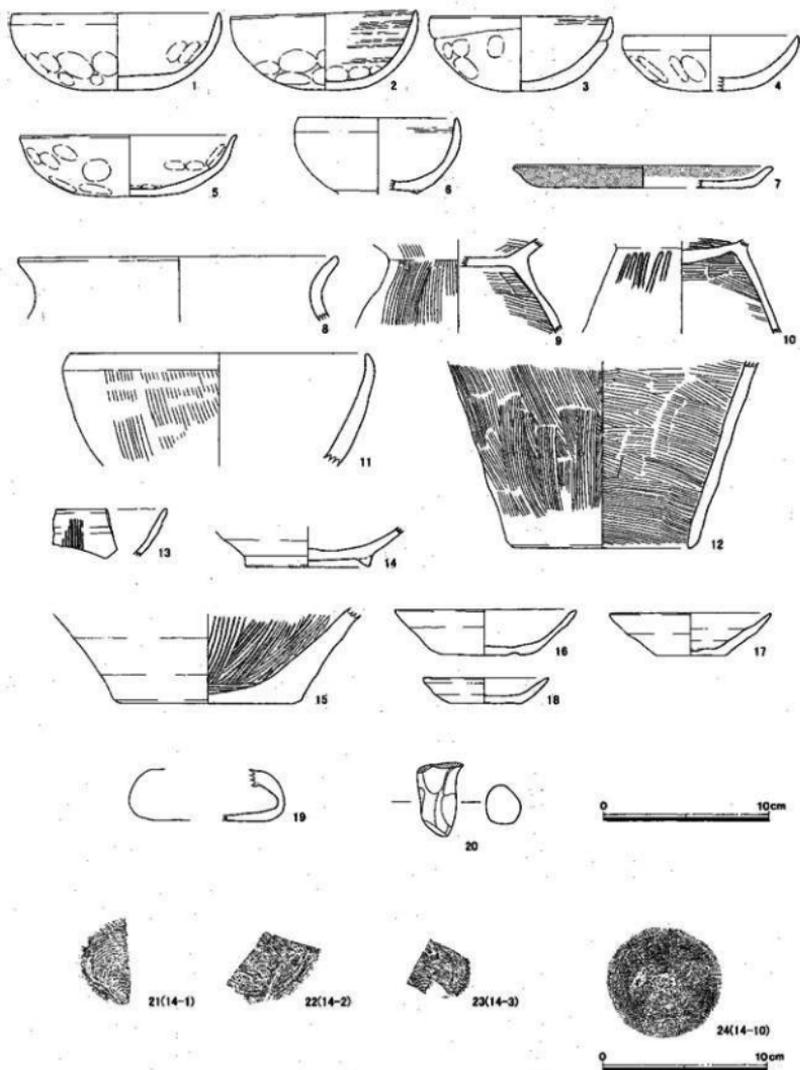
第13图 d区 柱穴列实测图(3)



1-2=A·B-3区 SD02 3=A-6区 SD05 4·19·27=B-14·15区
 5·15·16=B-14区 6·7·9·13·21·22·28=D-31区 8=A-14·16区
 10=a区 11=B-13区 12=A-11区 14=B-17区 17=A·B-12区
 18=埽土内 20=A-14区 23·24=B-12区

0 10cm

第14图 出土遺物実測図(1)



1-12=D-31区 2-5-9-10=D-30区 3-6-14=B-14区 4=B-12区 7-11=B-14-15区 8=D-31-32区
 13=A-10区 15=C-30区 16=B-8区 17=B-29区 18=A-6区 19=D-30-31区 20=C-31区

第15圖 出土遺物実測図(2)

図版1 a・b区



調査区全景
(西から)



調査区全景 (東から)



SD02・03完掘状況 (北から)

図版 2



SD02~10完掘状況（南から）



柱穴列完掘状況（北東から）



柱穴列完掘状況（北西から）

図版3 c区



調査区全景（西から）



SX01（北西から）



SX03検出状況（北東から）



SX03完掘状況（北東から）

図版4 d区



調査区全景（西から）



調査区全景（南から）



調査区全景（北東から）

図版5 d区



調査区全景（北東から）

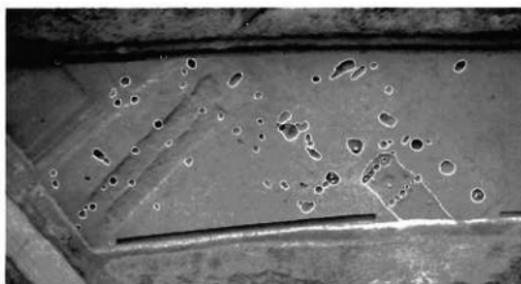


調査区全景

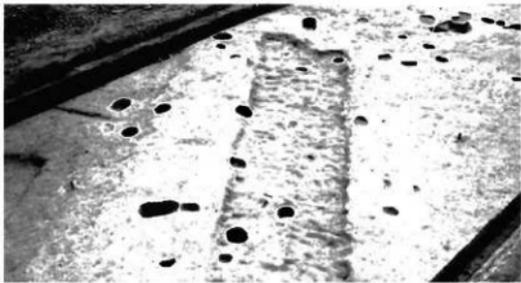
図版 6



SD15完掘状況(北から)

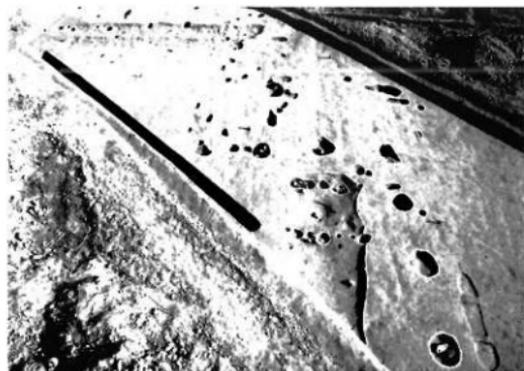


柱穴列完掘状況



柱穴列完掘状況(1)(北東から)

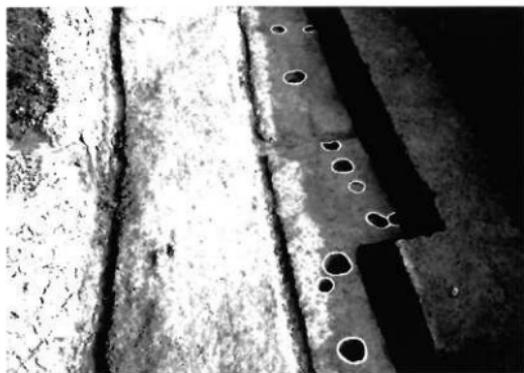
図版 7



柱穴列完掘状況(2)(北西から)



柱穴列完掘状況微細(北西から)

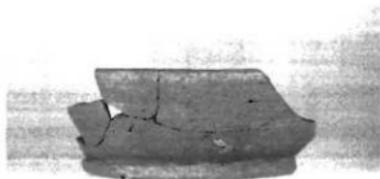


柱穴列完掘状況(3)(東から)

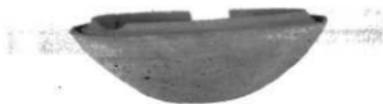
图版 8 出土遺物 (1)



14-6



14-14



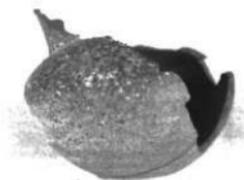
14-8



14-18



14-9



14-19



14-10

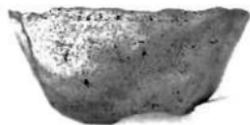


14-21

図版9 出土遺物(2)



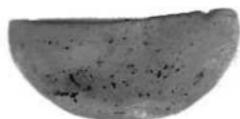
14-22



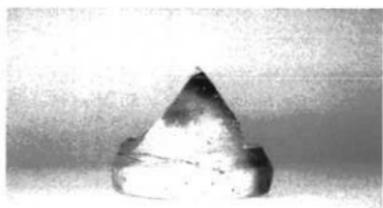
14-26



14-23



15-2



14-24



15-5



14-25



15-9

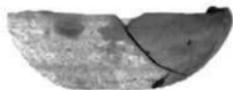
図版10 出土遺物(3)



15-10



15-15



14-27



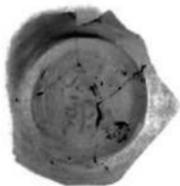
15-16



15-12



15-18



15-14



15-19

Ⅲ 平成15年度八坂別所遺跡の調査

平成15年度の発掘調査は、平成15年7月25日から翌16年3月10日まで実施した。掘削により生じる排土を調査地内で処理する必要があったため、調査地を東半と西半に2分割し、県道日坂八坂線側の東調査区から調査に着手し、終了後引き続き、西調査区の調査を行った。

東調査区では、水田耕作が行われている痕跡は窺われたが、それ以外の遺構は検出しなかった。包含層内から弥生土器、土師器、須恵器が出土した。

したがって、これから報告する遺構は、すべて西調査区で検出したものである。

1. 遺構 (第1～8図：カラー図版2～11、図版1～3)

溝状遺構

SD01 (第2図：図版2)

C・D-14・15区で検出した。北西から南東方向の溝状遺構で、調査区を横断する。検出長5.2m、幅0.8～1.4m、底幅0.3～1.1mを測る。確認面からの深さは、北西端で10.5cm、南東端で5.4cm、最深で7.7cmを測り、両端部での底面のレベルを比較すると、北西端が5.3cm高い。北西端側の底面に段差が見られ、南東端側の幅はやや狭まる。遺物は、須恵器・山茶碗の小片が出土した。

SD02 (第2図：図版2)

D-15・16区で検出した。北西から南東方向の溝状遺構で、調査区を横断する。検出長4.8m、幅0.7～0.95m、底幅0.3～0.55mを測る。確認面からの深さは、北西端で8.8cm、南東端で6.5cm、最深で10.8cmを測り、両端部での底面のレベルを比較すると、北西端が4.9cm高い。SD01同様、北西端側の底面に段差が見られ、南東端側の幅はやや狭まる。遺物は、須恵器・山茶碗の小片が出土した。

SD03 (第2図：図版2)

D-15・16区で検出した。北西から南東方向の溝状遺構で、南東端が調査区外へ及び。検出長3.15m、幅0.25～0.35m、底幅0.07～0.15mを測る。確認面からの深さは、北西端で2.1cm、南東端で2.7cm、最深で4.5cmを測り、両端部での底面のレベルを比較すると、北西端が5.8cm高い。遺物は、須恵器の小片が出土した。

SD04 (第2図：図版2)

D-15・16区で検出した。北西から南東方向の溝状遺構で、南東端が調査区外へ及び。検出長3.05m、幅0.18～0.3m、底幅0.07～0.18mを測る。確認面からの深さは、北西端で1.8cm、南東端が最深で5.1cmを測り、両端部での底面のレベルを比較すると、北西端が12.3cm高い。SD03と04の形状は近似する。遺物は、須恵器・灰釉陶器の小片が出土した。

SD05 (第2図：図版2)

C・D-15区で検出した。北西から南東方向の溝状遺構で、北西端が調査区外へ及び、南東端がD-14区杭付近で消滅する。検出長1.3m、幅0.15～0.55m、底幅0.09～0.38mを測る。確認面からの深さは、北西端が最深で8.4cm、南東端で5.4cmを測り、両端部での底面のレベルを比較すると、南東端が1.5cm高い。検出長が短い、溝底の傾斜は近接するSD01～04とは正反対である。時期は、不明である。

これらの溝状遺構が集中する地点は、調査区内でいちばん標高が低いところではない。確認面からの深さがいずれも浅いため、自然流路か人為的なものかは定かではない。調査区内で溝状遺構が集中するのは、平成8年度調査地点にも存在した。

柱穴列 (第3図: 図版2)

D-16・17区で検出した。S P 01・02・04・06は、1.2mと1.5mの間隔を置いて一直線上に並び、S P 04は03と切り合い関係があり、礎板の状況からS P 04は03に切られていると判断される。これらの柱穴は、円形または楕円形を呈し、長径41~70cm、短径30~42cmを測る。確認面からの深さは、S P 01が5.1cm、02が8.7cm、03が7.1cm、04が6.1cm、06が10.9cmといずれも浅い。S P 01~04からは、長さ30~55cmほどの木材が出土した。礎板の機能を果たすものと考えられる。袋井市板尻遺跡で同様な事例が見られる。また、S P 01の北東側と南東側からも礎板状の木材が出土した。それらに伴う柱穴は、検出されなかった。掘り方が消滅している可能性がある。木材以外の遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

道路状遺構 (第4~8図: カラー図版2~4, 図版3)

道路状遺構は、調査地の最西端E・F-19区で検出した。東側を除く三方が調査区外に及んでいるため、全体の状況は不明である。検出した道路状遺構の構造は、上層、下層、最下面の3段階に分けることができた。以下、上層の構造から順に説明する。

i) 上層 (第4図: 図版3)

調査地点は水田が広がり、柔らかい粘土が堆積する土層である。その中で、周辺の土層と比較して非常に硬くしまった面を確認した。これを道路状遺構の検出面とした。標高は、50.523~50.606mを測る。検出面の南半分は、攪乱により削平されていた。検出面は7cmほど東側へ傾斜し、最大幅は2.4mを測る。検出面の東端は南北方向だが、やや湾曲している。

検出面を掘り下げると、粘土に土器や砂利等が多く混入している状況を確認した。さらに、検出面の直下から、長径65~80cm、深さ5cmほどの小穴を5個検出した。このうち、4個では覆土内に炭が混じり、さらにその中の3個は穴の周囲や底面に焼けている部分が確認できた。炭を含む覆土を花粉分析したところ、樹木や草本花粉、シダ植物胞子が確認された。これらの穴の性格は不明である。

ii) 下層 (第5~7図: カラー図版2~4, 図版3)

検出面から約1m掘り下げたところで、道路状遺構の基礎部分を検出した。建物の扉材、加工痕のある角材、ほぞ穴のある板材、炭化した板材が、北東から南西方向に10枚敷き並べられていた。これらの向きは、道路状遺構の検出面における東端の向きとやや異なるが、道路状遺構の地盤沈下を防ぐための基礎構造であると考えられる。10枚の木材が途切れた北側から、木材と直交するように先端が加工された杭材が並べられていた。この杭材は暗渠だと考えられる。これらは、両端とも調査区外へ及ぶが、5.6mの範囲で検出した。兵庫県長尾・沖田遺跡で発見された古代道路状遺構の下層基礎にも側溝の掘り方に杭や板材を入れた暗渠が設けられていた。さらにその北側からも、炭化した木材と杭材が出土した。また、F-18杭付近から長さ1.9m、幅0.4mの板材が出土した。

10枚の板材を取り除くと、75~90cmの間隔を置いて平行に細長い杭材を組み合わせて置き、ところどころに杭を打ち込んで固定した様子が窺えた。これらは、10枚の板材の不同沈下を防止する役割を果たしている。この2列の方向、南南西から北北東が道路状遺構の向きにあたるのではないかと推測される。したがって、検出面で確認した上層と下層ラインはかなり攪乱されている状態であるといえる。F-18杭付近で出土した板材の下から、7~20cmの大きさの礫が数点見つかった。礫は板材を敷く際に置いたものと思われ、板材は道路築造時の足場である可能性がある。

2列平行の杭材を取り除くと、樹木の表皮や湿地性の植物の茎が敷かれていた。粗朶敷きと呼ばれるもので、3層以上あり最多で6層確認でき、最も厚いところで厚さ11.7cmを測る。層ごとに敷く向きを変えている。第6図に示したのは最上面で、確認できた中でいちばん面積が広い。基礎構造木材

と重ねてみると、その西端がかかる程度であることがわかり、有機的に機能していたかどうかは定かではないが、地盤沈下防止のために施されたものと思われる。粗朶敷きは、埼玉県西吉見古代道路跡に類例が見られる。

iii) 最下面 (第7図: カラー図版4)

粗朶敷きを取り除くと、道路状遺構の最下面を検出した。検出面から約1.3m下である。杭がいくつか散在していた。調査区の南西隅で畦状の遺構を検出した。北西から南東方向で、両端が調査区外に及ぶ。検出長1.4m、幅0.5mほどで、高さは4.1~6.1cmを測る。道路状遺構に伴うものかは定かではない。

様々な工法を用いた大規模な土木工事であることが窺われることから、官衙が主導して実施した工事であると考えられる。この地域は、地形的に古代の東海道が通っていたと考えられる。そのため、この道路状遺構が古代の東海道であることが可能性として考えられる。

全国で発見例が増加している古代道路状遺構をまとめた近江俊秀氏によると、古代官道の構築方法は、平地部では側溝状遺構を掘削するのみであるが、低地部では盛土工法、台地部分ではオープンカット工法を採っているとされる。今回の調査で検出した道路状遺構は、このうちの盛土工法に分類できる。

盛土工法による道路の築造過程は、①粗朶あるいは丸太敷きの他、谷を埋める際に多量の礫を入れる。②版築あるいは互層積みを行うものや礫を積み上げる。さらに③として、②の工程の延長として行われているようで、特に表層相当部分のみ土質を変えている事例がある。④路肩・法面を礫で補強したり、杭を打設したりする。築造過程からみると、本例では①と②の工程は確認できたが、③と④については明確にできなかった。

2. 遺物

平成15年度の調査で出土した遺物は、土器・木製品等コンテナ28箱分である。

1) 土器 (第9~16図: 図版4~7)

第9図は、須恵器である。1は、長頸瓶の頸部破片で、口縁部と体部を欠損する。体部との接合部の直径5.6cm、器高は現存で10.6cmを測る。2~5は坏身で、2は、立ち上がりが長く、器壁が薄くシャープな印象を受けるが、受部が極端に短いという特徴がある。他は、器壁が厚く鈍重な作りで、立ち上がりが短く内傾し、受部からわずかに出る程度である。3と4の外面のヘラ削りは、螺旋状ではなく、同心円状である。法量は、口径が12.0~9.9cm、最大径が12.4~10.2cmを測る。4の底部外面に、「|」のヘラ記号(第16図-11)がある。6~10は、かえりの付く坏蓋で、口径12.8~10.6cm、最大径13.8~12.0cmを測る。6~9のかえりは、2.0~2.5mm口縁端部より垂下するが、10は、0.5mm垂下するのみである。11~14の坏蓋は、口縁端部外面を屈曲されるか、垂下させる。内面は天井部からそのままの曲線を描き、内側に屈曲させることも外反させることもなく、身受けを作り出さない。最大径は、16.2~14.7cmを測る。11の天井部には、高さ8mmの扁平なつまみが付く。15~20の坏蓋は、口縁端部を垂下させるものである。17は、最大径16.7cmを測る。口縁端部から天井部まで1.7cmの高さがあり、そこに高さ1.3cmのつまみが付く、扁平な蓋である。21~24の坏蓋は、口縁端部を外反させるもので、ノタ目が顕著である。25~30の坏蓋は、口縁端部を内傾させるものである。27の内面に自然釉が付着している。28は、ひずみがあり、器高が高くなっている。30の内面には、工具によるノタ目が顕著である。

第10図は、須恵器である。1~4の坏蓋は、口縁端部がきわめて短いものである。1は、変形して

器高が高くなっている。5は最大径20.0cm、6は最大径21.2cmを測り大型であることから、皿蓋と判断した。7～25は、有台坏身である。7は、口縁部を欠損するが、器高は現存で6.9cmを測る。8～10は、底部から体部にかけて丸味を帯び、高台が低く、底部外面は高台端部と同じくらいか、高台端部より垂下するもので、外面のヘラ削りは高台の内側に限られる。法量は、8が、口径14.9cm、高台径8.5cm、器高4.45cm、9は変形著しいが、口径15.05cm、高台径10.2cm、器高4.05cm、10は、口径13.4cm、高台径9.4cm、器高3.6cmを測る。11～16は、底部が垂下し、腰が張るものである。11は、口径15.6cm、高台径12.2cm、器高3.85cm、12は、口径14.7cm、高台径10.4cm、器高4.15cm、13は、口径14.6cm、高台径10.2cm、器高4.2cm、14は、口径14.4cm、高台径9.6cm、器高3.8cm、15は、口径14.4cm、高台径10.9cm、器高4.1cm、16は、口径13.9cm、高台径10.1cm、器高4.15cmを測る。17～19は、底部を水平に作るもので、17は、口径15.5cm、高台径10.7cm、器高4.1cm、18は、口径14.6cm、高台径10.1cm、器高3.4cm、19は、口径13.6cm、高台径9.6cm、器高4.2cmを測る。20は、高台を欠損するもので、口径17.0cm、器高は現存で4.4cmを測り、体部下端までヘラ削りが及ぶ。口縁部外面に稜状の屈曲があり、口縁端部が外反するような印象を受ける。21は、小型の坏身で、口径9.2cm、高台径6.4cm、器高3.85cmを測る。22の坏身は、底部内面に当て具痕があり、23の底部内面には、「十」のヘラ記号がある。24の底部外面の中央には糸切り痕（第16図-13）が残り、ヘラ削りは体部下半に及ぶ。25の底部外面はヘラ削りが施されるが、中央に糸切り痕（第16図-14）が残る。

第11図は、須恵器である。1～4は、無台坏身である。1と2の底部外面には、ヘラ削りが施されることから、かえりのある坏蓋に伴う坏身の可能性がある。1は、口径13.0cm、器高4.65cm、2は、口径13.3cm、器高4.25cmを測る。3は、口径11.0cm、器高3.8cm、4は、口径10.2cm、器高3.6cmを測る。5～9は、坏である。6の底部外面、内面には工具による沈線状のノタ目が顕著である。5～7の底部外面は、ヘラ切り未調整である。9の底部外面には、ヘラ削りが施され、器壁が厚いことから、坏蓋の可能性も考慮したが、口縁部が開くことから、坏と判断した。5は、口径15.1cm、器高4.2cm、6は、口径14.0cm、器高4.5cm、7は、口径13.2cm、器高5.4cm、8は、口径13.2cm、9は、口径12.5cm、器高3.55cmを測る。10の高盤は、口径16.2cm、器高は現存で7.1cmを測る。11は、口径17.8cmを測るが、底部を欠損するため、高盤か有台皿かは不明である。12と13は、高盤の脚で、12が接合部の直径5.5cm、器高は現存で7.8cm、13は、接合部の直径4.9cm、器高は現存で6.5cmを測る。14は大皿で、高台径15.6cmを測る。15～18は皿で、16と18の外面のヘラ削りは底部のみに限られる。15が口径18.0cm、底径12.0cm、器高1.8cm、16は、口径16.6cm、底径10.4cm、器高2.3cm、17は、口径16.2cm、18は、口径17.5cm、底径10.4cm、器高2.3cmを測る。19～26は、壺である。19の蓋は、最大径11.8cm、器高は現存で1.65cm、20は、口径8.0cm、最大径8.6cm、器高は現存で4.9cmを測る。21は、口径12.2cm、最大径17.45cm、器高14.85cmを測り、底部外面から体部下半にかけて幅広の同心円状のヘラ削りを施す。22は、口径7.6cm、最大径10.3cmを測る。23は、口縁端部の断面が受口状、24・25は三角形、26は四角形を呈する。

第12図は、須恵器である。1の壺は、口径13.6cmを測り、全面にナデが施されるが、体部外面にタタキ目がかすかに残る。2は、壺の耳で、径2.5mmの円孔があく。3～5は、壺の底部である。3の底部外面には、糸切り痕（第16図-15）が残り、4の底部には、焼成時の癒着物がある。6～10は長頸瓶で、6の口縁端部外面には2条の沈線がめぐる。口径は、6が、12.1cm、7が、10.1cm、8が、11.3cm、9が、15.4cm、10が、9.0cmを測る。11・12は、長頸瓶の頸部で、ともに2条の沈線がめぐる。13～16は、体部で、13・14は肩が張り、15・16は丸味を帯びるものである。最大径は、13が、16.0cm、14が、15.0cm、15が、23.6cmを測る。17は、体部の下半で外面にはヘラ削りが施される。18は、高台

径14.4cmを測る大型の瓶の底部で、内面に指頭痕と爪痕が残る。19・20は、平瓶の口頸部で、21は、平瓶の体部である。19は、口径7.3cmを測り、頸部に1条の沈線がめぐる。20は、口径3.7cm、器高現存で2.2cmを測る小型の平瓶の口頸部である。21の体部には、幅1.0cm、長さ2.2cmの断面長方形の取っ手の痕跡が残る。

第13図は、須恵器である。1～3は甕で、1・2は、注口部が突出する。1は、体部の最大径10.6cmを測り、底部の外表面を平坦に作る。注口部の上端を欠損するが、敲打痕の可能性はある。2は、体部の最大径9.8cmを測る。3は、口縁部の外表面に稜が付く。4～9は甕の口頸部で、5の頸部外表面には、稜と沈線が施される。口径は、4が、25.5cm、5が、21.4cm、6が、21.9cm、7が、20.3cm、8が、23.1cm、9が、32.35cmを測る。9は、口頸部の内外面と体部内面にナデを施すが、体部外表面は斜め方向の粗いタタキ目を残し、口頸部の内外面に灰釉を施す。10・11は、無蓋高坏の坏部で、10は、口径15.4cm、11は、口径16.2cmを測る。12は鉄鉢で、体部最大径22.8cmを測り、外面の下端にヘラ削りが施される。13・14は陶臼である。13は、最大径18.1cmを測り、口縁部の外表面に2条、体部に2条の沈線がめぐる。14は、最大径15.6cmを測り、口縁部の外表面に1条の沈線がめぐる。

第14図は、土師器である。1～5は坏で、1は、口径14.8cm、器高3.4cm、2は、口径12.5cm、器高3.1cm、3は、口径16.5cm、器高2.95cm、4は、口径16.6cm、器高2.5cm、5は、口径14.6cm、器高2.55cmを測る。3～5の内外面には、赤彩の痕跡が残る。4の体部下半には、横方向のヘラミガキが確認できる。6は、有台坏で、高台径10.1cm、現存の器高2.05cmを測る。7は鉢で、口径12.8cm、最大径14.0cm、器高は7.3cmを測る。体部外表面の下半と口縁部の内面に指頭痕が残る。8は口径33.6cmを測る甕の口縁部と思われ、外表面に縦方向のハケ目、内面に横方向と斜め方向のハケ目が残る。9～21は、壺または甕の口縁部と考えられる。9～13は、口縁部が水平に伸びるもの、14～19は、「く」の字状に屈曲するもの、20は、直立気味になるものである。21は、口縁部が体部から強く屈曲し、口縁端部を肥厚させるものである。22～24は、取っ手である。22は、体部のカーブから壺の取っ手と判断できるが、他の2点の器種は判断できない。

第15図は、土師器、灰釉陶器、山茶碗である。1～3は、土師器の取っ手である。5～9は、灰釉陶器である。5は、内外面を施軸する。碗と判断したが、皿の可能性もある。6は、高台径8.1cmを測り、底部外面の高台の内側をヘラ削りする。7は、高台径7.5cmを測り、底部外面に糸切り痕（第16図-16）が残る。8は、高台径6.2cmを測り、底部外面に糸切り痕を残す。9は、口径16.0cmを測り、口縁部は体部から直線的に伸びる。10は瀝美・湖西系の山茶碗で、口径15.0cmを測り、内面に自然軸が厚くかかる。11～13の小皿のうち、11は瀝美・湖西系、12・13は東遠江系である。11は、口径9.0cm、器高1.45cm、12は、口径8.5cm、器高2.65cm、13は、口径7.6cm、器高1.8cmを測る。3点とも底部外面に糸切り痕（第16図-17～19）を残す。14は、体部外面の下端にヘラ削りを施し、高い高台が付く鉢である。

出土した土師器は、7世紀第1四半世紀から8世紀全般のものが主体となり、第15図-6の灰釉陶器は、9世紀後半の黒埴90号窯式期に、第15図-7・8の灰釉陶器は10世紀代の折戸53号窯式期に位置づけられる。山茶碗・小皿は、12世紀後半から13世紀後半までの間に位置づけられる。

2) 円面硯・転用硯（第15図-15～22）

15は、圈足硯タイプの円面硯の破片で、脚部径16.2cmを測る。ヘラ状工具による幅5mmと6mmの長方形の透かしが入る。16～22は、須恵器の坏蓋の内面を利用した転用硯である。16は、最大径15.2cm、器高3.5cm、17は、最大径16.1cm、18は、最大径13.9cm、19は、最大径12.4cm、20は、最大径12.3cm、21は、最大径11.7cmを測る。転用硯は、他に須恵器の甕の内面を利用したものが5点出土している。

3) 墨書土器 (第15図-23~29)

23~28は、須恵器の墨書土器で、29は、小皿の墨書土器である。23は、高台径11.6cmを測る有台坏身で、底部外面に「壹口(読めず)」と墨書されている。24は、高台径11.3cmを測る有台坏身で、底部外面に「女平」の墨書がある。25は無台坏身で、底部外面に「上井」の墨書がある。26の無台坏身の底部外面には墨書、27の有台坏身の底部外面と28の有台坏身の底部外面に墨痕があるが、判読は不能である。29の小皿は、口径8.8cm、器高1.55cmを測り、底部外面に回転糸切り痕を残し、その底部外面に墨書があるが、判読は不能である。

4) ミニチュア土器・手捏ね土器・土馬 (第16図-1~8)

1は、体部最大径4.8cmを測り、器壁を厚く作る。壺を模したものと判断した。2の鉢は、口径11.8cm、底径5.1cm、器高5.75cmを測る。3の鉢は、口径9.4cm、底径3.6cm、器高5.35cmを測る。4の鉢は、口径7.3cm、底径2.1cm、器高6.1cmを測る。5の瓶のミニチュアは、口径7.2cm、最大幅10.2cm、器高5.25cmを測る。6の土馬の足は、現存長5.4cm、直径2.2cmを測る。7の土馬の足は、現存長3.7cm、直径1.5cmを測る。8は、現存長2.6cmを測り円錐形を呈する。土馬の尻尾の可能性を考えている。

5) 瓦 (第16図-9)

D-14区から9の平瓦の破片が出土した。生焼けで、上面にかすかに布目が残る。厚さ1.75cmを測る。

6) 輪の羽口 (第16図-10)

D-17区から10の輪の羽口が出土した。外面は黒色を呈し、気泡が見られ、内面にはぶい赤褐色・ぶい黄橙色を呈する。

7) 銭貨 (第16図-11)

調査区の中央から「和同開珎」が1点出土した。「和同」の部分が残存している。銭径2.34cm、方孔の径0.64cmと推定され、厚さは、1.0~1.1mmを測る。色調は、暗赤色を呈する。薄さのせいか、波を打ったように銭貨はうねり、「和」の字の周辺に3箇所穴があいている。

8) 木製品 (第17~19図: 図版8・9)

木製品には、道路状遺構の基礎構造として使用された厚材や板材、杭材などや礎板といった建築材と機織具や曲物、鋏などの道具類がある。

道路状遺構の基礎構造として使用された木製品は100点以上ある。そのうち22点を図化した。

1~10は密接して敷き並べられていた。1は厚材で長さ159.2cm、幅28.6cm、厚さ3.7cmを測る。両端に長さ4~6cm、幅3.2~3.6cmの突起部を細く削り出している。突起側の側面中央付近には削り込みがある。材質はムクロジである。2も厚材で長さ147.2cm、幅33.3cm、厚さ3.4cmを測る。片端に長さ2cm、幅3cmの突起部を細く削り出しているが、先端を折損する。反対側は欠損する。突起部がつかない側面寄りに縦3.3cm、横3.7cmのほぞ穴が彫られる。材質はムクロジである。3~8は板材である。3は長さ137.8cm、幅19.3cm、厚さ6cmを測る。両端は折損し炭化がみられる。材質はムクロジである。4は長さ160.6cm、幅15cm、厚さ8.5cmを測る。両端は折損し、中央から上端にかけて炭化がみられる。材質はコナラ節である。5は長さ162.3cm、幅18.9cm、厚さ8.6cmを測る。両端は折損し、ほぼ全面に炭化がみられる。材質はムクロジである。6は長さ158.8cm、幅20cm、厚さ4.5cmを測る。両端は折損し、中央から上端にかけてと下端面付近に炭化がみられる。材質はムクロジである。7は長さ165.6cm、幅18.1cm、厚さ5.1cmを測る。両端は折損し側面に炭化がみられる。材質はムクロジである。8は長さ180.9cm、幅30cm、厚さ4.6cmを測る。両端は折損しさらに上端から長さ25cm、幅12cmほど欠損する。上端から11.8cmのところ縦4cm、横2.7cm、同じく99cmのところ縦2.8cm、横2.8cmの

ほぞ穴が彫られている。また上端から35.5cmには縦13cm、横13.8cmの削り込みがある。材質はキハダである。9と10は加工角材である。9は長さ188.4cm、幅15.5cm、厚さ8.9cmを測る。全面に加工痕が明瞭に残る。両端は加工により切断する。材質はマキ属である。10は長さ182.8cm、幅16.6cm、厚さ7.7cmを測る。表面の加工痕はみられない。両端は加工により切断する。材質はマキ属である。

11～22は杭材である。うち15～17と21・22は樹種同定を行い、いずれもマキ属と判明した。それ以外は針葉樹が11、12、13、14、19、広葉樹が18、20である。11は調査区境付近から打設された状態で出土した。長さ83.5cm、直径7.9cmを測る。先端を加工し、もう一端は折損する。樹皮が一部残存する。12は10枚の板材下から打設された状態で出土した。長さ98cm、直径6.5cmを測る。先端を加工し、もう一端は折損する。全面的に樹皮が残存する。13は暗渠と考えられる部分から打設された状態で出土した。長さ100.1cm、直径7.3cmを測る。先端を加工し、もう一端は折損する。樹皮が一部残存する。14は粗朶敷き範囲内から打設された状態で出土した。14を打設後に粗朶は敷かれている。長さ117.6cm、直径5cmを測る。先端を加工し、もう一端を折損する。樹皮が残存する。中央付近が彎曲する。15は10枚の板材の渡す平行に並ぶ杭を固定するために打設された状態で出土した。長さ132.8cm、直径7.4cmを測る。先端を加工し、もう一端を折損する。16は暗渠と考えられる杭材で打設されていない。長さ136cm、直径6.1cmを測る。先端を加工し、もう一端を折損する。樹皮が一部残存する。17も暗渠と考えられる杭材で打設されていない。長さ139.8cm、直径7.3cmを測る。先端は尖らせ、もう一端は面取りされていた。樹皮が一部残存する。18は10枚の板材を渡すために平行に並べられた杭材である。長さ149cm、直径7.1cmを測る。先端を加工し、もう一端は折損する。19は暗渠のすぐ北側に平行して置かれていた杭材である。長さ65cm、直径6.1cmを測る。打設した状態で出土していないが、先端を折損し、もう一端を切断する。20は暗渠と考えられる杭材である。長さ75.6cm、直径7.3cmを測る。打設した状態で出土していないが、先端を折損し、もう一端は折損する。21は4を固定する位置に置かれていた。長さ41.4cm、直径14.8cmを測る。先端を尖らせ、もう一端を加工により切断する。側面に細かい刃が残る。柱根を杭材に加工したものと思われる。

22は杭材による暗渠から約1m北で出土した。長さ45cm、直径6.5cmを測る。両端は折損する。表面が炭化で覆われ、亀裂がみられる。

23～27は道具類である。西調査区から出土したが、いずれも遺構に伴うものではない。これらは樹種同定していない。23は部材と考えられる。長さ36.4cm、幅4.6cmを測る。両端は折損する。両端部を含め、5ヶ所の楕円形状の穴があけられている。24は鋸と考えられる。長さ22.6cm、幅8.7cmを測る。柄を通すための穴があけられている。25と26は曲物の蓋板と考えられる。25は直径11.1cm、26は約半分を欠損するが、推定で直径15cmを測る。27は組み合わせ式の糸巻の枠木を固定するための横木と思われる。長さ10.1cmを測る。

静岡県内の遺跡から出土する建築材についてまとめた西尾太加二氏によると、建築材は大型であるため、在地産の木材を使用することが多く、直接的に遺跡周辺の植生を反映すると考えられるが、小型の木製品は他地域から持ち込まれることがあるため、遺跡周辺には自生していない樹種が発見される場合があり、遺跡周辺の植生を必ずしも反映しているとは言い難いとしている。さらに、時代や地域によって出土する樹種に明らかな違いがあることを見出している。志太郎衛跡である御子ヶ谷遺跡ではヒノキ材、佐野郡衛あるいは駅家とされる坂尻遺跡ではイヌマキ材が多く出土している。

今回の調査ではすべての出土木製品について樹種同定を行っていないため、単純にこれらの遺跡との比較はできない。同定した15点の樹種をみると、大型木材にムクロジ、杭材等にマキ属と使い分けられていたことが推測される。

3. まとめにかえて

まず、今回の調査の成果と課題についてふれることにする。

今回の調査では、溝状遺構、柱穴列、道路状遺構等が検出された。これらの遺構のなかで特筆されるのは、道路状遺構である。

道路状遺構は、検出面の最大幅2.4m、その検出面から約1m下から発見された板材、さらにその下から検出された粗朶敷きから成る。敷かれていた板材の幅は、1.45～1.85mを測り、道路状遺構の検出面の幅より狭く、向きも異なっている。また、板材とその下の粗朶敷きでは、粗朶敷きの東端が板材の下にかかる程度である。年代については、盛り土内の土器が抽出できればよいが、遺物はグリッドで取り上げられているため、年代を決めることはできない。また、基礎構造と考えられる板材の下から出土した第9図-1の長頸瓶は、口縁部・体部を欠損していて、時期の決め手を欠き、後藤福年のIV期第2小期以前、8世紀第1四半世紀後半以前に位置づけることができるとしか言えない。したがって、道路状遺構の年代については、上限・下限とも、言及しえない。今後、さらに検討を加える必要がある。

溝状遺構は、SD01・02が、山茶碗片の出土により、鎌倉時代以降に位置づけられ、03は、須恵器の小片が出土しているのみであるが、奈良時代に位置づけられる。04は、灰釉陶器片が出土していることから、平安時代末以降に位置づけることができる。

柱穴列については、柱穴内からの土器の出土がないため、時期の決め手を欠いている。

今回出土した遺物のうち、7世紀の第1四半世紀から8世紀全般の遺物は、次のような分布を示す。土馬・ミニチュア土器・手捏ね土器は、第16図-3の手捏ね土器がC-14区からの出土である以外は、道路状遺構が検出された調査区西端の17～19区に集中する傾向にある。円面硯・転用硯は、それよりも東側の16区以東に分布している。墨書土器は、転用硯の分布と重なり、8区以東から出土している。円面硯・転用硯・墨書土器の出土地点周辺から、当該期の建物跡と断定できるものは検出されていない。瓦は、平瓦の小片が1点であり、周囲に瓦葺きの建物が存在するのかが、年代も含めて詳細を知りえない。竈の羽口についても、同様である。

今後、八坂別所遺跡について解明していかなければならない課題が多く存在するが、次に、八坂別所遺跡と頭地遺跡の関連について言及することとする。

八坂別所遺跡と頭地遺跡の主体は、ともに7世紀第1四半世紀から8世紀末までと考えられ、同一の性格の遺跡である可能性が高い。この時期の遺跡の規模は、東西約350m、南北約500mの範囲に及ぶ。出土遺物は、円面硯・転用硯、墨書土器、器種豊富な須恵器類等があり、集落とは異なる官衙的な色彩が濃いものである。これらの遺物の分布を示したものが、第20図である。

円面硯・転用硯の分布は、平成15年度の八坂別所遺跡調査区と平成9年度に調査した頭地遺跡のSR4・5調査区までの約200mの範囲に及ぶ。SR4・5調査区からは、掘立柱建物跡を抽出できなかったが、直径50～75cmに及ぶ大型の柱穴が検出されていて、この時期に比定できる建物跡が存在する可能性は高い。今回の調査地からは、掘立柱建物等の建物跡は検出されていないが、周辺に建物跡の存在を推定したい。

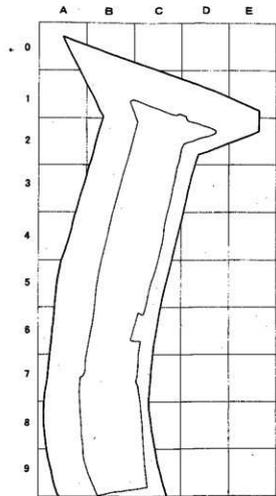
墨書土器は、平成15年度の八坂別所遺跡の調査地点に限られ、和同開珎、瓦も同様である。土馬・ミニチュア土器・手捏ね土器は、平成8年度・平成15年度の八坂別所遺跡の調査地点に限られるが、平成8年度の調査地点のものは古墳時代の可能性が高い。このようにみても、奈良時代の官衙的な色彩をもつ遺物は、道路状遺構の東側に集中していることがわかる。

奈良時代の遺構と遺物は、逆川の対岸の牛岡遺跡からも発見されている。平成元～3年度にかけて研究所が行った調査では、奈良時代の竪穴住居跡、2間×2間の総柱の掘立柱建物跡が検出され、須恵器の坏蓋・有台坏身等が出土している。また、平成13年度に市教委が行った調査では、遺構は明確ではないが、須恵器の坏蓋・有台坏身・有台皿・長頸瓶等が出土している。ただし、牛岡遺跡での遺構・遺物の分布は、遺跡の北端の標高56m付近に限られるようである。

それでは、八坂別所遺跡と頭地遺跡は、どのような性格なのであろうか。

久保智康氏から、事任八幡宮（己等乃麻知神社）を経て佐夜の中山峠へ登る行程は、東山道の安布知神社から式内阿知神社、そして平安文学に頻出する園原を経て神坂峠へ登る行程と重ね合わせてみると、標高の低い高い、郡境と国境、というように規模の差はあるものの、驚くほどの相似性を持っている、という御教示をいただいた。また、『延喜式』によれば、東山道が最難所の神坂峠を越え、信濃に入って最初に設けられたのが阿知駅である、という御教示もいただいた。

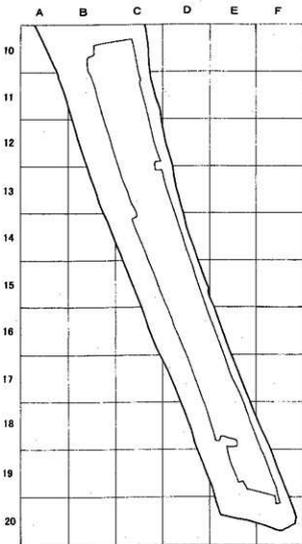
規模の差があるが、この東山道の最難所である神坂峠越えを控えた信濃側の状況が、八坂別所遺跡・頭地遺跡についても、当てはめることができるのではないかと。東海道の難所、佐夜の中山峠を控えた場所だからこそ、八坂別所遺跡・頭地遺跡は存在したのであり、そのための公的施設であった可能性が高いと考えられる。



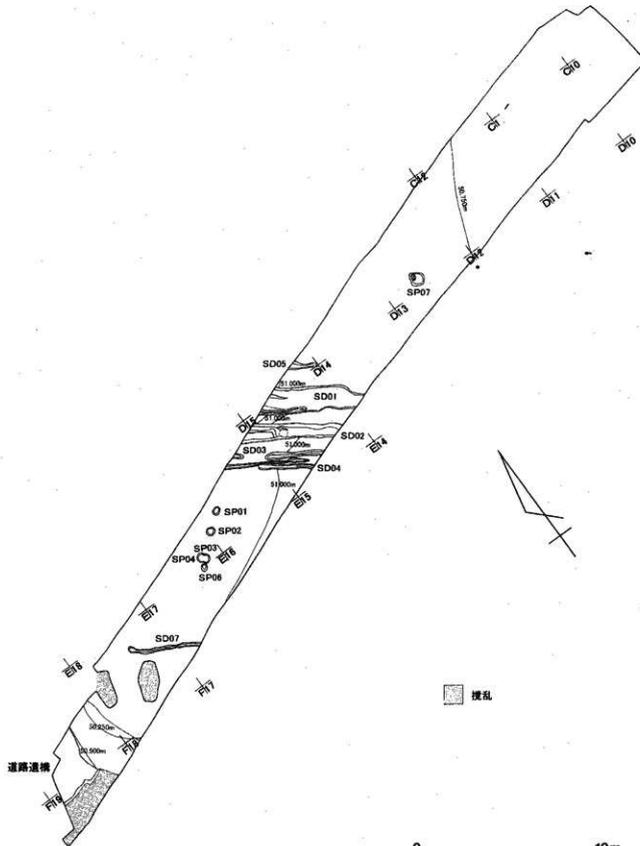
東調査区



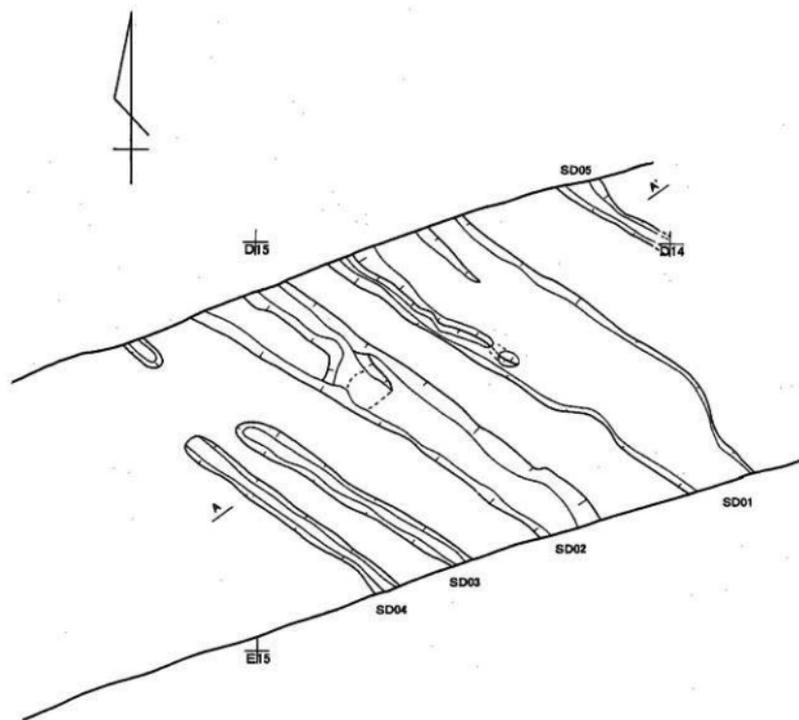
0 20m



西調査区

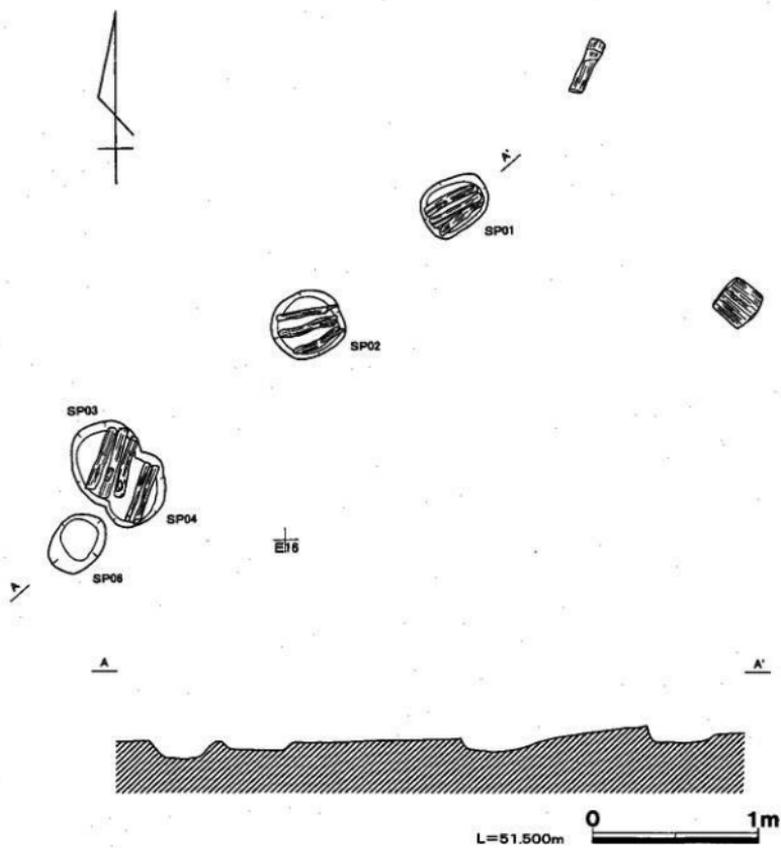


第1図 調査グリッド図・遺構全体図

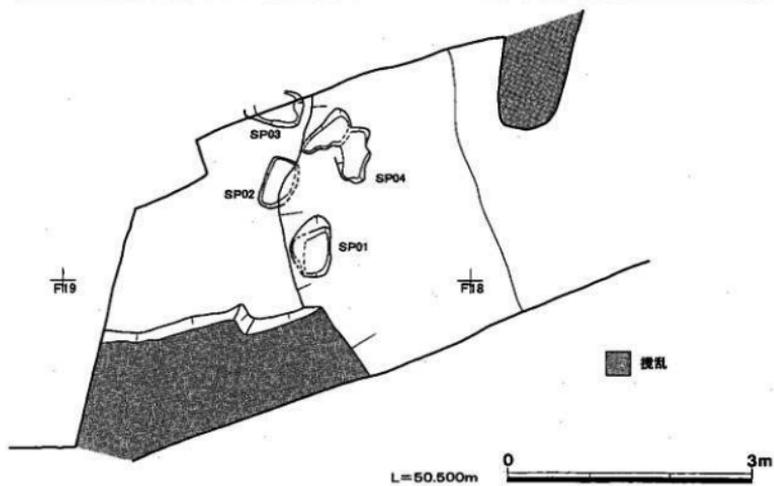
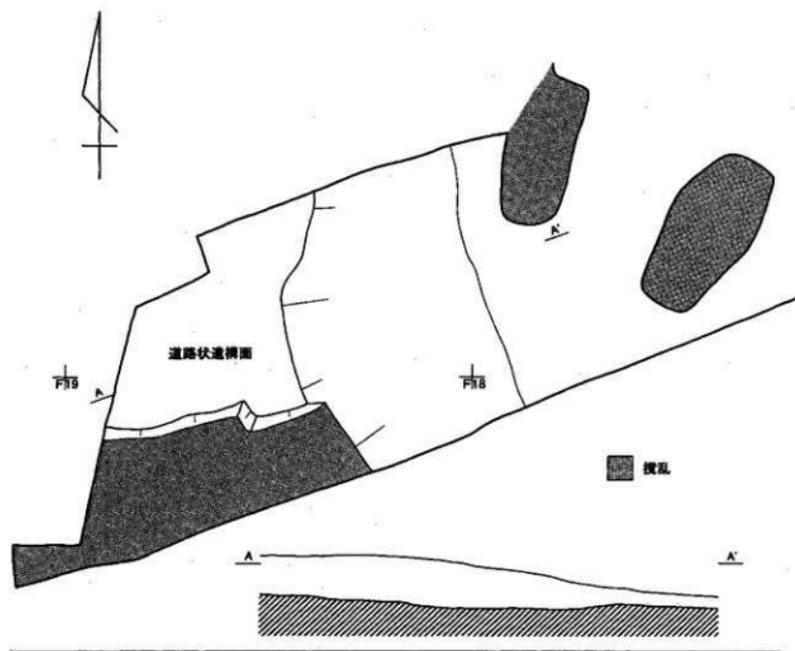


L=51.100m 0 3m

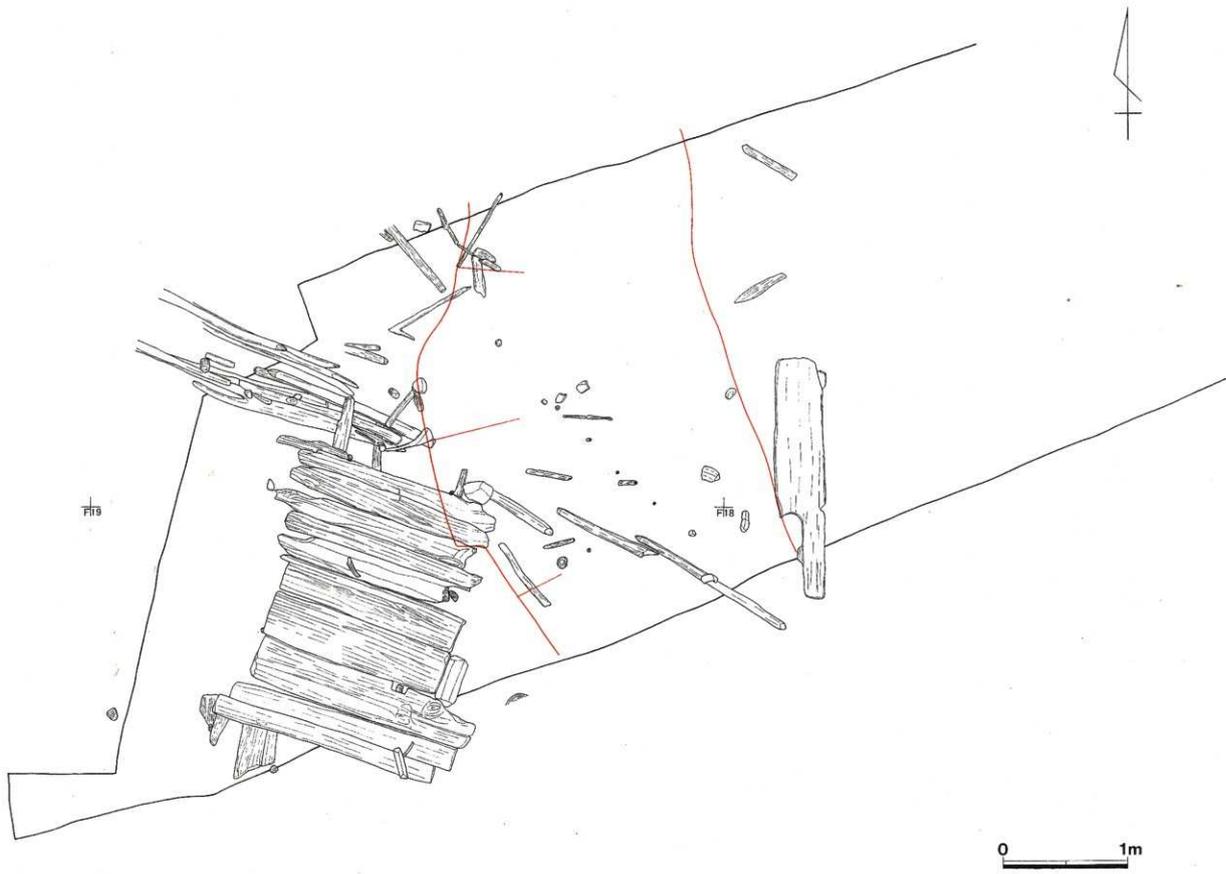
第2圖 S D01~05実測図



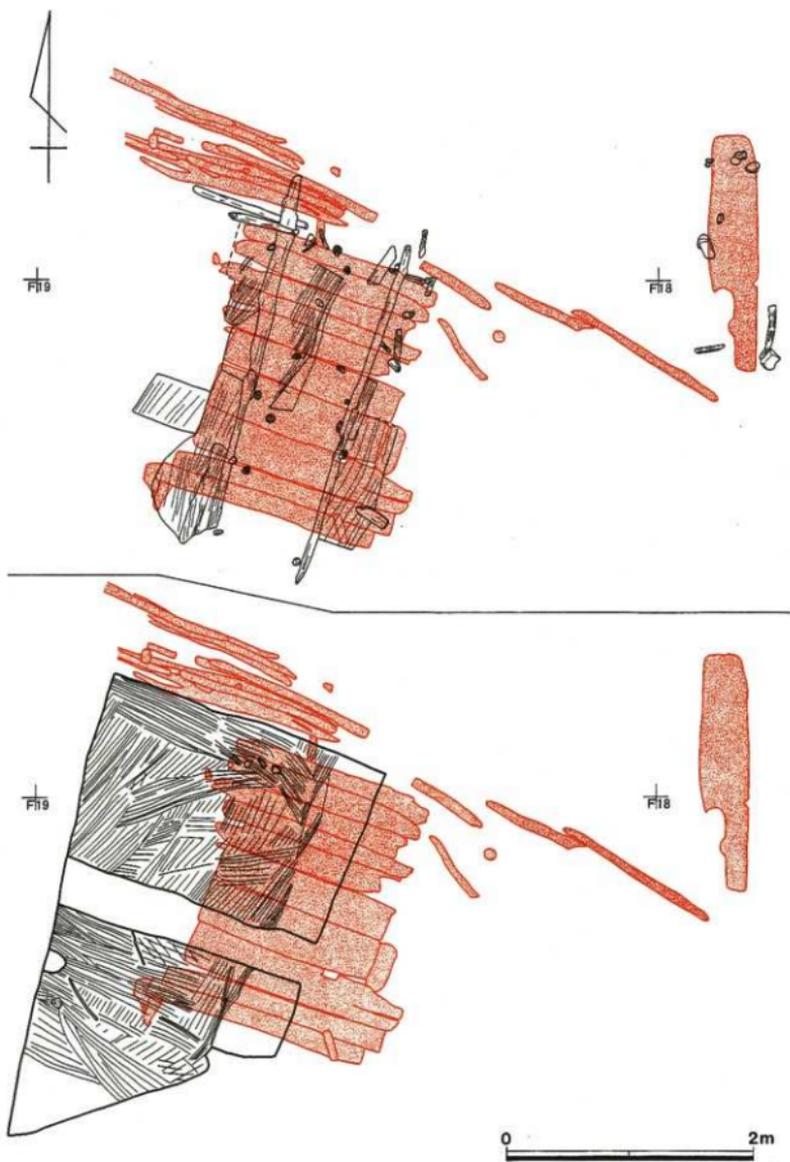
第3图 柱穴列实测图



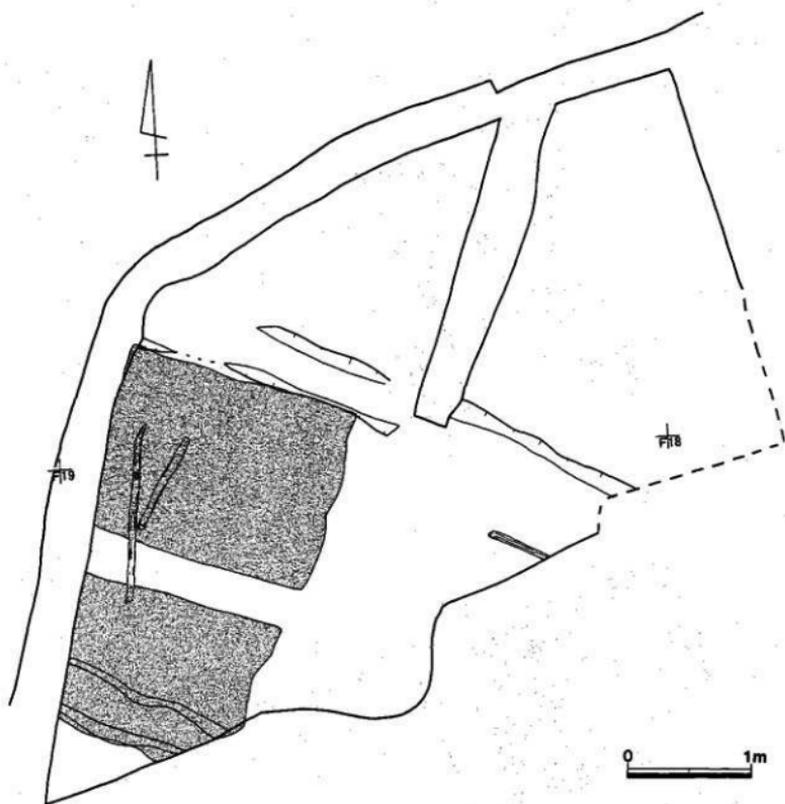
第4図 道路状遺構上層実測図



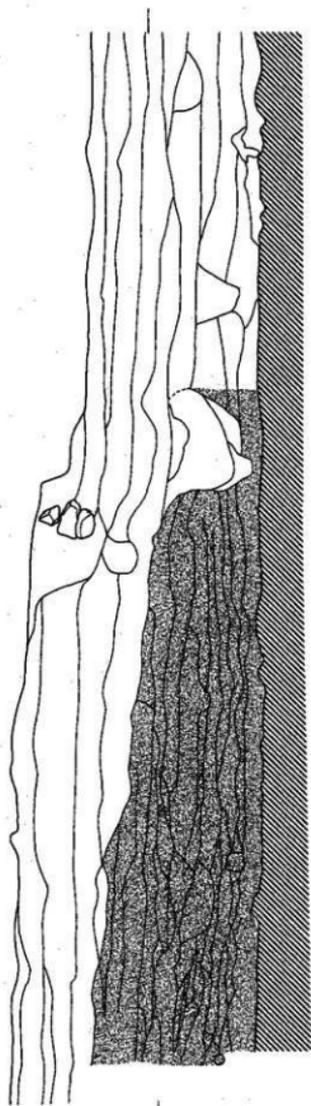
第5図 道路状遺構下層実測図(1)



第6圖 道路状遺構下層実測図(2)

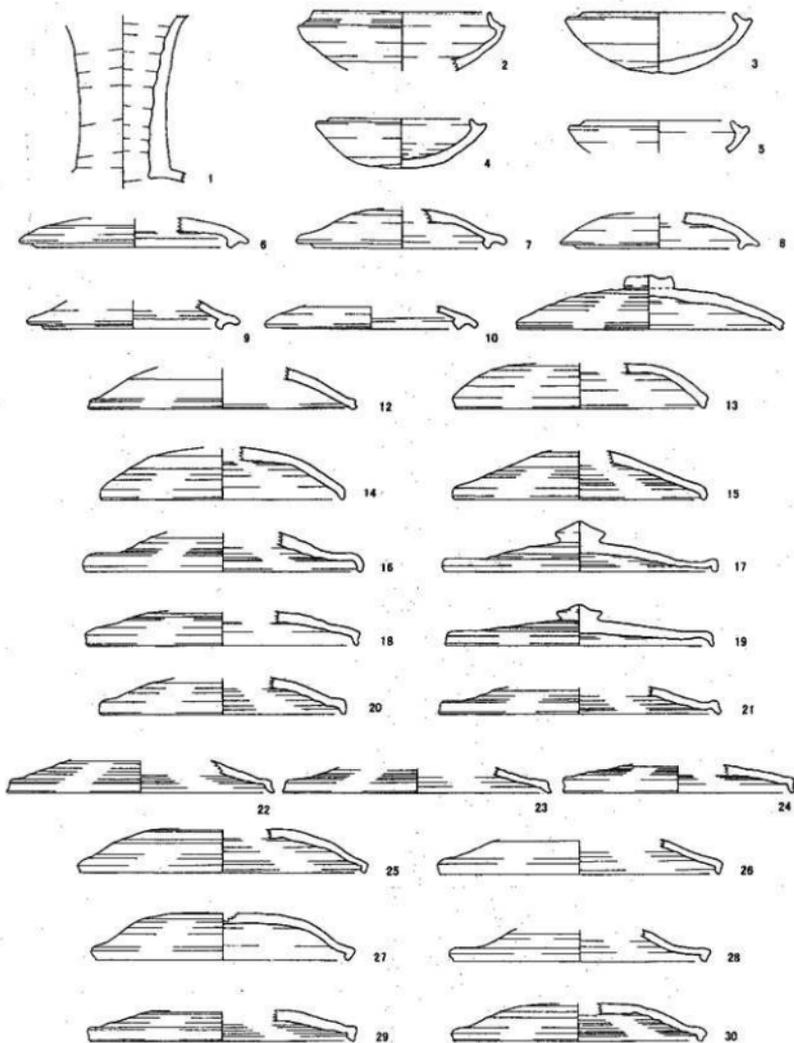


第7图 道路状遺構最下面実測図



0 2m
L=50.000m

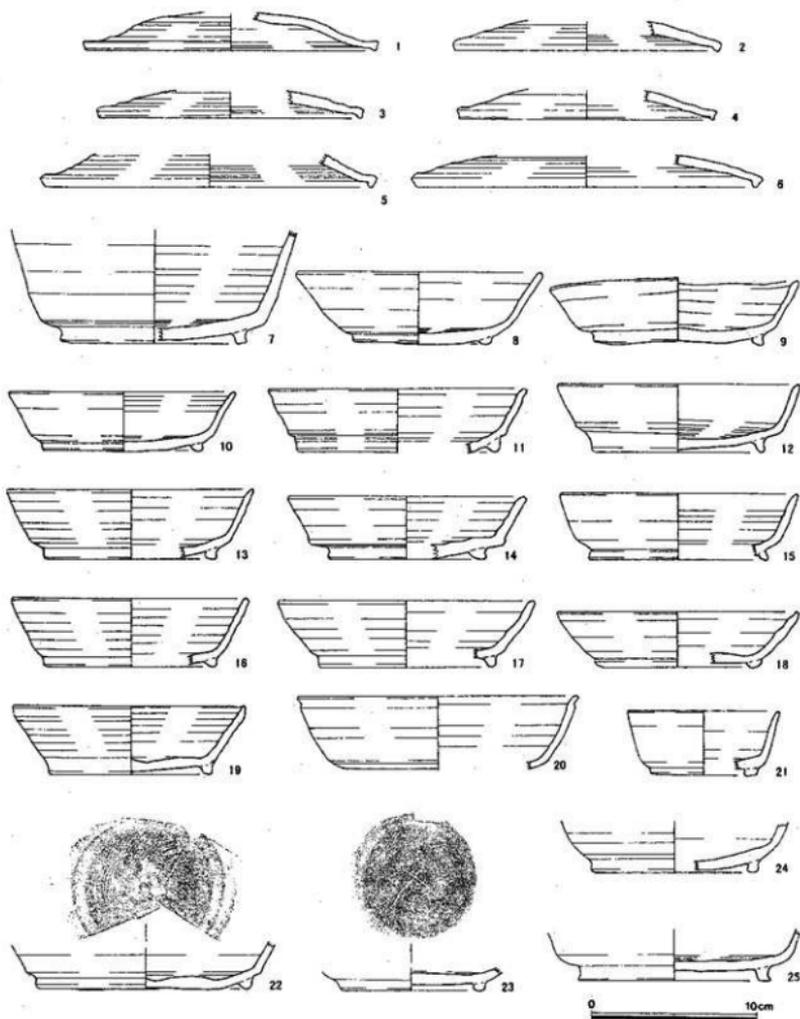
第8圖 道路状遺構土層断面実測図



0 10cm

1=F-19b区板村直下 2·13=D-16区 3=E-17·18区 4·25=C-14区 5=C-15区 6=F-19区 7·12=E-18区
 8·10·14·22=E-19区 9=埽土内 11=E-17区 15·30=試掘坑A拡張部分 16=試掘坑C西拡張部分 17·20·21=B-8区
 18=D-13区 19=B-9区 23=D-15区 24=C-9区 26=B-8·9区 27=C-10区 28=C-12区 29=B-11区

第9图 出土遗物实测图(1)



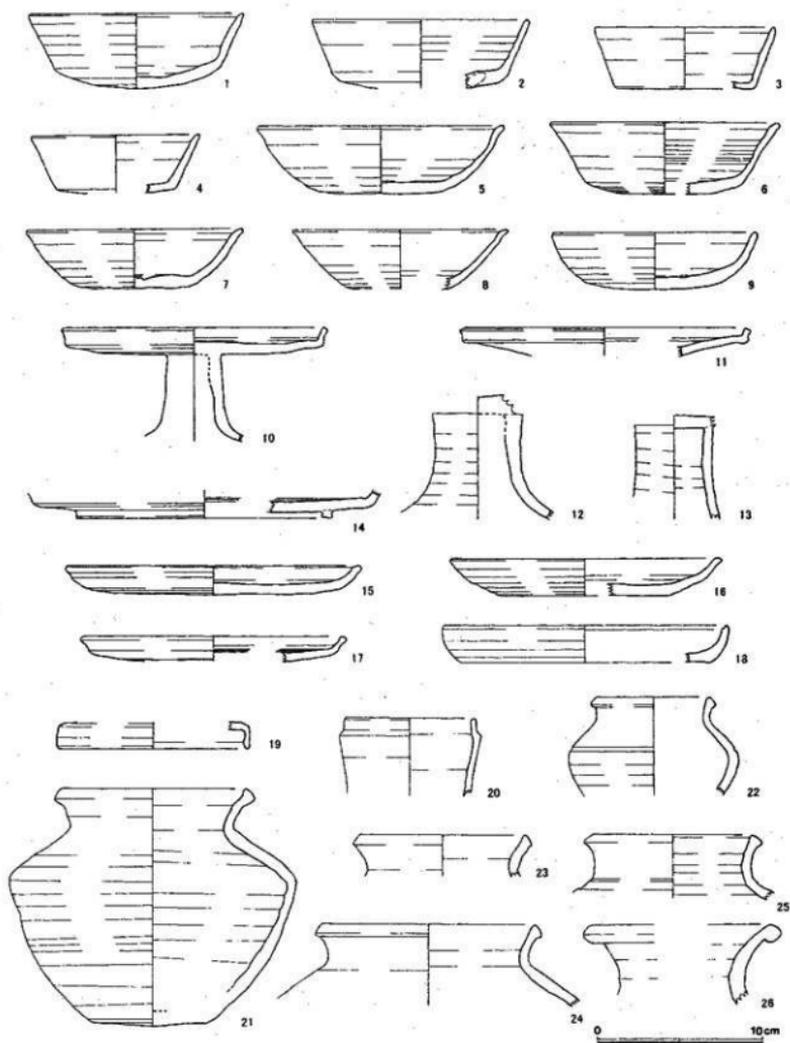
1=B-C-11区 2=C-12区 3・12=D-16区 4=D-17区 5=B-12区 6=B-C-12区 7=C-11区

8=D-15区 9-10=B-8区 11-24=飯グリッド区 13=試掘坑C西底部分 14=B-11-C-10区

15・16・21-23=E-17区 17=E-18区 18=B-9区 19=C-14区 20=C-13-D-13-14区 25=試掘坑B

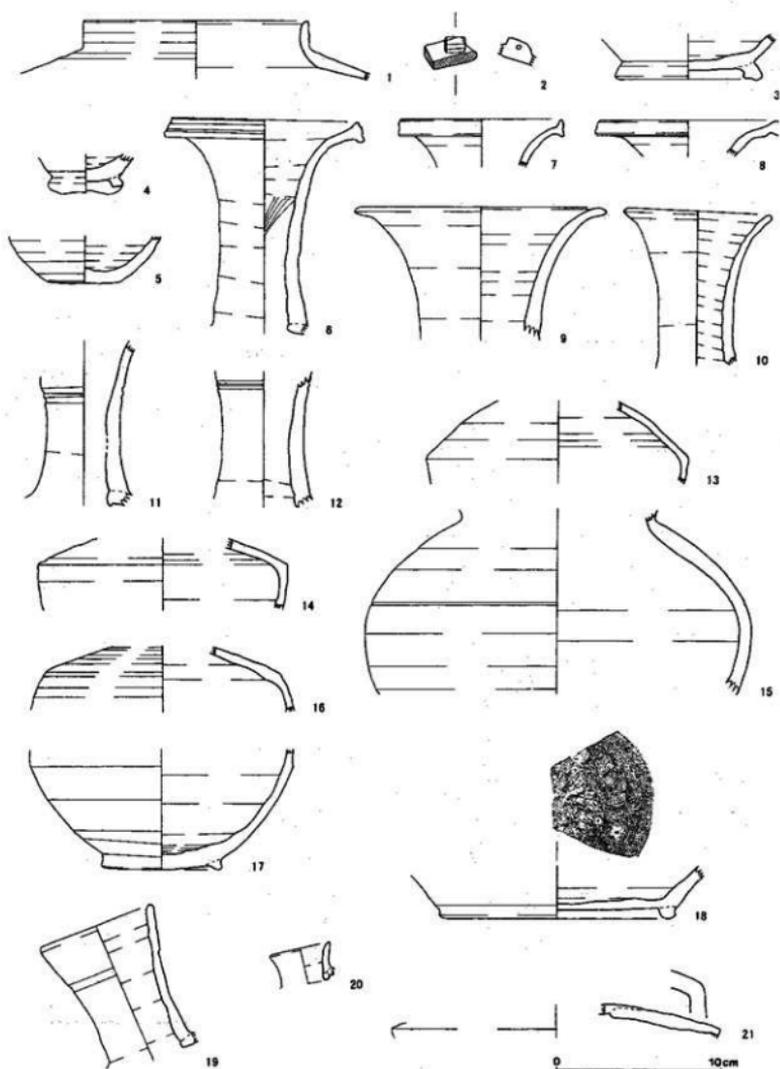
22=試掘坑C

第10図 出土遺物実測図(2)



1・25=B-7区 2・5・23=B-8区 3=B-10・11区 4=D-16区 6=B-C7区 7=B-9区 8・18・20=B-11区
 9・15=E-18区 10・14=試掘坑C 11・16=C-13区 12・13=D-15区 17=B-18区 19=板グリッドd
 21=B-8・9・11区 22=D-13区 24=F-18区 26=E-17区

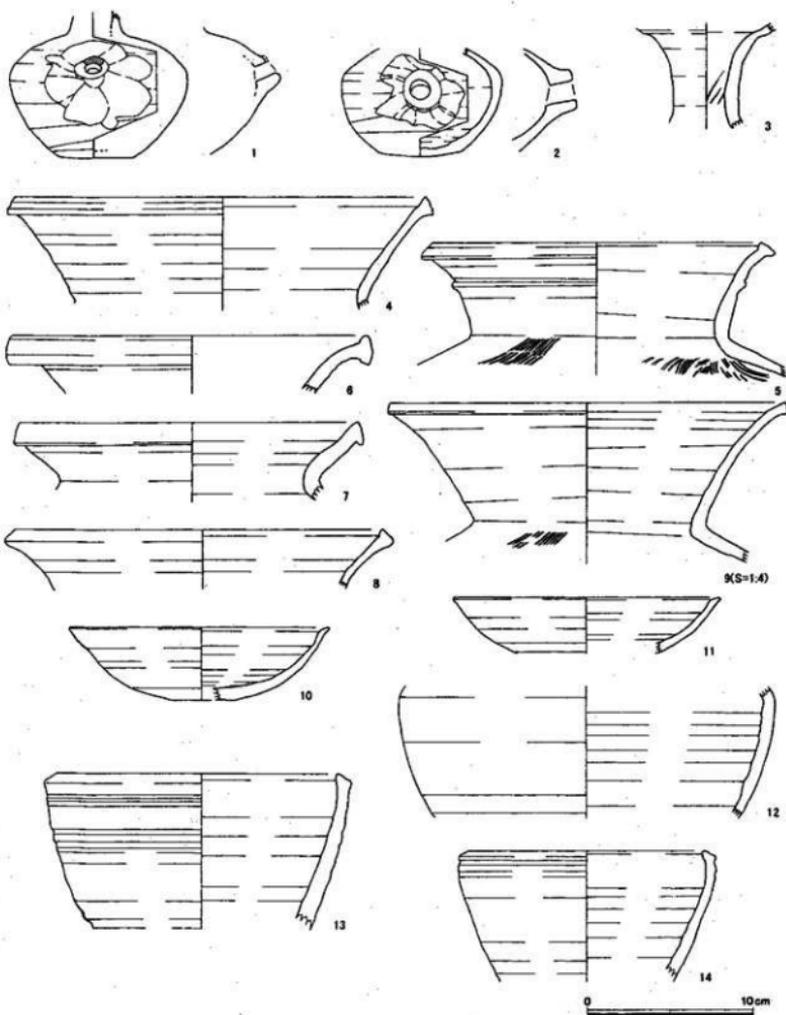
第11図 出土遺物実測図(3)



1=埴土内 2=試掘坑C 3=試掘坑D 4=D-17区 5=B-C17周辺 6=C-15区 7・19=E-18区 8=E-19区
 9=B-18区 10・20=試掘坑C東縁隆部分 11=B-8区 13・15~17=D-16区 14=B・11区
 18=板グッドb区 21=試掘坑A隆縁部分

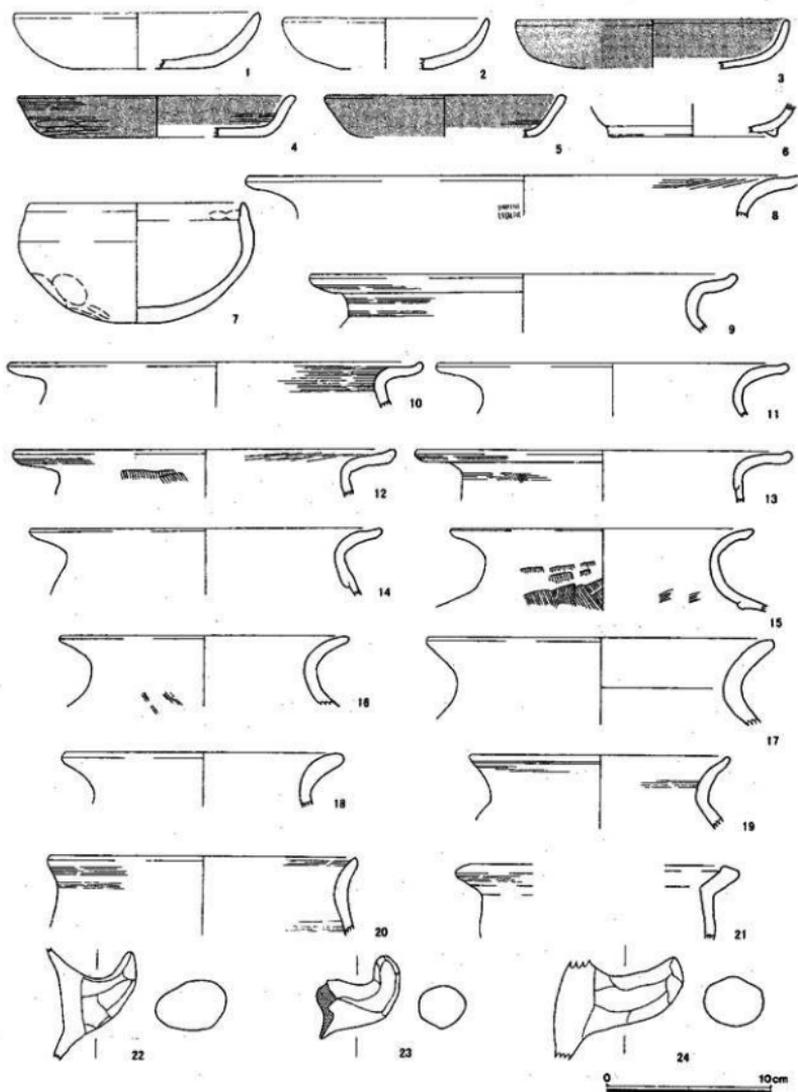
12=不詳 重機掘削時

第12図 出土遺物実測図(4)



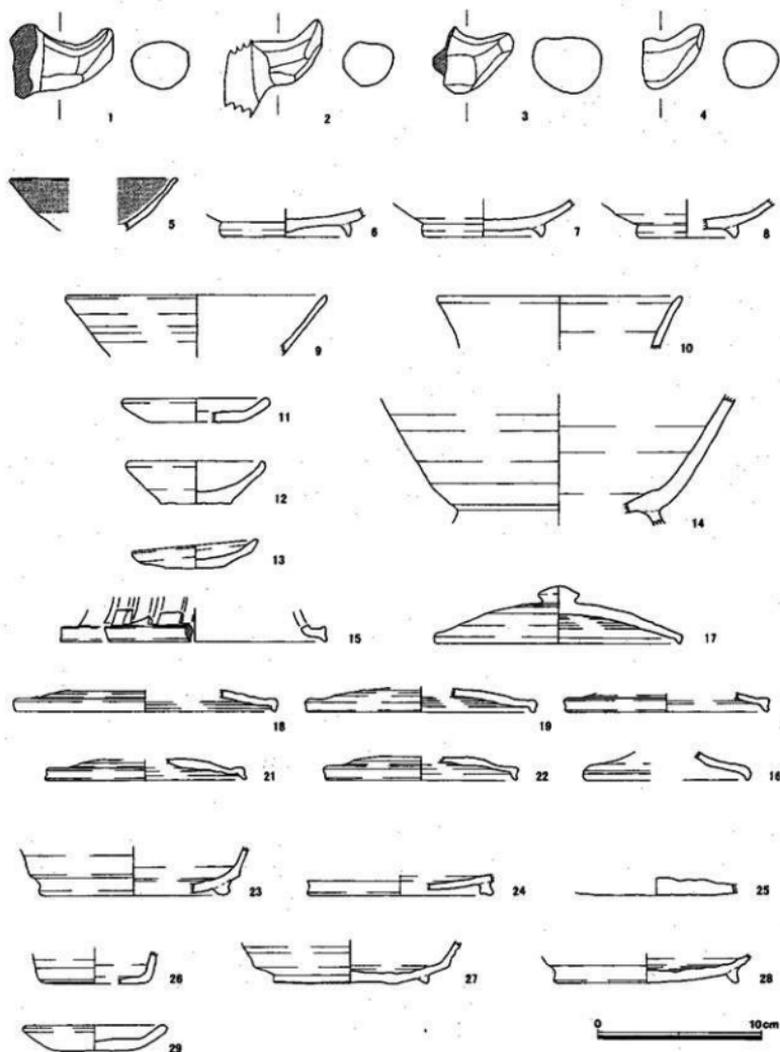
1·14=E-18区 2=試掘坑C 3=D-15区 4=B-9区 5=D-15区 6·13=B-8区 7=C-14区 8=B-18区
 9=F-18区 10·11=E-19区 12=D-13区

第13图 出土遺物実測図(5)



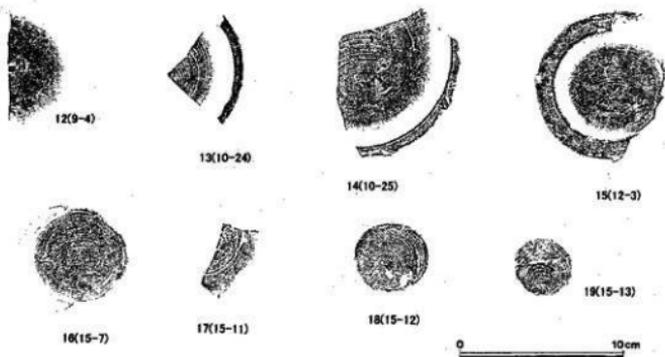
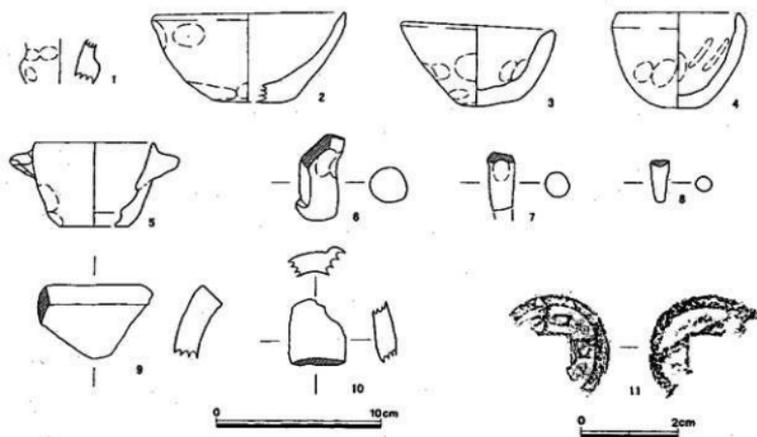
1・17・20=E-18区 2・10・22=E-19区 3=D-E-16・17区 4・5・8・12・15・15・24=D-16区 6・19・21=C-14区
 7=E-18・F-19区 9=B-9区 11=B-12区 13=板グリッド区 14=F-18区 18=E-17区 23=B-6・7区

第14図 出土遺物実測図(6)



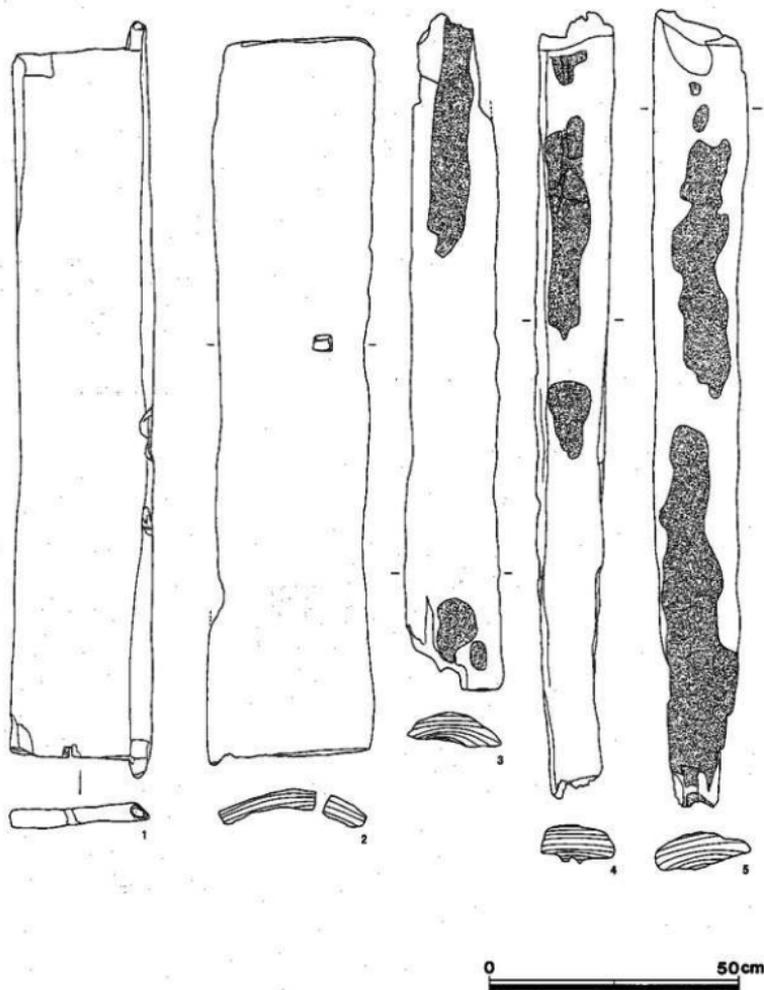
1=F-19区 2=B-18区 3=E-19区 4=E·F-18区 5=B-10-11区 6-12=C-13区 7=D-15区
 8-20-22=板分'リット'd区 9=C-14区 10=E-18区 11=調査区東側排水溝 13=B·C-17区 14=試掘坑1
 15=C-12区 17=板分'リット'f区 18=B-11区 19=B-9区 21-23-25=B-8区 16-27=B-6·7区
 24-29=出土地不明 26=C-4区 28=B-4区

第15図 出土遺物実測図(7)



1・5・7=E-19区 2=E-17区 3=C-14区 4・6=E-18区 8=出土地不詳 9=D-14区 10=D-17区

第16図 出土遺物実測図(8)

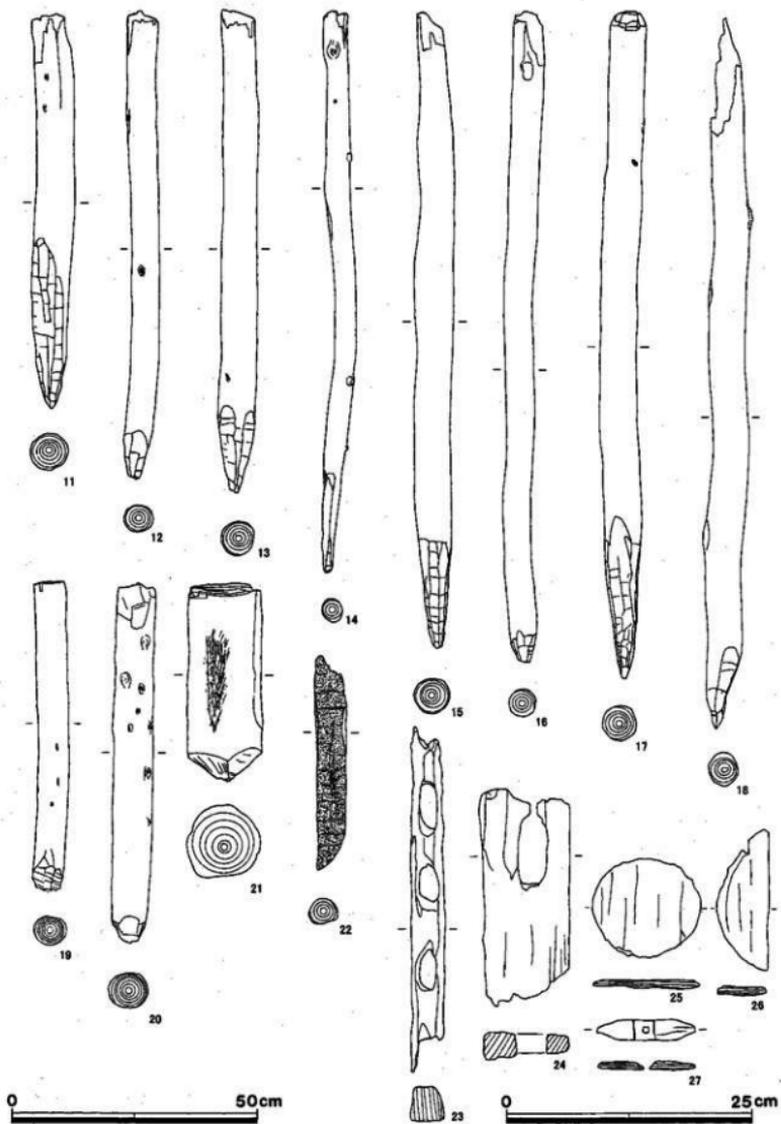


第17図 出土遺物実測図(9)

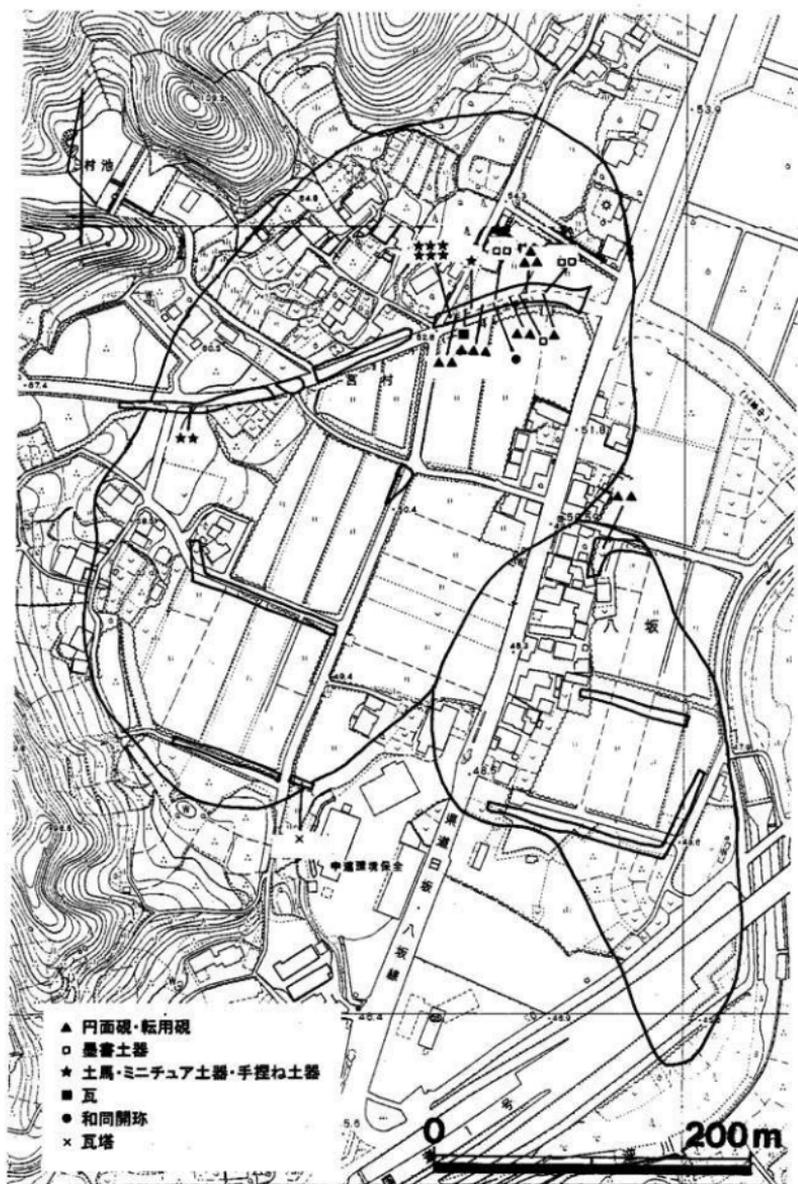


0 50cm

第18图 出土遺物実測図(10)



第19図 出土遺物実測図(11)

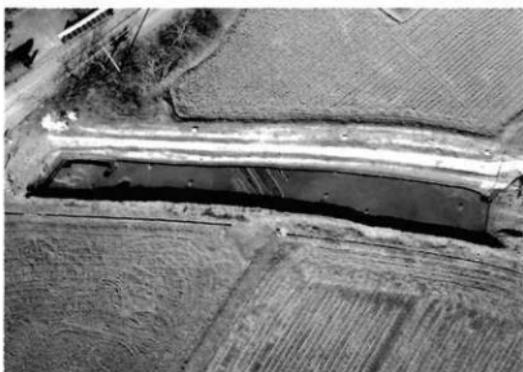


第20図 八坂別所遺跡・頭地遺跡全体図

図版 1



東調査区全景（西から）



西調査区全景

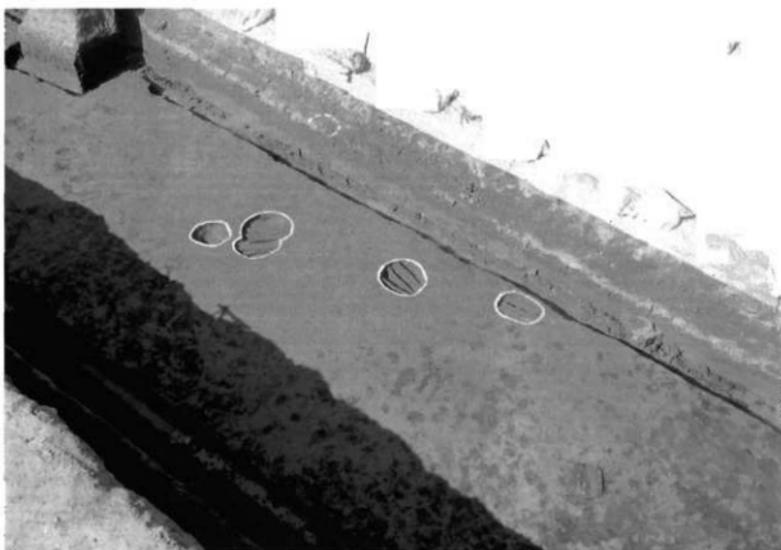


西調査区全景（西から）

図版 2 西調査区



SD01~05完掘状況（北西から）



柱穴列検出状況（南東から）

図版 3



道路状遺構路面検出状況
(南から)



道路状遺構上層検出状況
(西から)



道路状遺構下層検出状況
(西から)

図版 4 出土遺物 (1)



9-1



10-9



9-13



11-1



9-17



11-10



10-8



11-15

図版5 出土遺物(2)



11-21



13-1



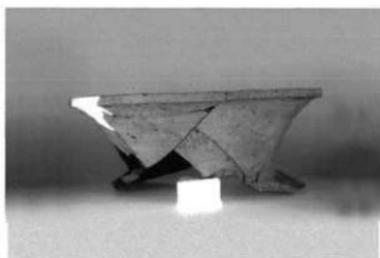
12-2



13-5



12-6



13-9



12-10



14-3

図版 6 出土遺物 (3)



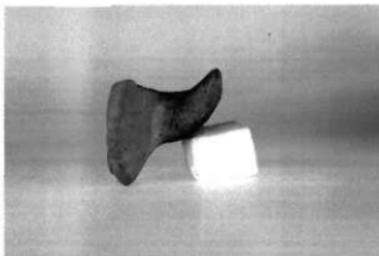
14-4



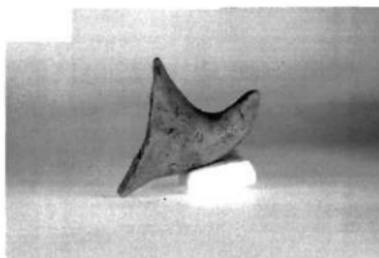
15-1



14-5



15-2



14-22



15-15

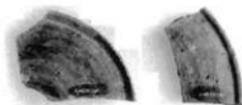


14-24



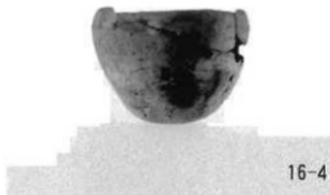
15-16

图版 7 出土遺跡 (4)



15-20

15-17



16-4



16-1



16-5



16-7

16-8



16-2

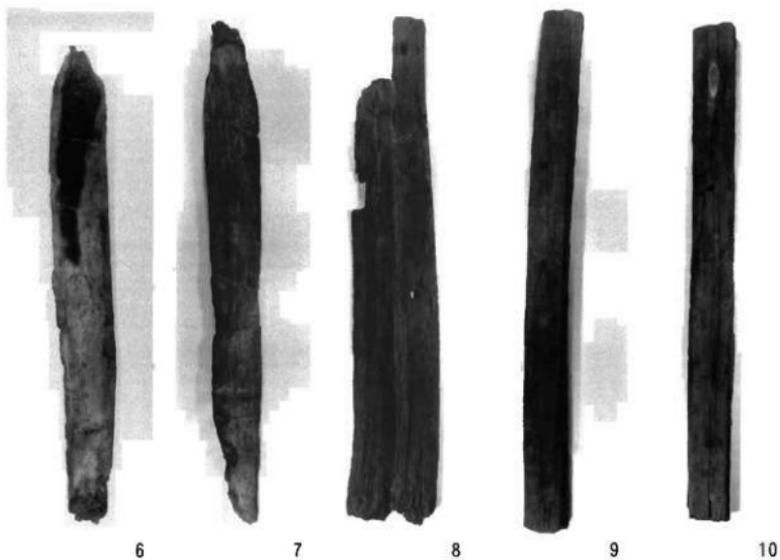
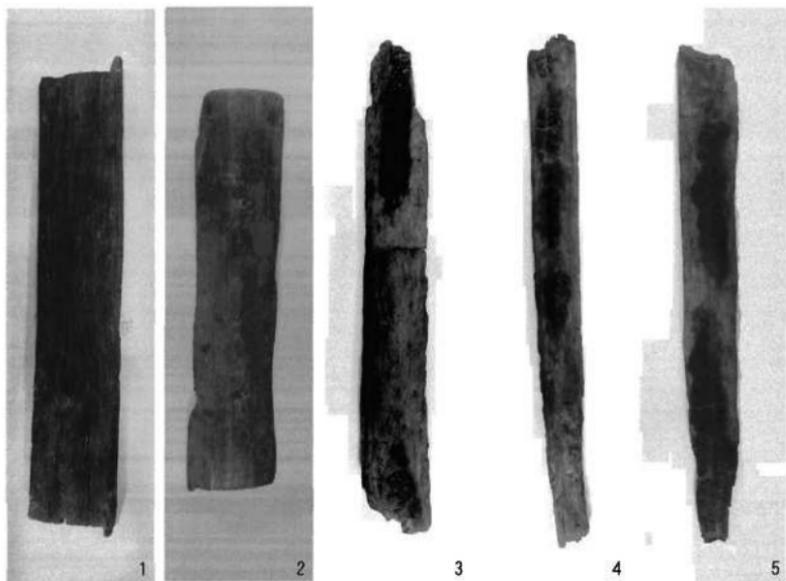


16-10

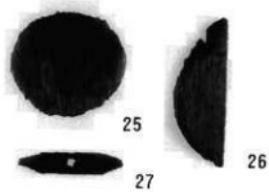
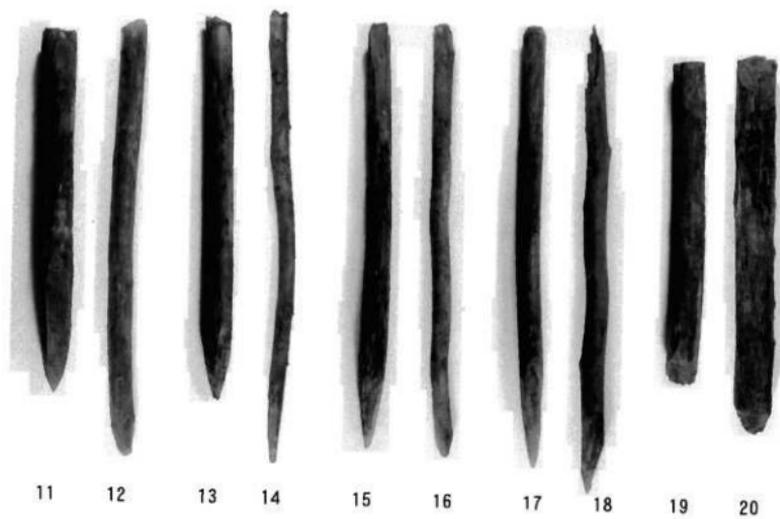


16-3

図版8 出土遺物(5)



图版 9 出土遺物 (6)



IV 牛岡遺跡の調査

牛岡遺跡の発掘調査は、平成12年9月22日から翌13年3月28日まで実施した。調査時には水田が広がっていたが、平成17年4月に「道の駅掛川」がオープンし、周辺の風景は一変した。

1. 遺構

調査区は一部で2面の遺構面を検出し、調査の面積は、合計で1,840㎡である。以下、第1面、第2面の順に報告する。

1) 第1面の遺構（第2図：カラー図版6、図版1～6）

第1面では、溝状遺構6、小穴149、性格不明遺構3を検出した。このうち、主な遺構について報告する。

溝状遺構

SD01（第3図：図版1）

調査区の北端B-1・2区で検出した、東西方向の溝状遺構である。両端が調査区外へ及んでいて、検出長約6.3m、幅0.7～1.4m、底幅0.2～0.48mを測る。確認面からの深さは、東端で14.8cm、西端で21.1cm、両端部での底面レベルを比較すると、東端が約24cm高い。北側の立ち上がりが他の遺構による擾乱を受けている部分もあるが、概ね直線的である。覆土には、10cm以下の礫が少量含まれていた。自然の流路なのか、人工的なものかは断定できない。遺物は、第8図-1・2の土器、第9図-7の削器がある。時期は、15世紀前半に位置づけられる。

SD03（第4図：図版4）

A-6区からB-8区にかけて検出した、東西方向の直線的な溝状遺構である。東端が調査区外へ及び、西端はB-8区内で立ち上がる。検出長10.5m、幅0.7～2m、底幅は明らかでない部分もあるが、0.2～0.5mを測る。確認面からの深さは、東端で39.3cm、西端で4.9cmを測り、両端部での底面レベルを比較すると、東端側が47.7cm高い。覆土から、弥生時代後期の土器が散在的に出土した。これらは、底面から9.7～14.1cm浮いた状態である。他にこれより新しい時代の遺物が出土しなかったことから、遺構の時期は当該期にあたると思われる。遺物は、第8図-3の弥生土器がある。

SD06（第3図：図版1）

B-2区で検出した。調査区外から東西方向に直線的に伸び、SX02と重複するあたりで向きを北に変えて直線的に伸びるが、その先は試掘坑により消滅する。検出長約3m、幅0.5～1m、底幅0.12～0.68mを測る。確認面からの深さは、西端で5.4cm、北端が最深で8.2cmを測り、両端部での底面のレベルを比較すると、西端が6cm高い。わずかな深さしかないので、断定できないが自然の流路だと考えられる。遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

性格不明遺構

SX01（第3図：図版2）

A・B-1区で検出した。直径1.6mのほぼ円形で、確認面からの深さは、91.5cmを測る。覆土の上層に、直径10～40cmほどの石が多量に含まれ、焼けて赤く変色しているものも見受けられた。石は、廃棄時に人為的に入れられたものと思われるが、石組み井戸の可能性もある。遺物は、第8図-4～8の土器、第9図-12の縄文時代の石皿が出土した。石皿は、裏面を砥石に転用している。時期は、15世紀後半に位置づけられる。

SX02 (第3図・図版3)

B-2区で検出した。SX01から西へ約4.2m離れて位置する。形状は、北東から南西方向にやや長い楕円形を呈する。規模は、長径2.08m、短径1.57m、確認面からの深さは、86.3cmを測る。覆土の上層に直径10~40cmほどの石を多量に含み、焼けて赤く変色しているものも見受けられた。SX01同様に井戸の可能性があり、廃棄された状態だと思われる。遺物は、第8図-9~14の土器、第9図-13の縄文時代の石皿が出土した。井戸の石組に転用したのであろうか、13世紀前半に位置づけられる。

柱穴列

柱穴列と考えられる小穴群は、2つの試掘坑の間のA・B-3~6区と、調査区の西端付近で検出した。このうち、規則性のみられる小穴を抽出し、柱穴列を復元した。なお、それ以外的小穴にも、柱根が残存しているもの、覆土の観察から柱穴と認められるものが存在し、建物跡が存在していたことが想定されるが、柱穴列の復元には至らなかった。

掘立柱建物跡

SH01 (第5図・図版4)

A・B-3・4区で検出した、南北方向が長軸の建物跡である。SP47・55・57・24・21・7で構成される。長軸が4.1m、短軸が3.65~3.7mを測る。柱穴の掘り方は直径50cmほどの円形で、確認面からの深さは、35.6~43.6cmを測る。東側列が、後述する柱穴列と重複する。SP21・7に掘り直しが見られる。構成するすべての柱穴から、遺物が出土した。時期は、中世以降と考えられる。

柱穴列1 (第5図・図版4)

A・B-3・4区で検出した。SH01のSP07の南に、SH01の柱間と同間隔で並ぶ柱穴を1個確認した。確認長6.2m、柱穴間は2.0~2.1mを測り、さらに南北に伸びる可能性がある。掘り方は楕円形もしくは円形を呈し、長径37~53cm、短径30~48cm、確認面からの深さは、32.4~43.6cmを測る。SP37から小皿の小片が出土していることから、鎌倉時代以降に位置づけられる。

柱穴列2~4 (第6図・図版4)

調査区の北西端で検出した。直線上に並ぶ柱穴を3列確認した。北から柱穴列2、3、4とする。柱穴列2では、2個の柱穴を確認した。柱穴間は、2.4mを測る。掘り方は楕円形で、柱穴の規模は、SP149が、50×51cm、深さ81.8cm、SP139が、63×85cm、深さ33.4cmである。SP139には礎板、149には柱根が残存していた。柱穴の規模・構造が異なり、調査区境付近に位置していることから、それぞれ別の遺構の柱穴である可能性もある。SP139から小皿の小片が出土していることから、鎌倉時代以降に位置づけられる。

柱穴列3では、4個の柱穴を確認した。確認長7.0m、柱穴間は、2.3~2.35mを測る。掘り方は、直径36~53cmの円形で、確認面からの深さは47~70.2cmを測る。SP128には柱根が残存していた。SP126から、小皿の小片が出土していることから、鎌倉時代以降に位置づけられる。

柱穴列4では、3個の柱穴を確認した。確認長3.85m、柱穴間は1.9・1.95mを測る。掘り方は、長径41~46cm、短径35~45cmの楕円形で、確認面からの深さは37.8~46.2cmを測る。SP137には礎板が残存していた。SP129から小皿の小片が出土していることから、鎌倉時代以降に位置づけられる。

2) 第2面の遺構 (第2図・図版5・6)

第1面下で東から西へ押し出された砂礫層および粘質土層を確認した。この層には縄文土器が含まれていた。第2面として調査を行ったのは、A・B-7~9区とA・B・C-15・16区である。検出した遺構は、溝状遺構2と小穴49である。このうち、調査区の北端で検出した小穴群は、不定形で浅

い掘り込みのものが多く、小穴群の性格は不明である。

溝状遺構

SD08 (第7図: 図版6)

A・B-8・9区で検出した。東西方向の溝状遺構である。両端が調査区外へ及んでいて、検出長約8m、確認面の幅約4.8~6.2mを測る。確認面からの深さは、東端で129.2cm、西端で125.7cmを測る。両端部での底面レベルを比較すると、東端が19.8cm高いことから、東から西へ流れていたと思われる。北側立ち上がりが見られ、砂利にえぐられ不整形の凹みができている。覆土は、堅果類や木片などの自然遺物を含む粘土と砂礫で、折り重なるように堆積していた。堅果類は分析の結果、コナラ属、トチノキ、イチイガシ、アカガシ属、ウラジロガシである。縄文時代の自然流路であると思われる。覆土の堆積状況から長時期にわたって埋まったことが窺える。縄文時代中期後半の土器片が出土している。

2. 遺物

遺物は、縄文土器・石器、弥生土器、須恵器、中世陶器、銭貨等、コンテナ6箱分である。種別としては山茶碗片が大半を占め、瀬戸・美濃系をはじめとした中世陶器と輸入磁器等が少量みられる。図示できたものは28点である。

1) 土器 (第8図: 図版7)

1~3はSD01出土である。1は13世紀中葉に比定される東遠江系山茶碗小碗で、器壁が全体に厚手、口唇部を欠損するが、内彎して立ち上がる。2は志戸呂産(三ツ沢窯: 古瀬戸後IV期平行)の天目茶碗で、口唇部を除き体部内外面に鉄錆釉が施される。3は白磁面取蓋の口縁部片である。

4はSD03出土の弥生時代後期の台付甕である。胴部下半に最大径をもつが、それ程張り出すことなく頸部に至る。全体に器面荒れが著しいが、胴部外面には縦位のハケメ、口唇部外面には浅いキザミが施される。

5~8はSX01出土である。5は緑釉挟み皿で、口縁はほとんど外反することなく立ち上がり、口縁内面のみに灰釉が施される。大窯第1段階に比定される。6は土師質の取鍋である。口縁の一部を欠損するが、口縁形はほぼ円形を呈し、口唇の一端を平坦にした流し口が付けられる。外面には整形時の指頭痕が確認できる。内面には金属のスラグ(銅?)の付着が認められる。7は常滑甕の底部片である。平底から緩やかに立ち上がり、底部周辺にはヘラ削り痕が明瞭に残る。8は第9型式に比定される常滑片口鉢の口縁部片である。

9~14はSX02出土である。9~11はいずれも13世紀前半代に比定される東遠江系山茶碗片である。12は8世紀代に比定される須恵器短頸壺である。13は8世紀代に比定される須恵器壺底部片である。14は8世紀前半に比定される須恵器高台付坏身底部片である。

15はSD03出土の志戸呂産(三ツ沢窯: 大窯第1段階平行)の播鉢片である。

16はSP176出土の東遠江系山茶碗底部片である。三角形の高台部の特徴から12世紀後半~13世紀初頭に比定される。

17はSP143出土の東遠江系山茶碗底部片である。16同様、三角形の高台部の特徴から12世紀後半~13世紀初頭に比定される。

18~23は遺構外出土である。18・19はA-15区出土の東遠江系山茶碗底部片である。高台部の特徴から18は12世紀後半~13世紀初頭に、19は13世紀中葉に比定される。20はB-2区出土の東遠江系山茶碗口縁部片である。12世紀後半~13世紀初頭に比定される。21はB-8区出土の龍泉窯系青磁碗の

高台部片で、13世紀中葉～14世紀前半に比定される。

22・23は表層からの出土である。22は瀬戸・美濃産（大窯第1段階）の播鉢口縁部片である。23は東遠江系山茶碗小皿で、13世紀後半に比定される。

2) 銭貨（第8図：図版7）

24～27は、すべてA～8区からの出土である。24は開通元宝、25は淳化元寶、26は洪武通寶、27は天禧通寶である。

3) 石器（第9図：第2表：図版8）

今回の調査では、140点の石器が出土した。いずれも縄文時代のものである。このうち打製石斧4点、削器3点、石匙2点、石錘2点、石皿2点、凹石1点の合計14点を図示した。7・12・13以外は遺構外出土である。

打製石斧4点のうち、1～3は折損する。1と2は安山岩、3は頁岩、4は硬質砂岩製である。削器は、5と6がともに頁岩で、同様の手法により製作されたものである。7は、第1面のSD01から出土した。小振りである。石匙2点は、石材と製作方法が異なる。石錘は、ともに砂岩である。石皿2点のうち、12はSX01、13はSX02から出土した。ともに第1面の遺構である。14は、砥石を凹石に転用したものである。

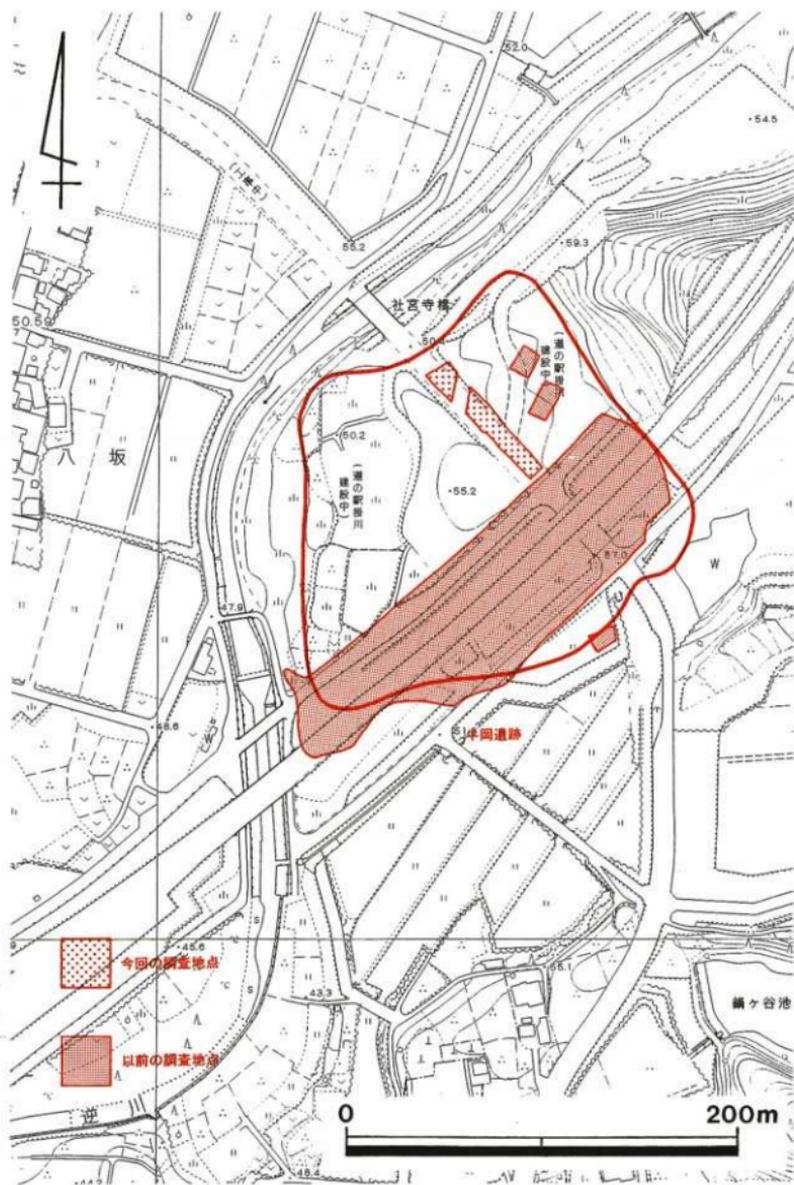
3. まとめにかえて

今回の調査地点は、平成元年度から3年度に研究所によって実施された調査地点（以下、研究所調査地点）とも隣接しており、その調査結果を踏まえながら今回の調査地点について、特に上層の中世期の遺構の特徴を提示しまとめたい。

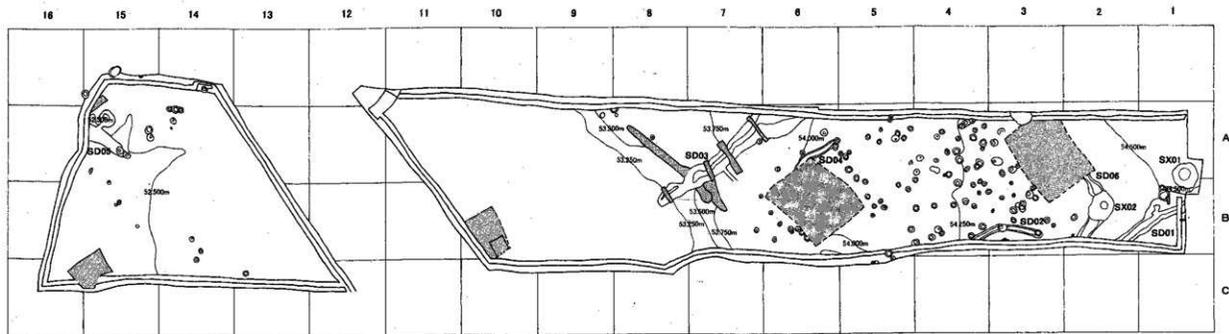
上層の遺構は、概ね12世紀後半から16世紀前半に位置づけられる集落の一部と考えられる。出土遺物の数的出土傾向をみると、12世紀後半から14世紀前半に比定される東遠江系山茶碗が多数を占め、続いて15世紀後半から16世紀初頭に比定される古瀬戸後期から大窯1段階に比定される、いわゆる瀬戸・美濃系陶器がわずかながら見られる。この出土傾向は、研究所調査地点での出土傾向とも合致しており、当集落の最盛期は12世紀後半から14世紀前半であり、14世紀中葉から15世紀中葉には断絶に近い衰微、あるいは縮小があったと考えられ、15世紀後半から16世紀初頭には最盛期には及ばないものの、少なくとも前代との比較においては確実な集落の痕跡をみることができる。

15世紀後半から16世紀初頭の遺構について、当該期に比定できるものはSX01のみであり、その性格について具体相は明確でないが、遺構の性格はともかくとして少なからず集落の性格を考える上で取鍋の出土は看過できない。スラグ等の鋳物跡の存在を裏付ける遺物が検出されていないため、SX01を鋳物跡に関わる遺構と想定するのは短絡的であろう。ただし、被熱によって赤化した石の出土は注視したい。周辺域に鋳物工房に関連する遺構の存在を想定することはあながち荒唐無稽とは言えないだろう。

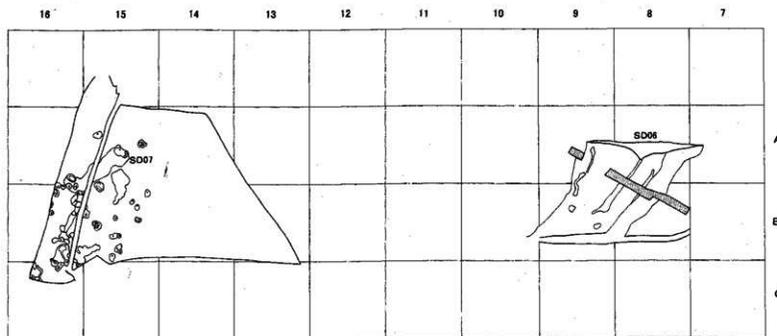
研究所調査地点においては、16世紀後半の屋敷地跡は確認されているが、15世紀後半から16世紀初頭に比定される時期の建物跡は検出されていない。当該地点の15世紀後半から16世紀初頭の集落は、研究所調査地点の16世紀後半の屋敷地を伴う集落に比べ散在的で小規模な集落だったと想定されている。小規模ではあるものの、取鍋の存在は、小規模な集落ではあるものの、そこに付属する工房の存在を示唆させるものと評価したい。



第1図 遺跡周辺地形図・調査区位置図



第1面

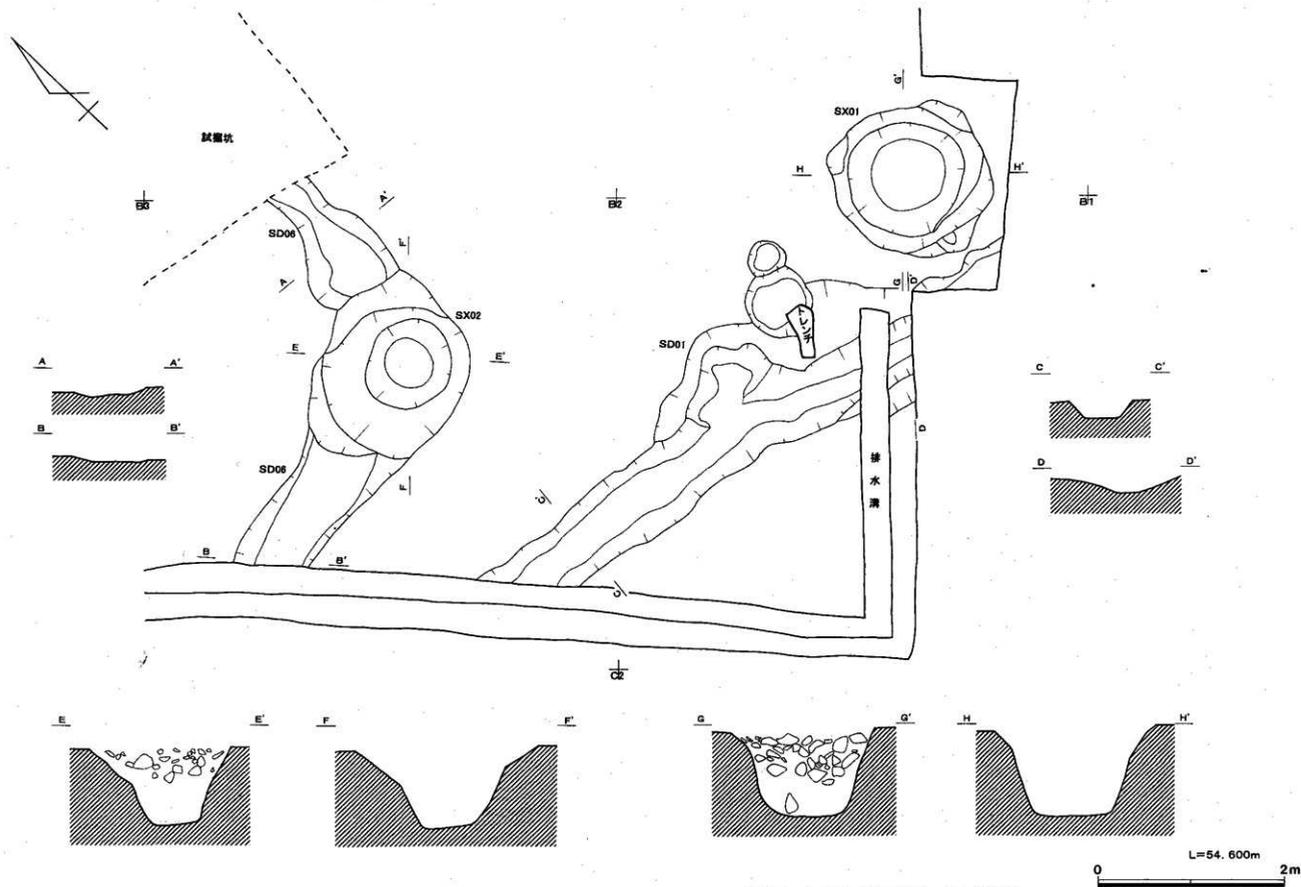


第2面

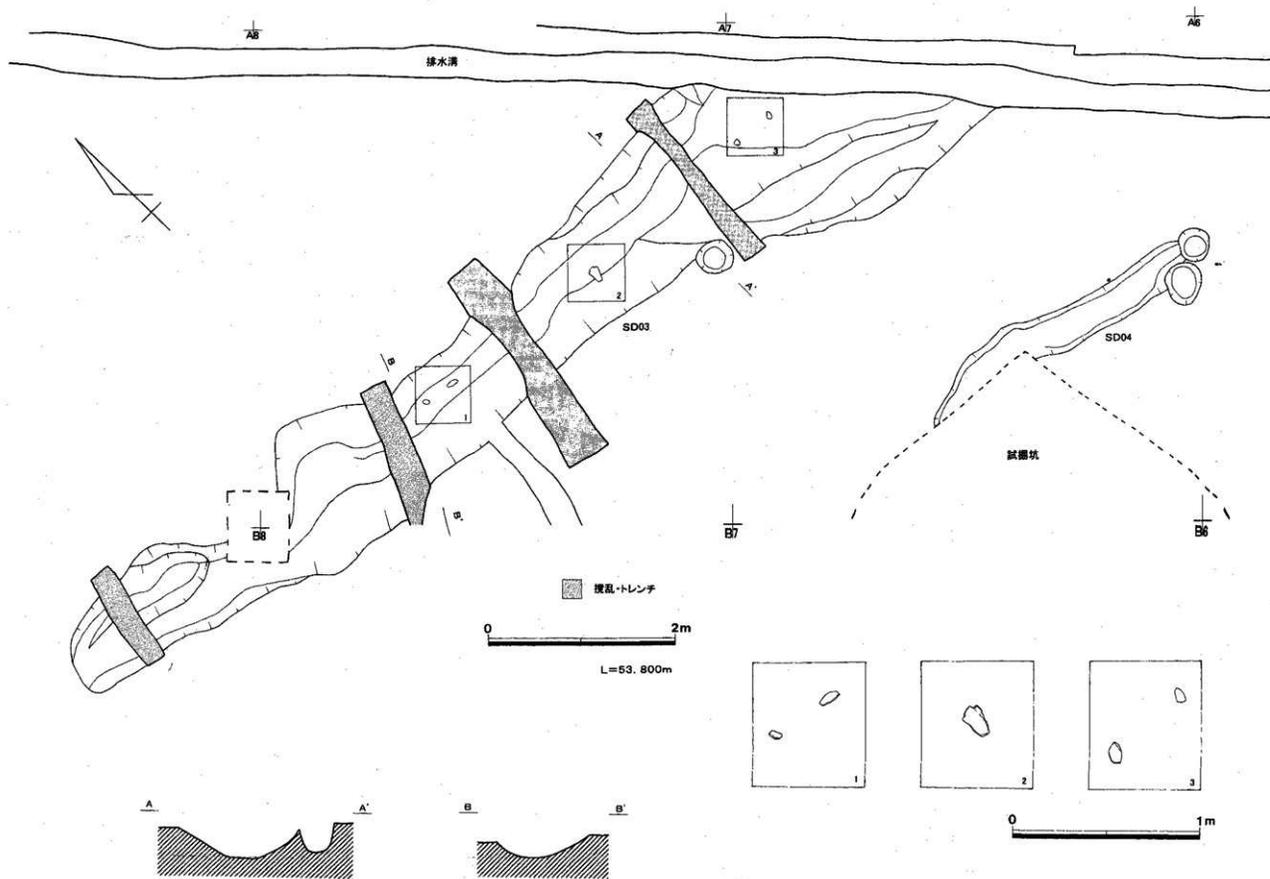
■ 掘乱トレンチ-試掘坑

0 10m

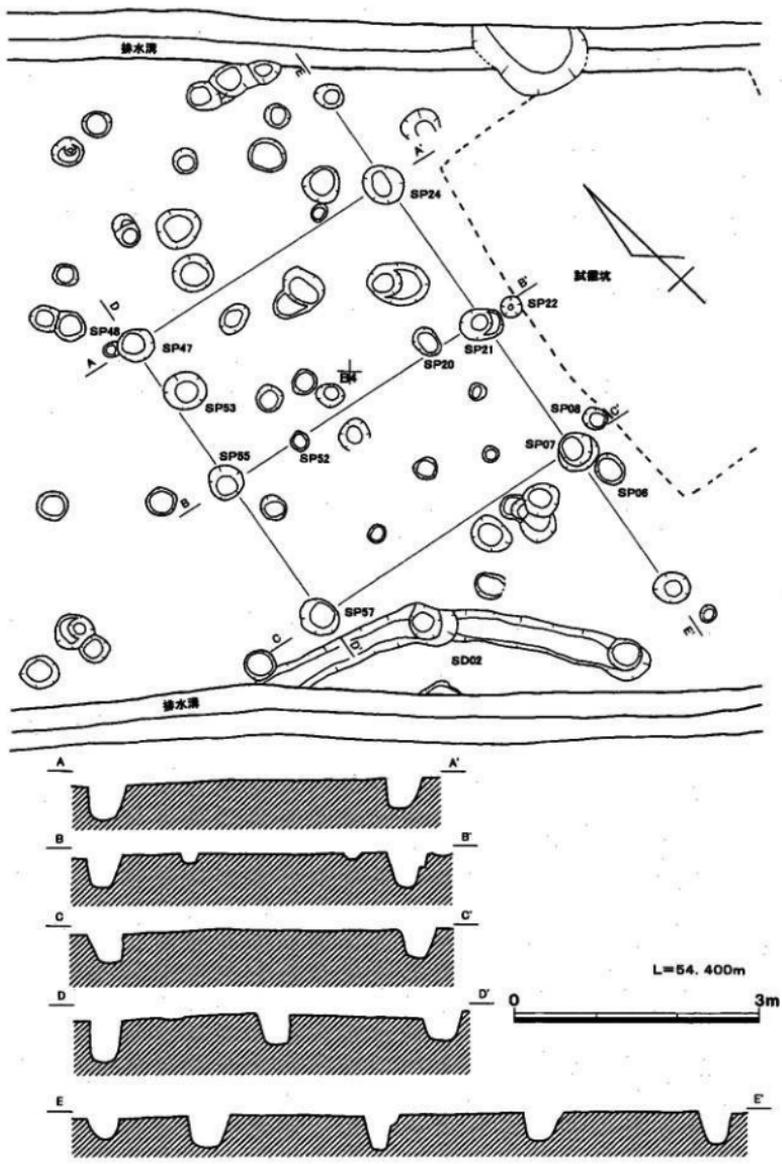
第2図 遺構全体図



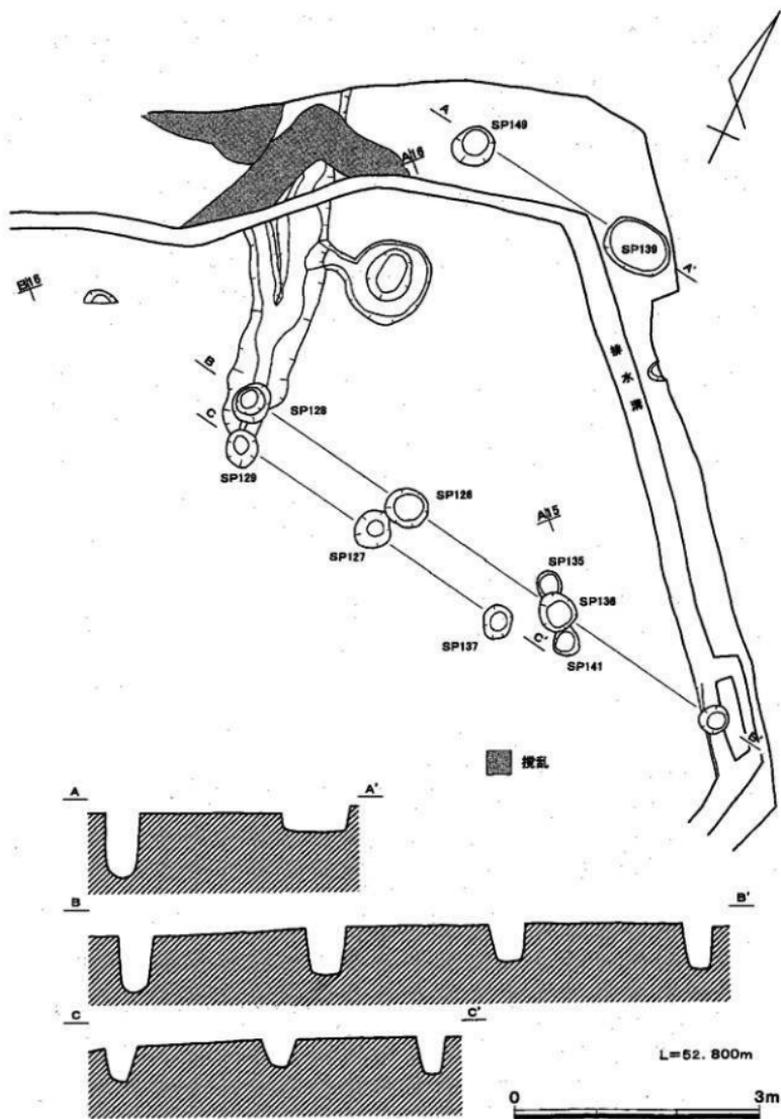
第3图 SD01·06、SX01·02 实测图



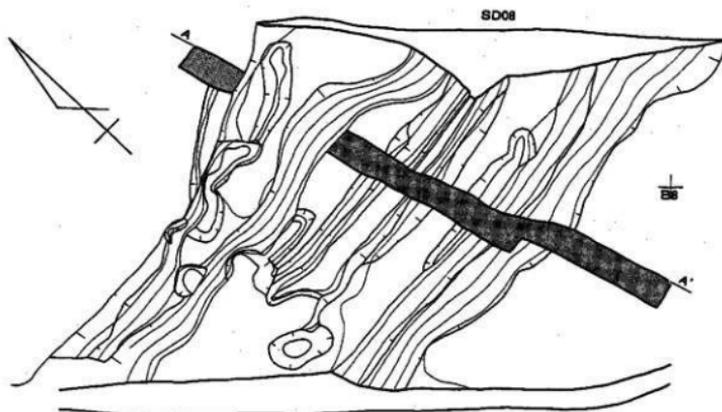
第4図 SD03実測図



第5図 柱穴列実測図(1)



第6图 柱穴列实测图(2)



トレンチ

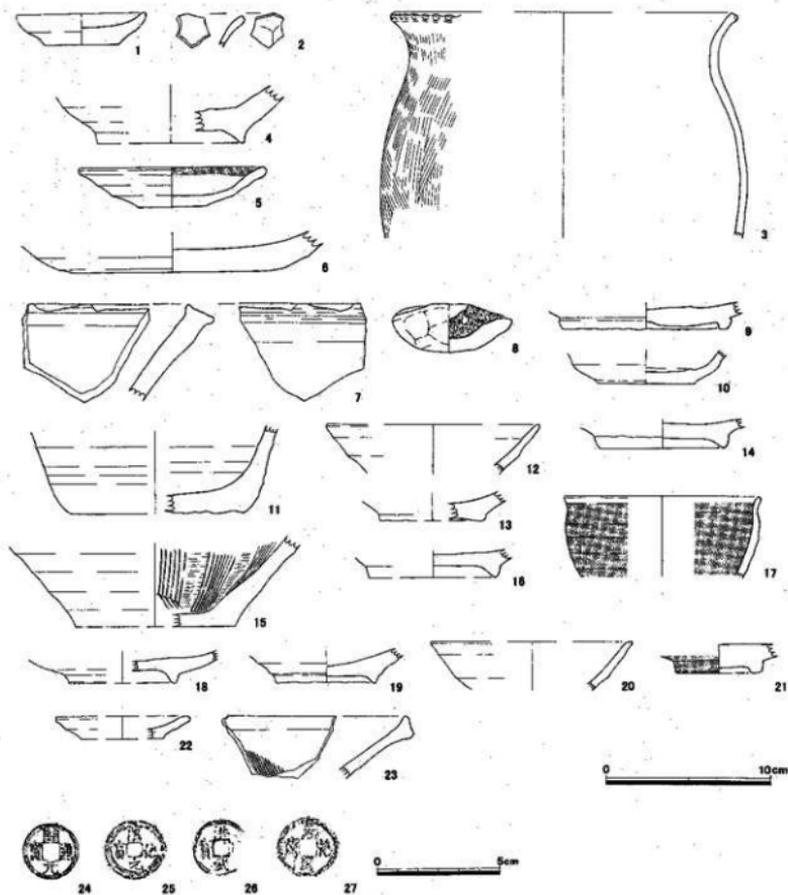


- | | | |
|------------|------------|-----------|
| 1. 灰色粘土 | 14. 灰色砂利 | 27. 雜灰色砂利 |
| 2. 雜灰色砂利層 | 15. 灰色砂利 | 28. 灰色砂 |
| 3. 雜灰色粘土 | 16. 雜灰色粘土 | 29. 灰色砂利 |
| 4. 雜灰色粘土 | 17. 灰色砂 | 30. 灰色砂利 |
| 5. 灰色砂 | 18. 灰色砂 | 31. 雜灰色砂利 |
| 6. 灰色砂 | 19. 灰色砂利 | 32. 灰色砂 |
| 7. 雜灰色砂利 | 20. 灰色砂利 | 33. 雜灰色粘土 |
| 8. 雜灰色砂利 | 21. 雜灰色砂利 | 34. 雜灰色砂利 |
| 9. 雜灰色粘土 | 22. 灰色砂層粘土 | 35. 雜灰色粘土 |
| 10. 雜灰色粘土 | 23. 灰色砂利 | 36. 雜灰色粘土 |
| 11. 雜灰色粘土 | 24. 灰色砂利 | 37. 灰色粘土 |
| 12. 灰色砂層粘土 | 25. 灰色砂 | |
| 13. 灰色砂 | 26. 灰色砂利 | |

L=52.700m

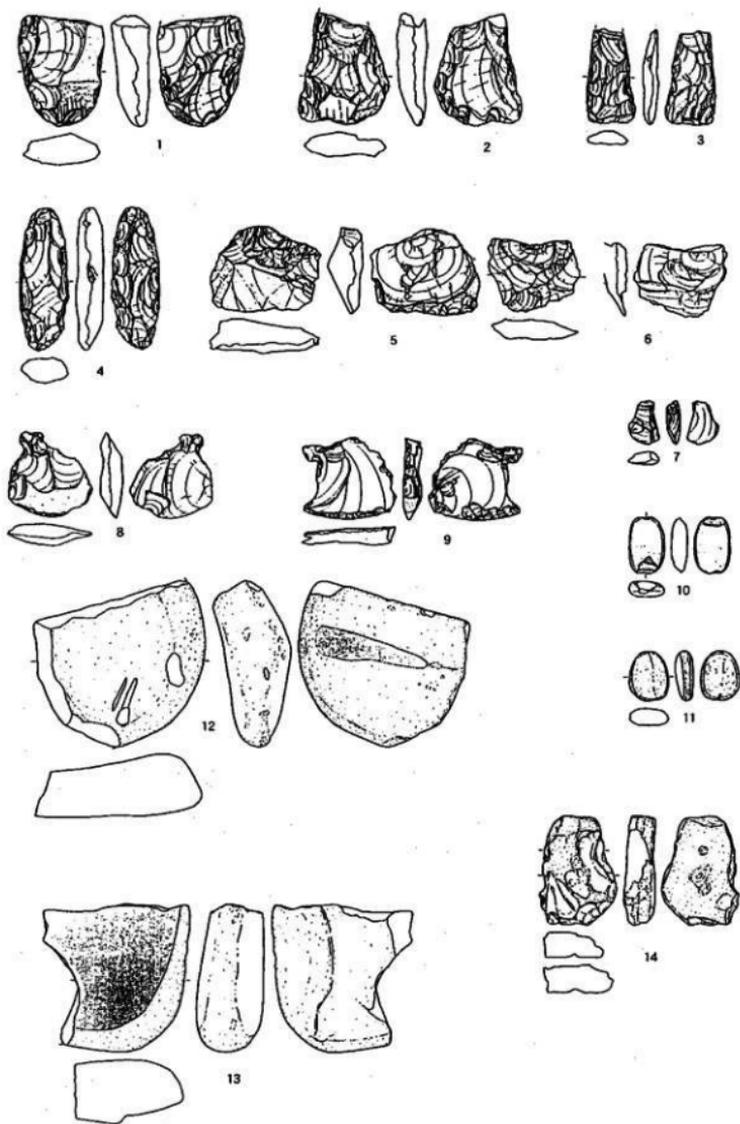


第7図 SD08実測図



1=B-1区SD01 2=B-1·2区SD01 3=A-7区SD03 4~8=A·B-1区SX01 9~14=B-2区SX02 15=A-3区SX03
 16=A-8区SP143 17=A-6区 18·19=A-15区 20=B-2区 21=B-8区 22=埽土内 23=直壁磨削时
 24~27=A-8区

第8图 出土遗物实测图(1)



第9图 出土遗物实测图(2)

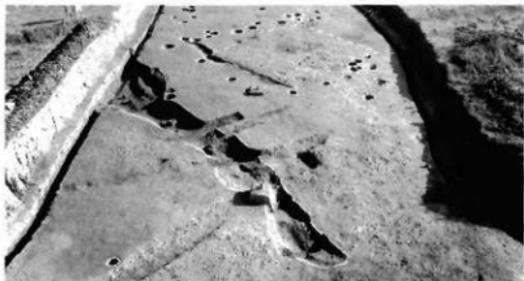
第2表 牛岡遺跡出土石器観察表

番号	グリッド	遺構名	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	所見
1		排土内	打製石斧	安山岩	78.9	61.8	27.8	135.5	大形打製石斧の刃部。側面には土づれ痕がみられる。
2	B-16		打製石斧	安山岩	80.7	64.6	22.1	108.1	横長剥片素材で、垂直打撃による平坦剥離で形態形成をした打製石斧。刃部に土づれ痕。
3	A-16		打製石斧	頁岩	68.2	35.3	11.8	32.3	素材剥片は横長剥片と推定される。縁辺からの垂直打撃で平坦な加工を施す。
4	A-15		両面加工石器	硬質砂岩	103	34.6	19.9	89	横長剥片素材を直接打撃で両面加工形成した石器。打製石斧の可能性もある。
5	B-16		削器	頁岩	62.6	78.4	25	108.1	横長剥片のバルブの部分を直接打撃で除去し、素材の鋭い辺に直接打撃で刃部を形成した削器。
6	A-C-13~15		削器	頁岩	52.9	65.5	21.3	54.9	横長剥片のバルブの部分を直接打撃で除去し、素材の鋭い辺を刃部とした削器。
7	B-1	SD01	削器	頁岩	31.4	22.1	9.8	6.3	横長剥片の両側辺を折取り、両側辺に囲まれた鋭い辺を刃部となす削器。
8	A-7		横形石匙	硬質砂岩	61.3	58.9	16.3	48.3	垂直打撃の剥片を素材にして、素材縁辺を刃部をなし、直接打撃で横みを形成している。
9	B-16		石匙	頁岩	59.5	66.3	13.4	45.9	縦長剥片の側面に押圧剥離で刃部を形成し、末端辺に横みを形成した石匙。
10	A-10, 11, B-10		礫石錘	砂岩	41.5	25.8	11.9	19.7	小扁平礫の両端を打ち欠いてつくられた石錘。
11	B-14		礫石錘	砂岩	36.1	28.8	13.2	19.4	小扁平礫の両端に擦り切り痕のある石錘。
12	A・B-1	SX01	石皿	砂岩	238.9	244.3	111.5	6,000.0	裏面は砥石に転用してある。
13	B-2	SX02	石皿	砂岩	212.2	208	95.9	5,292.2	正面に撃滅痕が顕著。
14	B-15		凹石・砥石	砂岩	158.9	110.6	45.1	763.6	砥石を凹石に転用。

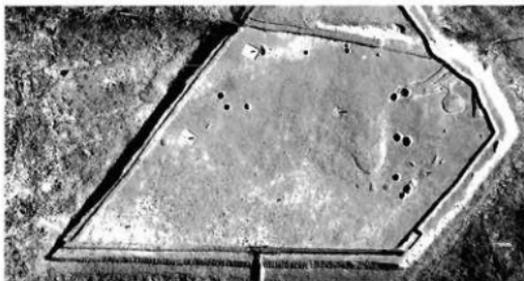
図版1 第1面



調査区全景（南東から）



調査区全景（北西から）



調査区全景



調査区全景（西から）

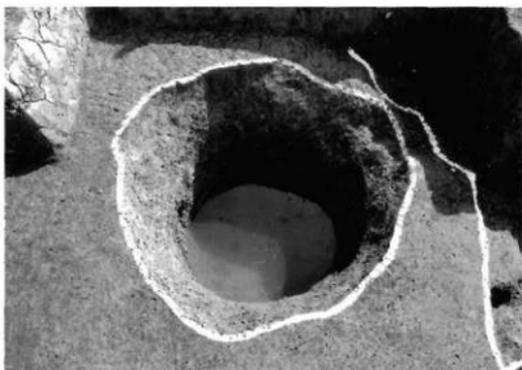
図版 2



SX01磔出土状況(南東から)



SX01土層断面(北西から)



SX01完掘状況(北西から)

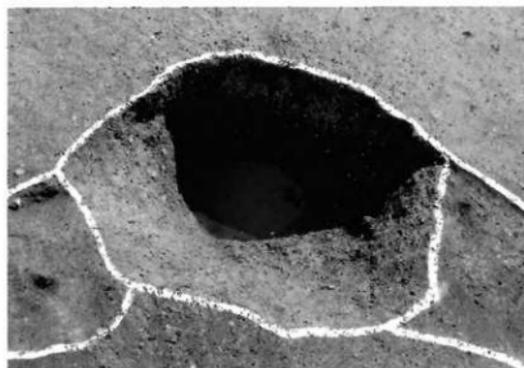
図版 3



SX02礫出土状況(北西から)



SX02土層断面(南西から)



SX02完掘状況(北西から)

図版 4



SD03遺物出土状況(東から)



柱穴列1完掘状況



柱穴列1完掘状況(西から)



柱穴列1完掘状況(南から)



柱穴列3・4完掘状況(東から)

図版5 第2面



調査区全景



調査区全景（南から）



調査区全景（北東から）

図版 6



SD08土層断面（西から）



SD08完掘状況（東から）

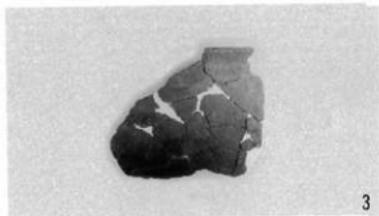
図版 7 出土遺物 (1)



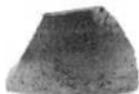
2



10



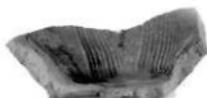
3



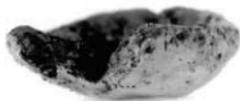
11



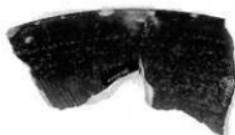
5



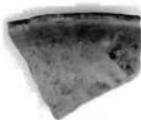
15



8



23



7



24



25

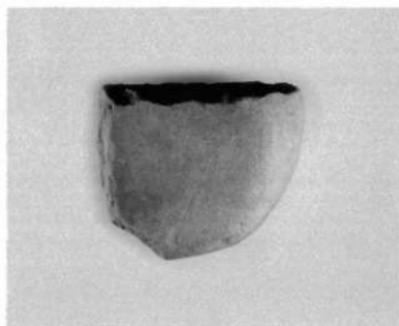
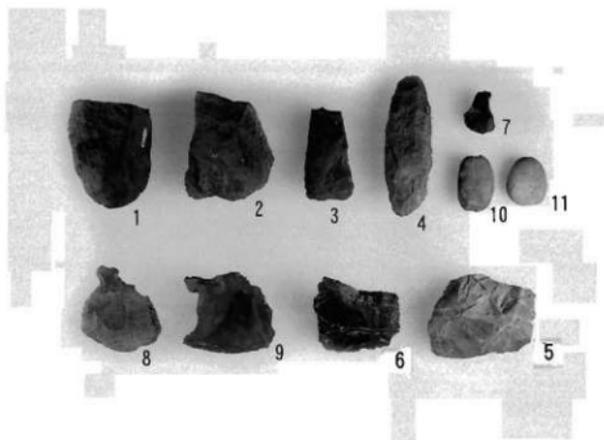


27

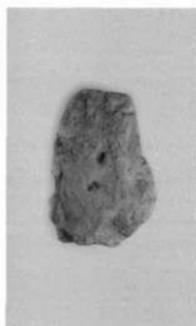


26

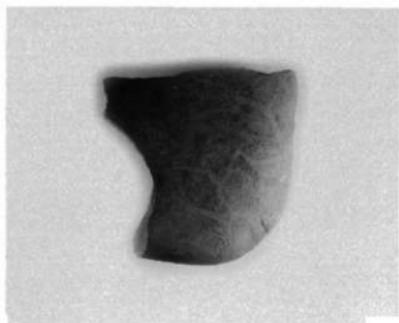
図版 8 出土遺物 (2)



12



14



13

V 栗下遺跡の調査

栗下遺跡の発掘調査は、平成16年7月17日から翌17年2月28日まで実施した。掘削により生じる排土を調査地内で処理する必要があったため、調査地を北半と南半に2分割し、北調査区から調査に着手し、終了後引き続き、南調査区の調査を行った。調査地点は、農地整備事業により平成11年度に農地造成工事が行われている。

1. 遺構

北調査区では、3つの遺構面を確認し、全体で堅穴住居跡1、堅穴状遺構2、土坑223、溝状遺構8、性格不明遺構3を検出した。南調査区では、農地造成土の下が砂利層及び旧耕作土と考えられる灰褐色土層で、水田耕作が行われていた痕跡が窺われたが、それ以外の遺構は検出しなかった。それより下層はシルト、砂、砂利が堆積し、河川であったと考えられる。遺構は、すべて北調査区から検出した。以下、第1面から順に報告する。

1) 第1面の遺構 (第2図：図版1)

第1面の北端から約10mは、農地造成による耕作土の直下に縄文時代の遺物を含む層が存在していた。それより南側で、東西及び南北方向の溝状遺構8、小穴5を検出した。小穴は現代のものも含まれる。以下、溝状遺構について報告する。

溝状遺構

SD01 (第3図：図版1)

調査区の西寄りA-6～9区で検出した、南北方向の溝状遺構である。北端は、SD03・04と交差した部分で消滅する。南端は南調査区側に及ぶが、同調査区ではその続きを確認できなかった。検出長は約14m、幅0.6～1.2m、底幅0.3～1mを測る。確認面からの深さは、SD04と接する北端で9.3cm、南端で9.7cmを測り、両端部での底面のレベルを比較すると、北端が12.5cm高い。

SD02 (第3図：図版1)

SD01の東隣で検出した、南北方向の溝状遺構である。北端はA-4・5区で調査区外へ及び、南端はA・B-9区で南調査区との境付近でSD01と合流して調査区外へ及ぶ。検出長は約25.3m、幅0.45～1.2m、底幅0.1～0.6mを測る。確認面からの深さは、北端で16.2cm、南端で7cmを測り、両端部での底面のレベルを比較すると、北端が11cm高い。

SD03 (第3図：図版1)

A・B-6区で検出した、東西方向の溝状遺構である。すぐ南側にSD04がある。東端はSD07に切られ、西端は調査区外へ及び。途中、南側の立ち上がりが明確でない部分がある。SD08を切り、SD02に切られる。検出長は8.5m、幅0.35～1m、底幅0.15～0.6mを測る。確認面からの深さは、東端で6.8cm、SD02との境付近で8.5cmを測り、両端部での底面のレベルを比較すると、西端が5cm高い。

SD04 (第3図：図版1)

A・B-6区で検出した、東西方向の溝状遺構である。東端は、SD07と交差する部分でSD03に切られ、SD08を切り、SD02と交差する部分で南側の立ち上がりは02を切っているものの、先端は消滅する。検出長は7.3m、幅0.3～0.6m、底幅0.1～0.2mを測る。確認面からの深さは、東端付近で3.4cm、西端付近で2.5cmを測り、両端部での底面のレベルを比較すると、西端が5cm高い。

S D05 (第3図:図版1)

A・B-6・7区で検出した、北東から南西方向の溝状遺構で、他のものが東西及び南北方向であるのに対し、明らかに方向を異にする。北東端は、S D04と08が交差する部分で切られ、さらに、S D02と01に切られる。S D01の西から調査区外へ及び溝状遺構は、規模と向きがS D05と似ているが、S D01との新旧関係から判断すると、別であると思われる。検出長は4.4m、幅0.4~0.5m、底幅0.25~0.3mを測る。確認面からの深さは、北東端で5.4cm、S D02との境付近で6.7cmを測り、両端部での底面のレベルを比較すると、北東端が3.5cm高い。

S D06 (第3図:図版1)

A~C-7・8区で検出した、東西方向の溝状遺構である。東端は調査区外へ及び、西端はS D01を切る。検出長は9.2m、幅0.9~1.1m、底幅0.6~0.9mを測る。確認面からの深さは、東端で12.7cm、西端で16.3cmを測り、両端部での底面のレベルを比較すると、西端が15.1cm高い。

S D07 (第3図:図版1)

調査区の東寄りB-6~9区で検出した、南北方向の溝状遺構である。北端は、B-6区で立ち上がる。南端は、C-8区で一端途切れ、さらに南調査区側に及ぶものの、その続きは確認できなかった。検出長は約14.4m、幅0.15~0.6m、底幅0.1~0.5mを測る。確認面からの深さは、北端で1cm、南端で7.4cmを測り、両端部での底面のレベルを比較すると、北端が15.1cm高い。北端側でS D03・04に切られるが、S D06との交差では新旧関係は明確ではない。

S D08 (第3図:図版1)

B-4~9区で検出した、南北方向の溝状遺構である。北端はB-4区で立ち上がり、南端は南調査区側に及ぶが、同調査区ではその続きを確認できなかった。検出長は25.6m、幅0.5~1m、底幅0.25~0.55mを測る。確認面からの深さは、北端で1.1cm、南端で5.8cmを測り、両端部での底面のレベルを比較すると、北端が20.1cm高い。途中、北西方向に枝分かれする溝が2ヶ所ある。B-6区でS D03・04に、B-7・8区でS D06に切られる。

第1面で検出した溝状遺構は、江戸時代以降の暗渠等水田耕作に関係すると考えられる。南北方向の溝状遺構が多く、東西方向のそれは南北方向のものより新しい傾向が看取できる。また、南北方向のものはA・B-8区で幅が広がる共通性もみられる。

2) 第2面の遺構(第2図:図版2・3)

第2面は、ほぼ平坦な遺構面である。性格不明遺構3を検出した。今回検出した遺構面3面のなかで、最も遺構数が少ない。

性格不明遺構

S X01 (第4図:図版2)

調査区南端のA-9・10区で検出した。東西4.74m、南北は最長で1.5mを測る。調査区外へ及びため、全容は不明である。確認面からの深さは、最深で40.7cmを測り、底面が南へ緩やかに傾斜している。南側調査区では続きを確認していないことから、遺構ではなく自然地形の落ちはじめだと思われる。中央部から縄文土器と礫が集中して出土したが、底面から30cm以上浮いた状態である。

S X02 (第5図:図版3)

B-6区で検出した。北東から南西方向が長軸の楕円形状を呈し、長径2.2m、短径1.54mを測る。確認面からの深さは、最深で22.5cmを測る。底面は一定ではなく、南西方向に低くなる段差が見られ、中央付近から切り合い関係のある小穴を検出した。遺物は、縄文時代中期後半の土器がある。

S X03 (第5図:図版3)

S X02から南に約3.3m離れたB-7区で検出した。東西方向が長軸でやや不定形な楕円形状を呈し、長径2.6m、短径1.5mを測る。確認面からの深さは、最深で20.5cmを測る。底面に小穴状の掘り込みがみられた。礫と縄文土器が、北東側から集中して出土した。

3) 包含層

第2面から第3面までは、厚さ約1mの包含層が存在し、この包含層中から、縄文土器や石器、礫等が多く出土した。遺物には、顔面突起付土器の破片、ほぼ完形の石棒などがある。礫は、一面に広がっていて、その近くから縄文時代の住居跡に伴う石囲い炉が検出されている。

石棒出土地点 (第6図: 図版4)

B-8・9区で検出した。他の包含層検出グリッドは複数層で遺物が出土したが、北調査区の南端にあたる付近では1層のみである。第2面のS X01よりやや東側に位置する。S X01の土器出土レベルより約15cm深いところで石棒は出土した。石棒は、礫の上に乗っているように見え、埋納されている様子は窺えなかった。石棒の周囲、東西4m、南北2.2mの範囲から、数点の縄文土器破片と礫が散在して検出された。礫は、部分的に集中している箇所も見られるが、まばらであると言える。

4) 第3面の遺構 (第7図: カラー図版7、図版5~9)

第3面からは、今回調査した遺構面のなかで最も多くの遺構を検出した。竪穴住居跡1、竪穴状遺構2、穴218である。竪穴状遺構2は、住居跡として報告する。さらに、柱穴の配置から掘立柱建物跡1棟を抽出した。遺構の分布は、北端から約20mまでの範囲に限られる。

竪穴住居跡

S B01 (第7・8図: 図版5・6)

B・C-2・3区で検出した。方形と思われる竪穴状の掘り込みで、北西辺で5.4mを測る。他の辺は、他の遺構により消滅するか調査区外に及んでいるため、定かではない。掘り込みの深さは、北東隅で30.2cmと最も深く、南西辺で10.4cmと浅くなる。なお、南西辺の東半分では掘り方を明瞭に確認できなかった。北東から南西の壁にかけて、土坑が存在する。平面形の中央付近に石で囲まれた炉と考えられる施設を検出したことから、竪穴住居跡と判断した。

石囲い炉は五角形状で、南東及び南西側は長さ35cmほどの石で辺を構成し、残りの辺は長さ10~15cmほどの石を積み上げて構築されていた。炉の内部から、縄文土器片が出土した。炉の掘り方は、直径60cmのほぼ円形で、最深で11.5cmを測る。

床面は確認できなかったが、底面から複数の小穴を検出した。そこで、炉を中心に主柱穴を復元した。炉の北側に位置するS P122は、直径40cm、深さ46.9cmを測る。調査区東壁際の小穴からは、折損した石棒1本が出土した。

S B02 (第9図: 図版7)

調査区の西寄りのA・B-3・4区で検出した。A・B-3区で確認した弧を描いた段差がS B01と同様の掘り方と判断した。また、S P85内に焼けた部分を確認し、これを炉跡と判断した。これらから、この遺構を住居跡と判断した。この焼けた部分を中心として弧を復元すると、直径4.15mの円形となる。西側が調査区外に及び、東から南側の掘り方が消滅しており、遺構の残存状況は良好ではない。複数の小穴を検出し、主柱穴の組み合わせを検討したが、確認面からの深さが一定せず、わからなかった。遺物は、縄文時代後期後葉から末葉の土器片がある。

S B03 (第10図: 図版8)

調査区の東寄りのA・B-4・5区で検出した。S B01・02と同様に、深さ10~18cmの段差が確認されたため、住居跡と判断した。東側は調査区外に及び、南側は消滅する。段差は北西と北東辺が残

存する。両辺が接するコーナー部分はSB01のような方形ではなく、やや鈍角である。北西辺が検出長4.2mを測り、SB02と近似するが平面形が異なる。炉跡は確認されなかった。複数の小穴を検出し、主柱穴の組み合わせを検討したが、確認面からの深さが一定せず、わからなかった。SB02・03の切り合い関係は、不明である。出土遺物はない。

掘立柱建物跡

SH01 (第11図：図版9)

第3面では、直径0.2～1mの穴を200以上検出した。切り合い関係を持つものが多く、複数時期にわたり生活が営まれてきたことを窺わせる。これらの穴のうち、調査区の北西隅から検出されたものが、比較的規模が大きく、また企画性をもって並んでいるのが看取できた。これらを柱穴と判断し、その並びから掘立柱建物跡を1棟復元した。

SH01は、A・B-1～3区で検出した、SP06・08・66・62・55・106・13・12・202で、北西から南東方向の建物跡である。調査区外へ及ぶため、全容は不明であるが、長軸4間、短軸1間を確認した。構成する柱穴はほとんど切り合い関係があり、各柱穴間の距離も厳密には不明なため、復元規模が異なる可能性がある。穴は長径1mほどの楕円形状を呈するものが多く、確認面からの深さは、34.4～73.4cmを測る。また、農地整備事業で発掘調査を実施した隣接地からも、同規模の穴が検出されている（『農地整備報告書』栗下遺跡第3図）。なお、柱穴としたが、貯蔵穴等、別の性格の遺構である可能性もあることを付け加えておく。

2. 遺物

栗下遺跡の調査で出土した遺物は、縄文時代の土器と石器等コンテナ40箱分である。

1) 縄文土器等 (第12～35図：カラー図版8：図版10～30)

今回の調査で出土した遺物の大半を占める縄文土器等はコンテナで25箱分あるため、報告書掲載にあたり抽出作業を行った。まず、数点出土した完形土器を選び出し、破片については、文様の有無にかかわらず、できるだけ大きなものを抽出した。以下、354点の土器を図示した。

1～21は完形に近い土器や大型の破片である。

1は後期中葉の加曾利BⅡ～Ⅲ式に属する深鉢の口縁から胴部の破片である。口径42.6cm、残存高26.8cmを測る。口縁部から胴上半部にかけて半截竹管状工具による羽状文を施す。その直下に半截竹管状工具による二重沈線が巡る。2は第2面のA-9区、SX01から出土した晩期後葉の五貫森式に属する深鉢である。口径34cm、器高40.5cm、底径8.2cmを測る。無文である。

3～17は深鉢である。3は後期末から晩期初頭に属する。口縁部に縦位粘土を貼付ける。口縁部から胴上半部は縄文を地文にしたあと、半截竹管状工具による沈線と連続印刻を施す。4～7は繊維状用具による条痕文を施す。4は後期末葉に属する。口縁はやや内湾する。5は第3面のSB01から出土した。後期末から晩期初頭に属する。口縁部に縦位粘土を貼付ける。6はA-3区のSP65から出土した。後期末葉から晩期初頭に属する。口縁部に2つ突起が付く。7は後期末葉に属する。8は後期末葉から晩期初頭に属する。口縁部に5条の条痕を2段巡らす。胴部は巻貝による条痕のあとナデ消している。9は後期末葉から晩期初頭に属する。擦痕が認められる。10～13・15は二枚貝による条痕文を施す。10は晩期初頭に属する。条痕文のあとナデ消している。11は晩期初頭に属する。12は晩期前葉に属する。口唇部に刻みが認められる。口縁部は横方向、胴部は斜め方向の条痕文が認められる。13は晩期前葉に属する。外面にススが附着する。14はC-3区から出土した。晩期前葉に属する。二枚貝によると思われる条痕文を施す。15は晩期前葉に属する。口縁部がくの字状の断面を呈する。

16は後期末葉に属する。口縁部に連弧文を巡らす。二枚貝のような条痕のあとスリ消している。17は晩期前葉に属する。口縁部に細い沈線が3条巡る。胴部は無文である。

18~20は浅鉢である。18は晩期初頭に属する。波状口縁をなす。口縁に連弧状の沈線を巡らす。胴部はきれいに磨く。19は晩期前葉に属する。ほぼ完形の小型の鉢である。波状口縁に把手が付き、口唇部の陸帯に刻みをつける。ヘラ状工具による沈線を巡らせ、沈線上に縦位粘土を貼付ける。胴部はきれいに磨かれる。内面に赤色顔料（漆か？）が付着する。20は晩期前葉に属する。器面が荒れ、調整は不明である。

21は晩期後葉に属する。壺形土器である。胴上半部に入組文を施し、下半部はきれいに磨かれる。

破片については、時期別に報告する。なお、抽出した破片の中に、晩期中葉に属するものは含まれていなかった。

第1期 中期後葉：22・23

22は曾利Ⅱ式に属する。深鉢の胴部である。23は加曾利EⅢ式に属する。深鉢の波状口縁である。沈線による渦巻文を施す。

第2期 後期前葉：24・25

24と25は堀之内Ⅱ式に属する。24は棒状工具による刺突を施す。25は波状口縁をなし、荒い燃糸文の地文に沈線を施す。縁帯文土器である。

第3期 後期中葉：26~52

26~28は加曾利BⅠ式に属する。26は擬似縄文を施す。27は縄文地文に半截竹管状工具による沈線を施す。28は太い縄文を施す。29~51は加曾利BⅡ~Ⅲ式、一乗寺KⅡ式、元住吉山Ⅰ式に属する土器群である。29~40は縄文が施文される土器群である。29~35・40は加曾利BⅡ式に属する。30・31は沈線を施す。32・33は同一個体である。ヘラ状工具による沈線で区画し、2個の刻みを付ける。34・35は沈線で区画し、その直下を磨く。40は屈曲する胴部片である。36は加曾利BⅡ~Ⅲ式に属する。浅い沈線で区画し、磨きと刻みを施す。37~39は加曾利BⅢ式に属する。37は楕円形状の区画が認められる。38は半截竹管状工具による沈線と押し引きを施す。39は沈線による区画内に円形の刺突が認められる。外面の一部に朱が残る。41~45は口縁部直下から胴部に羽状文が施文される土器群で、加曾利BⅡ式に属する。41~43は陸帯にヘラ状工具による刻みを付ける。43は外面を朱塗りで仕上げる。44は波状口縁をなす。46・47は加曾利BⅡ式に属する。46は無文の土器で波状口縁をなす。47は全面を朱塗りで仕上げる。48と49は口縁部文葉帯直下に巻貝による擬似縄文が施される土器で、一乗寺KⅡ式に属する。50と51は陸帯上に刻みが施される。52は口縁部に3条沈線が施され、宮滝的な様相を示すが、頸部から胴部にかけて羽状文が認められる。上ノ段古式に属すると思われる。

第4期 後期後葉：53~124

53~124は曾谷式、上ノ段式、宮滝式期に属する土器群である。

53~57は縄文が施文される土器群である。53~55は曾谷式に属する。平口縁と波状口縁がある。53・54は口縁部に縦位粘土を貼付ける。55は53と同一個体の破片である。56と57は元住吉山Ⅰ式または一乗寺KⅡ式に属すると思われる。56は把手部に擬似縄文を施す。57はススが付着する。58~70は羽状文のある土器群で、上ノ段式に属する。58・60・62は陸帯に刻みが施される。58~60は波状口縁をな

す。61は口縁部に縄文が施される。62は口縁部に半截竹管状工具による沈線を巡らす。63～69は深鉢胴部の破片である。63・64内面にススや炭化物が付着する。67は外面に朱が残る。70は波状口縁をなす。口縁部に沈線を施し、貼付隆帯に円形刺突を付ける。71～125は口縁部に2～3条の沈線が巡るのを特徴とする土器群で、宮瀧式に属する。71～77は口縁部に3条の沈線が巡り、巻貝による条痕が認められる。71は外面にススが付着する。76・77は波状口縁をなす。78は2条の沈線が巡る。巻貝による条痕を施す。79・80は波状口縁の波頂部に巻貝による旋状圧痕が見られ、新しい様相を呈する。81・82は波状口縁をなす。81は巻貝による条線文が認められる。83は波状口縁の波頂部直下に縦位の印刻を施す。84は地文に巻貝条痕が施され、口縁部に縦位の印刻を施す。85～90は胴部に巻貝条痕が認められる。87は沈線の上下に巻貝の殻頂を押す。89は口縁部に4本の弧線文を二重に描く。91～96は巻貝条痕文が地文となり、口縁部には巻貝による逆連弧文が認められる。97～109は巻貝条痕文の認められる土器群である。97・98は同一個体である。ススが付着する。胎土に金雲母を多く含む。107は口縁部が内湾する。108・109は波状口縁である。109は口縁部に沈線を施す。110～114は織維状用具による条痕文の土器群である。111・113はススが付着する。115～117は棒状工具による条痕文の土器である。115はススが付着する。117は器厚が5mmほどで非常に薄い。118はへら状痕度の認められる土器である。119～124は無文の土器群である。119は器面がでこぼこしている。123・124はススが付着する。

第5期 後期末葉：125～161

地元色の強い土器群である。

125・126は口縁部に沈線による連弧文が施される。127は沈線による逆さM字の区分けがみられる。128は沈線による区画文を施す。129～132は縦位粘土を貼付ける。129・130は同一個体で、沈線による区画文を施す。131・132は連続M字文が施される。133～141は縦位粘土の貼付と押圧文による区画が施される。133・134は沈線間に連続刺突文が認められる。135と136は4条沈線、137は5条沈線を施す。138・139は波状口縁である。2条沈線を施す。140は巻貝条痕を地文とする。142～144は隆帯上に押圧文を施し、刻みが認められる。142は深鉢胴部片で、ススが付着する。145は深鉢胴部片で、半截竹管状工具の施文が認められる。146・147は同一個体である。へら状工具による口縁部文様帯と沈線による作画が認められる。148は沈線が施される。ススが付着する。149・150は隆帯による文様が認められる。149は波状口縁をなす。150は赤褐色を呈する。151・152は口縁部に波打つ粘土帯を貼付ける。151は2条の沈線を巡らす。153は口縁部に3条の平行沈線を巡らし、羽状文が認められる。154～159は波状口縁の土器群である。口唇部付近に沈線を施文する。155は屈曲する。158は波頂部に縦位沈線、巻貝の殻頂による刺突が認められる。159は刻みを付ける。160は注口のような筒状口をもつ。161は顔面突起付土器の破片である。顔面が外面となる。鼻と耳がはっきり表現される。三叉文や入組文がみられることから大洞B式の古い頃のものと考えられる。

第6期 晩期初頭：162～207

二枚貝による条痕文や無文が特徴となる土器群である。

162～170は波状口縁をもつ土器群である。口縁部文様帯の隆帯上に刻みを施す。162～164は観塚式に属する。163は巻貝で刺突する。全体にススが付着する。166はへら状工具で刺突する。169は色調が黒色でよく磨かれており、他のものとは趣が異なる。内面にも施文する。170は波頂部下に横位沈線が5本巡り、谷頭部に瘤が付く。171は半截竹管状用具により3条の連続刺突文を施す。172は口縁部に粘土貼付による隆帯文を施す。173・174は横位隆帯上に押圧文が付く。173には平行して連続する刺突

文が施される。175・176は屈曲して立ち上がる口縁をもつ。波状口縁をなし、波頂部と谷頭部に縦位の櫛状沈線が認められる。沈線は175が9本、176が7本と異なるため、別個体とした。177～193は二枚貝による条痕文土器である。177・178・181・186～190・193はススが付着する。183は器面がほとんど剥落する。189は口唇部の一部に刻みを施す。194～202は無文土器である。197・201は器面が剥落している。200はススが付着する。203・204は波状口縁で、波頂部に押圧が認められる。203はススが付着する。205は無文の波状口縁土器である。206・207は鉢形土器で、二枚貝と思われる条痕文が認められる。207は把手に円筒の刺突を施す。

第7期 晩期前葉：208～301

208～263は大洞B～BC式段階、天王山式期に属する土器群である。

208～218は大洞B式に属する。縄文、入組三叉文、沈線が施される。212～216は鉢形土器である。212は口縁部に2条の平行沈線を巡らす。213・214は同一個体である。朱が残る。216は小型の鉢の破片である。218は鉢形土器である。口縁部に小突起が付く。2条の沈線が巡り、直下は外・内面とも磨かれる。219～225は縄文が施文される。219・220は羊歯状文を施す。221・222は入組文を施す。223～225は変形工字文が施される。225は朱が残る。226は変形工字文が認められる。朱が残る。直下は磨かれる。227・228は縄文が施文される。大洞式的な土器である。227は陸帯上に棒状工具による連続した刻みを付ける。228は棒状工具による刻みと沈線を施す。229は3条沈線により、入組三叉文を表出する。黒色で磨き上げている。230・231は同一個体で、胴部中央で内側に屈曲する鉢形土器である。沈線が一周する。ススが付着する。232は二枚貝による条痕を施し、陸帯上にヘラ状工具による四角い連続した刺突が認められる。233～237は天王山式に属する。233は口縁部に幅広で浅い2条の沈線を巡らし、縦位貼付粘土上に押圧文を付ける。胴部に羽状文を施す。234・235は口縁部に平行沈線による横羽状文と胴部に羽状文を施す。236は沈線による文様内に円形刺突を施す。その上から瘤を付ける。237は沈線による入組文を施す。238・239は陸帯上に刻みを施す。蛭塚式の要素である。240～242は二枚貝による条痕を地文とする。240は貼付陸帯上に押圧文を施す。波状口縁で波頂部に押圧がみられる。241は口唇部に平坦面をつくり、刻みを付ける。口縁部には瘤を付ける。242は口縁部貼付文で区画している。243～246は小突起付で、条痕のあとにナデによる地文とする。245は口唇部の一部に連続する刻みを施す。246は口縁部の一部に小突起が付く。247は小突起が付いた深鉢で、口縁部に刻みのある陸帯が巡る。248は2条の沈線と口縁部に刻みのある陸帯を巡らす。249は口縁部に沿って沈線と低い陸帯が巡る。250～263は口縁部に二枚貝のような用具による波状文を施す。250は波状口縁頂部に粘土を貼付け、刻みを施す。頸部にも波状文が認められる。二枚貝による条痕を地文とする。251・256・262・263はススが付着する。251はヘラ状工具により削って無文とする。252は頸部にも波状文を施す。254は巻貝による条痕を地文とする。内面に炭化物が付着する。255・259は二枚貝のような条痕のあとにナデ消している。257～259は波状口縁をなす。257は繊維状用具による条痕を地文とする。260は二枚貝による平行沈線の間に波状文を施す。264～280は二枚貝条痕を地文とする土器である。264～269は平縁である。264・265・267・268はススが付着する。265は外・内面に加熱による変色が見られる。内面には炭化物が付着する。270・271は胴部破片である。271はススが付着する。272～276は平縁で口唇部に刻みを一部入れる。272・275はススが付着する。277は手づねの小型の鉢である。波状口縁状をなす。口唇部に刻みが認められる。278～280は二枚貝による条痕のあとにナデ消しがみられる土器で、279は山形波状口縁土器である。280は波状口縁である。281～293は無文地文の土器群である。281・282は口縁部を屈曲させる形である。282・287はススが付着する。282は口縁部の一部に突起が付く。

294～296は磨きの施された無文土器群である。296は山形波状口縁土器である。297は口縁部に浅い沈線を施す。298～302は鉢形土器である。298は半載竹管状工具による沈線を施す。299は2個の小突起が付き、印刻が施される。300は口唇部に縄文を施す。口縁部にススが付着する。301は口唇部に隆帯による入組三叉文を施す。302は口唇部に刻みのある瘤が2個付く。

第8期 晩期後葉：303～307

303～307は氷Ⅰ式、五貫森式期に属する土器群である。

303～305は氷Ⅰ式に属する。303・304は工字文を表出する。303は黒色を呈する。305は口縁貝面に2条、内面に1条の沈線を施す。よく磨かれている。306は五貫森式に属する。307は壺形土器で、底部の形が弥生土器的な印象を与える。

底部：308～326

底部19個を一括して報告する。308は中期に属する。無文で赤褐色の呈し、胎土は厚い。底面に木葉痕がみられる。309～311は後期に属する。309・310は巻貝による条痕文がみられる。310は内面の一部に、311は内面の全面に炭化物が付着する。312～318は晩期に属する。312・313は二枚貝による条痕文がみられる。314は無文である。315は条痕文のあとナデ消される。316は器面が荒れて不明である。底面に網代痕が見られる。317は一部が磨かれる。318はきれいに磨きが施される。319と320は繊維質用具による条痕が施される。底面に木葉痕がみられる。321～326は底面に網代痕がみられる。

補修孔のある土器：327～344

土器を整理していく中で補修孔のある土器が18個確認できた。一括して報告する。327～329は巻貝による条痕文が施されていたため、後期とした。327・328は口唇部が平坦である。327はススが付着する。329は後期末と思われる。裏面が磨かれている。330～344は晩期に属する。330は蛭塚式に属する。沈線による施文と隆帯上に刻みが認められる。331と333～335は二枚貝による条痕のあとナデ消している。331は口唇部に指頭圧痕が認められる。335は口唇部にヘラ状工具による刻みを施す。332と336は二枚貝による条痕を施す。336は胴部破片で、補修孔が2個ある。337は黒色土器で磨かれている。口縁部を隆帯にする。338・339は二枚貝による条痕のあとに磨かれている。338は口唇部を沈線で刻む。339は胴部の破片である。340は条痕文のあと、削りで仕上げた黒色土器である。彎曲していることから胴部片と思われる。341は繊維質用具による条痕を施す。342は不明である。343・344は鉢形土器の口縁部破片で、二枚貝による条痕のあとナデ消している。

336・339・340のように胴部に孔があけられた例や336のように孔が2つ開けられた例が見受けられた。これらは単純に補修のためにあけられた孔かどうかを検証する必要がある。

注口土器：345～351

注口土器の注口部を一括した。345～347は堀之内式に属する。345・346は無文でナデ、347は磨きにより仕上げている。348～350は加曾利B式に属する。348・349は磨き、350はナデにより仕上げている。351は無文でナデにより仕上げている。亀ヶ岡式土器を真似たもので、細くて短い。

土製耳飾り：352～354

土製耳飾りは3点出土した。352はB-5区から出土した。最大径4.7cm、最小径4.6cm、厚さ1.6cm

を測る。有文で中央部が凹む。353はA-2区から出土した。正円形で、直径4.4cm、厚さ2.1cmを測る。無文で中央部が凹む。354はA・B-3区から出土した。正円形で、直径2.2cm、厚さ1.5cmを測る。無文で中央部が凹む。

2) 石器 (第36~45図: 第3表図版31~36)

今回の調査では354点の石器が出土した。いずれも縄文時代のものである。このうち石鏃29点、石匙2点、石錐1点、打製石斧52点、磨製石斧21点、削器11点、石棒4点、器種不明2点の合計122点を図示した。

石鏃は29点のうち、未製品と思われるものが17点ある。凹基鏃は14点、有茎鏃は9点、その他6点である。石材は頁岩が23点で最も多く、ついで珪岩が3点、黒曜石、鉄石英、サヌカイトが各1点である。16が長野県諏訪星ヶ台産と推定される黒曜石製、28が鉄石英製、29が二上山産と推定されるサヌカイト製である。1~4はSB01、5・6はSD02、7はSD04から出土した。それ以外は遺構に伴って出土していない。

石匙は2点とも横形である。石材は30は凝灰岩、31は頁岩である。30はSD04から出土した。

石錐は頁石製である。

打製石斧は52点である。分銅形が1点、ばち形が22点、短冊形は29点である。石材は安山岩が38点で最も多く、ついで砂岩・硬砂岩が9点、凝灰岩が3点、ホルンフェルスと片岩が各1点である。63は磨製石斧を、83は石棒の断片を転用している。33はSP12、75はSP106から出土した。ともにSH01を構成する柱穴である。それ以外は遺構に伴って出土していない。

磨製石斧は21点である。乳棒形11点、定角形6点、その他4点である。その他は部分磨製石斧と蛤刃が2点ずつである。従って、敲打整形が多数を占める。その中で、99は定角形ではあるが、敲打整形の技術で加工している。石材は凝灰岩が18点で最も多く、ついで砂岩2点、頁岩が1点である。95はSH01を構成する柱穴であるSP65から、96は第2面のSX01から出土した。それ以外は遺構に伴って出土していない。

削器は11点である。大形が2点ある。石材は頁岩が5点、凝灰岩2点、珪岩、鉄石英、安山岩、チャートが各1点と様々である。85はSB01から出土した。それ以外は遺構に伴って出土していない。

石棒は4点である。完形1点、頭部断片2点、頭部と基部を欠損したものの1点である。石材はいずれも緑泥片岩である。118は第6図に出土状態を示した。119は第3面のSB01から出土した。破壊されているのは、祭祀行為に伴う結果であると推定される。

器種不明な石器は2点ある。87は打製石斧の未製品と推定される破片であるため、第4図に示した。石材は頁岩である。122は独鈷石の刃部とみられる破片である。石材は砂岩である。

栗下遺跡の石器所見

株式会社アルカ 角張淳一

① 石器組成と傾向について

打製石斧は、分銅形、ばち形、短冊形の3種類が揃っている。土づれ痕と推定される刃部使用痕は、ばち形、短冊形に顕著である。通常、東日本の分銅形打製石斧は称名寺式から堀之内式に顕著で(栃木県八剣遺跡)、大洞B、BC並行のそれは大型化する傾向にある。栗下遺跡の分銅形は、前者の時期に伴うものと推定される。短冊形、ばち形は縄文時代中期から顕著になるが、特に中部地方では中期後半から両者の打製石斧が一つの遺跡内で多量に出土する事例(東京都多摩ニュータウン№72遺跡、長野県千田遺跡などで実見)があり、それらについては、土づれ痕が見られることが多い。この点も栗下遺跡の事例と矛盾しない。打製石斧は加曾利B式以後に遺跡内で少量になる傾向があり、なかには全く出土しない遺跡もある(長野県石神遺跡など)。栗下遺跡の打製石斧の傾向からは、おそらく縄文時代中期後半から堀之内式の時期に伴うと思われる。

磨製石斧は敲打整形が多数を占め、これらは中期から後期前半までに多い磨製石斧である。堀之内Ⅱ式～加曾利B式になると、定角式磨製石斧が主体を占める。定角式磨製石斧は栗下遺跡の主要器種ではないので、加曾利B式以後の磨製石斧は僅少であると思われる。興味深いのは、99の磨製石斧で、定角式磨製石斧の形態を維持しながら敲打整形の技術で加工されている。これは定角式磨製石斧と敲打整形磨製石斧の折衷石器であるので、時期的にも堀之内Ⅱ式が妥当であろう。敲打整形しない研磨整形の磨製石斧は5点出土している(104, 105, 106, 107, 108)。これらは加曾利B式以後、晩期に至るまでの磨製石斧として妥当であろう(長野県石神遺跡、岐阜県最上遺跡など)。

石鏃は量的に少なく、未製品がほとんどである。東海地方後期中葉以降の五角形石鏃や、有茎鏃の未製品もみられ、これらは後期中葉以降から晩期の特徴を示す。諏訪星ヶ台産と推定される黒曜石、二上山産と推定されるサヌカイトもみられ、石鏃の傾向は後期中葉以降、晩期にかけて、各地のネットワークについて重要な問題を提起できる。

石棒・石剣類は加曾利B式以後の石器だろう。破壊されているのは、祭祀行為に伴う結果と推定される。石冠? (122) と推定される石器の出土例は稀少である。

削器類は、加曾利B式以降の端正な押圧剥離を特徴としている。珪質の石材を用いて、幅広く連続する押圧剥離で刃部を形成している。

② 時期と遺跡の性格について

先年度の報告書の土器型式をみながら、栗下遺跡の石器の帰属時期について再考してみたい。先年度の栗下遺跡の報告をみると、第20図～第22図の土器片は、中期末～後期初頭・前葉(北白川上層Ⅰ、中津・称名寺式・堀之内Ⅰ)が主体である。第22図の図20が堀之内Ⅱ式に該当。第23図は一乗寺K・元住吉山・加曾利B式で、後期中葉の土器群である。第24図が宮滝式(後期末)、第25図の一部に天王山式(晩期前葉)である。

以上からみると、量的に土器片が多いのが中期末～後期前葉で、これらの土器片は小さいのも特徴である。次に加曾利B式並行、そして若干の晩期前葉の土器群となっている。晩期前葉の土器片は大きく、残りもよい。他の遺跡との比較による石器の時期も、これらの土器群とよく調和しており、打製石斧・磨製石斧・石鏃などはほぼ中期末から後期前葉の石器と考えられよう。また、有茎鏃・石棒

の一部・削器の一部などは加曾利B式～後期末（宮滝式）に、石棒・削器の一部が晩期前葉に伴う石器と推定される。石器の量からみると、中期末から後期前葉の石器が多く、時期が下るにつれて次第に量が少なくなると推測される。

おそらく、中期末から後期前葉にかけて、かなり大規模な集落遺跡が形成され、その後に、その集落を破壊するように加曾利B期から後期末にかけての遺跡が形成され、さらにそれを破壊して小規模な晩期の遺跡が形成されたと推定される。

参考文献

- 『石神遺跡』 小諸市教育委員会 1994
- 『八剣遺跡』 栃木県文化振興事業団・栃木県教育委員会 1997
- 『八坂別所遺跡・頭地遺跡・栗下遺跡・メノト遺跡』 掛川市教育委員会 2006
- 『最中遺跡』 木曾広域連合・上松町教育委員会 2007

3. まとめにかえて

今回の調査では、3面の遺構面を検出した。なかでも、第2面と第3面およびその間に堆積していた遺物包含層の年代である縄文時代の様相について、まとめてみたい。

まず、検出した遺構の時期を検討してみたい。第2面では性格不明遺構3を検出した。出土した土器から、SX01は晩期後葉、SX02は後葉末葉、SX03は晩期初頭に位置づけられる。第3面では堅穴住居跡3、掘立柱建物跡1、穴218を検出した。SB01からは後期中葉から晩期前葉にかけて、SB02からは後期末葉の土器が出土した。SB03から出土した遺物はないので、時期は不明である。掘立柱建物跡は構成する柱穴から後葉中葉の土器が出土した。

これを整理すると、いちばん古い遺構は後期中葉のSH01となる。SB01からも後期中葉の土器片が出土しているが、数的には晩期前葉のものが多いため、遺構の帰属時期も晩期前葉と思われる。次に古いのが後期末葉で、第2面のSX02と第3面のSB02である。次に晩期初頭の第2面のSX03となる。次に晩期前葉のSB01となる。最も新しいのは晩期後葉のSX01となる。

このように今回の調査で検出した各遺構は、SX02とSB02を除いて時期がばらばらである。また、同じ後期末葉のSX02とSB02でも、出土した土器は地元色の強い土器であるため、縄文土器の型式にあてはめることが難しい。さらに、SX02とSB02の間には約1mの遺物包含層が堆積していた。したがって、同時に存在していた遺構であるとは言えない。

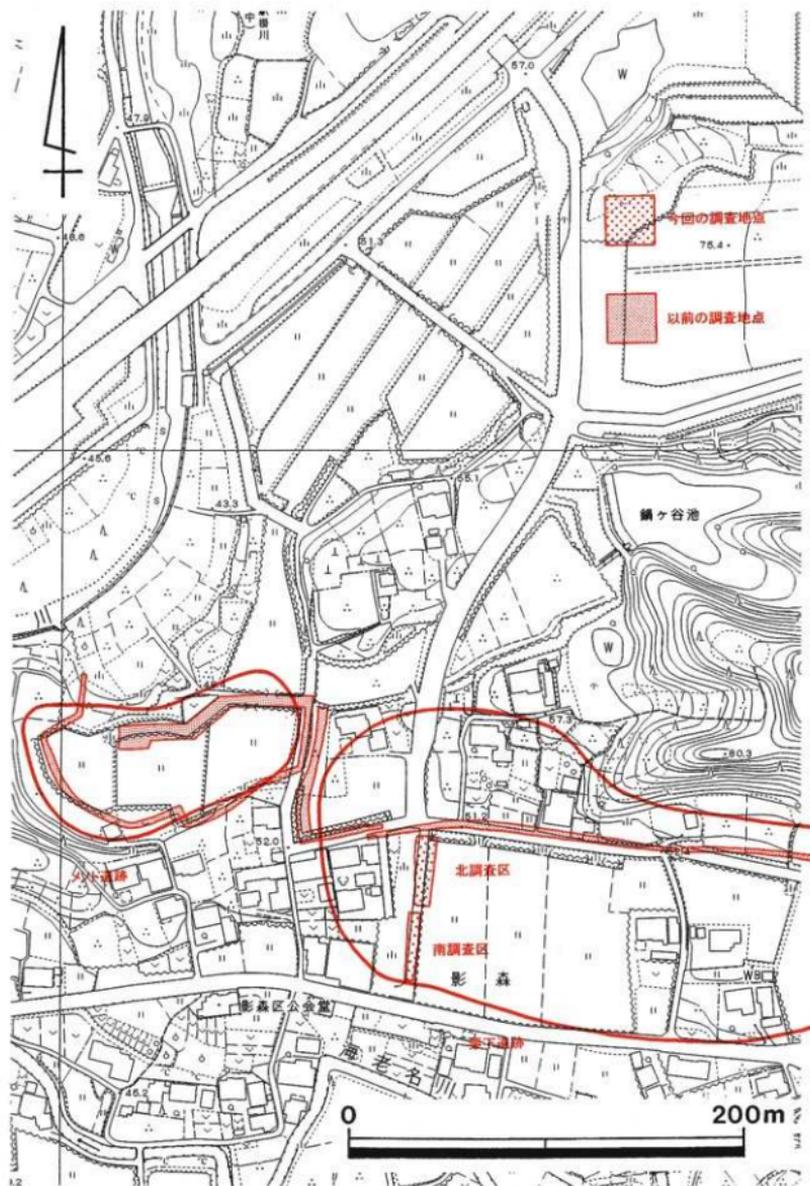
図示した354点の縄文土器等のうち、時期がわかるものは350点であった。時期別にみていくと、中期後葉が2点、中期が1点、後期前葉が5点、後期前葉～中葉が2点、後期中葉が29点、後期後葉が72点、後期末葉が40点、後葉が6点、後期末葉～晩期初頭が5点、晩期初頭が49点、晩期前葉が102点、晩期後葉が7点、晩葉が30点である。これらのうち、遺構に伴うものは36点と全体の約1割しかない。大多数を占める遺構外の土器等は、グリッドと層位によって出土地点を押さえてある。層位の検討は十分でなかったが、グリッドごとにみていくと、中期後葉の土器は調査区の北寄りのA-2・区から、晩期後葉の土器はA-6区以南に集中していた。これらは全体の出土点数の割合からいえば、少ない方の時期に属する土器群だが、時期による居住域の移動が窺える。

これらのことから、今回の調査地点では、縄文時代晩期中葉を除く、後期中葉から晩期後葉までの間に生活が営まれていたことが判明した。繁栄期を迎えたのは、最も出土量の多い後期後葉から晩期前葉といえよう。

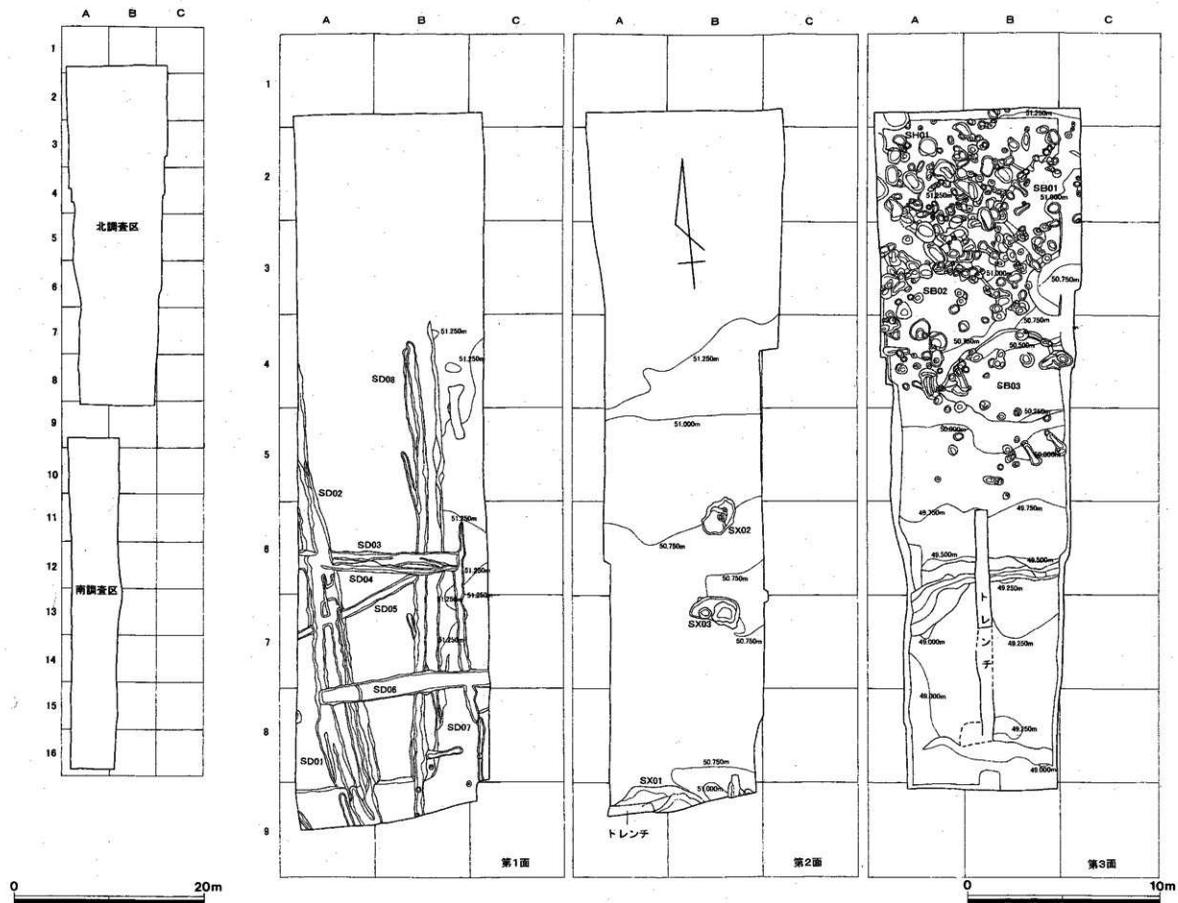
次に、栗下遺跡と隣接するメノト遺跡との関連について触れたいと思う。

農地整備事業の調査で出土した縄文土器の時期をみると、中期末から晩期までのものがある。栗下遺跡では建物跡の柱穴と思われる小穴や住居跡と思われる堅穴状遺構を検出していることから居住域と推測していた。今回の調査では、農地整備事業の調査と同時期の土器が出土し、石囲い炉を伴ったSB01と建物跡と思われる柱穴の並びであるSH01を検出した。これらのことから、栗下遺跡は縄文時代中期末から晩期にかけての居住域であったことがさらに明確になったと言える。

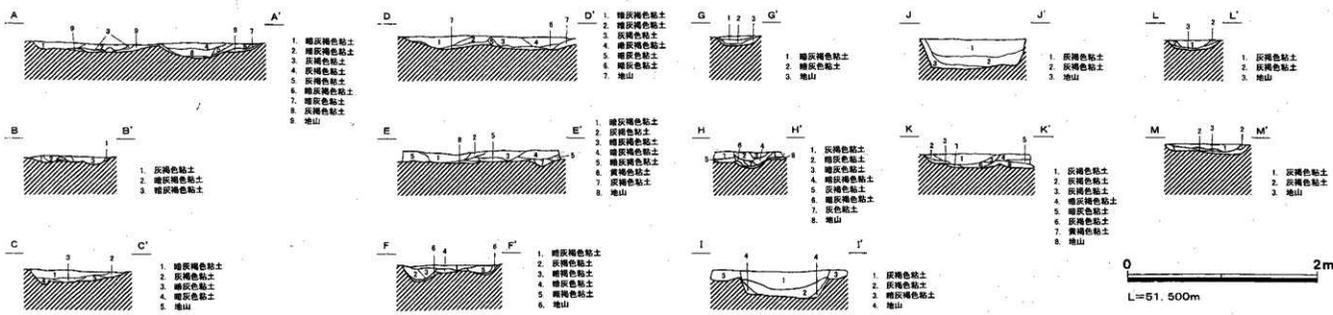
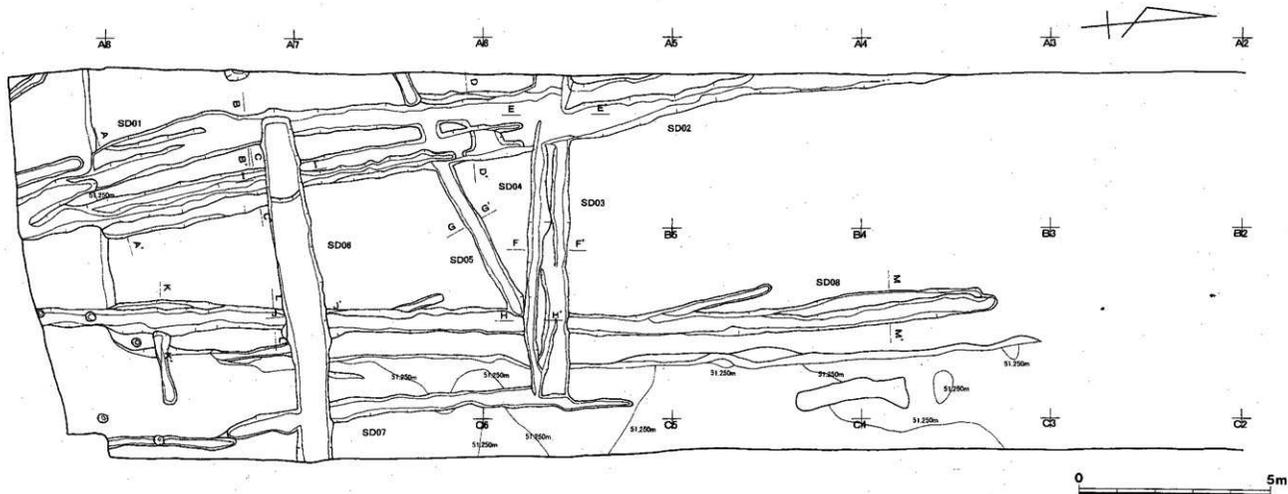
メノト遺跡ではドングリ等の貯蔵穴を20基検出している。今回の栗下遺跡の調査では、凹石や磨石といった堅果類の粉食加工工具は出土しているが、貯蔵穴等は検出していない。したがって、堅果類の加工場であるいわゆる水場遺構は、メノト遺跡内に構築されたと考えられる。このように、居住域と作業域の位置関係を改めて確認できた。同時期の集落内の空間的な使い分けが明らかになったことは意義深い。



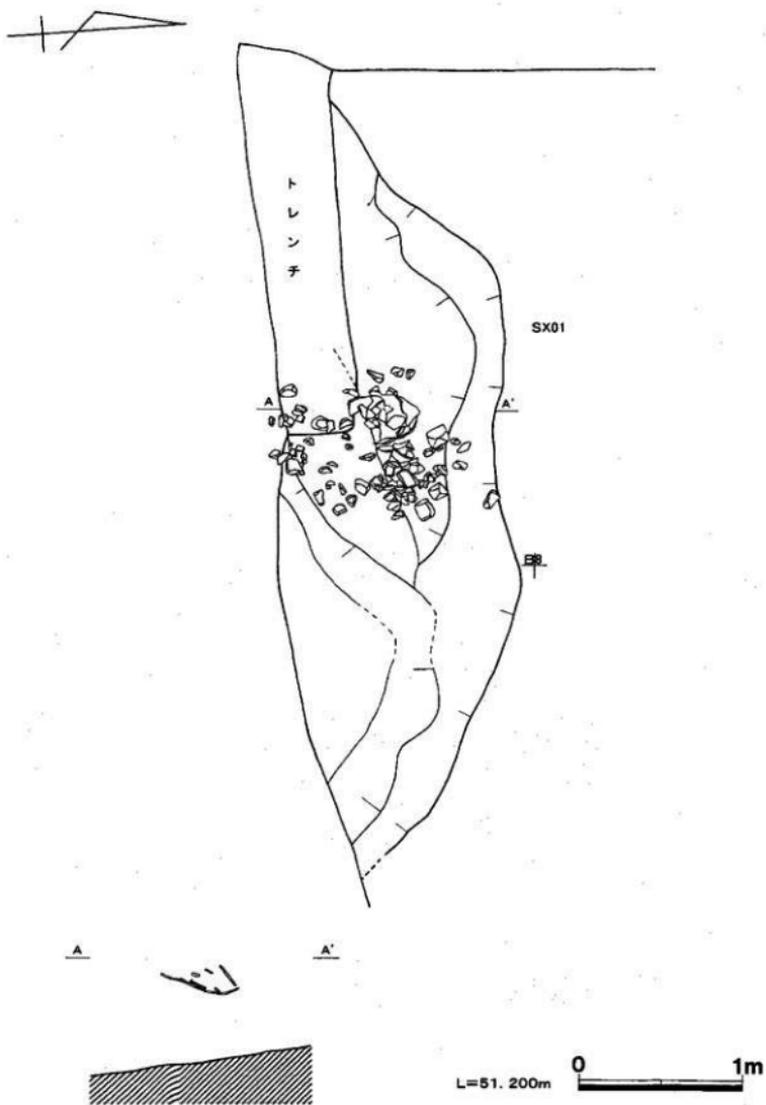
第1図 遺跡周辺地形図 調査区位置図



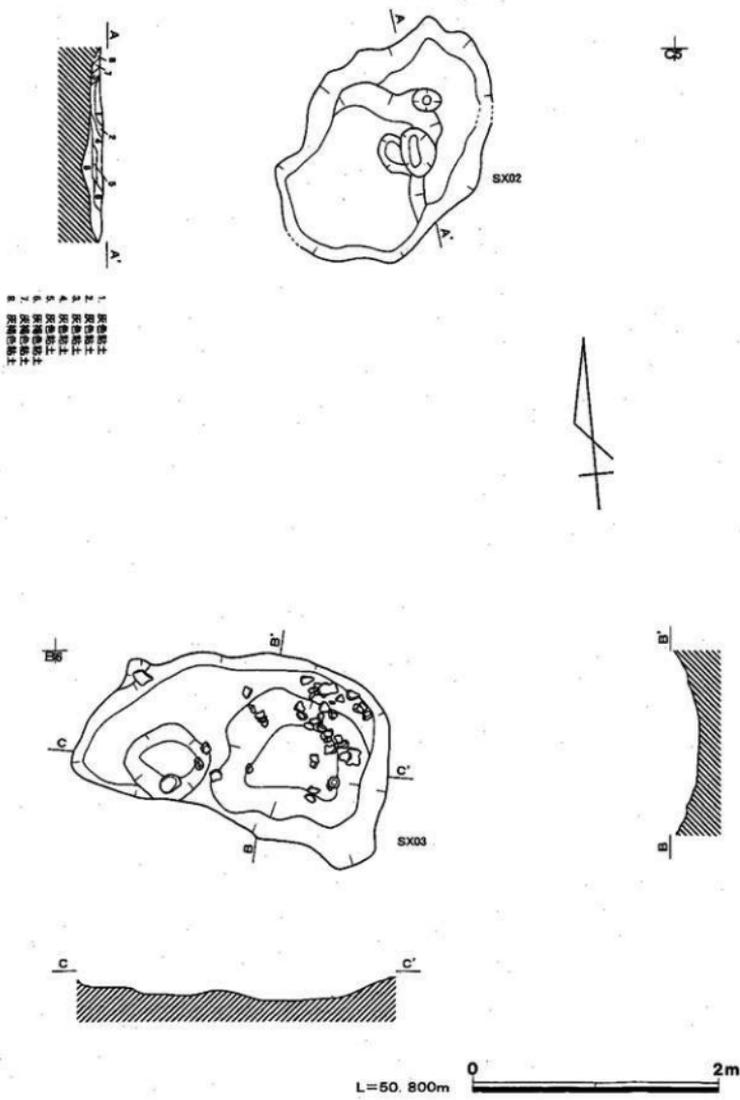
第2図 調査グリッド図・遺構全体図



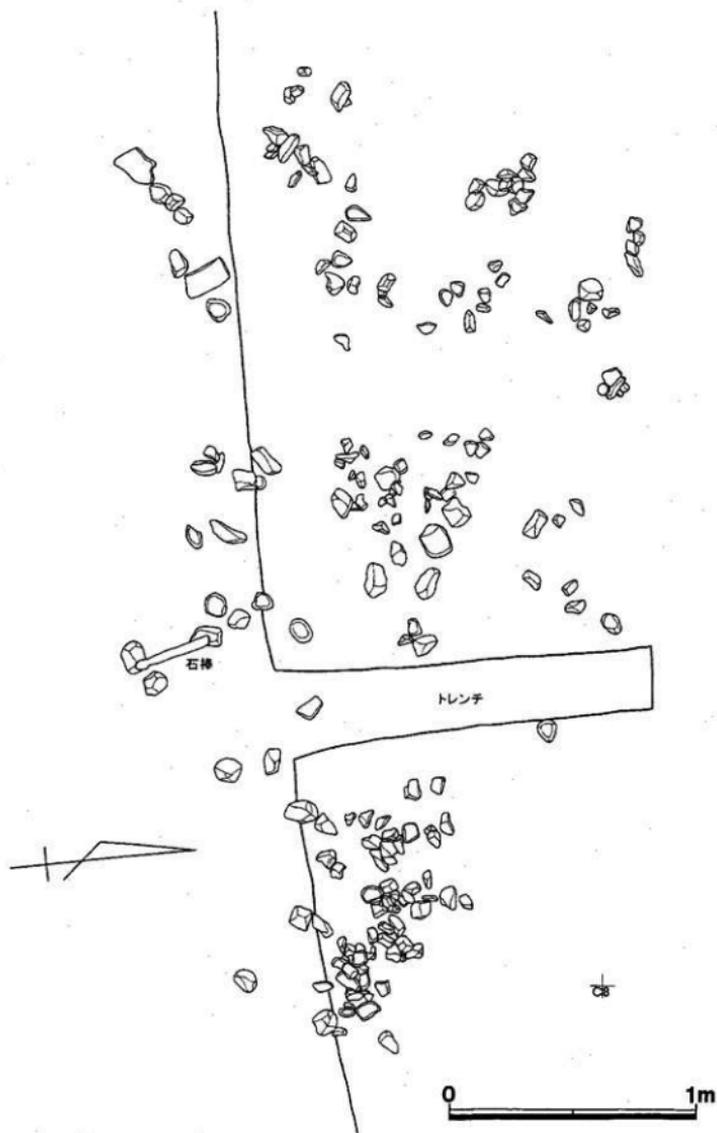
第3图 第1面 SD01~08实测图



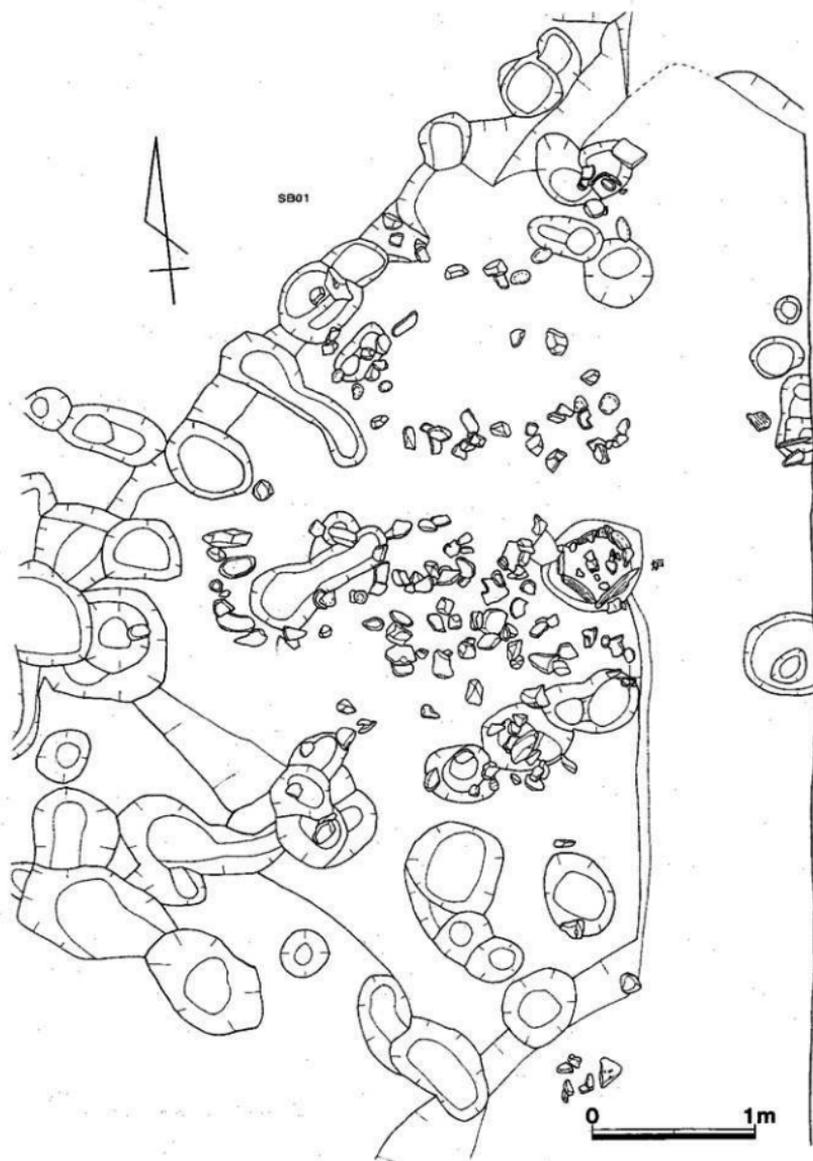
第4図 第2面 SX01実測図



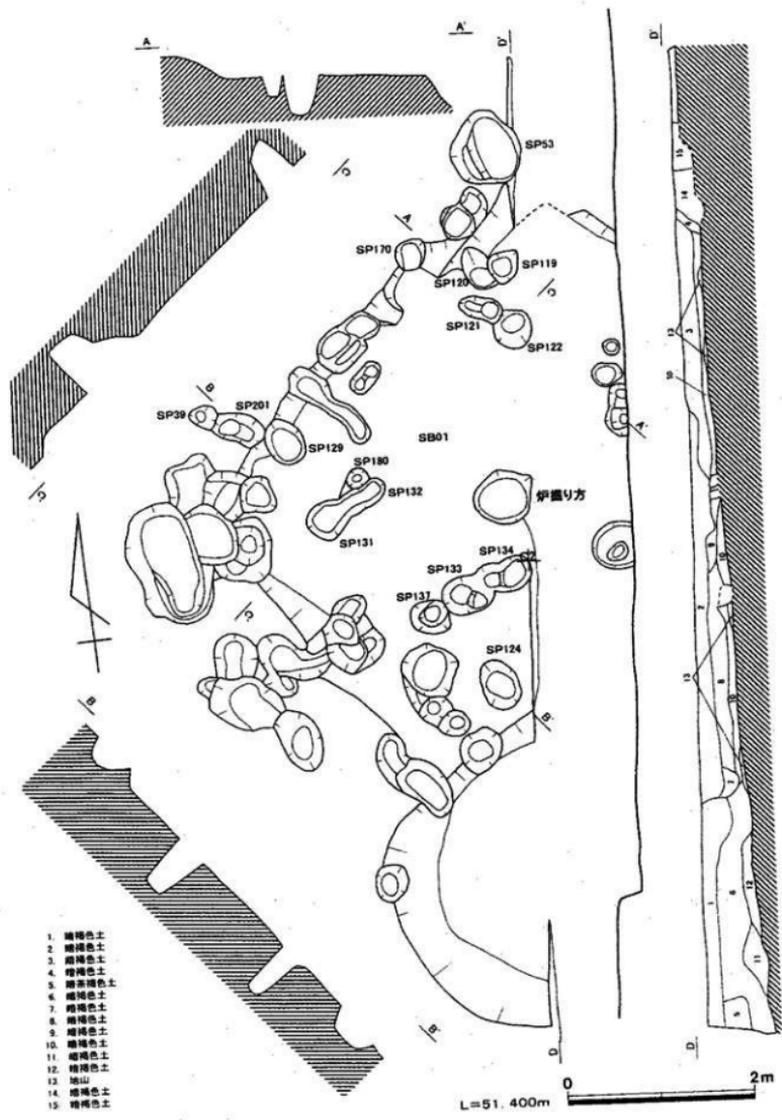
第5图 第2面 SX02·03实测图



第6図 包含層 石棒出土状況実測図

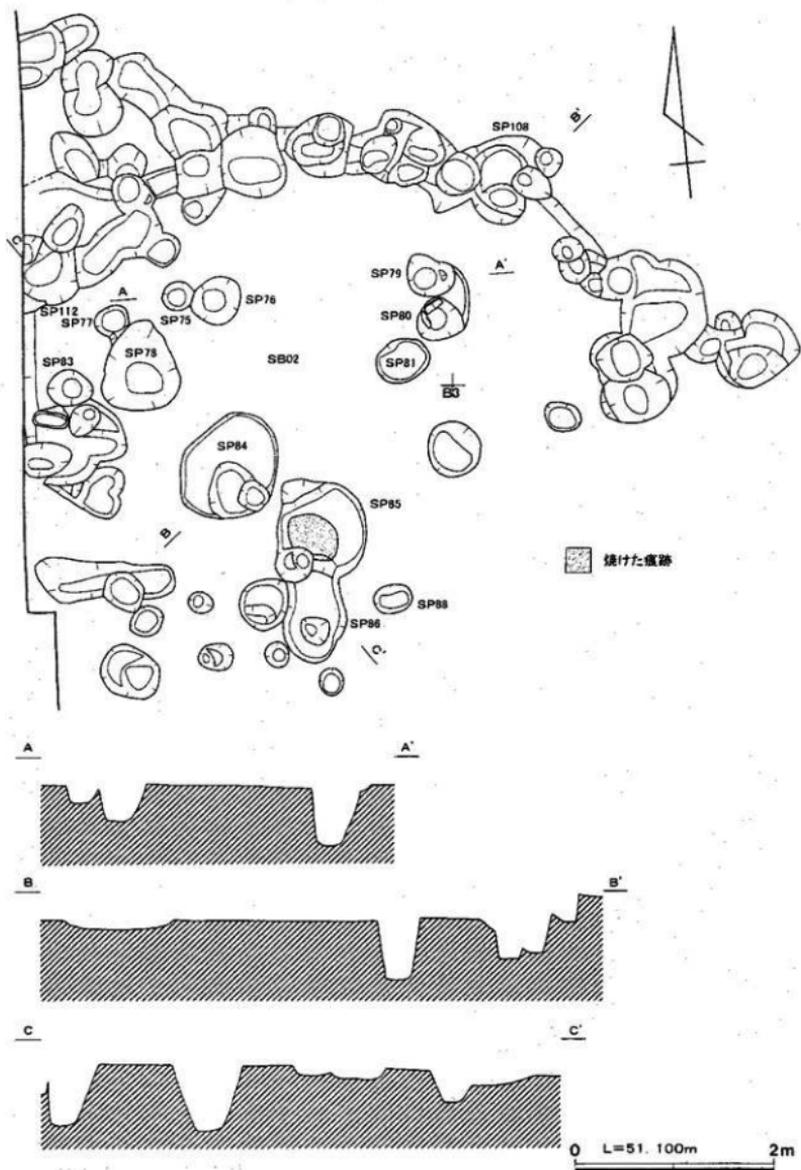


第7圖 第3面 SB01遺物出土状況実測図

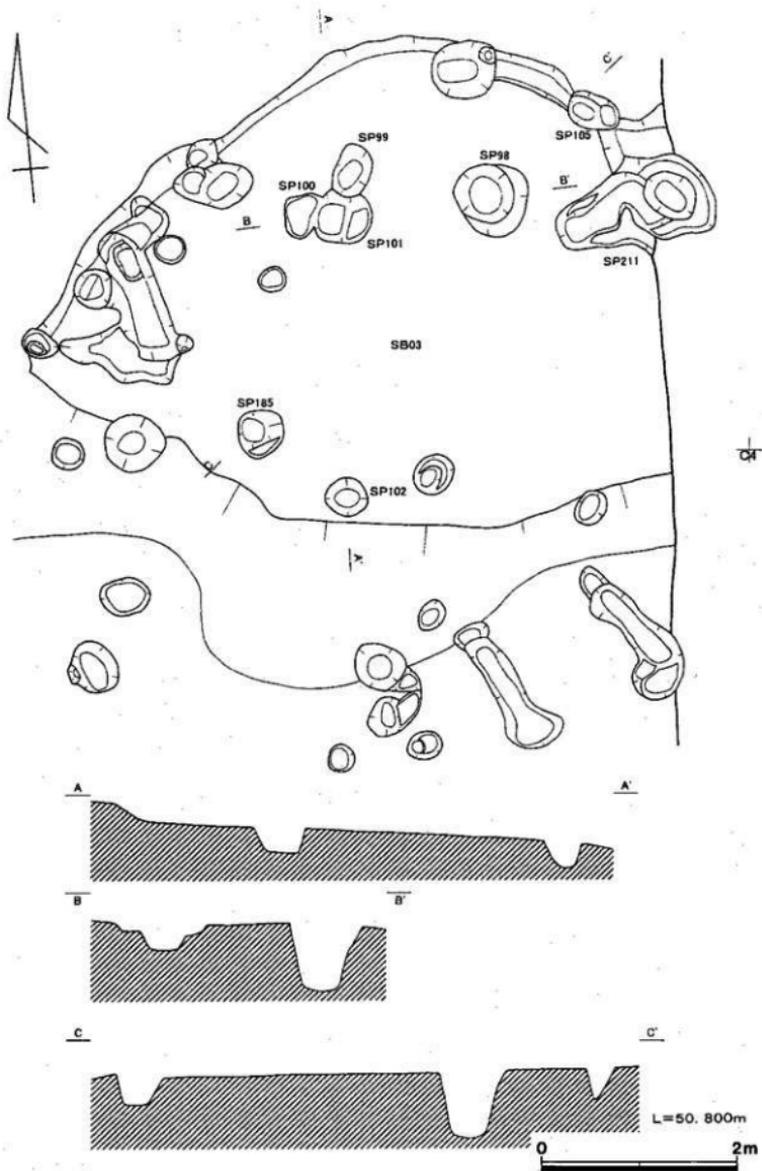


- 1. 暗褐色土
- 2. 暗褐色土
- 3. 暗褐色土
- 4. 暗褐色土
- 5. 暗茶褐色土
- 6. 暗褐色土
- 7. 暗褐色土
- 8. 暗褐色土
- 9. 暗褐色土
- 10. 暗褐色土
- 11. 暗褐色土
- 12. 暗褐色土
- 13. 地山
- 14. 暗褐色土
- 15. 暗褐色土

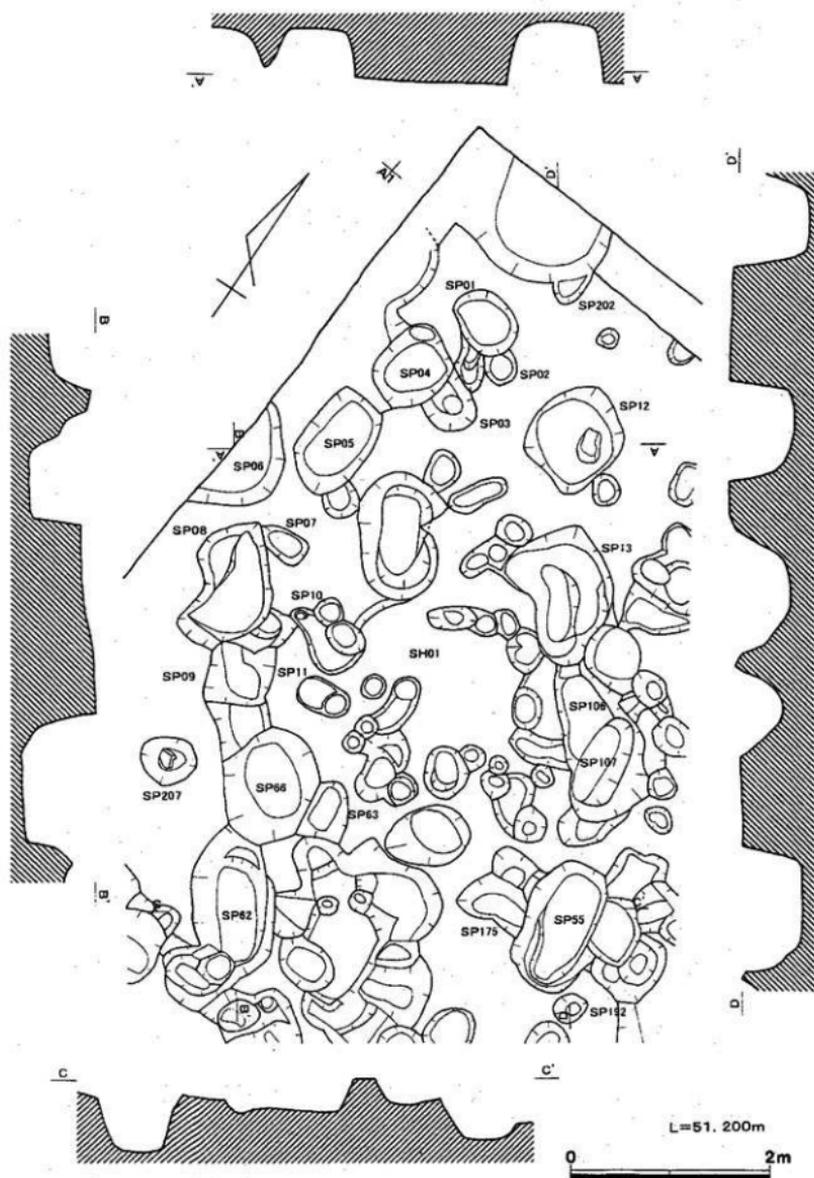
第8図 第3面 SB01発掘実測図



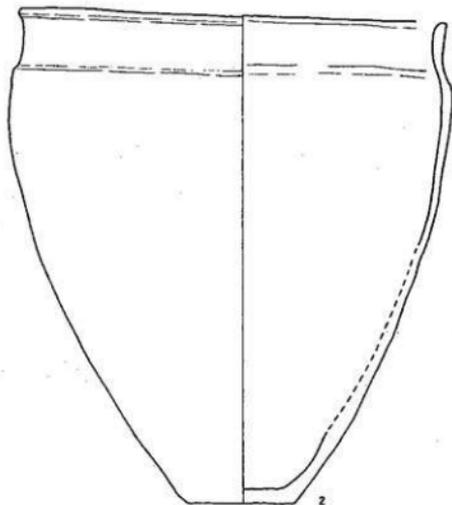
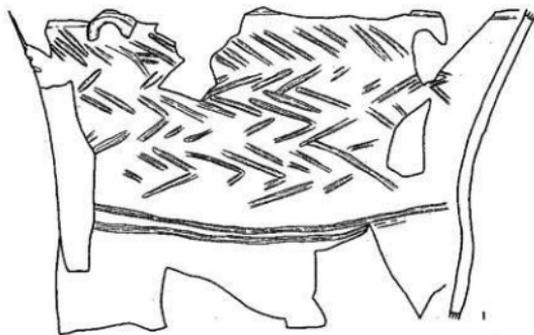
第9図 第3面 SB02実測図



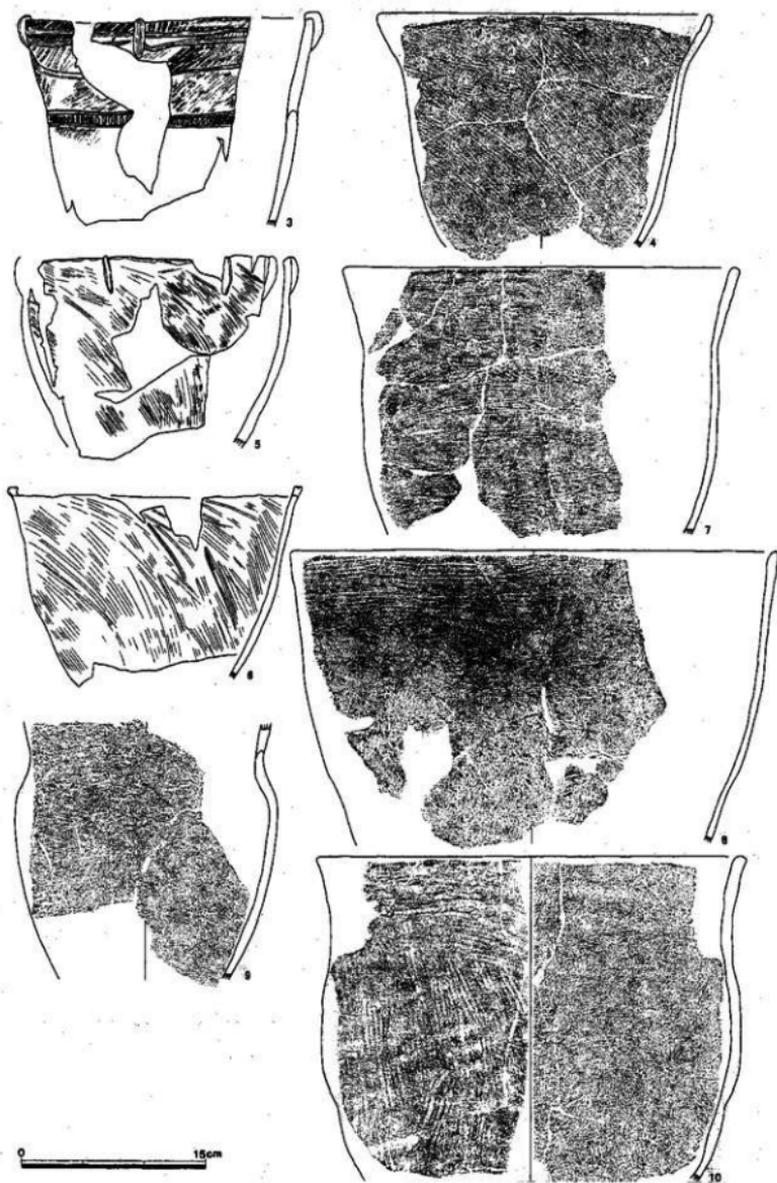
第10图 第3面 SB03实测图



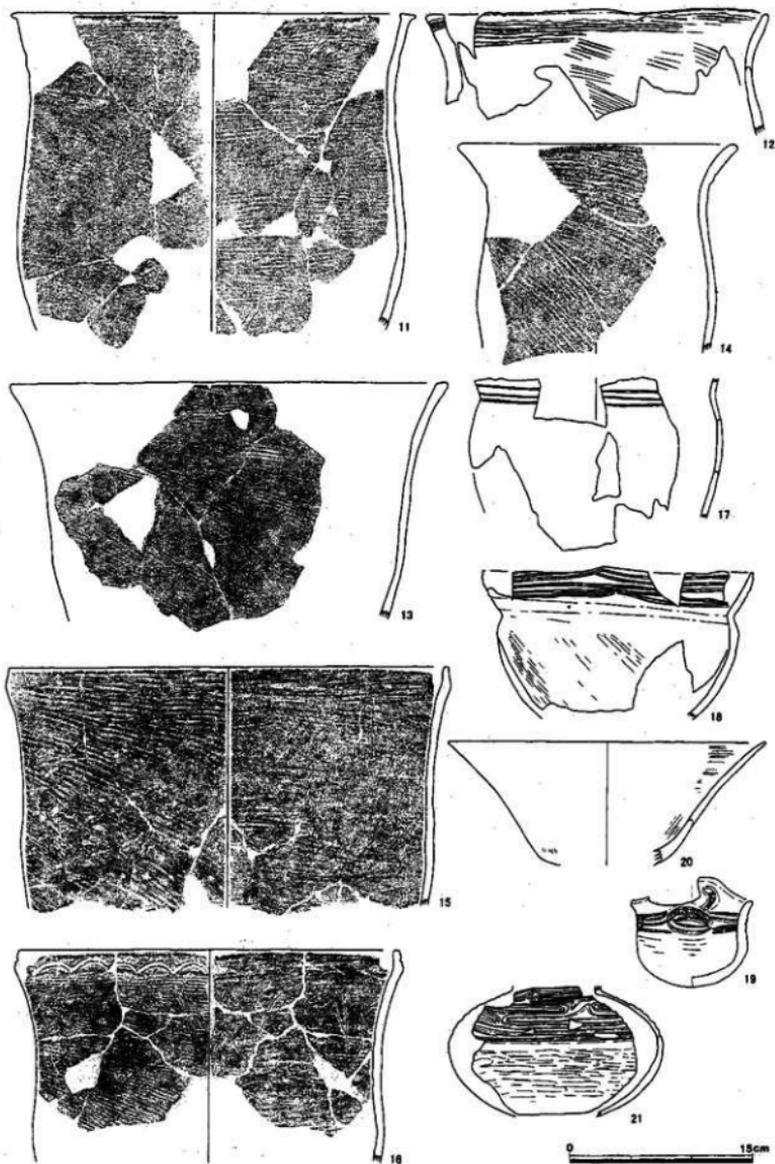
第11图 第3面 SH01实测图



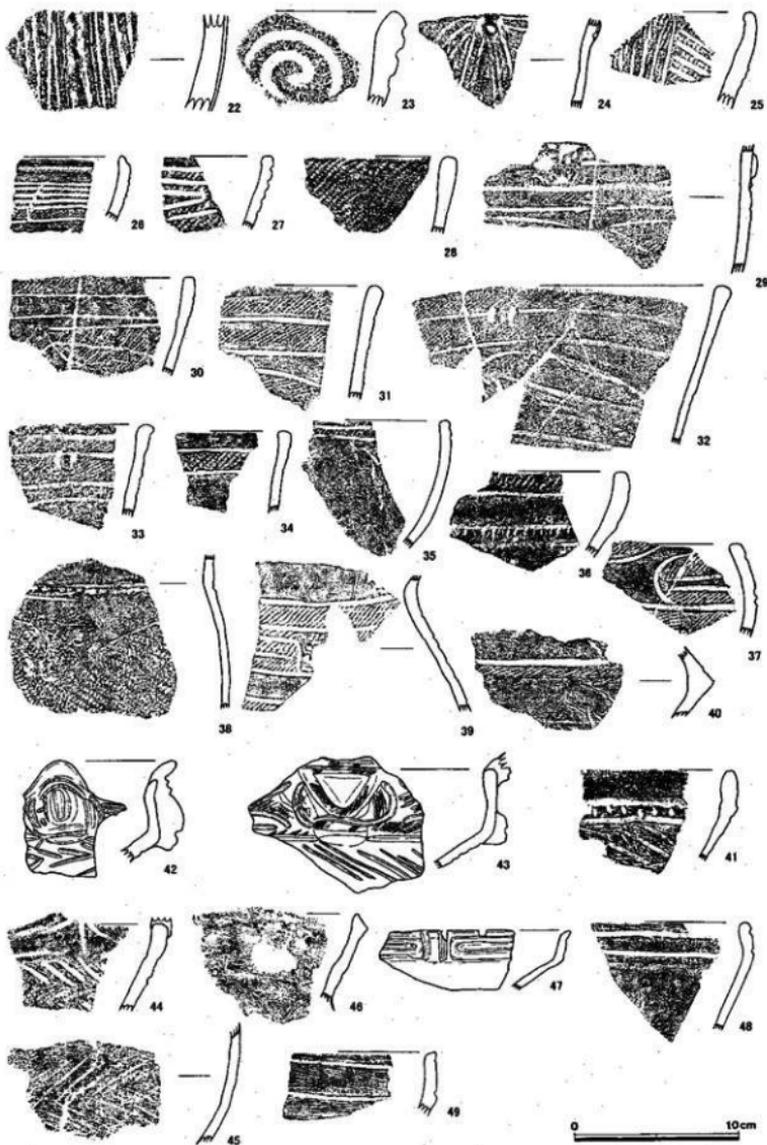
第12図 出土遺物実測図(1)



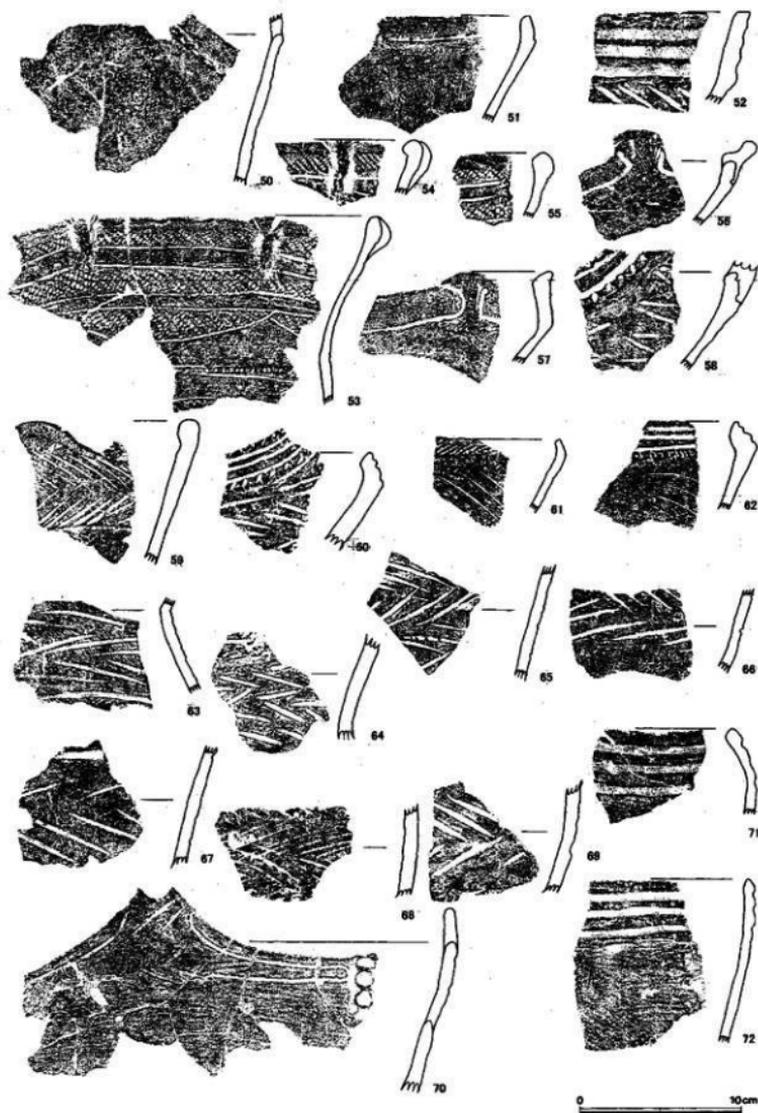
第13圖 出土遺物実測図(2)



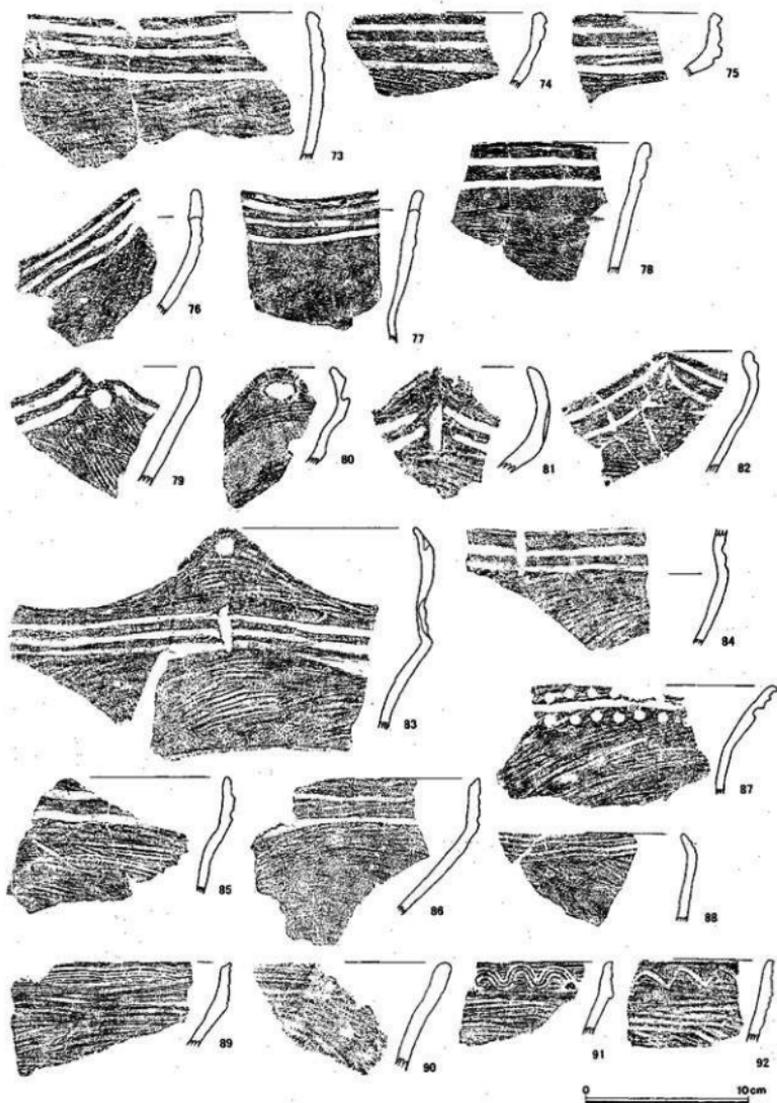
第14图 出土遺物実測図(3)



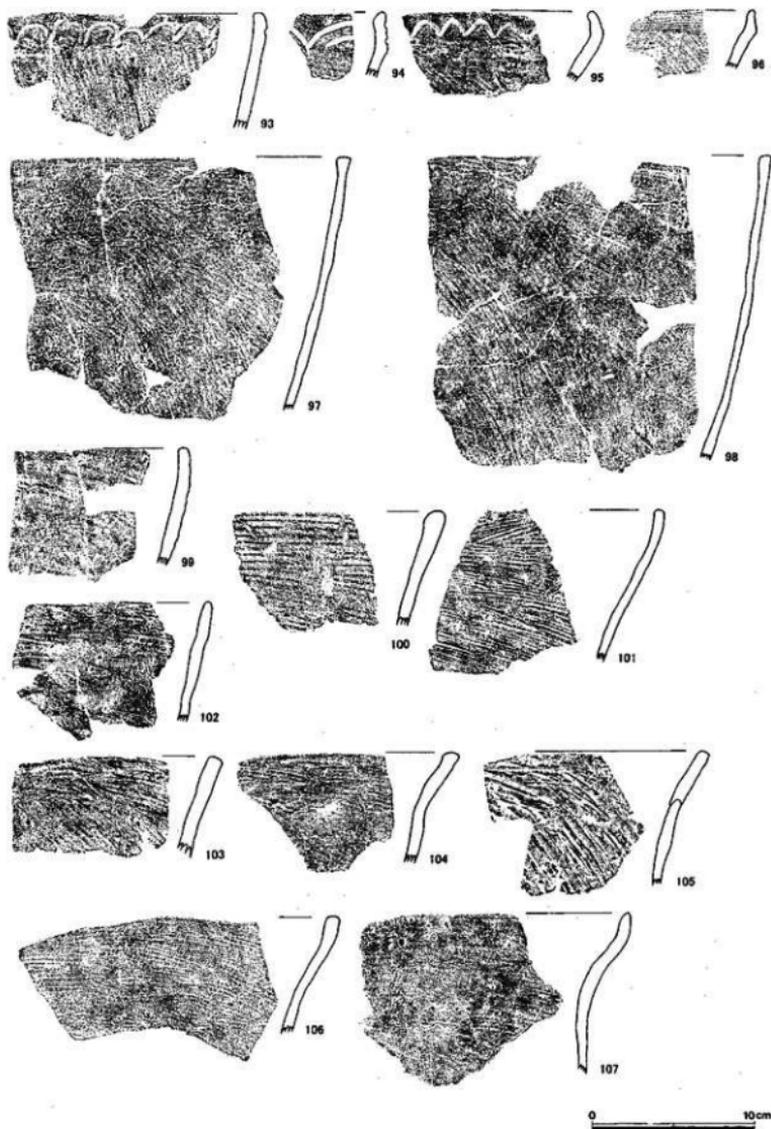
第15图 出土遺物実測图(4)



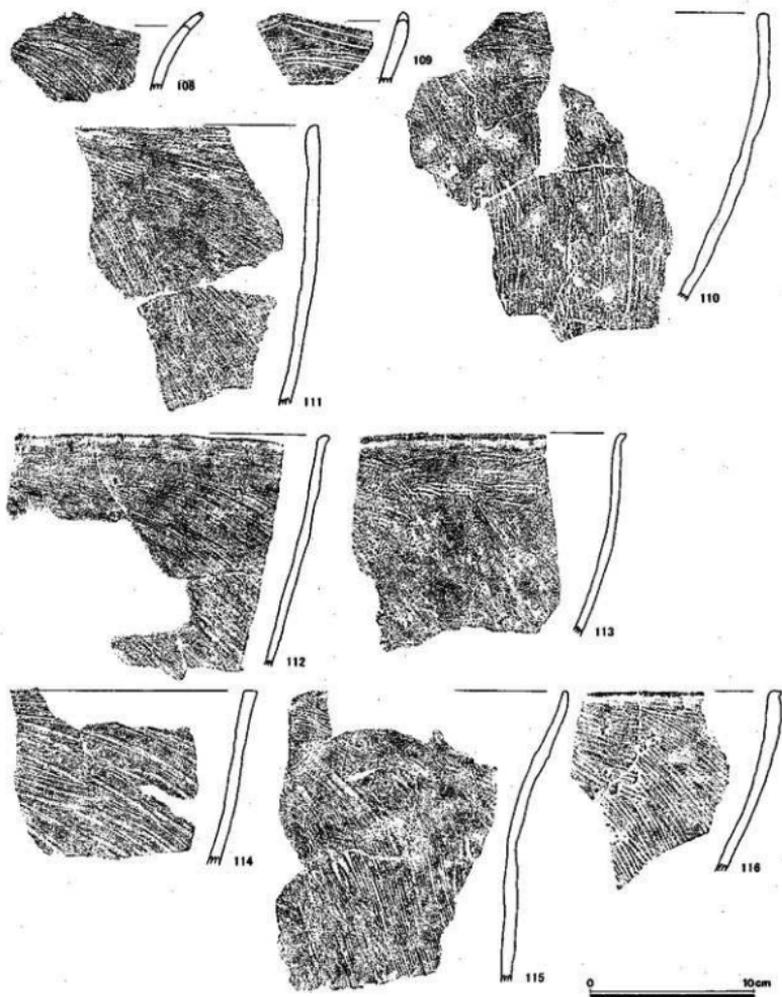
第16图 出土遺物実測図(5)



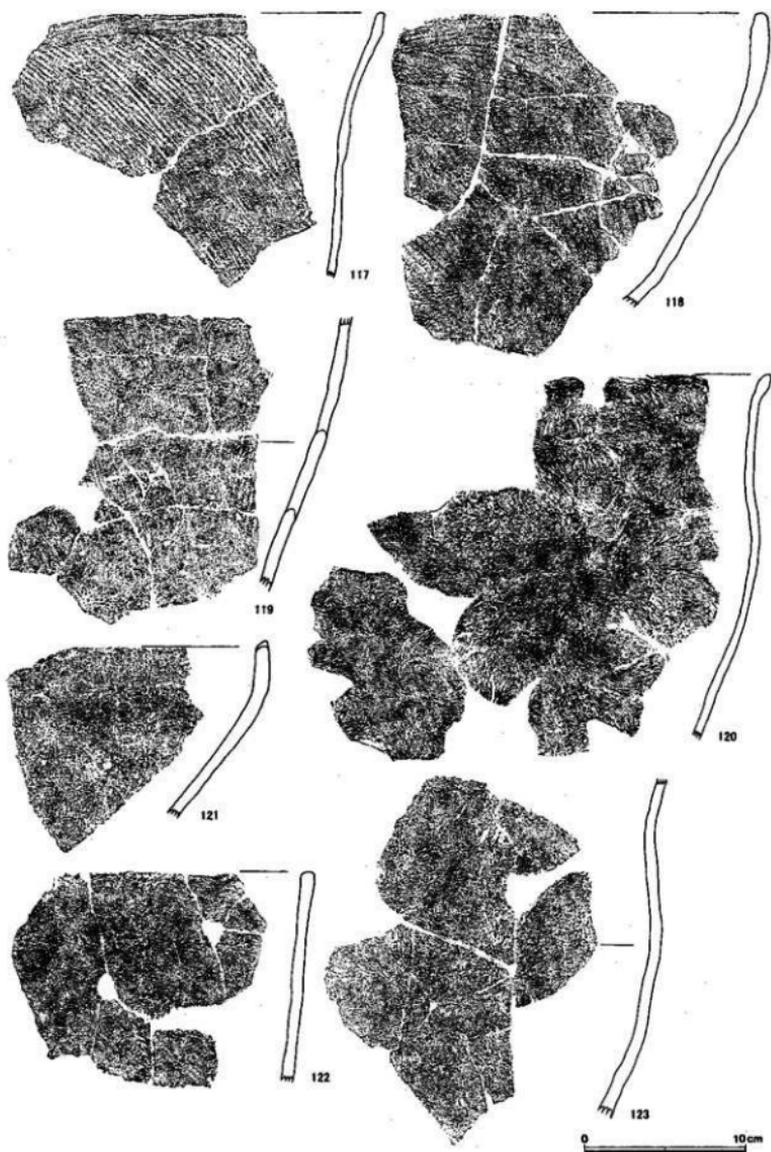
第17圖 出土遺物実測図(6)



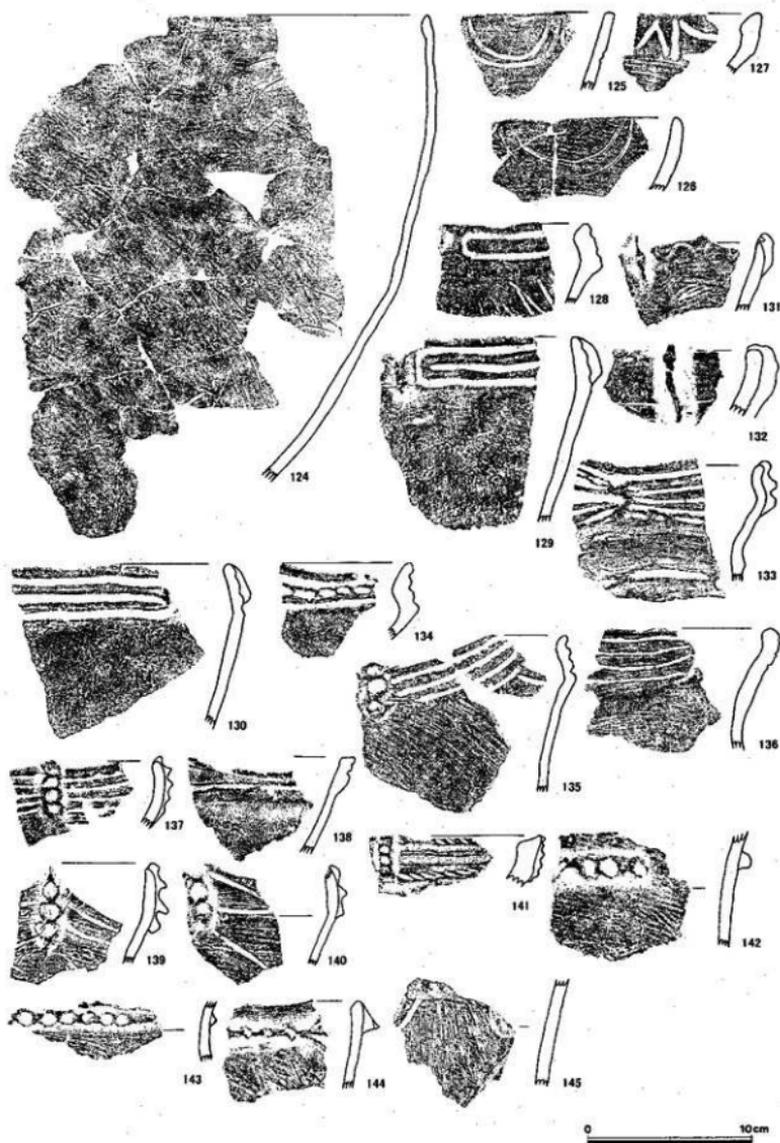
第18図 出土遺物実測図(7)



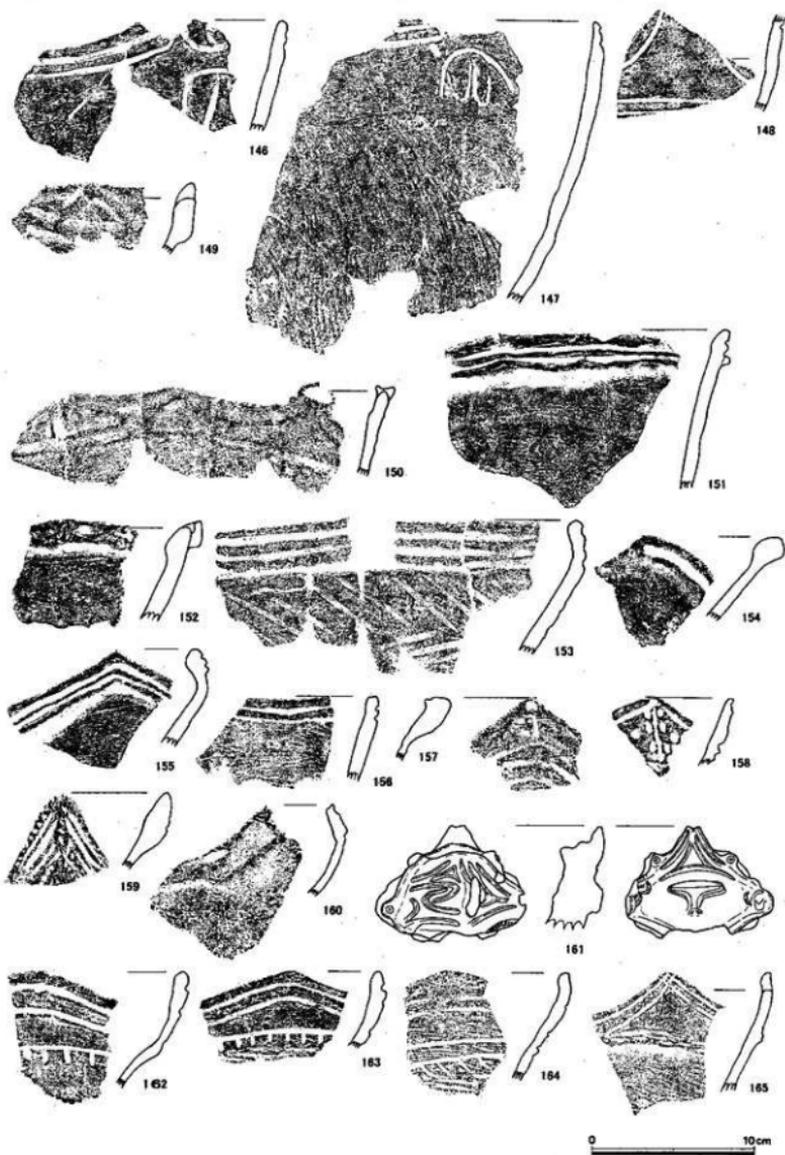
第19図 出土遺物実測図(8)



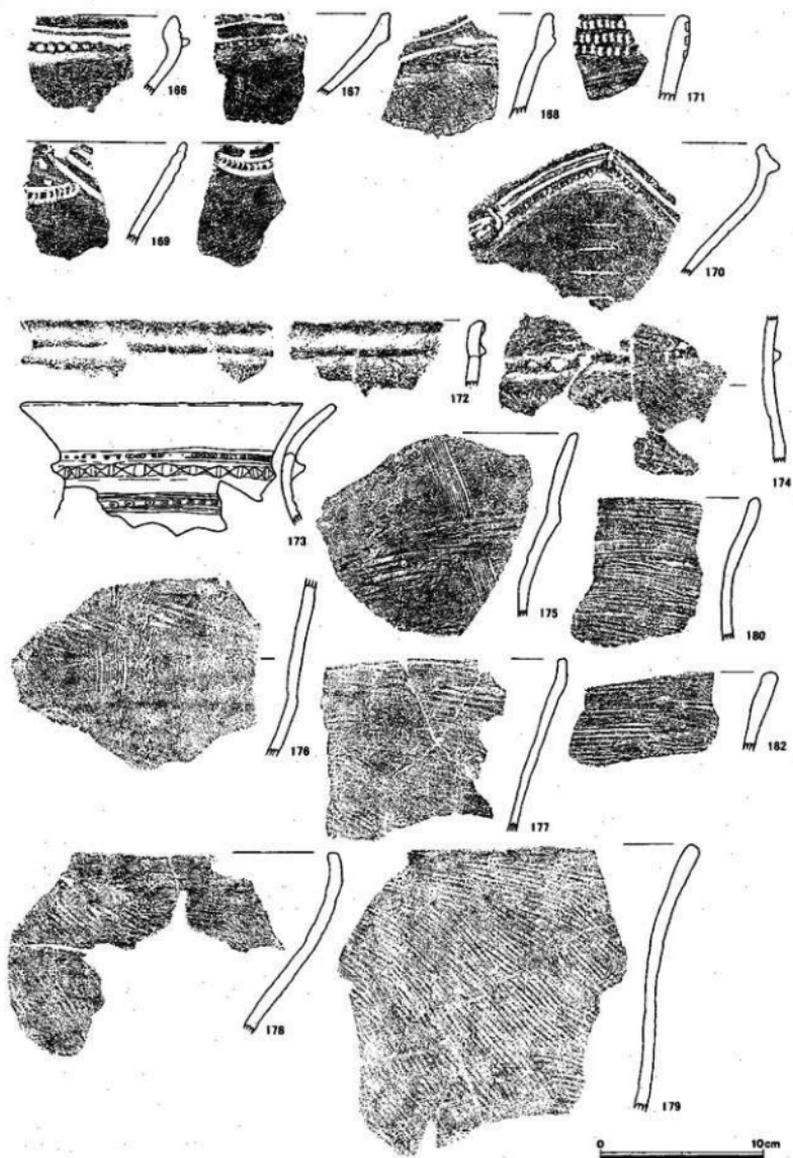
第20图 出土遺物実測図(9)



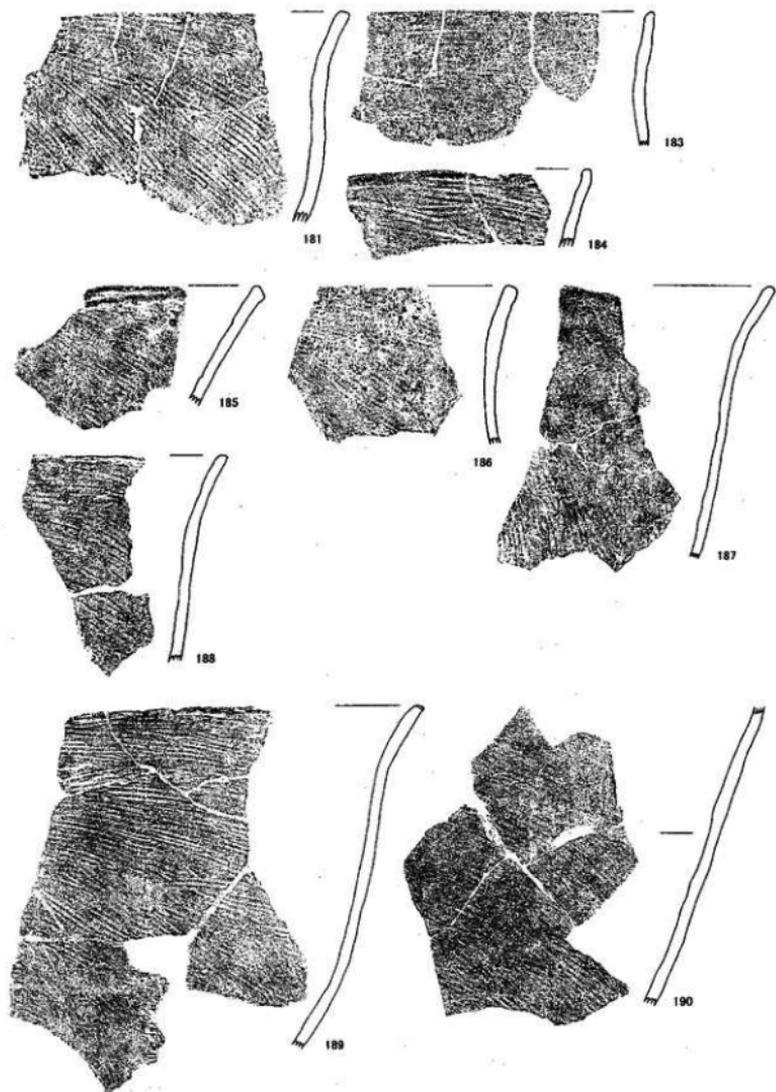
第21图 出土遺物実測図(10)



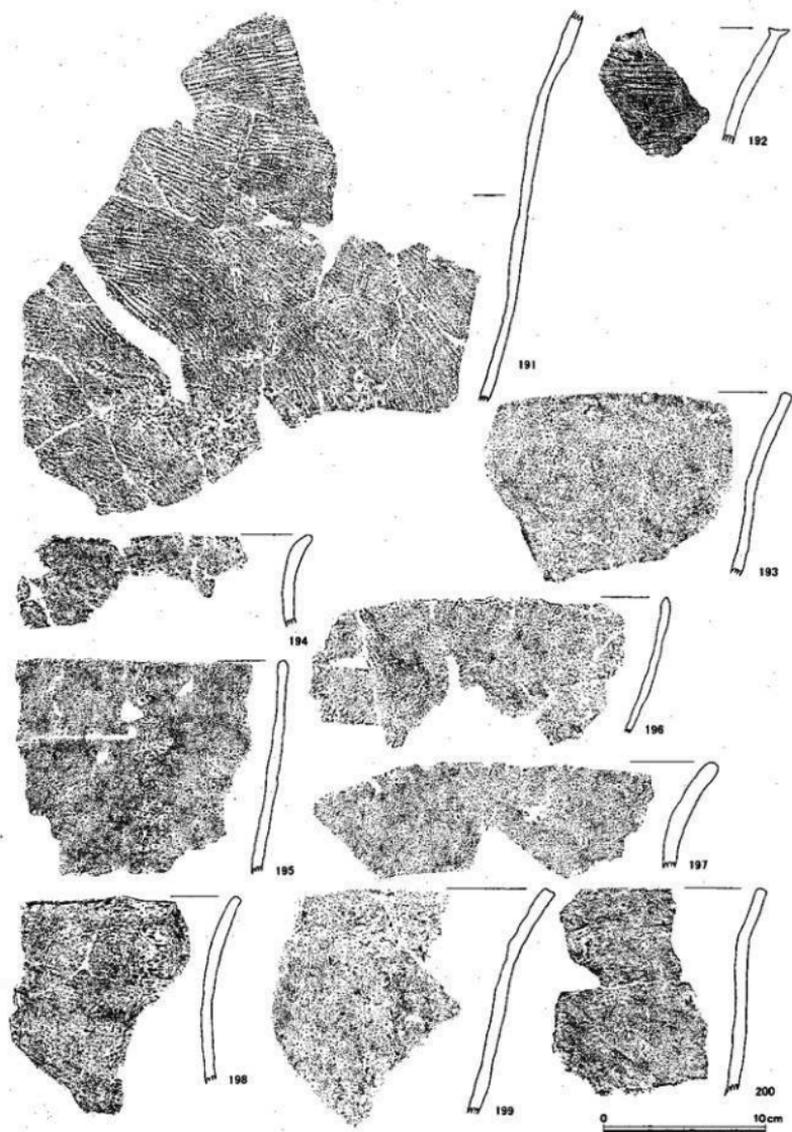
第22図 出土遺物実測図(11)



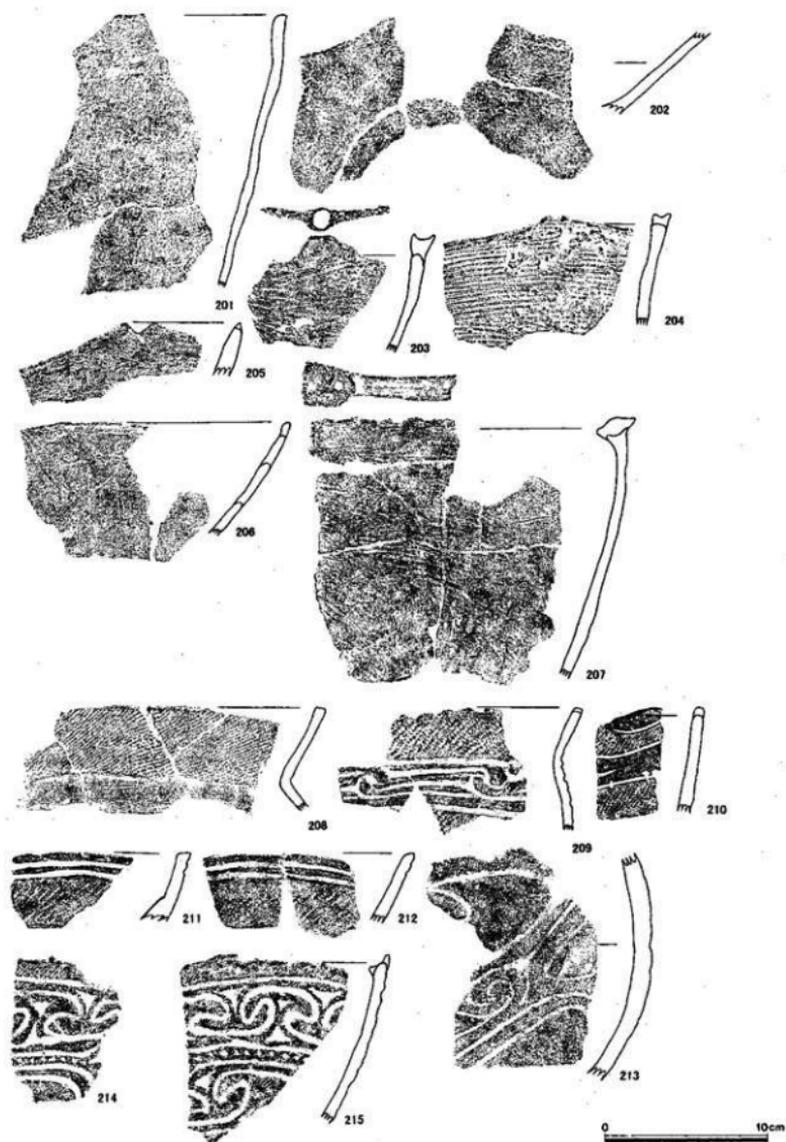
第23图 出土遺物実測図(12)



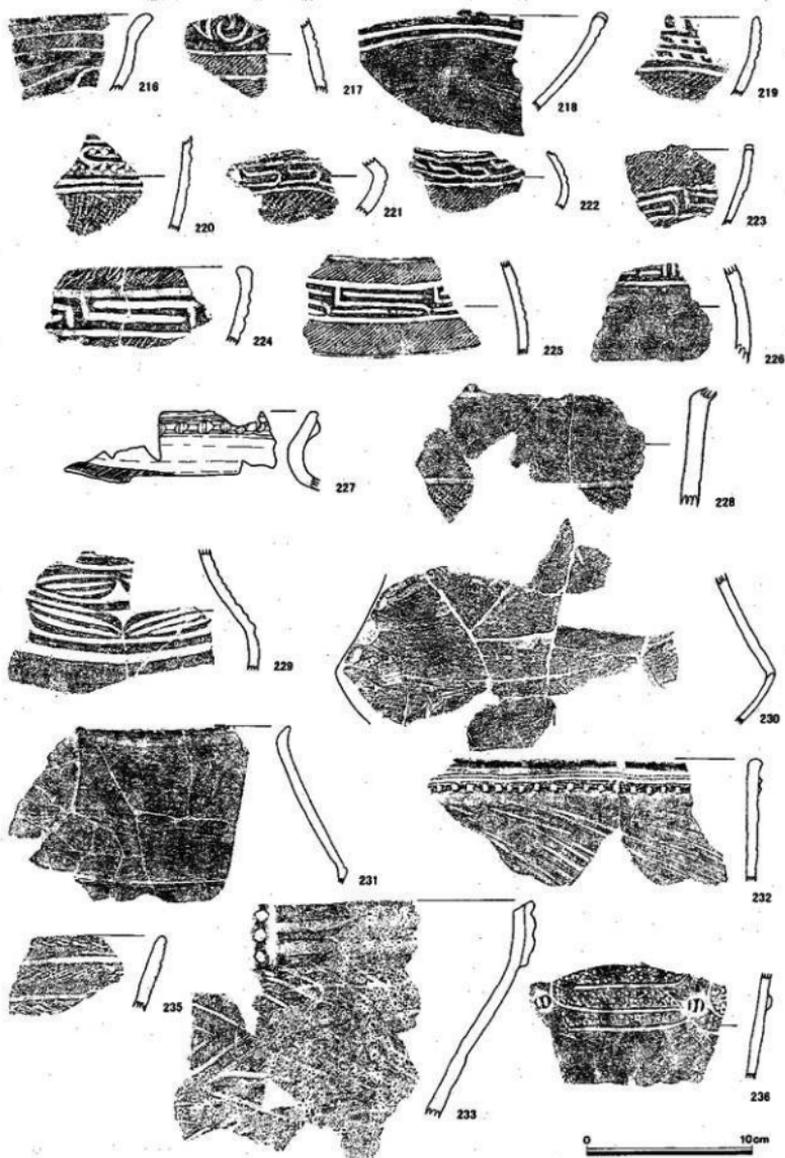
第24図 出土遺物実測図(13)



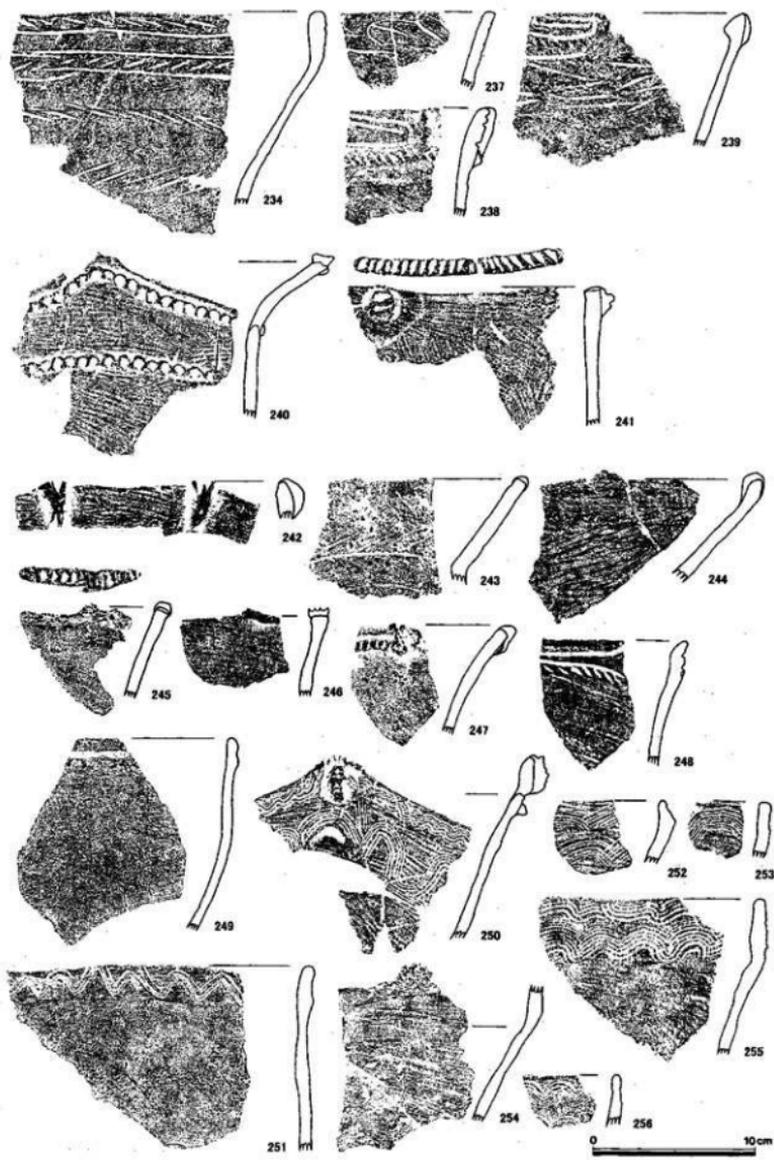
第25圖 出土遺物実測図(14)



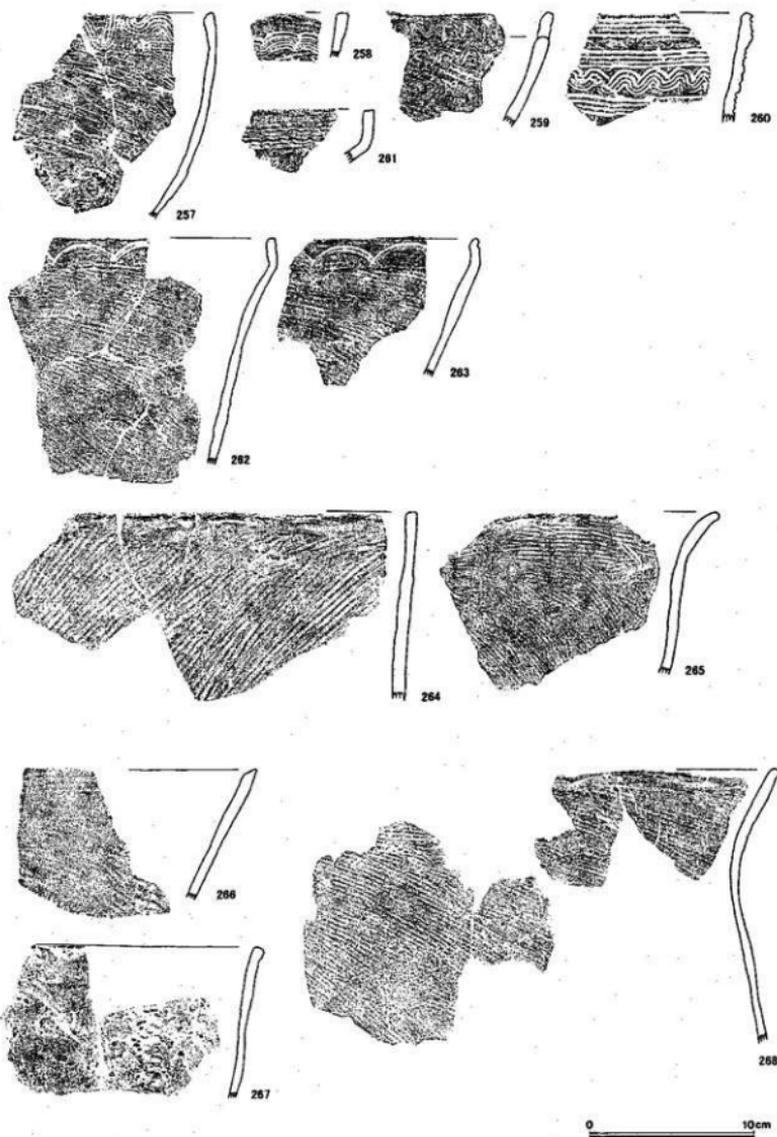
第26图 出土遺物実測図(15)



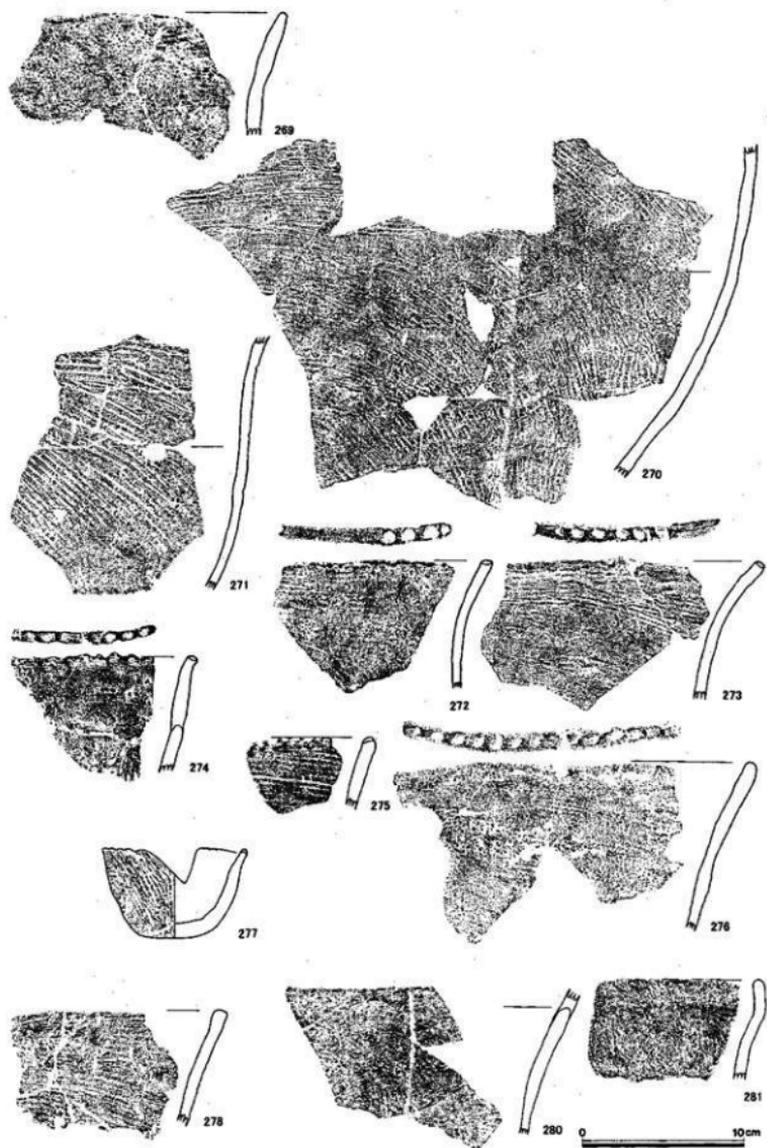
第27圖 出土遺物実測図(16)



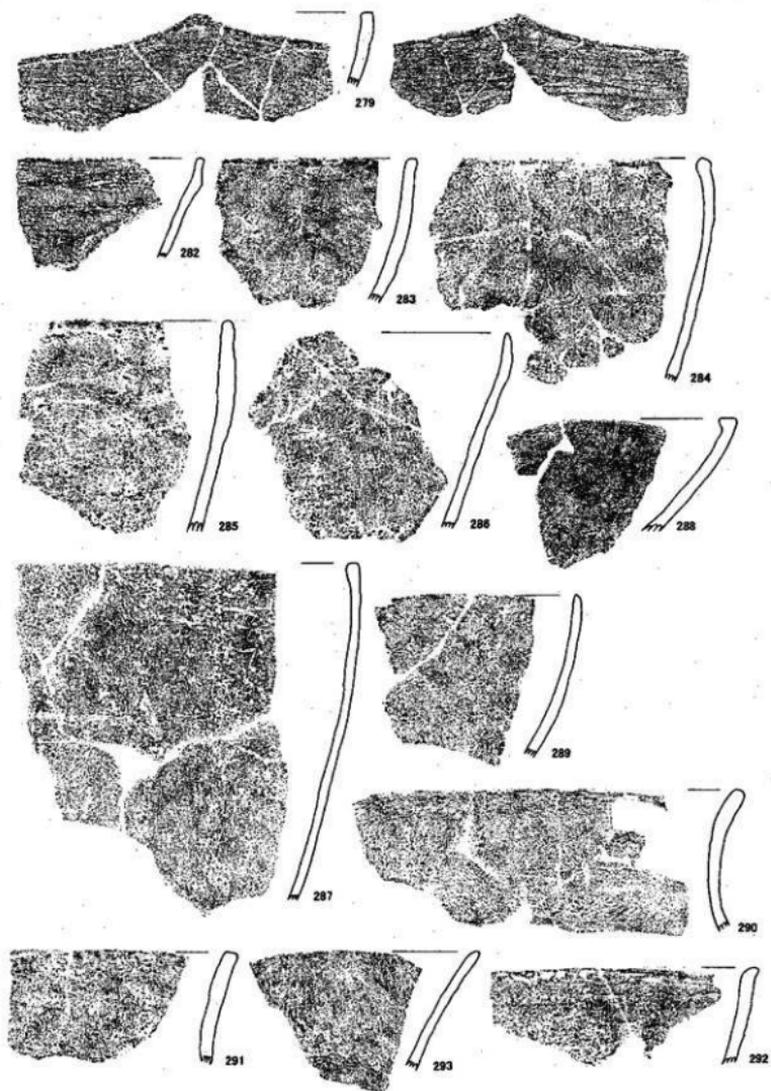
第28图 出土遺物実測図(17)



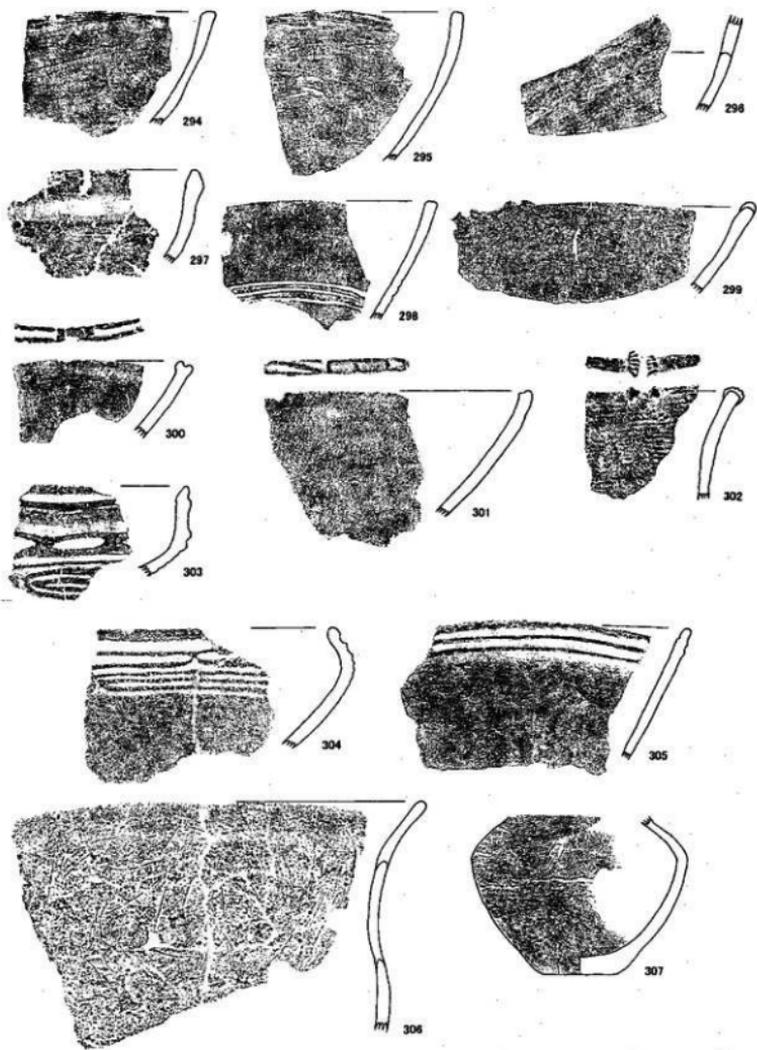
第29圖 出土遺物実測圖(18)



第30图 出土遺物実測図(19)

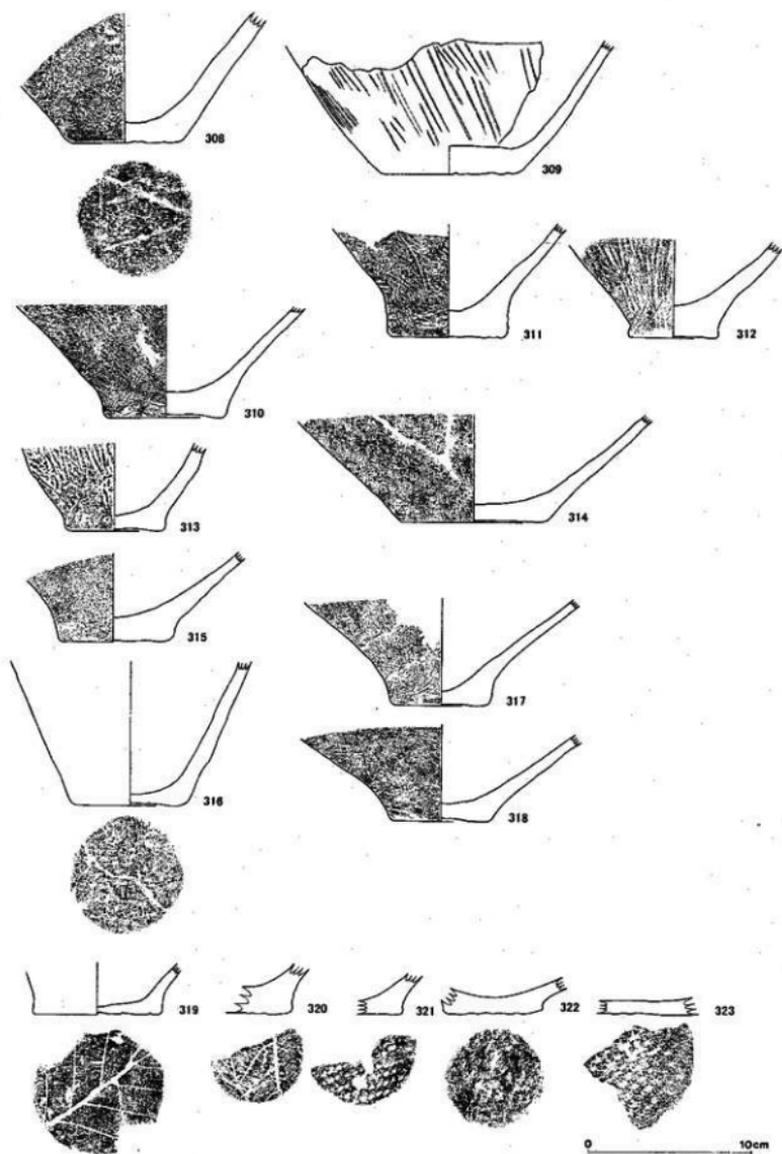


第31圖 出土遺物実測図(20)

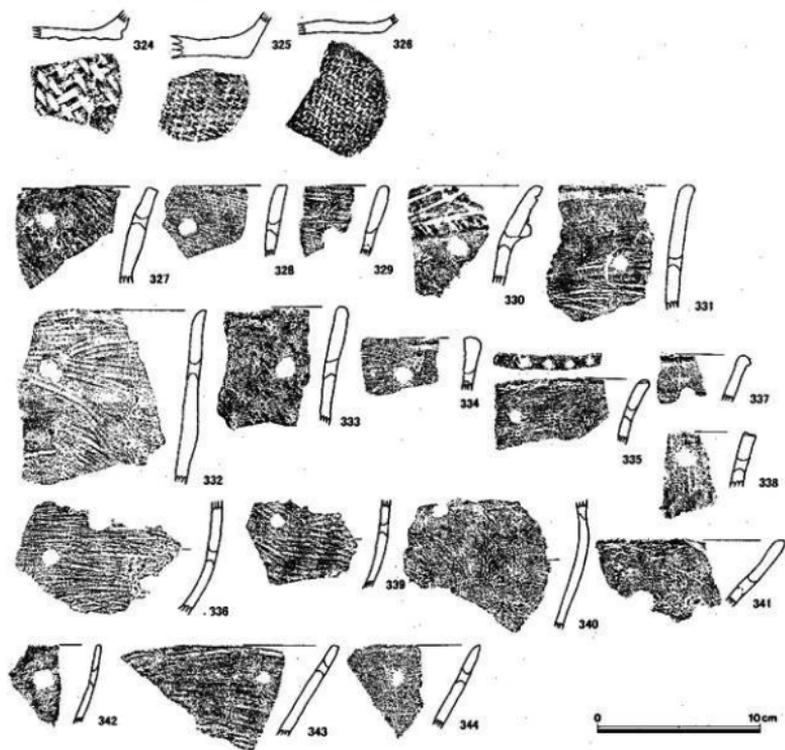


0 10cm

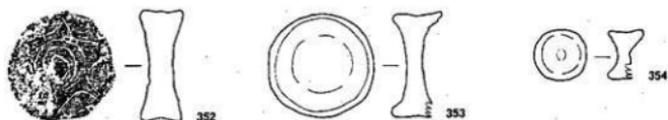
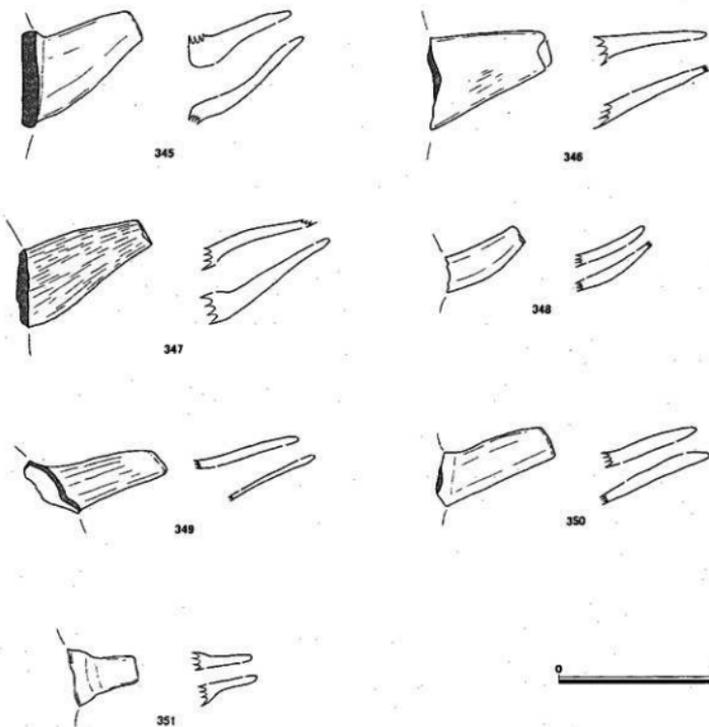
第32图 出土遺物実測図(21)



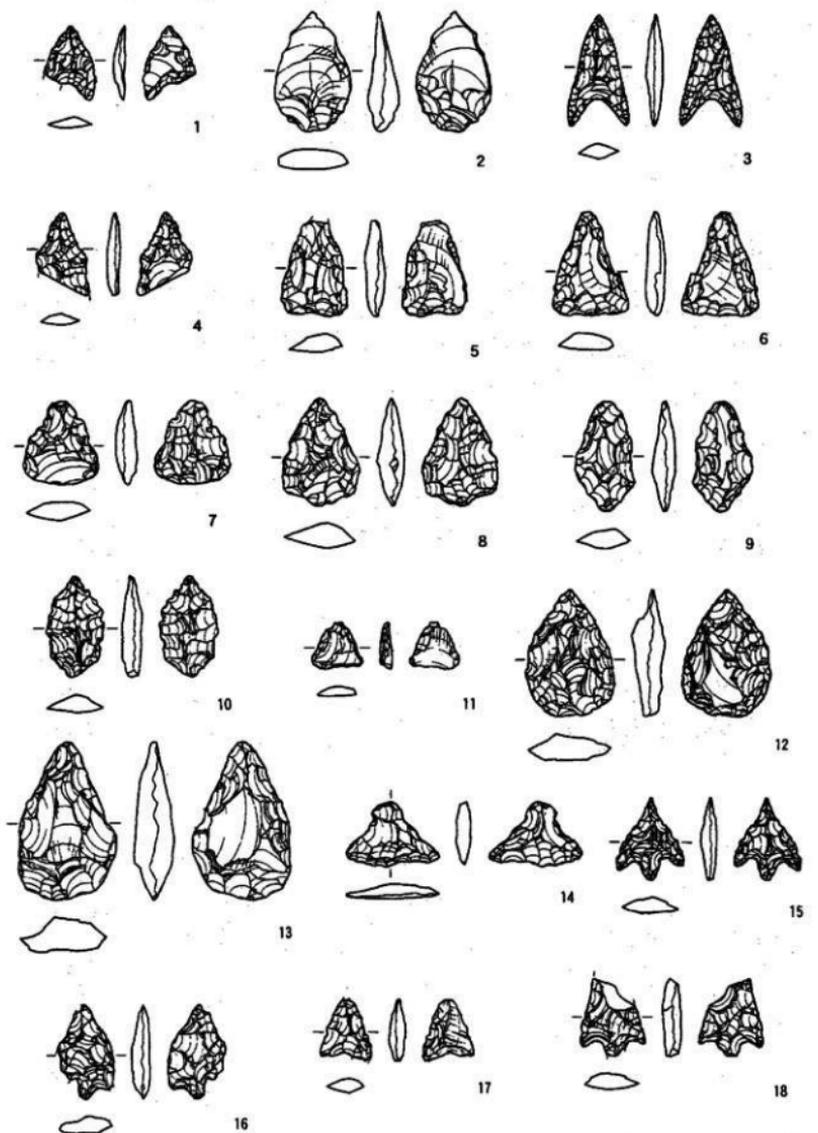
第33圖 出土遺物実測図(22)



第34図 出土遺物実測図(23)

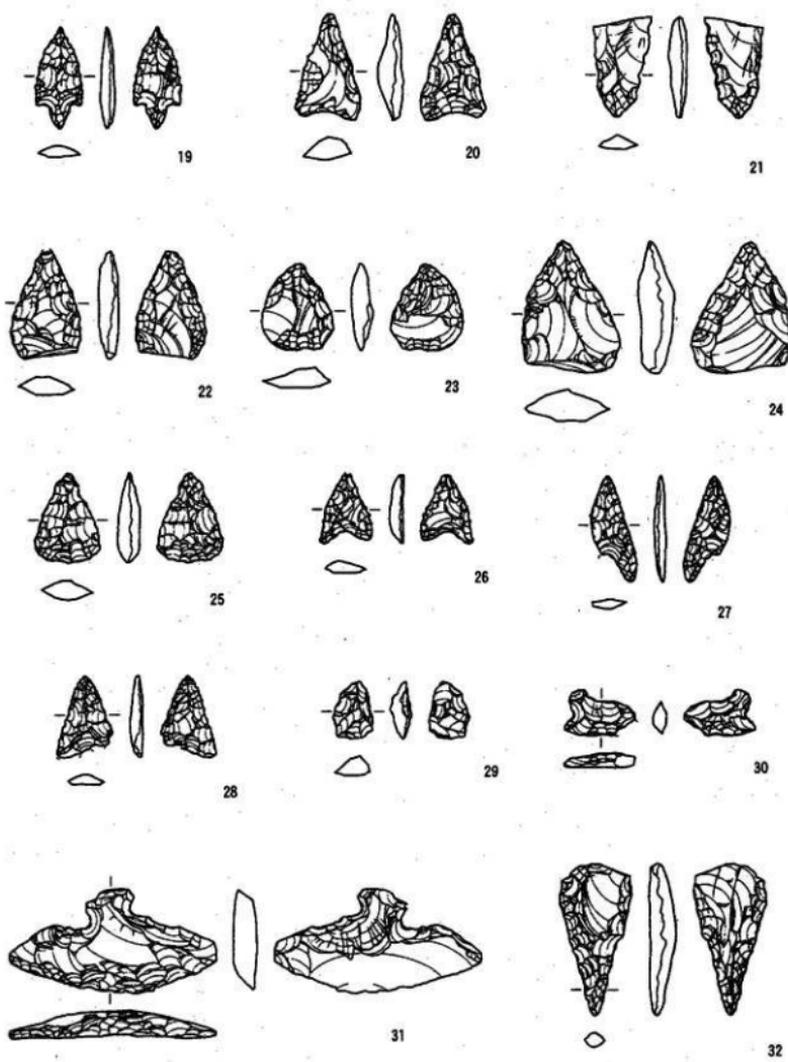


第35圖 出土遺物実測図(24)

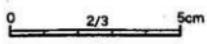


石鏃

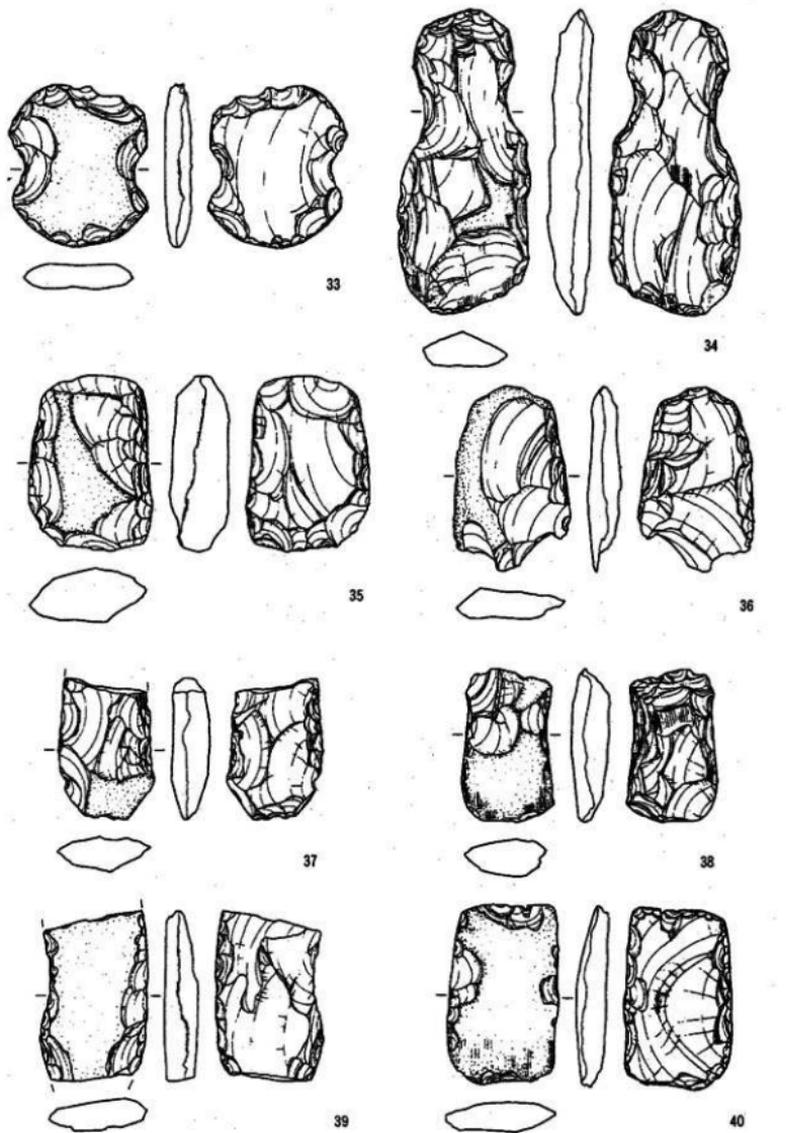
第36圖 出土遺物実測図(25)



石鏃・石匙・石錐

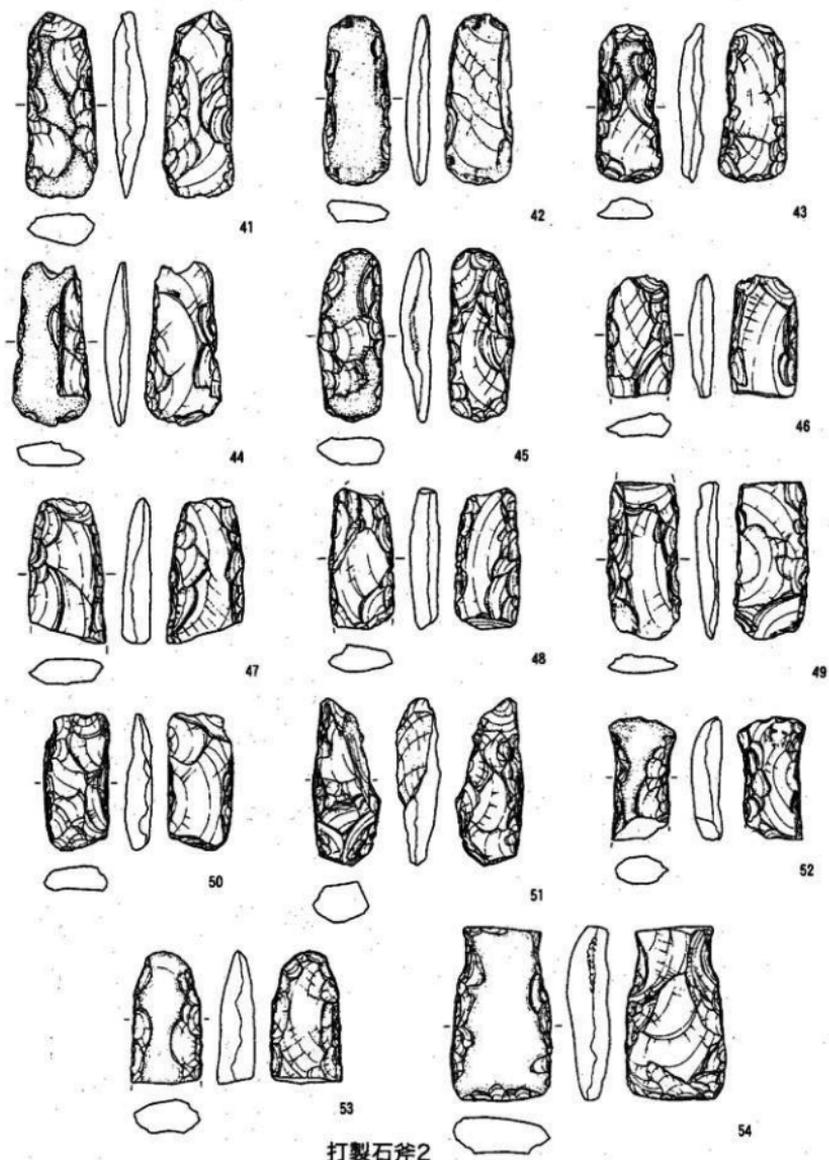


第37図 出土遺物実測図(26)



打製石斧1

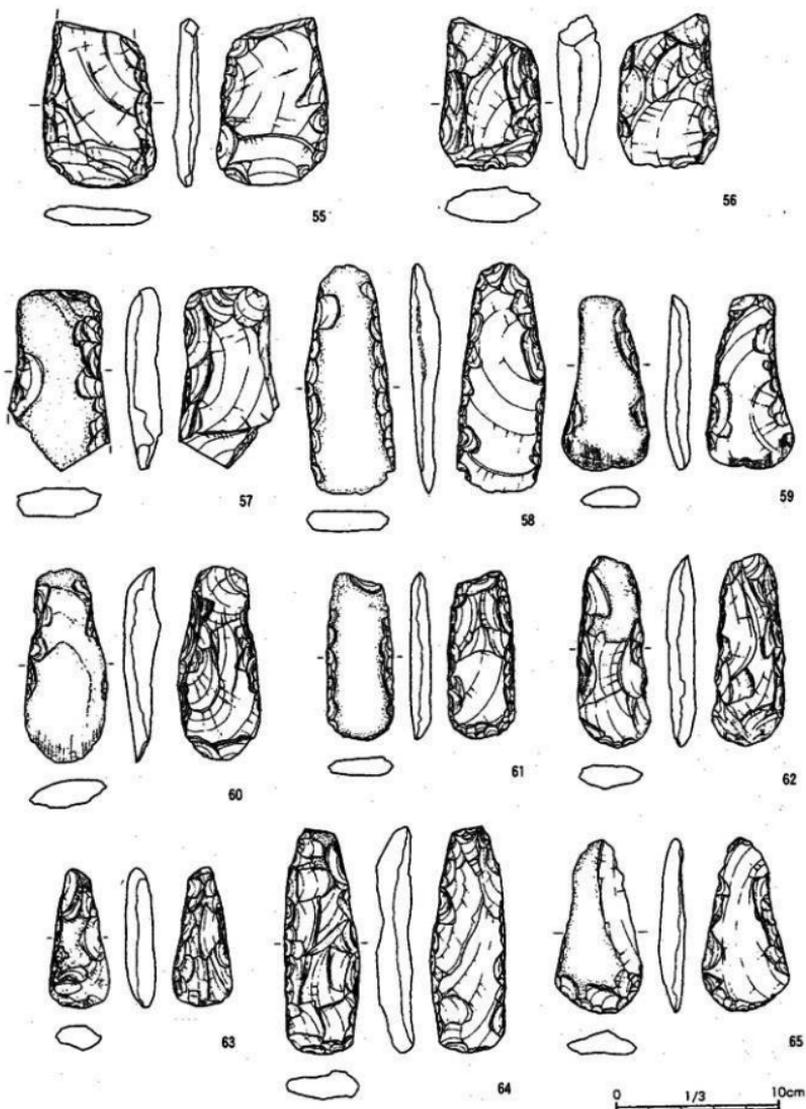
0 1/3 10cm



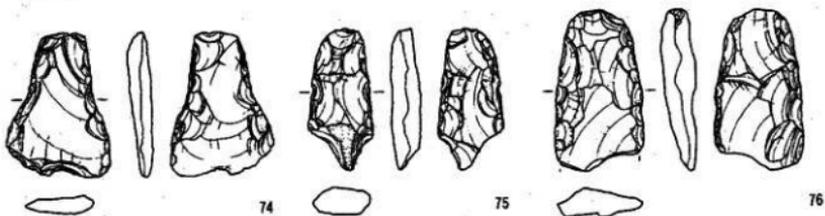
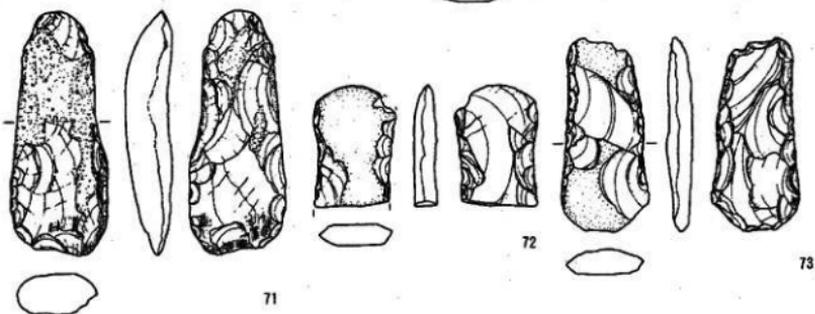
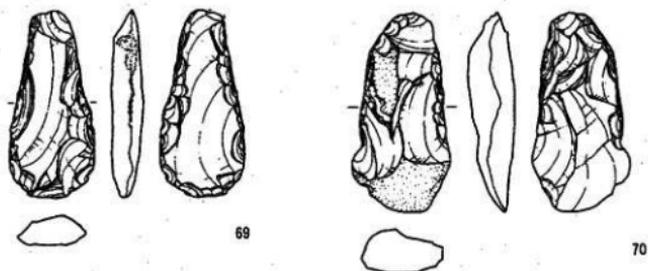
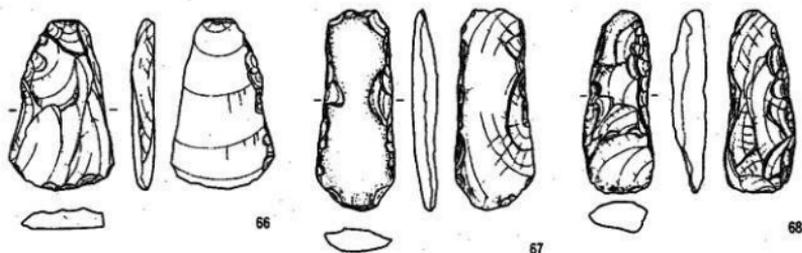
打製石斧2

第39圖 出土遺物実測図(28)

0 1/3 10cm



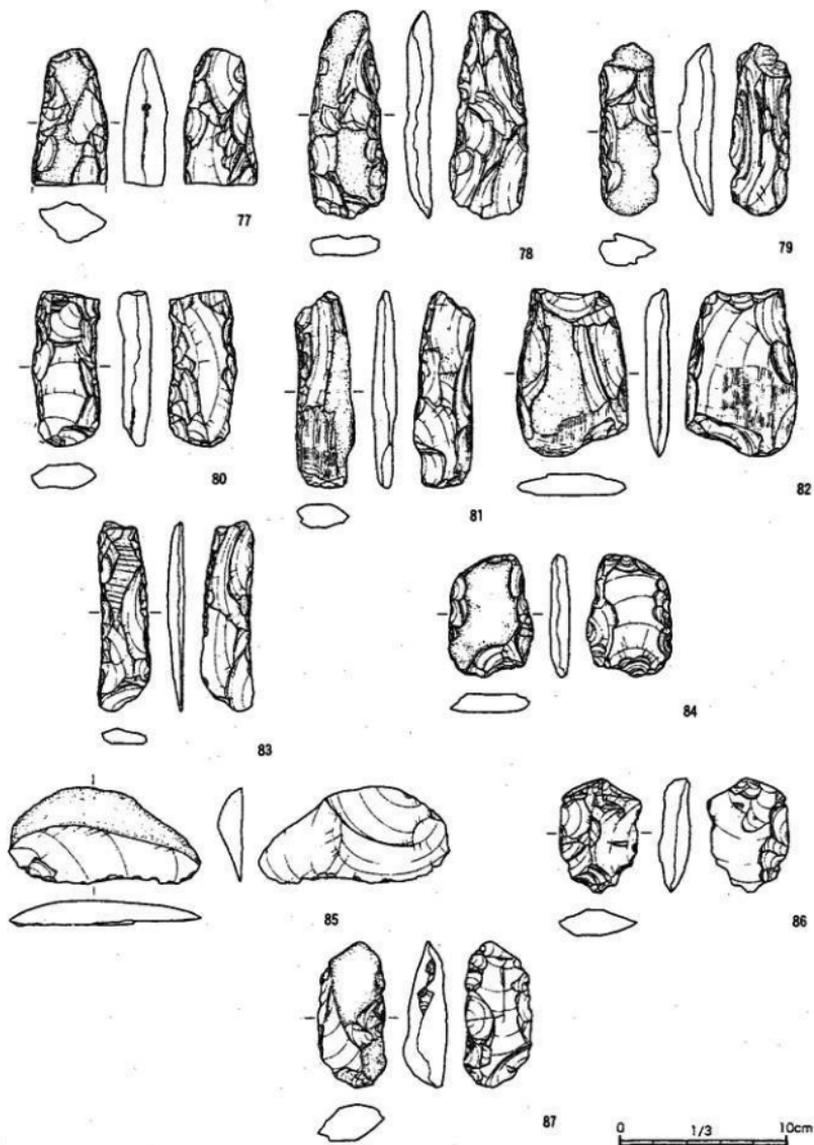
打製石斧3



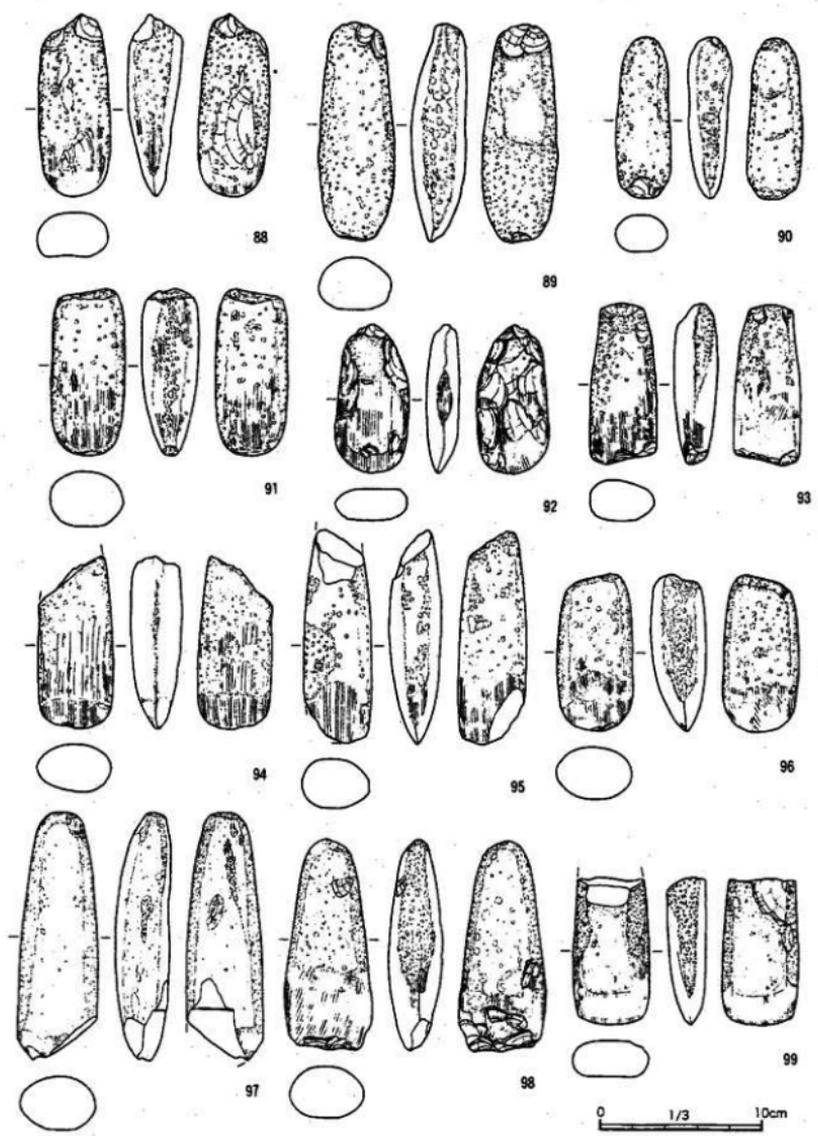
打製石斧4

0 1/3 10cm

第41圖 出土遺物実測図(30)

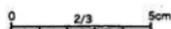
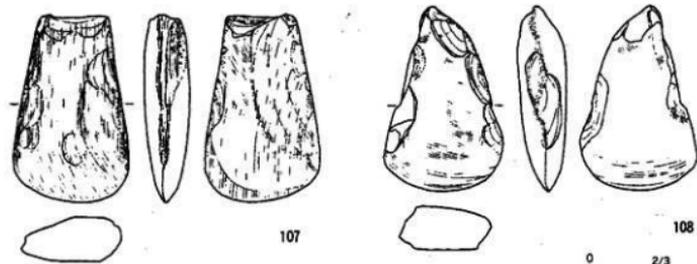
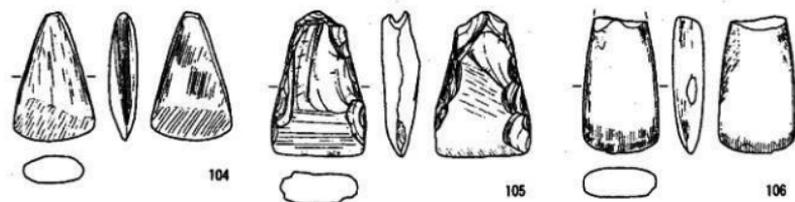
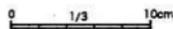
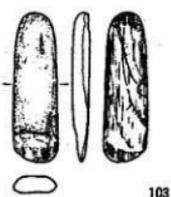
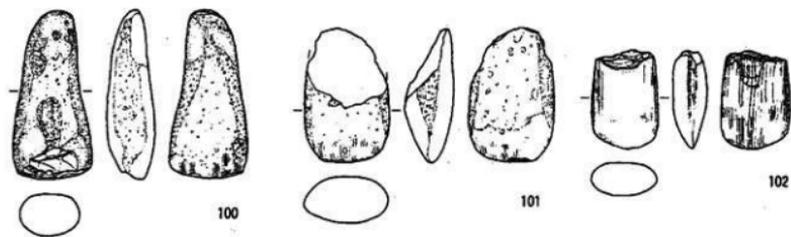


打製石斧5



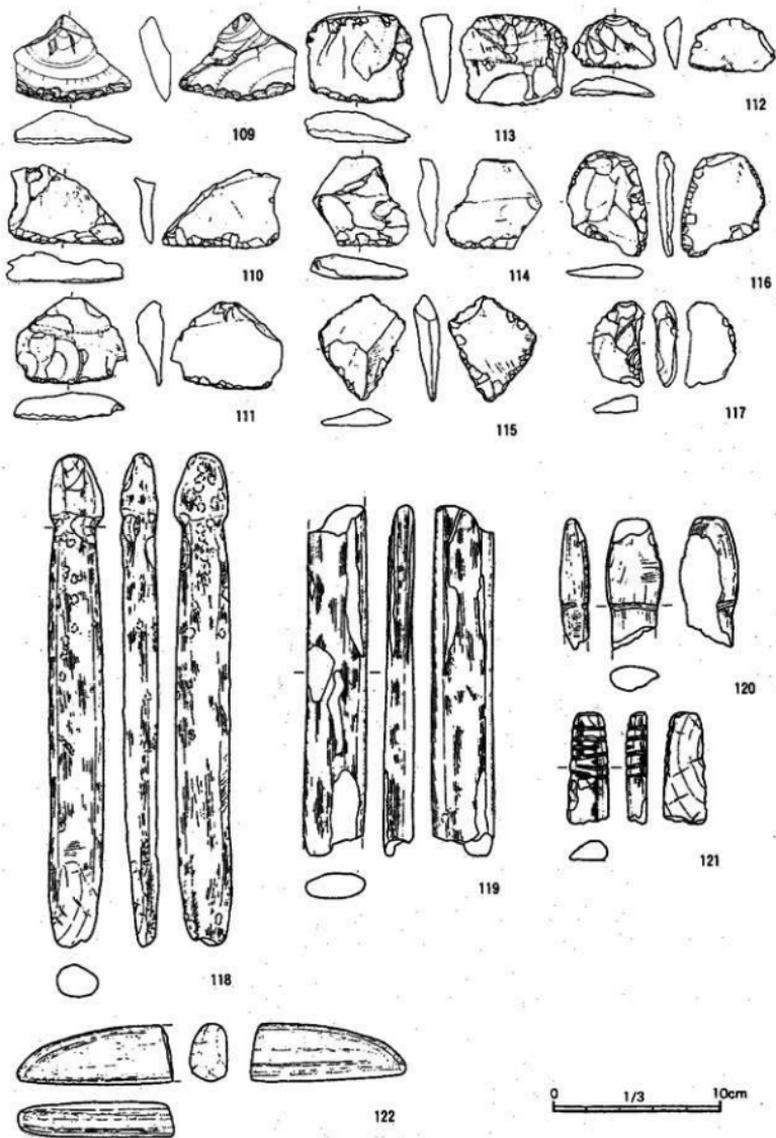
磨製石斧1

第43図 出土遺物実測図(32)



磨製石斧2

第44圖 出土遺物実測圖(33)



第45图 出土遺物実測図(34)

第3表 栗下遺跡出土石器観察表

番号	グランド	遺構名	層位	目録	形状	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	所見
1	B-	SB01	石礫	珪岩	凹基礫	22.4	15.7	3.6	0.9	裏面に珪材の主要剥離面がある。半両面加工。
2	B-2	SB01	石礫	頁岩	有基礫未製品	36.1	22.6	9.4	6.1	縦長剥片素材。素材打削面に押圧割傷が施されている。
3	B-2	SB01	石礫	頁岩	凹基礫	33.6	18.3	6.2	2.0	精緻な押圧割傷の完形品。
4	B-2	SB01	石礫	珪岩	五角形石礫	24.9	16.1	3.9	3.2	脚部欠損。半両面加工で、裏面に珪材面を一筋残す。
5	A-6	SD02	石礫	頁岩	凹基礫未製品	28.9	19.4	6.2	1.1	先端部欠損。脚部製作直前の未製品。両面加工。
6	A-6	SD02	石礫	頁岩	凹基礫未製品	31.3	22.8	6.0	4.0	裏面に珪材面を残す。押圧割傷が深く、加工初期段階。
7	B-6	SD04	石礫	頁岩	凹基礫未製品	25.2	22.4	6.5	3.2	両面加工の未製品。脚部作成直前の形態。
8	A-1		石礫	頁岩	有基礫未製品	32.6	22.8	8.3	5.0	凹基礫の製作技法でつくられた有基礫の未製品。
9	A-2		石礫	頁岩	有基礫未製品	33.3	18.0	7.0	3.3	裏面に珪材面を残している未製品。
10	B-2		石礫	珪岩	有基礫	30.4	17.5	6.1	2.7	縁磨削の有基礫。
11	B-2		石礫	頁岩	凹基礫未製品	14.1	18.0	3.8	0.7	素材の面を大きく残した小形の凹基礫未製品。
12	A-4		石礫	頁岩	凹基礫未製品	38.2	26.8	10.0	8.1	大形石礫の未製品。裏面に珪材面を残している。
13	A-6		石礫	頁岩	有基礫未製品	45.5	29.2	12.0	14.3	大形有基礫の未製品。基部製作の途上。
14	B-2		石礫	頁岩	五角形石礫	16.9	27.8	4.6	1.6	脚部一部欠損。
15	B-5		石礫	頁岩	有基礫	24.7	20.0	5.0	1.4	凹基礫の製作技法でつくられた有基礫。縁辺は鋭直状。
16	B-5		石礫	珪岩	五角形有基礫	28.3	16.9	5.6	2.0	有基礫の製作技法で五角形石礫を製作。石材も重要。
17	B-C-4		石礫	頁岩	凹基礫未製品	18.4	16.2	5.0	0.9	背面に珪材面を大きく残している。
18	B-C-6		石礫	頁岩	有基礫	23.2	19.4	5.8	2.0	凹基礫の製作技法でつくられた有基礫。先端、基部欠損。
19	B-C-7		石礫	頁岩	有基礫	30.3	14.1	4.6	1.4	精緻な押圧割傷の完形品。
20	C-2		石礫	頁岩	凹基礫未製品	31.8	19.2	7.7	3.2	背面に珪材の主要剥離面を大きく残している。
21	A-2		石礫	石礫未製品	30.0	17.1	5.6	2.6	素材は縁直状。素材先端部を石礫先端部にした押圧割傷がなされる。	
22	A-2		石礫	石礫未製品	32.3	20.7	6.0	3.9	裏面に珪材面を残す。基部が加工途中で折れているので形態不明。	
23	A-3		石礫	凹基礫未製品	26.0	21.6	6.6	3.2	表裏に珪材面を残す。脚部の製作途中の形態。	
24	A-5		石礫	頁岩	石礫未製品	39.5	29.2	10.7	9.7	大形石礫の未製品。裏面に珪材面を残している。
25	A-B-3		石礫	頁岩	凹基礫未製品	27.1	19.3	6.6	3.1	両面加工の未製品。脚部作成直前の形態。
26	A-B-3		石礫	頁岩	凹基礫	20.8	16.4	4.3	1.2	裏面に珪材の主要剥離面がある。半両面加工。
27	A-B-4		石礫	頁岩	凹基礫	31.9	13.6	3.6	1.1	精緻な押圧割傷の凹基礫。脚部一部欠損。
28	A-B-5・6		石礫	鉄石英	凹基礫	24.4	16.3	3.8	1.2	裏面に珪材の主要剥離面がある。半両面加工。
29	A-4		石礫	サヌカイト	有基礫未製品	17.3	11.8	6.4	1.0	極小の未製品。二山のサヌカイト製とみられる石材も重要。
30	B-6	SD04	石礫	燧状石	楕円石礫	13.9	21.1	4.6	1.1	極小の石礫。先端部欠損。押圧割傷の両面加工。
31	A-B-6以南		石礫	頁岩	楕円石礫	31.5	60.8	8.3	12.3	楕み郭は間接打削。押圧割傷の周縁加工。素材は横長剥片。
32	A-1・2		石礫	頁岩	頁岩	45.6	21.4	8.1	6.0	楕みのある完形品。刃部、整形加工は押圧割傷。
33	A-2	SP12	打製石片	砂岩	分銅形	97.3	81.6	16.8	172.6	背面に自然面を残す。刃部は磨かれている。
34	A-3		打製石片	安山岩	ばち形	182.7	78.3	26.1	436.9	大形の打製石片。刃部に土づれ痕が顕著。
35	A-3		打製石片	硬質砂岩	楕円形	105.4	72.6	34.7	243.6	刃部再生の可能性がある。
36	A-5		打製石片	安山岩	短冊形	111.2	68.7	20.1	153.8	打製石片の未製品。縁辺は折れている。
37	A-5		打製石片	安山岩	短冊形	84.6	56.7	22.5	127.7	背面に自然面を残す。刃部は鋭利な割傷。
38	B-4		打製石片	安山岩	短冊形	92.5	54.6	22.9	142.6	背面全面が自然面。刃部に土づれ痕。刃部再生の可能性がある。
39	B-5		打製石片	硬質砂岩	短冊形	101.5	63.3	19.6	173.8	背面に自然面を残す。基部と刃部が折れている。
40	北側遺区一横		打製石片	安山岩	短冊形	108.3	66.2	18.3	170.1	背面全面が自然面。刃部に土づれ痕。
41	A-2		打製石片	硬質砂岩	短冊形	124.0	47.3	22.4	143.3	背面に自然面を残す。刃部は鋭利な割傷。
42	C-3		打製石片	安山岩	短冊形	113.8	44.6	15.7	106.3	背面全面が自然面。刃部に土づれ痕。
43	A-5・6		打製石片	燧状岩	短冊形	105.7	44.3	16.7	96.4	裏面は珪材の主要剥離面。
44	A-B-6以南		打製石片	安山岩	短冊形	109.0	50.5	16.2	98.5	背面に自然面を残す。刃部は土づれ痕。
45	A-B-6以南		打製石片	硬質砂岩	短冊形	115.6	44.2	21.3	126.7	背面に自然面を残す。刃部は鋭利な縁辺の割傷面。
46	A-4		打製石片	安山岩	短冊形	81.6	44.8	16.3	75.6	横長剥片素材。基部折れ。
47	A-7		打製石片	安山岩	短冊形	97.3	51.3	19.6	120.2	横長剥片素材。基部折れ。
48	B-2		打製石片	安山岩	短冊形	94.5	43.1	19.8	104.8	横長剥片素材。基部、刃部折れ。
49	A-B-3		打製石片	安山岩	短冊形	105.5	49.3	14.9	97.3	横長剥片素材。刃部は土づれ痕顕著。
50	A-4		打製石片	安山岩	短冊形	91.4	43.3	18.5	93.9	横長剥片素材。刃部折れ。
51	A-B-6以南		打製石片	安山岩	短冊形	112.2	44.6	29.6	135.6	打製石片未製品。
52	A-4		打製石片	安山岩	短冊形	82.4	44.1	20.6	86.2	背面に自然面を残す。刃部折れ。
53	B-6		打製石片	硬質砂岩	短冊形	88.6	47.2	25.3	135.0	背面に自然面を残す。刃部折れ。
54	A-6		打製石片	硬質砂岩	ばち形	116.2	66.7	28.1	274.6	背面に自然面を残す。刃部が折れている。2と同じ石礫。
55	B-4		打製石片	安山岩	ばち形	104.6	68.2	16.0	124.7	横長剥片素材。基部折れ。
56	A-B-4		打製石片	安山岩	ばち形	95.9	62.0	28.1	158.0	横長剥片素材。基部折れ。
57	不明		打製石片	安山岩	ばち形	112.7	60.9	21.4	174.1	背面に自然面を残す。刃部折れ。
58	A-1		打製石片	安山岩	ばち形	142.6	54.1	17.7	141.1	背面に自然面を残す。刃部は鋭利な縁辺の割傷面。
59	A-1		打製石片	安山岩	ばち形	108.6	53.6	15.0	101.6	背面全面が自然面。刃部に土づれ痕。
60	A-4		打製石片	安山岩	ばち形	120.8	50.4	22.2	130.4	背面に自然面を残す。刃部は鋭利な縁辺の割傷面。
61	A-4		打製石片	安山岩	ばち形	104.1	41.0	12.5	77.2	背面全面が自然面。刃部再生の可能性が高い。
62	A-6		打製石片	ホルンフェル	ばち形	119.5	44.9	17.4	112.3	背面に部分的に自然面を残す。刃部に土づれ痕。
63	A-6		打製石片	燧状岩	ばち形	86.4	36.3	18.1	56.6	磨製石片を転用した打製石片。背面に磨製石片の研削面を残す。

64	B-4		打製石斧	横置砂岩	短冊形	139.7	45.8	22.3	187.9	横長削片素材。刃部は鋭利な縁辺の割離面で構成される。
65	B-6		打製石斧	安山岩	ばら形	107.3	53.6	16.5	81.5	背面に自然面を残す。刃部に土づれ痕。
66	B-8		打製石斧	安山岩	ばら形	102.4	61.0	14.2	92.2	横長削片素材。刃部は鋭利な裏材縁辺の割離面で構成される。
67	A-6		打製石斧	安山岩	ばら形	120.5	47.6	14.7	101.1	背面に自然面を残す。刃部に土づれ痕。
68	A-5		打製石斧	安山岩	短冊形	109.6	42.2	20.6	105.7	背面に自然面を残す。刃部に土づれ痕。
69	A-6		打製石斧	安山岩	ばら形	112.8	50.4	18.9	122.0	横長削片素材。
70	A-6		打製石斧	安山岩	ばら形	119.9	68.6	28.1	185.8	背面に自然面を残す。刃部は鋭利な縁辺の割離面。
71	B-3・4		打製石斧	安山岩	短冊形	147.3	57.1	27.7	285.3	背面に丁寧な取付痕。刃部は土づれ痕が顕著。
72	B-3・4		打製石斧	横置砂岩	ばら形	73.3	49.3	13.8	74.1	背面に自然面を残す。刃部折れ。
73	B-3		打製石斧	安山岩	ばら形	117.1	52.6	15.6	115.6	背面に自然面。刃部に土づれ痕。
74	B-4		打製石斧	安山岩	ばら形	86.8	61.1	15.2	73.0	横長削片素材。刃部の損傷が大きい。
75	A-2	SP106	打製石斧	安山岩	ばら形	84.7	38.8	17.7	64.8	刃部欠損。
76	A-6		打製石斧	安山岩	ばら形	96.7	52.6	20.9	110.0	横長削片素材。刃部は裏材の縁辺だが、半分以上おれている。
77	A・B-4~6?		打製石斧	安山岩	ばら形	84.5	43.9	25.6	123.7	背面に自然面を残す。刃部折れ。
78	B-3・4		打製石斧	安山岩	短冊形	127.3	47.1	16.9	106.6	背面に自然面。刃部は割離面で構成され、土づれ痕はない。
79	A-2		打製石斧	安山岩	短冊形	106.0	36.9	21.6	83.8	背面に自然面を残す。刃部は裏材の鋭い辺。
80	A・B-4		打製石斧	安山岩	短冊形	94.9	40.6	20.2	99.4	横長削片素材。基部折れ。
81	A・B-4		打製石斧	安山岩	短冊形	102.4	36.2	14.5	76.2	背面に自然面。刃部に土づれ痕。
82	B-4		打製石斧	凝灰岩	短冊形	120.8	67.3	14.4	154.7	刃部磨製石斧。背面に研磨された刃部、裏面は割離面と土づれ痕。
83	A・6・6		打製石斧	片岩	短冊形	116.9	31.6	9.7	41.6	石棒の断片を打製石斧に転用。背面に石棒の研磨面が残る。
84	B-2		打製石斧	安山岩	短冊形	75.5	50.7	12.0	62.2	背面に自然面を残す。刃部は鋭利な縁辺の割離面。未製品。
85	B-	SB01	大形刺剣	安山岩		69.3	112.9	15.6	96.4	横刃形の刺剣。
86	B-3		大形刺剣	チャート		70.5	49.7	18.7	58.6	縦長削片素材の刺剣。裏面に直線打撃の成形加工。刃部は裏材の縁辺。
87	A・B-6以南		磨製石斧	珪石		89.3	40.6	26.1	97.4	磨製石斧。素材は横長削片の打面を削いで加工で打製。打製石斧の本製品から。
88	不明		磨製石斧	凝灰岩	乳棒形	114.7	44.6	34.2	262.6	基部に再生割離。
89	不明		磨製石斧	凝灰岩	乳棒形	137.8	47.3	33.7	351.7	器全体に取付痕。研磨は刃部のみ。
90	B-2		磨製石斧	砂岩	乳棒形	101.5	34.6	26.9	138.0	器全体に取付痕。研磨はなし。
91	A-3		磨製石斧	凝灰岩	乳棒形	106.0	45.8	35.6	292.1	基部に再生割離。
92	A-7		磨製石斧	砂岩	バチ形	92.7	46.3	20.5	119.9	部分磨製石斧。背面と裏面一部に研磨痕。
93	B・C-5		磨製石斧	凝灰岩	乳棒形	101.0	41.5	27.4	194.2	刃部は取付で覆われている。
94	A・B-3・4		磨製石斧	凝灰岩	乳棒形	109.1	46.4	32.1	255.3	基部折れ。
95	A-3	SP65	磨製石斧	凝灰岩	乳棒形	136.2	43.0	32.3	273.9	刃部、基部折れ。
96	A-9	SX01	磨製石斧	凝灰岩	乳棒形	99.1	47.8	34.5	273.6	基部折れ。
97	A-2		磨製石斧	凝灰岩	乳棒形	155.6	49.2	34.3	436.8	刃部、基部折れ。
98	B-3		磨製石斧	凝灰岩	乳棒形	132.5	54.6	33.3	348.0	刃部に再生割離。
99	C-1~4		磨製石斧	凝灰岩	定角式	92.7	47.3	24.4	178.3	基部折れ。
100	C-3・4		磨製石斧	凝灰岩	乳棒形	123.2	55.5	34.6	314.5	刃部に再生割離。
101	A・B-3・4		磨製石斧	凝灰岩	輪刀	97.7	61.0	34.9	263.7	器体が大きく積層。
102	A・B-6以南		磨製石斧	凝灰岩	輪刀	71.6	48.0	24.6	143.8	器体が大きく積層。
103	B-7		磨製石斧	凝灰岩	定角式	46.8	28.3	10.1	18.3	取付痕なし。丁寧な研磨。基部欠損。
104	B・C-4		磨製石斧	凝灰岩	定角式	53.0	34.0	13.4	28.7	基部は割離面。本製品から。
105	B・C-4		磨製石斧	凝灰岩	短冊形	108.3	31.3	12.8	73.5	部分磨製石斧。背面と裏面一部に研磨痕。
106	A・B-5		磨製石斧	凝灰岩	定角式	49.6	27.1	11.2	27.2	取付痕なし。丁寧な研磨。基部欠損。
107	調査区一括		磨製石斧	珪石	定角式	67.9	40.8	16.4	64.8	取付痕なし。丁寧な研磨。基部欠損。
108	A-5・6	包含層	磨製石斧	凝灰岩	定角式	66.8	41.9	17.4	59.2	割離加工されている。
109	A-2		刺剣	珪石		64.9	72.0	20.8	52.7	横長削片素材。刃部は取付痕。押圧割離で刃部形成だが損傷が大きい。
110	B-4		刺剣	凝灰岩		48.1	69.5	18.7	41.9	横長削片素材。刃部は未端辺。押圧割離で刃部形成。
111	B-4		刺剣	珪石		52.2	66.0	17.3	57.0	横長削片素材。刃部は未端辺。刃部加工はなく刃部は裏材辺。
112	B-5		刺剣	珪石		32.4	50.9	11.8	15.3	横長削片素材。刃部は未端辺。磨製状の押圧割離で刃部形成。
113	A・B-5		刺剣	珪石		55.8	64.4	19.2	66.1	横長削片素材。刃部は未端辺。磨製状の押圧割離で刃部形成。
114	A・B-5		刺剣	鉄石英		55.2	58.4	14.9	39.8	短冊削片素材。刃部は未端辺。押圧割離で刃部形成。
115	A・B-5		刺剣	珪石		65.0	52.5	15.6	32.3	短冊削片素材。刃部は未端辺。押圧割離で刃部形成。
116	A・B-6以南		刺剣	珪石		64.2	48.9	10.0	28.9	短冊削片素材。刃部は未端辺。押圧割離で刃部形成。
117	A-5・6	包含層	刺剣	凝灰岩		52.3	31.1	15.2	18.9	縦長削片素材。側面に押圧割離の刃部が形成される。
118	A-9	SX01	石棒	純珪片岩		302.7	33.6	22.3	352.6	丁寧につくられた石棒。形状はやや扁平。
119	B-2	SB01	石棒	純珪片岩		215.4	38.2	18.3	237.1	丁寧につくられた石棒。形状はやや扁平で頭部と基部が欠損。
120	不明		石棒	純珪片岩		80.3	34.2	18.0	62.4	短冊断片。
121	A・B-6以南		石棒	純珪片岩		69.8	25.0	12.9	29.2	短冊断片。
122	B-6		異形石斧	砂岩		92.7	36.6	22.7	69.7	ドロッ石の刃部とみられる断片。

図版1 第1面



調査区全景（南から）



SD03～05完掘状況（西から）

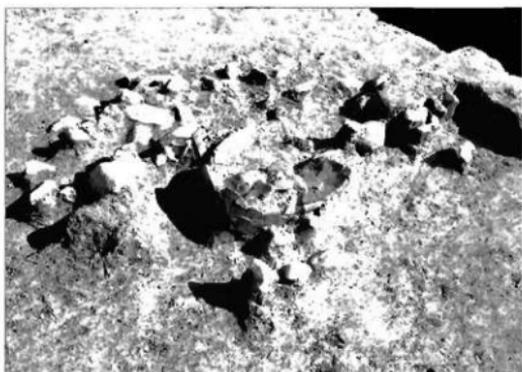


SD06完掘状況（西から）

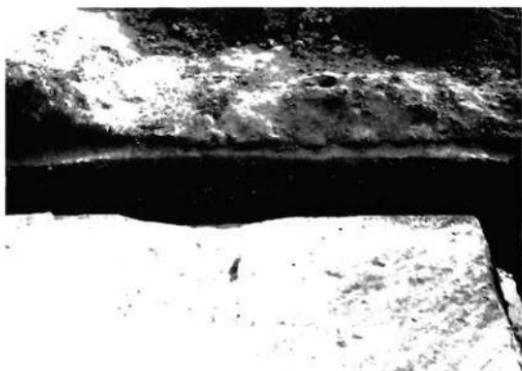
図版2 第2面



調査区全景(南から)

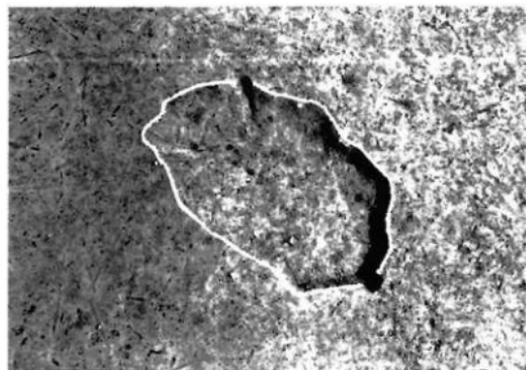


SX01遺物出土状況(西から)

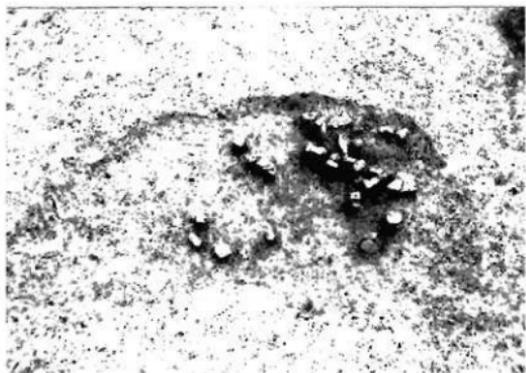


SX01完掘状況(北から)

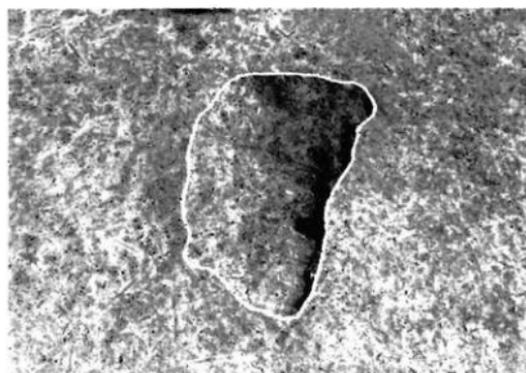
図版 3



SX02完掘状況(西から)



SX03遺物出土状況(南から)



SX03完掘状況(西から)

図版 4



包含層石棒出土状況(北から)



石棒出土状況微細(北から)

図版5 第3面



調査区全景（北から）

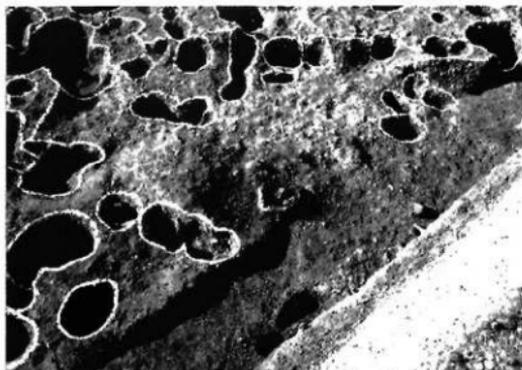


調査区全景（南から）

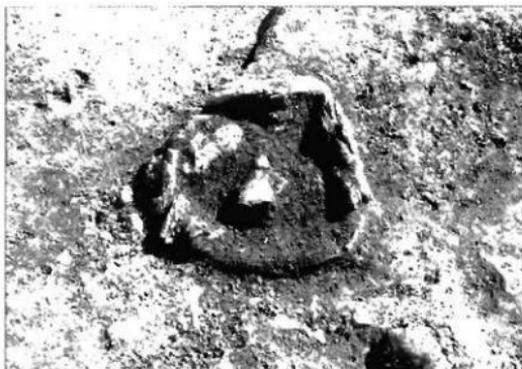


SB01遺物出土状況(北東から)

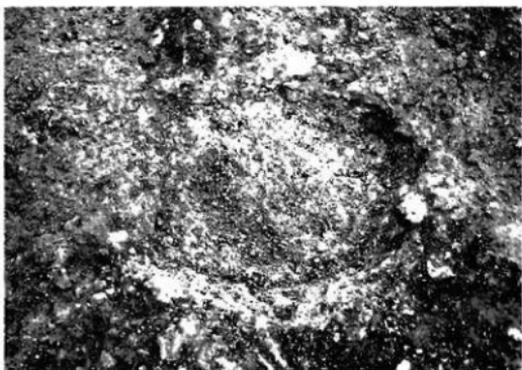
図版 6



SB01炉検出状況(南東から)

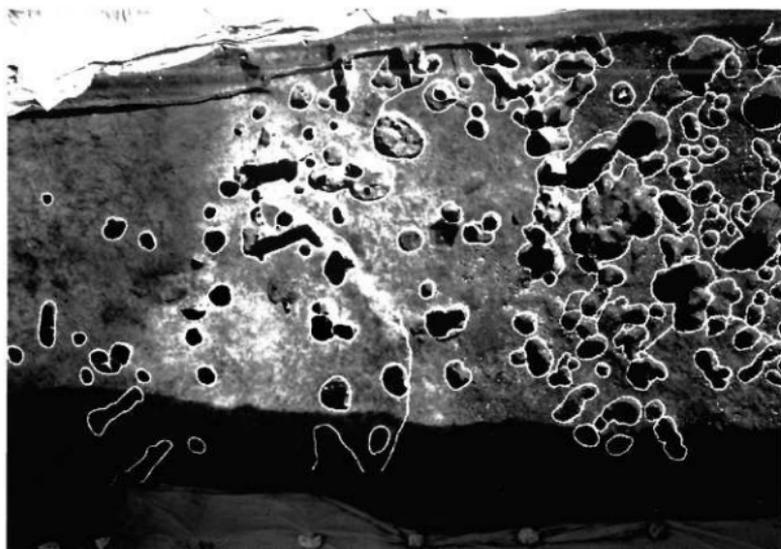


SB01炉検出状況微細
(北西から)

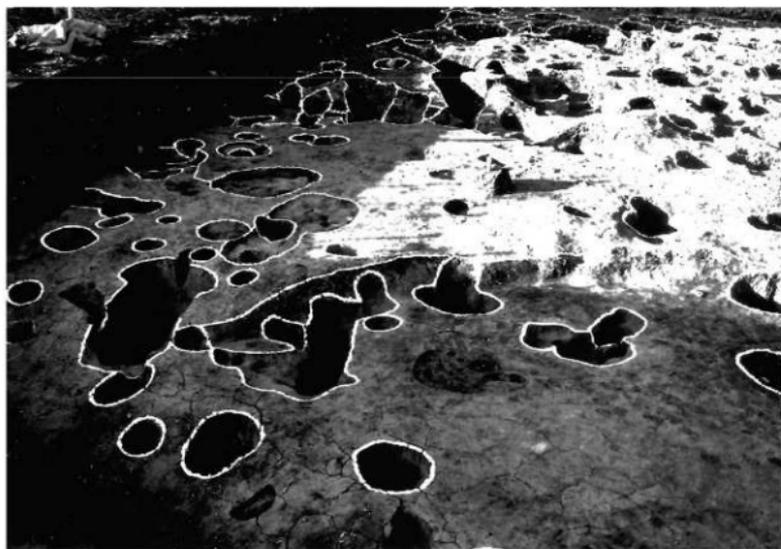


SB01炉完掘状況
(北西から)

図版 7

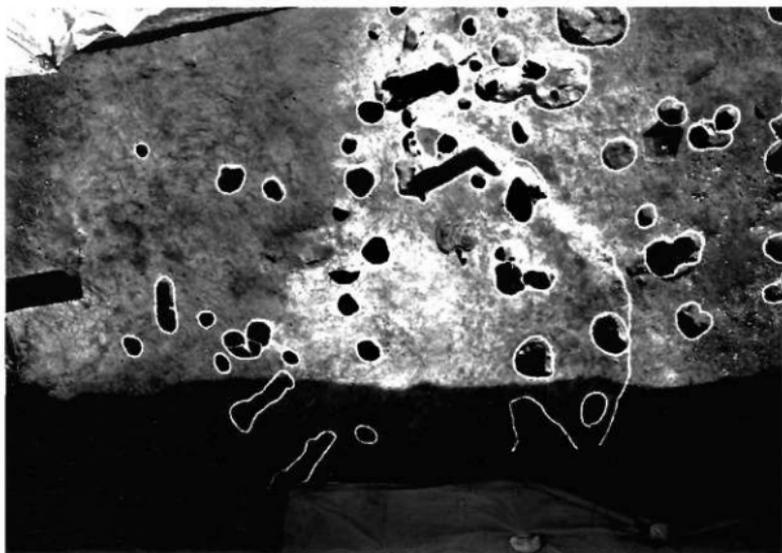


SB02・03完掘状況



SB02完掘状況（南から）

図版 8

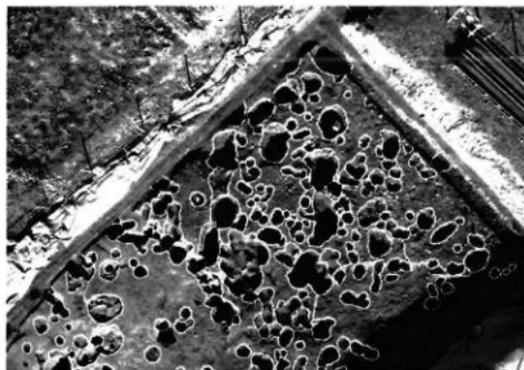


SB03完掘状況

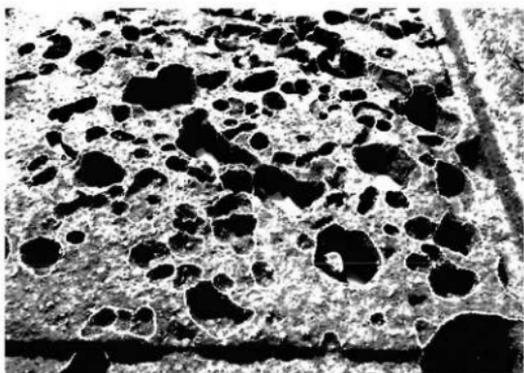


SB03完掘状況（南から）

図版 9



SH01完掘状況



SH01完掘状況（北から）

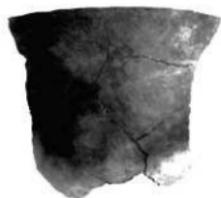


南調査区全景（南から）

图版10 出土遗物(1)



1



4



2



5



3



6

図版11 出土遺物(2)



7



11



8



12



9



13



10



14

图版12 出土遗物(3)



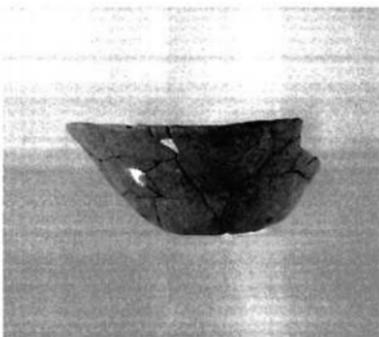
15



18



16



20

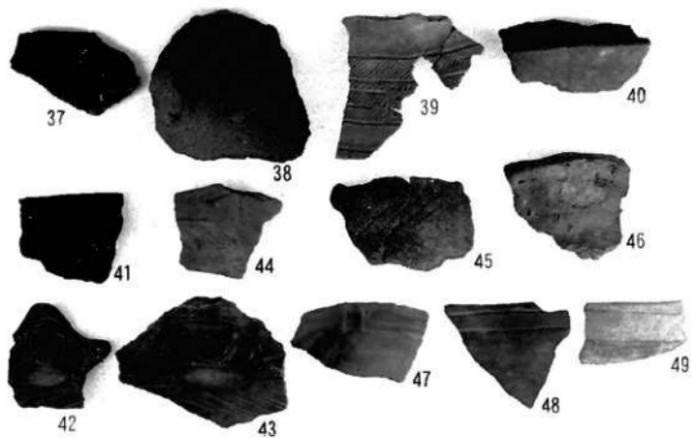
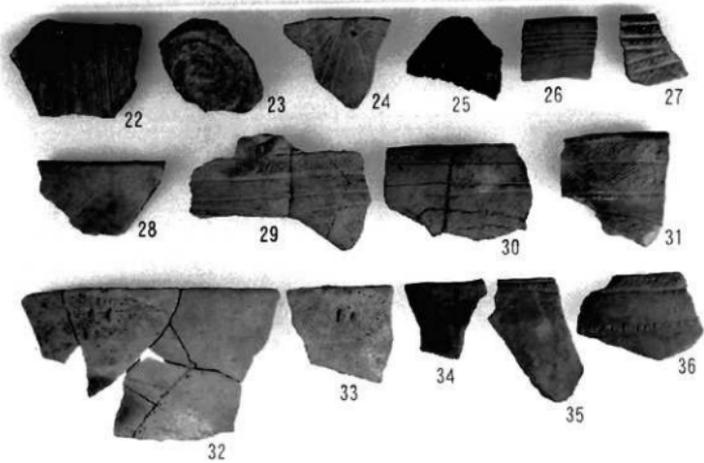


17

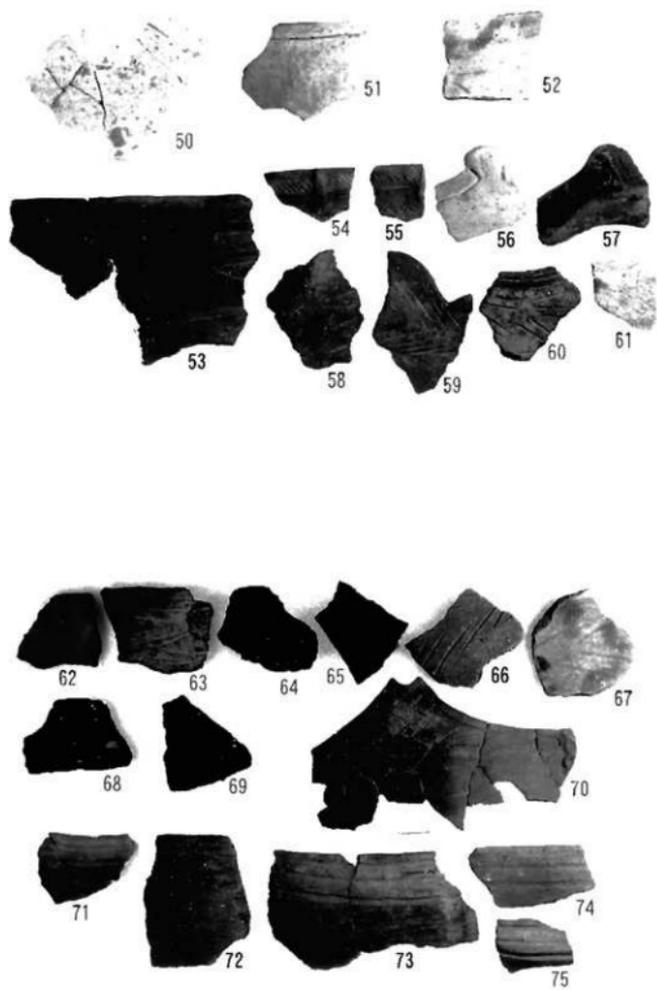


21

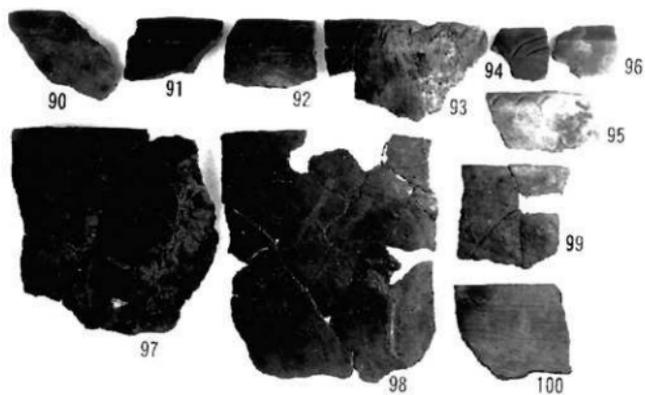
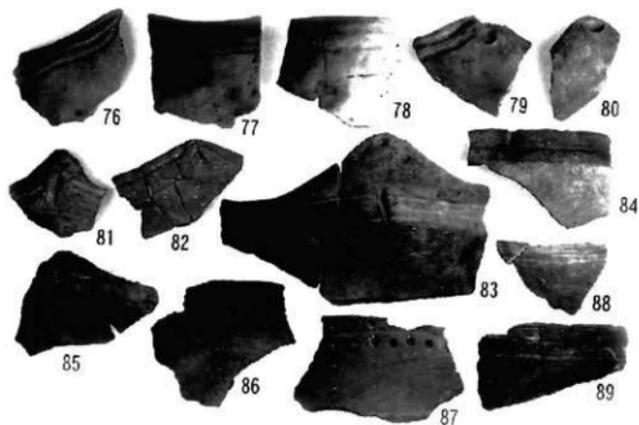
图版13 出土遺物(4)



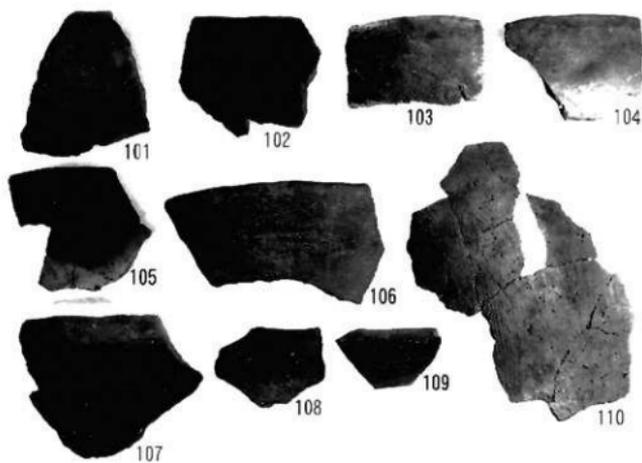
図版14 出土遺物(5)



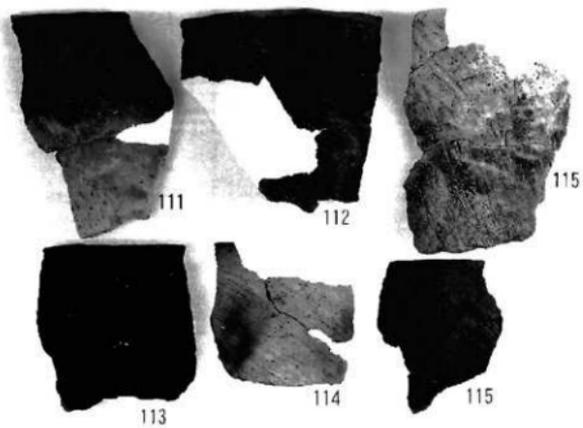
图版15 出土遺物 (6)



図版16 出土遺物(7)



2-16-335-2 9/23



图版17 出土遺物 (8)



117



118



119



120



124



121

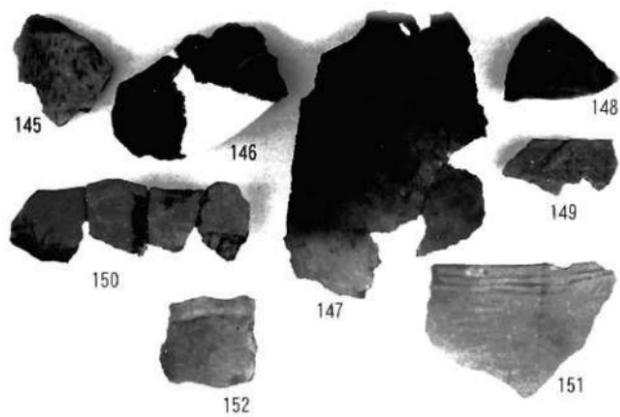
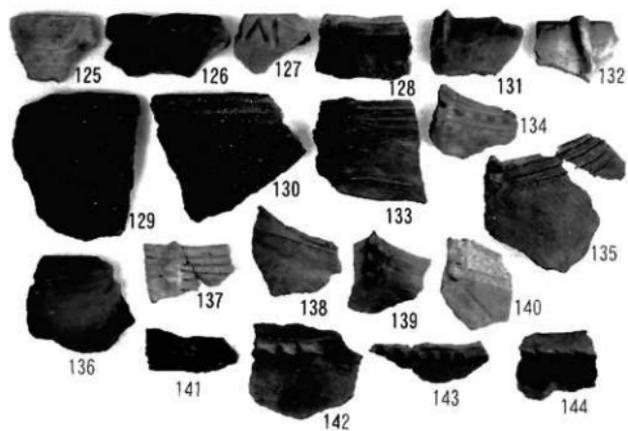


122

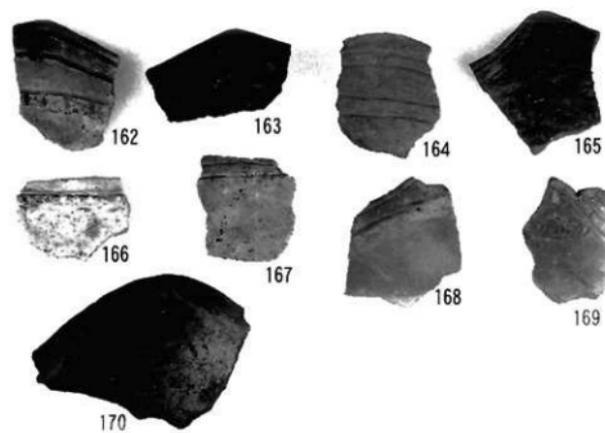
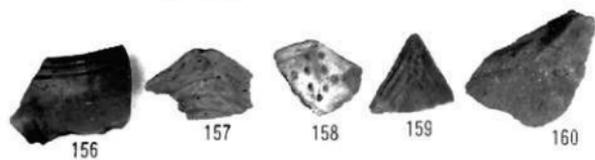
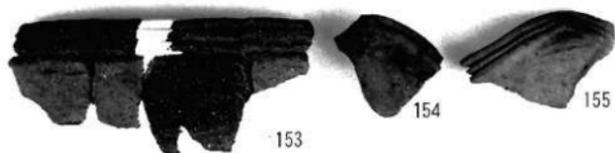


123

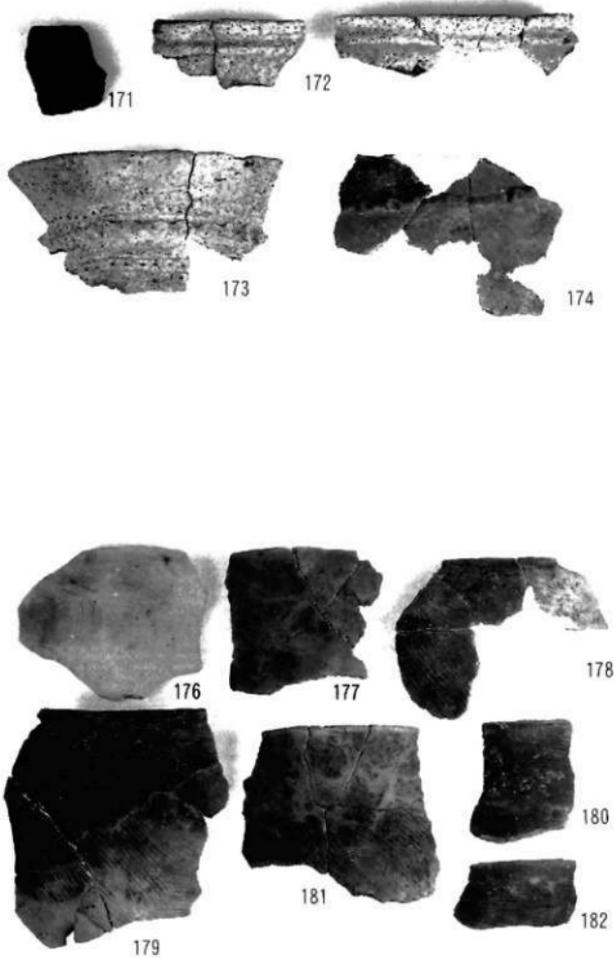
图版18 出土遺物 (9)



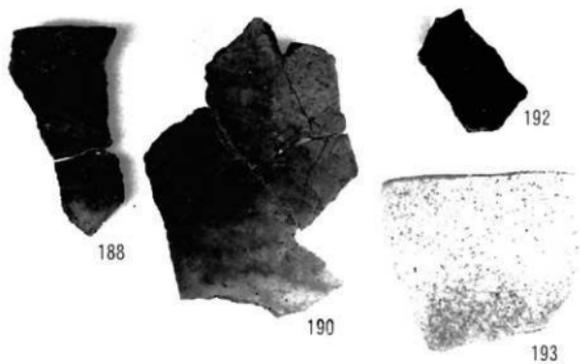
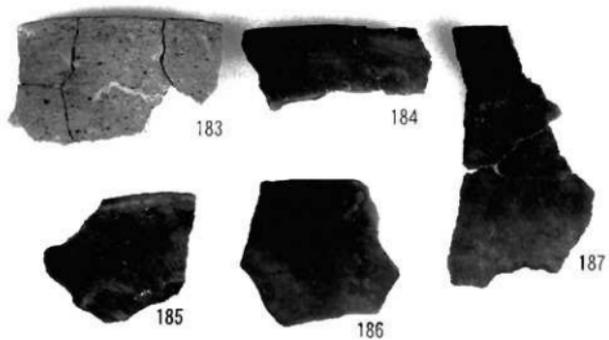
図版19 出土遺物 (10)



図版20 出土遺物 (11)



图版21 出土遗物 (12)



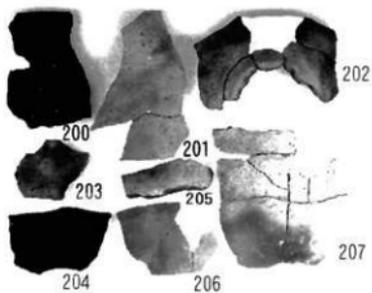
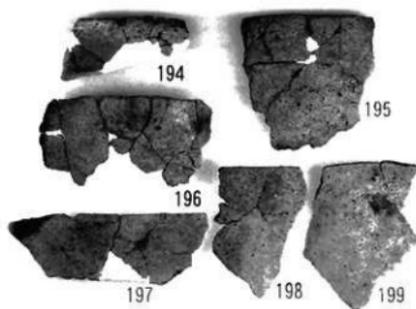
图版22 出土遺物 (13)



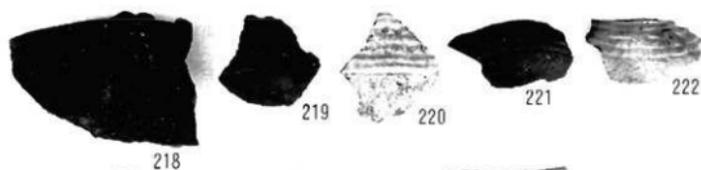
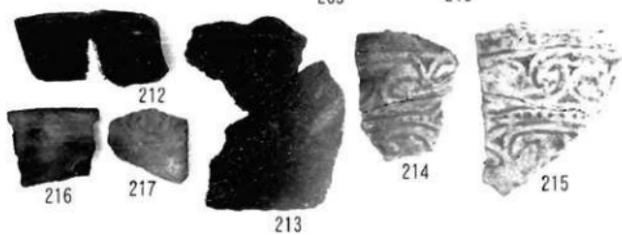
189



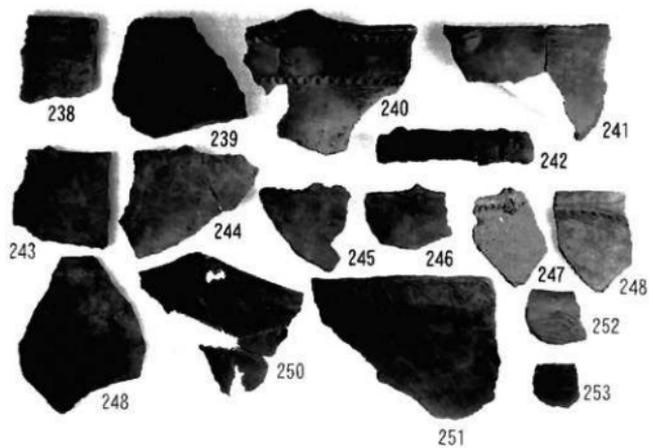
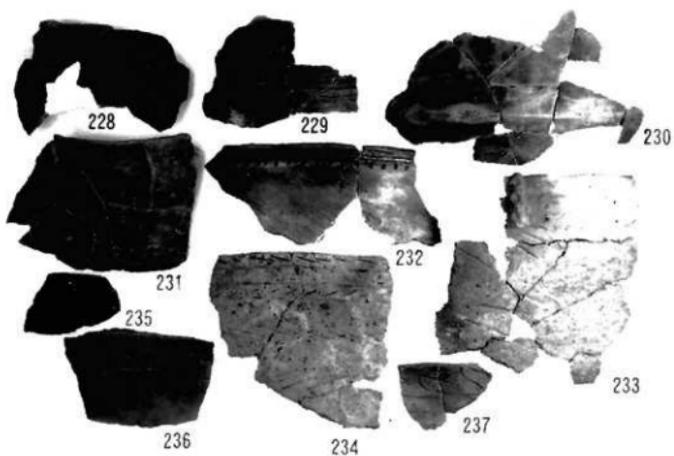
191



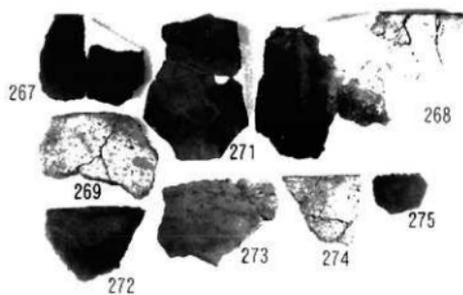
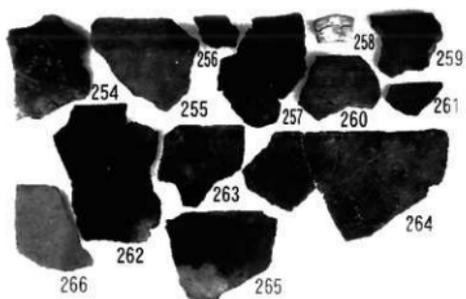
图版23 出土遗物 (14)



图版24 出土遺物 (15)



図版25 出土遺物 (16)

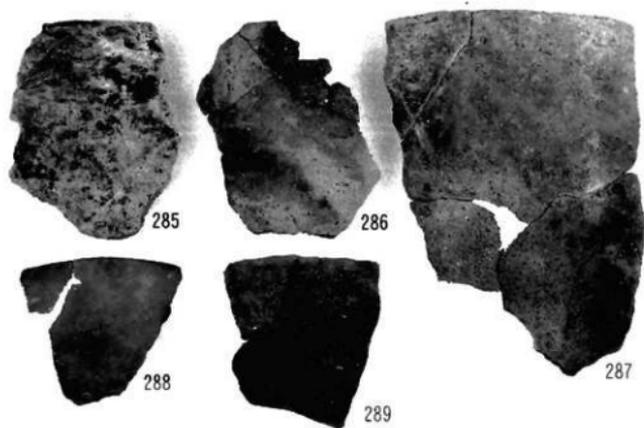
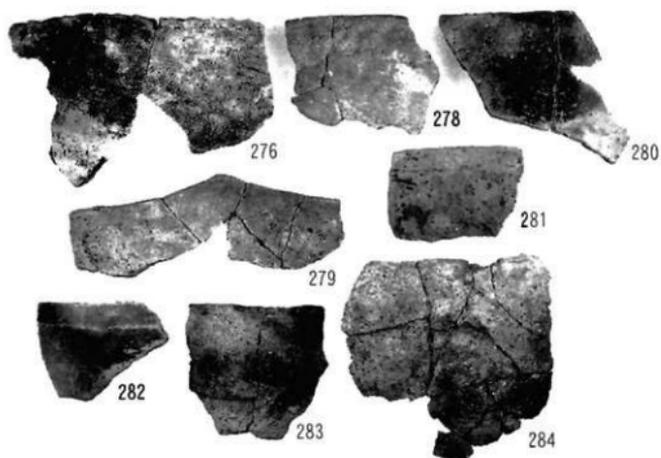


270

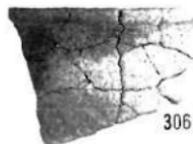
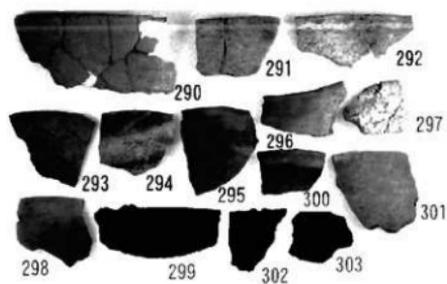


277

图版26 出土遺物 (17)



图版27 出土遺物 (18)



图版28 出土遺物 (19)



308



309



310



308 底面



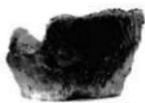
311



314



312



313



315



316



317

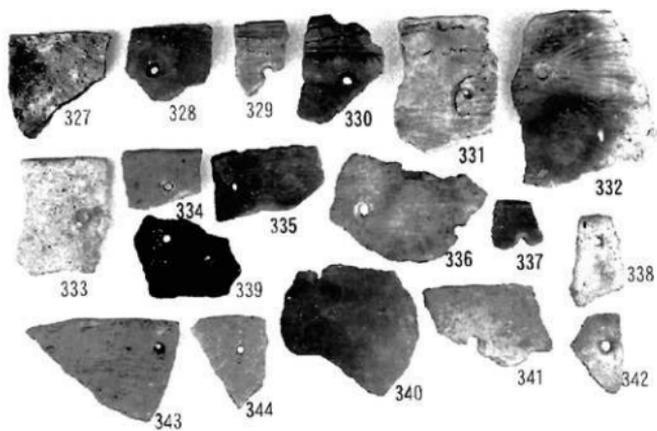
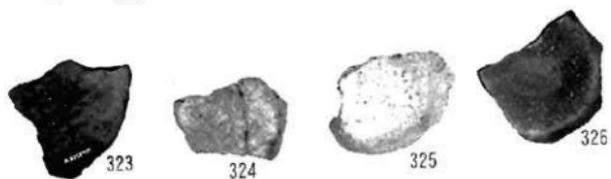
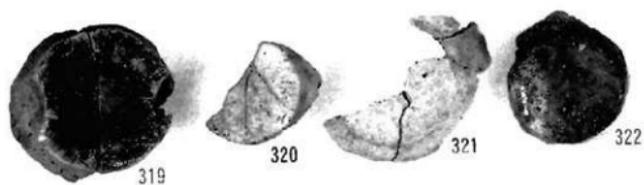


318

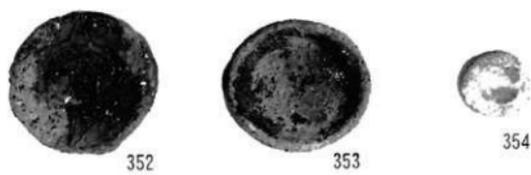
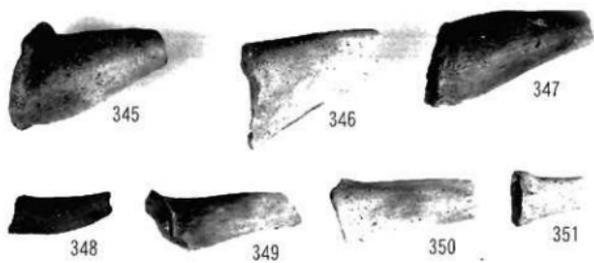


316 底面

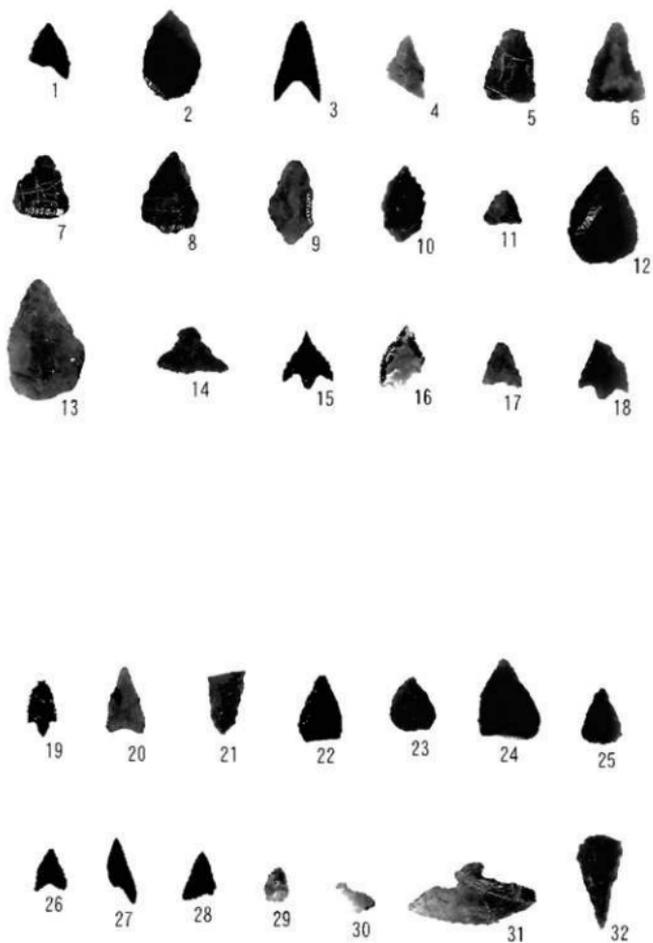
图版29 出土遺物 (20)



图版30 出土遺物 (21)



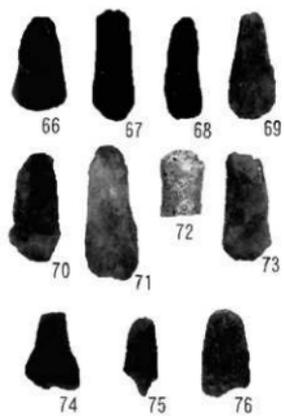
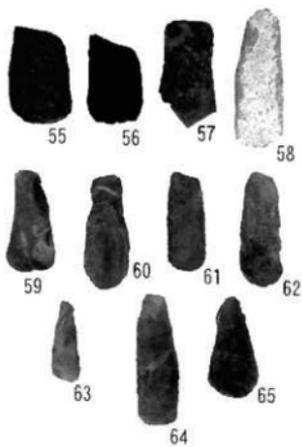
図版31 出土遺物 (22)



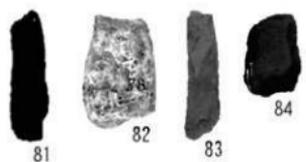
図版32 出土遺物 (23)



図版33 出土遺物 (24)



図版34 出土遺物 (25)



87

図版35 出土遺物 (26)



2-16-335-2 22/23



图版36 出土遺物 (27)



109



113



112



110



114



116



111



115



117



118



119



120



121



122

VI 全体のまとめと課題

最後に全体のまとめと課題について触れる。

平成8年度の八坂別所遺跡調査では、調査区の幅の狭さから検出した遺構の性格ができなかった。遺物は7世紀の第1四半世紀から8世紀初頭、奈良時代後半から平安時代、13世紀後半、16世紀後半から18世紀前半にかけての土器が出土した。中でも、7世紀の第1四半世紀から8世紀の初頭に収まると考えられる遺物が多く出土した。当該期の遺跡の本体が調査地周辺に存在することが考えられる。

平成15年度の八坂別所遺跡調査では、道路状遺構の検出があげられる。遺構内から出土した長頸壺から8世紀の第1四半世紀後半以前に位置づけられるものの、上限・下限は定かにはできなかった。検出した道路状遺構は地形的に古代東海道の可能性が考えられる。わずかな部分の調査であったが、基礎構造はこれまで全国で見発されている道路状遺構のもの共通する部分が見受けられた。今後、古代の道路状遺構の調査が全国的に進み、構造の類例が増加することを期待する。

八坂別所遺跡は、遺物の出土傾向から奈良時代に一端収束する。そして、平安時代末から鎌倉時代にかけて再興する。「遺跡をめぐる環境」でも触れたが、調査地北側に位置する事任八幡宮は、「己等乃麻知神社」として延喜式や多くの紀行文にも登場する。延喜式や『枕草子』等が成立した平安時代の遺跡周辺の様相が、今回の調査で明らかにできなかったことは今後の課題としたい。

牛岡遺跡では2面の調査を実施した。上面からは12世紀後半から16世紀前半に位置づけられる集落の一部を検出した。遺物の出土傾向とあわせ、今回の調査地点の隣接地で過去に研究所が大規模に調査した成果を追認することができた。さらに、15世紀後半から16世紀初頭と考えられるSX01では施赤化した石や取鍋が出土した。鋳物工房に関する遺構の存在を想定させるものとして注目したい。下面の縄文時代の様相については明らかにできなかったため、これまでの調査で出土した牛岡遺跡の縄文土器との検討を行いたい。

栗下遺跡では検出した遺構から居住域と推定される。過去の調査で隣接するメノト遺跡から水場遺構が検出されており、縄文時代後期から晩期にかけての調査地周辺の様相が明らかとなった。また、多量の縄文土器の時期別作業を行ったが、現段階での静岡県内の後期後葉から晩期前葉にかけての縄文土器型式編年の研究では、時期の特定に苦慮する破片も数多くあった。今回の調査で出土した土器の多くがグリッド一括で取り上げたため、十分な検討に耐えうる有効な資料には成り得ないが、当該期の資料を提供することができた点で、評価できよう。縄文土器と石器組成との時期差は、今後検討する課題としたい。

市内において、縄文時代から中世にかけての遺跡が約1km四方の範囲に集中している地区は少なく、研究所の調査を含め、約20年間でこれほど数多くの発掘調査を実施した例もない。しかも、得られた成果は地域の歴史を解明するにあたり重要なものが多く、全国的に注目されるものも含まれる。しかも、これらの成果は牛岡遺跡を除けば、各遺跡のごくわずかな範囲を調査した結果、得られたものである。まだ遺跡の多くは農地の下に残っているため今後調査が進めば、さらに各遺跡の様相が明らかになっていくものと思われる。

引用・参考文献

- 掛川市 1997 『掛川市史 上巻』
- 掛川市 2000 『掛川市史 資料編 古代・中世』
- 静岡県 1994 『静岡県史 通史編1 原始・古代』
- 静岡県 1992 『静岡県史 資料編3 考古三』
- 掛川市教育委員会 1995 『地蔵堂遺跡 農地総合開発整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 掛川市教育委員会 2003 『第22回掛川考古展 古代東海道と佐野郡』
- 掛川市教育委員会 2005 『牛岡遺跡 一般国道1号日坂バイパス道の駅ランプ造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 掛川市教育委員会 2006 『八坂別所遺跡・頭地遺跡・栗下遺跡・メノト遺跡 県営農地総合開発事業東山口地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 可美村教育委員会 1981 『城山遺跡』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992 『坂尻遺跡 本文編』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992 『社宮寺遺跡・向畑遺跡』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995 『牛岡遺跡Ⅰ・頭地遺跡』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995 『牛岡遺跡Ⅱ』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995 『池ヶ谷遺跡Ⅲ(遺物編)』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996 『曲金北遺跡(遺構編)』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997 『曲金北遺跡(遺物・考察編)』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2000 『大谷横穴群』
- 静岡県教育委員会 1989 『静岡県の窯業遺跡(静岡県内窯業遺跡分布調査報告書)』
- 袋井市教育委員会 1985 『坂尻遺跡 一奈良時代編一』
- 兵庫県教育委員会 1991 『長尾・沖田遺跡(Ⅰ)』
- 兵庫県教育委員会 2005 『加都遺跡Ⅰ』
- 吉見町教育委員会 2002 『西吉見古代道路跡』
- 近江俊秀 2006 『古代国家と道路 考古学からの検証』 青木書店
- 岡本春一 1998 『もう一つの市史 東山口小史』
- 木下良・武部健一 2004 『完全踏査古代の道 一畿内・東海道・東山道・北陸道一』 吉川弘文館
- 久保智康 2006 「安布知神社伝来の花禽双鸞八花鏡をめぐって」 『伊那 2006.11月号』 伊那史学会
- 佐野五十三 2005 『静岡の歴史と風と私』 静岡新聞社
- 中村育男 1996 『掛川誌稿 全翻刻』 静岡新聞社
- 西尾太加二 2006 「中泉御殿跡門柱材の樹種同定」 『御殿・二之宮遺跡第84次発掘調査報告書』 磐田市教育委員会
- 古代交通研究会 2004 『古代交通研究 第13号』 八木書店

報告書抄録

ふりがな	やさかべっしよいせき に・さん うしおかいせき くりしたいせき に							
書名	八坂別所遺跡Ⅱ・Ⅲ 牛岡遺跡 栗下遺跡Ⅱ							
副書名	県営農免農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
編著者名	村松弘規							
編集機関	掛川市教育委員会							
所在地	〒436-8650 静岡県掛川市長谷一丁目1番地の1 電話(0537)21-1158							
発行年月日	西暦2007年3月23日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やさかべっしよいせき 八坂別所遺跡	静岡県掛川市八坂 字別所182-1ほか	22213	K-483	34度 47分 30秒	138度 04分 29秒	1996年6月) 1997年3月	2,415㎡	農林漁業用 揮発油税財 源身替農道 整備事業 (農免農道 整備事業)
	静岡県掛川市八坂 字水代161-1ほか			34度 47分 43秒	138度 04分 22秒	2003年7月) 2004年3月		
うしおかいせき 牛岡遺跡	静岡県掛川市八坂 字牛岡906-21ほか	K-491	K-491	34度 47分 24秒	138度 04分 44秒	2000年9月) 2001年3月	1,840㎡	
くりしたいせき 栗下遺跡	静岡県掛川市八坂 字栗下1231			K-335	34度 47分 22秒	138度 04分 32秒		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
八坂別所遺跡	集落跡	弥生 古墳 奈良 鎌倉 江戸	小穴 溝、小穴、道路状遺構	土器 土師器・須恵器 土師器・須恵器・瓦 和同開珎・木製品 陶器 陶器		古代道路状遺構の発見		
牛岡遺跡	集落跡	縄文 弥生 中世	溝、小穴 溝 小穴、土坑	土器・石器 土器 土器・陶器・銭貨				
栗下遺跡	集落跡	縄文	住居跡、小穴、土坑	土器・石器		縄文時代後期～晩期にか けての多量の土器・石器		

平成8年度八坂別所遺跡と牛岡遺跡は日本測地系
平成15年度八坂別所遺跡と栗下遺跡は世界測地系を使用

八坂別所遺跡Ⅱ・Ⅲ・牛岡遺跡・栗下遺跡Ⅱ

県営農免農道整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

2007年3月23日

発行 掛川市教育委員会
静岡県掛川市長谷一丁目1番地の1
TEL 0537-21-1158

印刷 鈴木印刷所
静岡県掛川市横須賀253
TEL 0537-48-2076

